
ボクと彼女と彼女の縁結び記

ジャム猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクと彼女と彼女の縁結び記

【Nコード】

N1043I

【作者名】

ジャム猫

【あらすじ】

一話一話サクッと読めちゃうそんな物語。よろしければお試しあれ。(笑) ある日、ボク家に届いた一通の封筒。それが全ての始まり。ううん、もしかしたら、ずっとずっと前からボクが知らない時から始まったのかも知れない。時にドタバタに、時にファンタジックに。こうしてボクと彼女達の物語が始まったんだ……。

第一縁

それは、ボクが14になったばかりの夏休み中旬から送られて来た。

淡い青色の透き通るような雪の結晶が散りばめられた様に描かれた、父さん宛の一通の白い封筒。

綺麗な封筒だなあ。この封筒に似合ったとても綺麗な字だしね。封筒に対するボクの第一印象は、そんな感嘆。

こんな素敵な封筒で送ってくれる人ってどんな人なんだろう？

封筒を裏返し、送り主を見てみると『ひんがし電堂 そうじ蒼樹』と書いてある。一見女の人なのか男の人なのか見分けにくい名前の差出人だな。ボクはそう思いつつ、父さんにこの封筒を渡しに行く。

「父さん電堂さんって人から封筒が届いてるよ」

「わあゝああ、ん？ ありがとう妖よういち」

何だかまだ眠そうな目を擦りながらあくびをして、いつもの薄い四角い眼鏡かける父さん。

それほど高くは無い身長と一見気難しそうな顔をしてるけれど、実はとても優しい父さんである。

「どうしたの？」

封筒を持ったまま固まる父さんに何気なく問いかけてみるボク。

「あ、ああ……電堂さんって誰だっけかなって思い出してただけさ。

……それより、妖一は顔でも洗って来なさい。父さんはご飯を作って待つてるからな」

につこりと優しい笑顔でそう言う父さん。

うーん……何かの勘違いかな。

ボクはどこかちよつと何かが引っかかりつつも、言われた通りに顔を洗いに行くのだった。

それからというものの、毎月一通同じ様な封筒がボクの家が届くようになった。

年が明けても年賀状と共に、その封筒は送られて来ていた。

一体なんだろうと凄く気になりつつも、父さんへの手紙で勝手に覗く訳にも行かないし、ボクにとっては謎の綺麗な封筒のままである。

けれども、その謎の綺麗な封筒は今年の3月は来なかった。

何だろう……毎月一日には封筒がポストに入れられてたのに……。最初に届いた8月から欠かさず届いてたものが、来ないなんて、とても奇妙な感じがしたボク。

ある意味、不思議がりながらも毎月楽しみにしてたのだから、すごく残念だったのは正直な所かもしれない。

やがて春休みがボクには訪れて、終る頃にはボクは中学3年生になる。

そんな明日には新学期が始まる春休み最後の日の夜、それは知らずのうちにボクの家送到られて来ていた。

淡い青色の透き通るような雪の結晶が散りばめられた様に描かれた、一通の白い封筒。そして裏の差出人の名前は『電堂』である。

やった……！！

ボクはあまりの嬉しさに声に出して喜んでしまっていたのだった。軽い足取りで父さんの元へ向かい、笑顔でその封筒を手渡すボク。すると、何処か緊張した面持ちでそれを受け取る父さん。

一つ息を吐き、そして封筒を開封して中身を読む。

少々ばかりの沈黙あと、父さんは何処か悲しそうな哀れみの様な瞳でボクを見つめて、一言、

「すまん妖」

と、謝ったのだ。

え？

ごめんって?? どうゆう事??

何が何だかちんぷんかんぷんな頭で、父さんに目で問いかける。

「父さんは……母さんが残してくれたお前を守る事は出来なかったみたいだ……。本当にすまない。これも全部15年前の父さんがい

けないんだが……でもああするしかなくて。母さんも仕方ないって笑ってくれてたからな……」

「え？ ……え！？」

神妙な面持ちでボクを見ながら自己完結する父さんを前に、ボクは何も解らず軽いパニックである。

そんな途中で完結されても……意味が解らないって父さん……。

と、言うか一体何の話をしてるの？ 父さんの昔話？ え？？

「うん。人生つてものは時に理不尽な火の粉がかかってくる事だつてある。けれども妖……」

真面目な顔をしながらボクに語る父さんの姿。

「え……？ ……うん」

何となく意味も解らずに頷いてみる。

「けれどもそんな火の粉でも負けずに道を進むのが男の子というものだ。だから妖一もこれからどんな事があるうと頑張つて人生を歩んで欲しい」

……。

父さんごめん。意味が解らないよ……。

とにかく何事にも負けない男になれて事かな？

「う、うん……。よく解らないけれど、いつかそうゆう男になってみるよ」

「そうか……そうかそうか。すまん妖一、頑張ってくれ、こんな父さんでも良かったら力になるからな……」

と、今度は涙ながらに。

何で父さんが泣いてるのか解らないボク。

そんな中、ふとチャイムが鳴る。

こんな夜に誰だろう？

夜の7時という夕飯時の訪問者を迎えに、ボクは玄関まで行く。

「はい開いてますからどうぞ」

玄関の扉向こうに居る人へ声をかけると、すると綺麗な声で、
「初めまして今晚は妖一さん」

中に入るなり、につこりと微笑みながら同い年くらいの女性が挨拶したのである。

黒く綺麗なしっとりとした背中まで伸びた長い髪に、優しい笑みと端麗たんれいな顔立ち。胸元にフリルが付いた青いデニムのキャミソールワンピースから覗かせるは、白く透き通るような美しい肌をした女性である。その容姿から、まるで何処かのご令嬢さんみたいにも思える。

え……なんでボクの名前を??

初対面のはずの彼女に名前を呼ばれたボクは、ただ呆然とする。

「今日からこちらでお世話になる事になった『電堂ゆきめ』です、よろしく願いしますね妖一さん」

再びにつこりとして、礼儀正しくお辞儀をする彼女。

「あ……はい、こちらこそよろしく願います」

丁寧に言われて、返事を返すボク。

と、その瞬間思考が急に鈍くなり、

「って……え?? 電堂って……」

数秒、きつと数秒の沈黙を置いて、思わず問いかけたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第一縁『ただボクは雪の結晶の絵が綺麗だったから、気になったんだ』

第一縁。（後書き）

と、言う訳で ジャム猫 の小説Ⅰ第一弾です^^ お暇でしたら良かったら読んでみてくださいな^^b ブログにupしたものですけどね……。

FC2ブログ『 ジャム猫 の煩惱のりくらり』にも良かったら遊びに来てください（汗） アダルト設定ですがアダルトでもなんでもないですから……（グスン）。

第二縁。

ふとチャイムが鳴る。

こんな夜に誰だろう？

夜の7時という夕飯時の訪問者を迎えに、ボクは玄関まで行く。

「はい開いてますからどうぞ」

玄関の扉向こうに居る人へ声をかけると、すると綺麗な声で、

「初めまして今晚は妖よういち一さん」

中に入るなり、にっこりと微笑みながら同い年くらいの女性が挨拶したのである。

黒く綺麗なしっとりとした背中まで伸びた長い髪に、優しい笑みと端麗な顔立ち。胸元にフリルが付いた青いデニムのキャミソールワンピースから覗かせるは、白く透き通るような美しい肌をした女性である。その容姿から、まるで何処かのご令嬢さんみたいにも思える。

え……なんでボクの名前を??

初対面のはずの彼女に名前を呼ばれたボクは、ただ呆然とする。

「今日からこちらでお世話になる事になった『電堂ゆきめ』です、よろしく願いしますね妖一さん」

再びにっこりとして、礼儀正しくお辞儀をする彼女。

「あ……はい、こちらこそよろしく願います」

丁重に言われて、返事を返すボク。

と、その瞬間思考が急に鈍くなり、

「って……え?? 電堂って……」

数秒、きつと数秒の沈黙を置いて、思わず問いかけたのだった。

と、問いかけたボクの姿に『ふふっ』と笑みを零して彼女は、
「ひょうやあられの『電』に、どうどうとの『堂』で『電堂』と言

います妖一さん」

解りやすく説明をしてくれる。

「や……えっとそうじゃなくって……あのー……」

ちぐはぐな言葉しか出ないボクに、彼女は優しく微笑ほほえんだ。

あ……可愛かわいい。

なんて、その瞬間そんな言葉が思い浮かぶ。

「もしかして手紙届いてませんでしたか？ 私はその送り主の娘なんです」

「あつ！ じゃ電堂ってあの封筒の電堂さんなんだ！」

「はい」

と、にっこりとボクに微笑む彼女。

なんとなく言いたい事が言えた気がするボク。

そっかー。やっぱりこの電堂さんなんだ。そっかそっか。

……。

……………。

……え。

解決した次の瞬間、ポツンと次の疑問が頭に浮かぶ。

その電堂さんが何でボクの家に来てるんだろ……？

そう言えば……今日からこちらでお世話に……って言ってなかったっけ……？

……え！？ 何で！？ 娘って！？

「あのー？ 妖一……さん……？」

「え？ わあっ！」

気がつけば、目の前の彼女の顔がボクを覗き込んでいて、急に目の前に現れた彼女の顔に思わず驚しりもちいてしまったボク。

大丈夫ですか？ なんて尻餅しりもちを付いたボクに手を差し出す彼女。

あはは…… 大丈夫大丈夫と照れ笑いを浮かべつつ立ち上がり、

「よく理解が出来てないんだけど……とりあえず家の中に入ってよ電堂さん。今温かいコーヒーでも淹いれるからさ」

そう言いながら家の奥へと彼女を招き入れたのだった。

「美味しいですね。あんまりこうゆう物を飲んだりした事が無かったので、何だか嬉しいです」

可愛らしい微笑を浮かべつつ彼女はコーヒーを啜る。

どこか絵になるなあ。

なんて、コーヒーを啜る彼女の姿に軽く見とれてるボク。

「へー……そうなんだ。でもホットじゃなくていいの？ 夜になると意外に冷えたりするから温かい方が安らげると思うんだけど」

「十分これでも安らげますよー妖一さん」

ふふつ。と、浮かべて返し、また一口と啜る。

そう、彼女に出したのはホットじゃなくて冷たいアイスコーヒーなのだ。ボクがホットでと言うと、彼女が『冷たいアイスでお願いします、妖一さん』と返したので、アイスで出したのだ。

床が畳みの居間、通称『畳の間』に彼女を通してコタツテーブルにて話すボク達。

素晴らしい掛け軸や置物なんて無い至って普通の居間だから、かえってその方がくつろぐには最適かも知れない。

それでも、コーヒーよりもお茶の方が似あいそうかも。

なんて、差し出してからふと思うボク。

居間にコーヒーの香りと三人分の啜る音が広がり、何処か居心地の悪い沈黙だけが少々漂っていた。

……何か言わなきゃ。じゃないと何も始まらないしね……。

僕はそう思い、沈黙に背中を押されるように口に出す。

「えっと……電堂さん。あのー……さっきの事なんだけれどね」

「はい妖一さん。あ、私の事なら『ゆきめ』って呼んで下さい。私も『妖一さん』とお呼びしてますし」

につこりと促されて、ボクはそれじゃあ……とばかりに言おうとするけれど、何だか気恥ずかしくなって、

「ごめん『電堂さん』でいい？」

なんて苦笑いを一つ浮かべる。

すると少し残念そうな顔を見せながらも、

「はい、妖一さんがそうしたいのなら構いません」

と、微笑と一緒に返してくれたのだった。

「あのね電堂さん。さっき『今日からここでお世話になる』って言うてたじゃない？ あれってどうゆう事なのかなってボクは思っただけれど……」

「あれ……？ 博康様ひろやすから何も聞いて……ないんですか？」

キョトンとした顔でボクを覗く彼女。

彼女が言う『博康』とは、隣で眼鏡を曇らせながら黙ってコーヒーを啜すすっているボクの父さんの名前である。

「いや……何かを聞いた」って言えば聞いたんだけど……ちんぷんかんぷんでさ、今日電堂さんが家に来る事も知らなかったりなんだよね……ははは」

うん。ボクの言葉に一切の嘘は無いよね。

本当に意味が解らないまま電堂さんが突然訪ねて来たかたちだからね……。――

「えっと……」

ボクに向けたキョトンとした顔を、そのまま父さんに向けて、してもう一度ボクへと戻しながら、

「簡単に言いますと……」

説明しようとする彼女。

コホンッ。と、一つ咳払いをしてからテーブルから身を後ろに出し、姿勢を整えて彼女は、

「私、電堂ゆきめは『妖一さんのお嫁さんになりに来た』次第です。出来ない所もただだあると思いますが、今夜からどうぞ私をよろしくお願い致します妖一さん」

と、につこり素敵な微笑みを浮かべ、そして三つ指で丁寧に頭を下げて言う。

「あ、そうなんだ」ボクのお嫁さんにね」

「はい」

「そっか」

「はい」

「そっか」。

……つて、ええええええええつ!!」

ちよつと待つて!!!」

そんなの知らないし、急に言われてもボクは困るって!!!」

「……父……さん?」

「……………」

ギギギイと重く軋^きむ様な音を響かせる様に振り向き、父さんに問いかけるボク。

しかしその父さんかというと、曇った眼鏡も拭きもせず黙ってコーヒーを啜るばかり。

やがてそれから二・三口コーヒーを啜って、父さんはやっと口を開いたのだ。

「すまん……妖」

その二言だけを言う為に。

ええええええつつつ!!」

ちよつと父さん!! 謝れてもボクは困るよ父さん……。

「お、落ち着いてください妖一さんっ。こうゆう時は冷たいものでも飲んで落ち着くのが一番いいって何かの本に書いてありましたよっ」

はい、どうぞ。と、彼女からアイスコーヒーを手渡され、

「あ、ありがとう」

急に、一気に渴いたノドを冷たいものを流して潤^{おおい}すボク。

「ふー……」

「落ち着きましたか? 妖一さん?」

「う、うん、少しは」

アイスコーヒーの冷たさで熱が冷やされる感じがする中、グラスをテーブルに置いてふと気が付いた。

……あ。

「……あ。間接……キスですね」

どこか視線をグラスから放せられずに頬をカァツと赤らめて、恥ずかしそうに言う彼女。

ボクはそんな彼女の姿と言葉に、心臓の音が聞こえてしまうんじゃないかというほどの大きさで、ドクンツと一つ鼓動が波打った。彼女がどんと頬を赤らめていくに連れて、僕の鼓動もしだいに大きく早く波を打つ。その間はきつと数秒なんだと思うけれど、僕には数十秒にも思えて、恥ずかしさのあまりに思わず、

「ご、ごめんっ！」

と、慌てて謝った。

しかし、その慌てにつられてか……、

「キャツ……」

グラスを急にテーブルに戻したのがいけなかったか、ガシヤーと響かせてアイスコーヒーを彼女の服に派手に零してしまったのだ……。

その状況にさらに慌てて傍にあったタオルで拭くボク。けれど、タオルを取り出して拭いたものの、中々全部は拭き切れずに零れたコーヒーは染みになりそうだった。

その姿に父さんは『申し訳ない、直ぐにその服は洗うから、その間良かったら電堂さんはお風呂でコーヒーのベタベタを流してきてはどうかな？ 思った以上にかかった様だし、きつと気持ちが悪いでしょうから』なんて助け舟を出してくれたのだ。

すると、彼女はしばし何か考えてからにつこりと微笑んで、

「これも何か一つの運命や縁えにしなのかも知れませんね。では、お言葉に甘えてお風呂を頂戴いたしますね博康様」

そう言っとたんて父さんに案内されるままお風呂場へと向かう彼女。

途端、居間に一人だけで残されたボク。

そんな二人が抜けた空間で、ふと思ったのは……。

これからボクってどうなるんだろね。

なんて、少々他人事気味た事。

一人で居る居間は、何故かとても広く感じれ、ボクに何かを考えさせてくれるのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二縁『運命って信じる？　ボクは運命なんて言葉はまだ理解なんて出来ないんだけど……ね』

第三縁。

親子揃ってシーンとする畳たたみの間に、シャワーの流れる音色が届いてくる。

ボクはそんなシャワーの音色に、平然を装よそいつつも、何処か心と体が緊張してる感じがする。とても変な緊張感に疲労も混じっているかも知れない。

……だって、今まで父さんとボクの二人で暮らして来た家に、女性せいが居るんだもんね……。

それに何年も男しか使ってなかった浴室に見知らぬ女性が居るという、変な世界だから。

ボクはそんな事を考えながら、どうしていいのか解らない状態に、ジツとコタツテーブルに入ってたただ彼女が出てくるのを待っていた。何故かこうゆう時に限って耳がよく聞こえてしまう。

シャワーがタイル床へと一直線に流れる音。

流れるシャワーが体に触れて、その体を伝ってまとまって床に零れる音。

そんな音に、どこかやつぱり落ち着かない……。

そんな事じゃボクはいけないと思い、別の事を考えるけれど、ふと思いついたのは……思わぬ間接キスをした事と頬を赤く染め上げた時の彼女の姿。

初めて……しちゃった。

でもまだ『間接』だからセーフだよな！？ 意図的にしたんじゃないし……あれはちょっとした事故だったから仕方なかった……よね??

なんて自問自答するボク。

ふと横目に父さんを見ると、やつぱり大人なんだなって思う。

ボクがドキマギしてるのに、父さんは至いたって平然としてるんだから。

そんな父さんを見ると、ボクは、まだまだ子どもなんだなって自覚させられる。もう中学三年生になるって言うのにね。

すると突然、父さんがボクの名前を呼んだのだ。

「妖一^{よういち}」

何処か何かを一緒に吐き出した様な、そんな声でボクを呼ぶ。

「な、何？ 父さん何だか改まって」

急に呼ばれ、小さく内心驚きつつ問い返すボクに、父さんは真面目^{まじめ}な眼差^{まなざし}しで、

「すまん。今回の事は父さんが悪い。でも何度か手を打ったんだけど、尽く無駄^{むだ}になってしまった様でな……結果的にこんな形にまでなってしまった。その……妖一には悪いと思ってる……」

と、ボクに謝る。

ボクはそんな父さんの姿に、今まで大きく見えてた父さんが少し小さく見えちゃって、どこか許せる気がした。

まだまだ子どもながら、成長するってこうゆう事なのかもなんて思えたボク。

ボクにはまだ何がなんて上手く説明は出来ないんだけれどね。

「ううん。何が何だかさ、まだ良く解^とってないけれど、起こっちゃったものは仕方ないし。それに父さんもボクの為^{ため}に色々してくれたみたいだから謝らなくてもいいよ、もう。」

それよりさ、起こっちゃったんだから、それを含めてこれからどうしようって事が大事な事で、今さら過去をどうこう言っても何も始まらないじゃない。ね？ 父さん」

自然と、につこりと笑顔が零れるボク。

「理由は訊^きかないのか？」

「うーん……。とりあえず彼女がそろそろシャワーから上がるかも知れないから、ボクは新しいバスタオルと何か着替えを持って行ってあげてくるね。話はそれからいいよ。それに別に父さんが話したくなかったらボクは全然それでもいいと思うよ。」

でも、話す事でどこか心が楽になれるならさ、ボクはそれに付き

合うからね、父さん」

そう言つて、よいしょと立ち上がり、二階へ向かおうとした時、
「妖一、随分見ない内にお前も強くなつたな」

父さんがそう感心しながら呼びかけた。

あはは。うん、今なつた気がするよ父さん。

なぜだろう？ 少し父さんが小さく見えたからかな？ ううん、
良く解らないや。

でも、何だか言えるのはこんな事かも。

「ボクは父さんと母さんの子だもんね、強くもなれるよ」

ふふつと、ボクは笑みを零して部屋を出て、二階のある部屋へと
向かった。

「久しぶりに入つたけど、手入れしてるんだな父さん」

ボクはその部屋に何年ぶりかに入つて、ふと思つた。

何年も使つてないのに、綺麗に磨かれてる全身鏡。その全身鏡の
横にはホコリさえも被つてはいない古い化粧道具。壁にはフォトケ
ースに収められた若い時の父さんと母さんの写真が飾つてある。も
う何年も使われなくなつた部屋なのに、未だ生活感が溢れてくるそ
んな部屋のままである。

えつと……確かこの辺のタンスに……。

ボクは遠い昔の記憶を思い出しながらタンスを引き出した。
あつたあつた。

そう引き出したのは、新品の水玉ピンクのパジャマと、淡い青色
の真新しいバスタオルと同じく淡い黄緑のフェイスタオル。

母さん、可愛いパジャマとか好きだったからね。

他にも色々あるけど、最初に手にとつたこれを持ち、そして部屋
から出て行く。

……パタン。

と、ボクは何処かギュツとした思いを感じつつ後ろ手で静かに扉
を閉め、そして脱衣場へと向かつたのだつた。

「あ、新しいバスタオルとか洗濯機の上に置いてくね電堂さん、よ、良かったら使ってね」

脱衣場から扉を開けて一步入れば直ぐにお風呂場。脱衣場の中には洗濯機と乾燥機があり、回っている洗濯機の上にボクは着替えとかを置く。

「あ、すみません妖一さん。ご迷惑をおかけしてしまって……」

と、お風呂場から彼女は申し訳無さそうな声で返す。

お風呂場には曇りガラスで中が見えない様になっているのだけれど……それでもドキドキを隠せないボクの心臓。

「ううん、もとはボクがうっかりしてアイスコーヒーをかけちゃったのが悪いんだし、気にしないでね」

ドクンツと、大きく鼓動する。

ボクはそんな心臓を少しでも落ち着かせようとしてから、彼女に返した。

「すみません。お世話になりますなんて言いつつ、用意した荷物を全部置き忘れて来てしまいました。いつもはこんなドジはしないんですけどね、あははは……」

「ううん、気にしてないし、電堂さんも気にしないでいいからね」
ボクは優しくそう言う。

「はい、ありがとうございます妖一さん。
でも、良かったです」

ふと明るい彼女の声が返って来る。

「え？ 何が？」

「妖一さんも博康様ひろやすもとても優しい方で」

そんな彼女の言葉に、そうかな？ と、返すボク。

「はいっ。全然話を通ってなかったみたいなのに、急に訪れた私なんかを招き入れてくれたり、コーヒーを淹いれてくださったり、あまつさえお風呂場や着替えなどを貸して下さったりとか。

……それに私達の所じゃ、そんな事はしてはくれないと思います

から……。私達、私と母にはちょっとした訳があつて一族に嫌われてて、こんな風に優しくされた事なんて、おかしい話一度もなかったんです。だから妖一さんと博康様にこんな風に優しくされて、嬉しくて、とても感謝してるんです」

あははは。ただ普通にした事なのに感謝なんて。

ボクは何処かこそばゆい思いを感じつつ、

「今日は疲れたでしょ？ 客間にお布団を用意しておくから今日は泊まって行くといいよ、壱堂さん。きつと疲れてグッスリと眠れると思うし。あと夕食もまだでしょ？ お風呂から上がったなら良かったら一緒に食べようね壱堂さん。父さんが張り切って作ってたから張り切りすぎて失敗してるかもだけど」

なんて軽く笑い話を混ぜながら言う。

「お互い色々考えなくちゃいけない事もあるかも知れないけれどさ、今日はそうゆうの全部考えなくていいからね。今日は楽しむ事とゆっくり体を休めて旅の疲れをとる事を優先だよ？」

と、にっこりと微笑んだ。

曇りガラスだから向こうから確認は出来ないんだけど、どこかそんな笑みが零れてきたボク。

「はい、ありがとうございます妖一さん」

そう言う彼女の声は、何処か泣いている様にも思えたのは、きつとボクの勘違いなのかも知れない。

シャワーの音で鈍く聞こえるのが、そう思わせたのかも知れないから。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第三縁『時に重い荷物は人を小さくさせたりするね。ボクは、重いなら一人で持たなくてもいいと思うんだ』

第四縁。

「それじゃー……何時^{いつ}までもここに居る訳にはいかないし、そろそろボク行くね、電堂^{ひでつどう}さん」

ボクはお風呂場でシャワーを浴びている彼女にそう言つて脱衣場を出る事にした。

女の子が入つてゐるつて言うのに、男の子なんかが何時までも脱衣場に居る訳にも行かないしね。それに居たら出るにも出れないだらうし。

そう思いながらその場から離れようとした時、彼女が言つた一言に大きく鼓動が跳ね飛ぶ。

……え???

や……まさか聞き間違いだよね……??

あはは、ドキマギし過ぎて耳がおかしくなつたのかも。

「それじゃ出るね」

気持ちを落ち着かせて、再び出ようとした時、彼女の言葉が確かにボクの耳に届いた。

それは、何処か恥ずかしそうにも、決心した様な声で、

「ま……待つてください。妖一さんなら……見られても平気ですからそこに居てくださいませんか……」

と。

もしかしたらボクは彼女にからかわれて……る?

いや……会つたばかりで彼女の全部は解らないけれど、他人^{ひと}をからかう様な人には見えなかったし……。

それじゃ本気で言つてゐるの??

ボクは彼女のそんな一言にグルグルと思考が回る……。

「妖一さんが言つた様に色々考えなくちゃいけない事も沢山あると思います。けど、さっきの妖一さんの優しい言葉で私の決心は固くなりました」

「えっと……電堂さん……？」

決心は固くって……どうゆう決心？

なんて思いながら間抜けた声で問かけたボク。

「小さい時から勝手に決め付けられてた婚約なんて嫌だっと思ってたのですが……つい最近妖一さんの事を詳しく知ってから興味を持つてたんです。でもそれは、情報から想定される『私の中の妖一さん』でしかなくて、その妖一さんを本当に好きなのか解らないままここに來てたんです。」

けれど、逢ってみて思いました。ここに居る妖一さんは、私が思っていた以上に素敵な方で、妖一さん、アナタなら私は全てを差し出しても構わないと思っております」

とても嬉しそうに、そして優しい声で言ってくれる彼女。

ボクは、そんな彼女の言葉に頭が真っ白になる。

……えっと……決められてたっていう事はー、その『許婚^{いいなすけ}』か何かって事で……そして当^{とう}のボクはその事をたった今知った訳で……えーと……。

全てを差し出しても……って事はどうゆう事なんだろう……。それはボクに見られても平気って事？？えっと何を？

ボクは真っ白な頭の中で必死に彼女の言葉の整理をする。

「私ばかりが妖一さんを色々知ってるのは不公平ですよね？……

……だから今度は妖一さんが……少しでも私を……知って欲しいな……って……」

ゆっくりと、どこか柔らかくもシットリとした口調で彼女は言う。ちよつと……え！？ええええっつっ！？

グルグル回る思考の中から、一つだけ現状を見つけたボク。

どうしてそうなったか解らないけれど、彼女が裸のままここへ出てきちゃう！！それって何だか凄くヤバい事な気がする！！

と、捻り出したのはそんな答え。

「ま、待って電堂さん！！」

お風呂場の曇りガラス扉が開こうとした時、ボクは咄嗟^{とっさ}に呼びか

けた。

「……私ではやっぱり何か不満……ですか？」

「不満とか不満が無いとかそうじゃなくて……ボクは男の子で電堂さんは女の子なんだよ!？」

「……はい？」

自分でも何を言ってるか解らない言葉に問い返されるボク。

「えっとだから……女の子はそう簡単に男の子に見せちゃいけないとボクは思っただよね……」

「はい。だから妖一さんだから私は見てもら……」

そう言いながらグイッと扉が開こうとするのを、ボクは直ぐ様背中と後ろ手で押さえた。

いくら曇りガラスだからと言っても、そんな超接近距離じゃぼんやりと見えてしまうから、背を向いて扉が引つ張られない様に押さえたのだ。この姿勢だと力はいれにくいけれど、仕方ない。

「出てきちゃダメっ! 出て来ちゃうとボクどうなるか解らないから絶対出てきちゃダメっ!」

心臓が今までに無いくらい何度も飛び跳ねる。もしかしたらこのまま心臓が壊れちゃうんじゃないかってくらい。

うつん。きつとボクの心臓は彼女が出てきた瞬間壊れちゃうと思う……絶対に。

ほら、息も何だかおかしいくらい出て行くし入ってくるし……。

「妖一さん??」

グツと扉を引こうとする力が強くなっていくのが解る。

「お願いだから出てこないで電堂さんっ! ね?? 考え直して……ね??」

すると、ボクの必死な言葉に少しずつ扉を開けようとしていた力が抜けていく。

やがて、再びカチャンときつちり扉が閉まり、その様子に安堵するボク。あんど

「解りました。そこまで仰おつるのでしたら、見せるのは諦めますね……」

……」

そう言った彼女の言葉に、一つタメ息を吐いて力を抜いた。

「うん……それじゃまた後であの畳の間で」

と、ボクがそこから離れようとした時……。

ガチャ。

という音と共に、ボクの背中に0コンマ何秒の超高速の電気が走った。そしてその超高速の電気が走り去った瞬間、何とも言えない甘くも優しく清潔感のある香りと、感じた事のない大きくて柔らかいものがボクを包み込む……。

……どうしてだろう。何故か体に力が入らない。

そんな中、彼女はボクの耳元に唇を寄せてそつと囁いた。^{ささや}

「う……動かないでください……ね？ 見せるのと抱きしめるのは……恥ずかしさも何倍も違うんですから……」

と、恥ずかしさで今にも倒れそうな声で。

背中から彼女の早い鼓動が伝わってくる。まるで今のボクのようにとても早く、壊れそうなくらいに。

「電堂さ……」

「動かないでくださいっ」

やっとの思いで出た声で問いかけようとしたボクを遮る彼女。

「何もしません。だから……動かないでください……ね」

うん。と、ゆっくりと彼女の言葉に頷く。

すると、ゆっくりボクの背中から離れ、お風呂場へ戻って扉を閉めた彼女は、

「……ごめんなさい妖一さん」

一つ謝る。

「そしてどうか私を嫌わなくてください。でも……少しでも妖一さんの心の中に私は残れましたか？ 感じました……か？」

そう言う彼女の声から、何処か恐れと切なさを感じたボク。

ああ……そっか、彼女必死なんだ。ボクに自分自身を知って欲しくて。

こんな事したら嫌われるかも知れないって恐怖を感じながらも、必死で知って欲しかったんだ、彼女という存在を。

「ふふ……あははっ」

すると、何処か笑みが零れてくるボク。

「妖……さん？」

突然の笑いに間抜けた声で問いかける彼女。

扉を開ければ、きつと鳩はとが豆鉄砲でも食らった様な顔をしてるのかも知れないね。

「うっん、ごめん。」

えっと、あのね、ここに荷物を持ってお世話につて事はとうぶんはこっちに居るつもりだったんでしょ？」

「え？……はい」

「うん。だったらそんなに焦らなくていいよ雹堂さん。先の事なんて何にも解らないし、雹堂さんがいつまでこっちに居れるかも知解らないけれどさ、お互いゆっくり相手を知っていけばいいんじゃないかな〜って思うんだ。その……恋仲とかそうゆうのじゃなくてもお互いを知る事は出来るし、大切だからね。だから無理しなくてもいいし必死になる事も無いんだよ、雹堂さん」

優しい笑みが零れてくるボク。

不思議と温かい気持ちに僕の中から溢れ出てくる様な、そんな感じがするんだ。なんだか。

「それに、うちの家訓にさ、こんな家訓があるんだ。変な家訓だけれど笑わないで聞いてね」

「はい」

と、お風呂場から柔らかく返事が返る。

「『我が家に居候すべし者は皆全部家族と思え』なんて家訓。これはね、5年前に天国に逝っちゃった母さんが作った家訓なんだ。可笑しいでしょ？」

「いいえ、とっても素敵だと思います、妖ーさん」

ふふっ、と、お風呂場から優しい笑みが聞こえてきた。

「それじゃ、今度こそボク行くね。着替え洗濯機の上に置いておくから良かったら使ってね」

「はい、ありがとうございます」

彼女のその言葉を聞いて、ボクは脱衣場から出ようとした、その時だった。

バンッ！！

と、物凄い音と共に何かが壊れる音が響いてきたのは。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第四縁『大胆で繊細。それが女の子なのかも知れないなってボクは思ったんだ』

第五縁

「それじゃ、今度こそボク行くね。着替え洗濯機の上に置いておくから良かったら使つてね」

「はい、ありがとうございます」

彼女のその言葉を聞いて、ボクは脱衣場から出ようとした、その時だった。

バンツ！！

と、物凄い音と共に何かが壊れる音が響いてきたのは。

「一体今のは何なん……」

ボクは突然発せられた轟音に戸惑う中、見知らぬ女性が声を張り上げるのを耳にした。

「さー！ 神妙に出てきなさいっ！！」

その声は何故か怒り心頭で声を荒げている様である。

一体……何なんだろう……。

ボクは良く解らない事態に少し脅えつつも、

「雹堂さんとはにかくここに居てね……。よく解らないけどとりあえずボクは様子を見てくるから」

と、そう彼女に言つて轟音がした方へと向かうのだった。

ボクが轟音がした方へと向かった時には、凄まじい光景がそこには広がっていた。

何かの力で家の出入り口の扉が家の中へと吹き飛ばされており、その吹き飛ばされた扉を良く見れば、扉の表の面……ようするに外へ向けてる面と、扉があつた周りの壁が軽く焼け焦げているのである……。

それはまるで、暴風と一緒に凄まじい炎が扉にぶつかった様な感じだ。

その様子にまじまじと見入っていると、ボクの後ろの方からさつきと同じ女性らしき人の声上がる。

「ほらー、今出てきたならアタシの広い心で『ミディウムレアのちよつと焦がす程度』で許してあげるからさあ」

なんて言う声が。

信じ難いけれど……その言葉が本気だったら、この人の仕業^{しわざ}なのかも知れない……。

ボクは目の前の後景に、何処かそう思う。

「出て来ないとアタシ怒るよー本気で」

聞き覚えの無い女性のそんな声は、さっきよりも怒りの色が滲^{にじ}んでいる様だ。

誰かを……探してる??

一体誰を探してるのだろう……。

ボクはそう思いつつ声がした方へと向かう。

そこはフローリングの床が広がるちよつとした客間。

扉を吹っ飛ばして中に入ってきたと思われる彼女は、何故かそこに居た。

彼女の姿からは、何処か殺気のような黒いものを感じるボク。

「君は……一体に誰……なの？」

ボクは後姿の彼女に、恐る恐る問いかける。

すると、僕の声に気が付いた彼女はくるつと半回転してボクを振りかえ見た。

それは、ブロンドのショートカットに綺麗な青い瞳。少し小さめの端麗な顔立ちにプルンとした小さく可愛い口元。ちよつとロックテイストの白いTシャツに綺麗な足のラインが見て取れる碧^{あお}いスリムジーンズ姿の美少女がボクの目の前に立っていたのだ。

「その……君は一体誰を……」

電堂さんとはまた違った魅力のある彼女に、何故か惹^ひかれる様なドキドキを感じつつも、何が起こるか解らないという恐怖を感じるながら、ふと問いかけたボク。

すると……。

「見つけ、アタシの妖ちゃん」

ギユウ。

につこりと微笑ほほえんだかと思えば、次の瞬間にはいきなりボクを抱きしめる彼女……。

その刹那、甘く優しい香りが僕の鼻腔びじうをくすぐり、胸に当たる柔らかなものが僕の意識を全て奪おうとする……。

ああ……香りと感覚が何だか気持ちよくて……ボクが何処かに消えて行っちゃいそう……。

目に前に真つ白な世界が、ふと広がりかけるボク。

「やつと逢えたね妖ちゃん」

そんな彼女の甘く優しい言葉がボクの耳をくすぐる。

……やつと……って……？

薄れてくボクの意識の中で、そう問い返す。

「……アタシね、あの時から忘れた事なんか無かったんだから」

「……へ？ あの時って……」

ギユウと、更に強く抱きしめる彼女。温もりと切なさきりなさがボクの中に響く。

「パパやママが何を言ってもアタシは平気だから。アタシにどんな事があったても絶対に妖ちゃんだけは守ってあげるからね。一緒に帰ろうね、妖ちゃん」

「ま……もる？ ……かえ……る？」

……ヤバい。ボクが消えちゃう……。

もう、頭が真つ白になり、彼女の感覚だけがボクを支配しようとした時、フツと何故か彼女がボクから離れたのだった。

「……でも、その前にしなくちゃいけない事があるからちよつと待ってて妖ちゃん」

そうにつこりとボクに微笑むと、彼女から再び殺気ころもの様な黒いも

のが生まれ出るのを感じた。

……そうだ、とりあえず彼女を止めなくちゃいけないいつ。

ボクは咄嗟に彼女の手を握った。

「妖ちゃん……？」

ボクに手を握られて、急にキョトンとする彼女。

「だ、誰を探してるか解らないけれど……その、暴力はいけないよ！　ね??　それに誰かを傷つけると一緒に、知らず知らず自分の心も傷ついて行っちゃうから……ダメだよっ!!」

ギュツと、握っていた手に力が入る僕。

すると、握る僕の手を見て、ふふつと突然笑みを零した彼女。

「あはは、妖ちゃんあの時と全然変わってないね。ううん、変わってなくて良かったってアタシ思うよ。だってそうゆう優しい所にアタシ惹かれてるんだから」

彼女の言葉が終ると同時に、ボクは頬にキスをされる……。

一瞬何が起きたか解らなかったボク。頬に柔らかい何かが当たったのは解ったのだけど……彼女がボクから唇を離すまで本当に何が起きたか解らなかったのだ。

そしてそれがキスだったと解ると、ボツと熱で熱くなる僕の顔。

い……い、い、今……ボク……。

初めて……された……。

あんなに……柔らかいんだ、唇って。

「……あれ？　妖ちゃん初めてだった？」

悪戯っぽいその質問に、ゆっくり頷いて返すボク。

「そっかぁ。……うん、大丈夫！　アタシもキスはバージンだから」

悪戯っぽい笑みに、何処か恥ずかしさを見せた笑顔。

ドクン……。

鼓動が一つ跳ね上がったのを感じた。

「ありがとう妖ちゃん」

感謝の言葉と共に、再びボクを抱きしめる彼女。

「でも、こればかりは何とかしないといけない事だから。それに

言ったでしょ？ アタシにどんな事があっても妖ちゃんだけは守るって」

耳元で優しく囁き、ゆつくりとボクの肩から顔をどけて、ボクの顔を見る彼女。

ボクを見る彼女の青い綺麗な瞳は、何処かトロンとしていて、ボクの他は何も見えていない様である。

そしてゆつくりと彼女の顔はボクへと近づき……。

コンッ。

と、軽い音と共に何かが彼女の横顔に飛び当たって落ちたのである。

ふと落ちたものを見れば……。

「風呂桶ふうおけ？？」

思わず言葉が零れたボク。

そこにあったのはプラスチック製の何処にでもあるようなピンク色の風呂桶。

あれ……これってもしかして……。

なんて思いながら、飛んできた方を風呂桶から視線を上げていけば、そこには綺麗な長い黒髪をしっかりと湯をまだ少し含ませたまの彼女……電堂さんの姿が。

体にはバスタオルを巻いており、一応体は隠してはいるけれど、バスタオルからは窮屈きうくつそうな胸を覗かせていて、どこかいけないものを見ている気がするボク……。

「は、離れなさいっ！ 今すぐ妖一よういちさんからその手を退どかしなさいっ……！」

ビシッ！ と、指を目の前の彼女に突きつける電堂さん。

「ど……どうして電堂さんがここに……」

「妖一さんが中々戻って来なかったので、何だか不安になって来てみたんですっ。そしたらいきなりこんな事に……」

「……見つけた泥棒女……」

いつしかシヨックから解けた彼女は、ギイイと電堂さんを睨みつけながらそう言う。

「アナタこそ、泥棒猫の様な真似まねをしておいて何を言ってるの!？」

「アタシが『泥棒猫』ならアンタは『泥棒牛』ね……。どうせ大方、その牛乳うしちちで妖ちゃんたがしらを誑たがかしてるんでしょうけどねー……」

……ざわり。

そんな何ともいえない嫌な空気がボク達を一気に包み込んだ気がした……。

そして次の瞬間っ！

ボクは夢の様な、ありえない後景を目の当たりにしたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第五縁『女難？ 占って貰ったらきつとそう出る気が……ボクには何処かそう思えたんだ』

第六縁

「アナタこそ、泥棒猫の様な真似まねをしておいて何を言ってるの!？」

「アタシが『泥棒猫』ならアンタは『泥棒牛』ね……。どうせ大方、その牛乳で妖ちゃんうしちやんを誑たぶらかしてるんでしょうけどねー……」

……ざわり。

そんな何ともいえない嫌な空気がボク達を一気に包み込んだ気がした……。

そして次の瞬間っ！

ボクは夢の様な、ありえない後景を目の当たりにしたのだった。

それは、ボクの肩にかけていた手を離れたかと思えば、その刹那せつな、青々と燃え上がる火炎弾かえんだんを右の掌てのひらから生み出し、その火炎弾をバスタオル姿の電堂さんでんどうさんへと放った彼女の姿っ！

危ないっ！

ボクはそれを見るなり、何故か彼女の元へと駆け出していた。

ダメだ……間に合わない……。

ボクが駆けつけるよりも格段に速い火炎弾。青々と燃え上がり炎の尾をなびかせ、バスタオル一枚の電堂さんへと食らいつくっ!!
ボクは半ば諦めかけた、その時……。

ゴオウオンツ!!

ボクの目の前でそれは一瞬大きく紅く閃光し、大きな音を部屋に響かせて跡形も無く消し飛んだのだった。

「怪我けがは無いかな? 電堂さんに妖一よういち」

「博康様ひろやす!？」

「父さん!？」

目の前に急に現れては、何事も無かったかの様な顔をして問いか

ける父さんの姿。

「え……今……炎が電堂さんを襲おうとして……炎が消し飛んで……父さんが現れて」

あまりの後景に状況整理が上手く出来ないボク。

同じ様に少なからず戸惑いを見せる電堂さんと、

「な……なんなの……」

火炎弾を放った当の本人。

「ああ、何となくコレで」

鯉こいの様に口をパクパクするボクに、淡々（たんたん）とした口調でサラリとする父さん。

コレで。という父さんの軽く上がる片手を見れば、そこには握られた一つのフライパンの姿が。改まってよく父さんを見ると、普段着の上から小豆色のエプロンをかけて、見るからに『お料理中』と言わんばかりの姿である。

何となくコレでって……フライパンで今の炎を消し飛ばした……の！？

父さんの普段と変わらない口調で言った言葉に、呆気あつけにとられるボク。

「で、妖一。こちらに居る少々ロックテイストなＴシャツを着ている娘は、何方どなたなんだ？」

ポツリ。

誰もが呆気にと取られてるこの状況で、ポツリと問いかける父さん。

と……父さんって一体……。

いろんな意味で驚愕きょうがくしつつ、ボクは彼女を紹介しようと……

「……あれ？　そう言えば誰だろう……急な事で名前も聞いてない気がする……」

ふと零す。

彼女の言葉からすれば、ボクは昔にこの子と逢ってる様だけ……全然覚えていないどころか記憶にも無い気がする……。

「まあ、とりあえず、電堂さんはそんな姿じゃ風邪を引いてしまう

から着替えておいで。着替えたら夕飯にしよう。さっきの畳の間（居間）においで」

と、につこりと促す父さん。

その言葉にゆっくりコックリと頷き、脱衣場へと戻る雹堂さんの姿。

「何処の何方か存じ無いけれど、君も良かったら夕飯を一緒にどうかな？ この時間帯だしきつとお腹が空いてるでしょう？ まー私の手作りでお口に合うかどうかは保障出来ないけれどね」

あははは。と、笑いながら彼女にボク達と一緒にの夕飯を誘う父さん。

「え……」

そんな父さんの姿に目を点にする彼女。

うん。誰だつてきつとそうなると思う……。ボクだつて変な感じだし。

「色々募る話とかあるだろうし、食べてからでも遅くは無いらう？ な？」

「え……ええ」

少々父さんの勢いに押された様子で、頷き返した彼女。

「今日は多めに作っておいて正解だったな」

そう言いつつキッチンへと戻って行く父さん。

気難しそうな顔に似合わず、何処か飛びぬけてる気が、息子ならしたボクだった。

「あれ……妖ちゃんのお父……さん？」

「うん……一応」

一つ苦笑いを浮かべながら彼女の顔を見て頷くボク。

ボクが頷いた次の瞬間、視線が合った二人にぶわつと笑いが上がったのだった。

「なるほど、妖ちゃんのお父さんだけあるって事ね。ちょっと呆気にとられちゃったけど、アタシ嫌いじゃないな、ああゆう所」

「あはは、それってどうゆう意味だろう？」

「さあ？」

と、悪戯いたずらっぽい笑みを見せてる彼女。

ボクは笑いながら彼女を畳の間に案内するのだった。

やがて目の前に広がるのは、コタツテーブルの上に置かれた大きな鍋と四人分のご飯と受け皿。そしてその鍋を囲むように男女交互に座った父さんと彼女達の姿。

ダシの綺麗な香りと程よい甘さの香りが部屋中に広がり、空腹をどこまでも刺激する。

それは、蓋を開けるとモワツと湯気が上がり、それと同時に美味しそうな香りが更に広がって食欲を湧き出させた。

鍋の中で時よりグツツと揺らぐ具材。大根・つみれ・こんにゃく・昆布・イカ巻き・牛蒡巻き・鳥団子・ちくわ・ちくわぶ・がんも・がんもどき・三角はんぺん・餅巾着・卵・ソーセージなど色々入れて煮込まれたお鍋……所謂いわゆる『おでん』である。

「さあ、召し上がれ。少し多めに作ってあるからいっぱい食べなさい」

父さんのその言葉に『いただきますっ！』と声がハモった。

「わっ……色んなダシが効いているのに、どれも邪魔するどころか皆で一つの美味しさに導いてる感じがして美味しいです、博康様」

一口、口に入れたパジャマ姿の電堂さんは、思わず感嘆かんたんの声と共に漏らす。

「うわー、凄く美味しい〜！」

と、電堂さんと比べたら簡単な言葉だけれど、すっごく喜んだ顔を見せる彼女。

「うん、久しぶりに食べたけれど美味しい」

そうゆうボクも簡単な言葉だけれど、美味しさに思わず微笑んでしまう。

「よかった。鍋なんてあんまり作らないから少し不安だったが、喜んでもらえて何よりだな」

そう微笑んで、一口する父さん。

「そうだね、二人暮らしたから鍋なんて滅多に作らないしね」
相槌を打つボク。
あいつち

「そうなんですか？ こんなに美味しいのに勿体無いですよ」博康様。
あ、宝の持ち腐れって知ってますか？」
もったいな

につこりと微笑んでそう言う電堂さん。

美味しさのあまり皆の箸がどんどんと進んで行く。

しかし不思議だな。

熱々のがんもどきを食べながら、ふと思うボク。

さっきまで戦闘になるうとしてた二人が、こうやって父さんの作った一つの鍋をつつついてるんだから。

ほら、彼女の『これも美味しい』って言葉に、電堂さんも『そうですね、これも美味しいですね』なんて返してるし。

「どうしました？ 妖一さん？」

「ん？ どうしたの？ 妖ちゃん」

二人を見ていたボクに気が付いたらしく、二人して問いかけられるボク。

「ううん、何でもない。二人共美味しそうだった」

何処か微笑ましい気持ちになりながら、二人に返す。

すると、しばらくの間沈黙を置いた後電堂さんの顔が見る見る内に赤くなり、もう一人の彼女の顔も悪戯っぽくも少し恥ずかしそうな顔になって、
のち

「何なに？ 妖ちゃんデザートにアタシ達でも『食べる』の？」

と、彼女が言う。

「妖一さん……何だか大胆です……」
だいたん

電堂さんも恥ずかしそうに小声になりながらそう言うのだった。

「え……！？ や、そうじゃなくて……二人とも美味しそうに食べてるなってっ！」

二人の言葉に慌てて訂正するボクに、二人共につこり笑って、

『ジョーダンです』

と、声をハモらせた。

うー……ヤられた……。

「妖ちゃん真つ赤な顔、可愛い〜」

「茹^ゆダコさんですね、妖ーさん」

ボツと顔が熱くなつたボクに、クスクスと可愛らしく笑う二人。

とても恥ずかしい気持ちにもなりながら、ボクの心の何処かでは、二人が微笑んでいる事に嬉しくも安心していたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第六縁『お鍋は剣より強しなんだってさ。どこかボクはそう思ったんだ』

第七縁

やがて一通りおでんを食べ終わり、彼女はふと、

「それじゃ夕飯も食べ終わった事だし、約束だしアタシの事を話すね」

自分の事を話し出した。

一緒におでんを食べて和んだ所で、そうだったと思い出したボク。確か……何故か彼女はボクの事を昔から知っていたような口ぶりだった気がする。

でも、ボクには全然覚えも無いんだよね……。何処かで逢ってるらしいんだけど……。

そう思いつつ、僕は彼女が今から話そうとする事に耳を傾けたのだった。

「えっと、まずは自己紹介から。

アタシの名前は今野あかね。確か15歳になる……のか？ 多分。うん……多分」

え？ 自分の歳なのに良く解らないって？？

ボクは彼女の言葉にそんな疑問が脳裏を通り過ぎる。

「で、今日は、アタシの耳にちよつとした噂が飛び込んで来て、その噂を聞いたらジツと出来なくて妖ちゃんの家に飛び込んできちゃいました。妖ちゃんの家は昔から知ってたから、来るのにはあつという間に来れたけれどね。」

でも妖ちゃんの家に来るまでにいやーな匂いがしててね、いざ家の前に着たらここからその匂いしてて、噂の事もあって思わずピリピリがピークに達しちゃって、ついつい扉を壊しちゃいました……ごめんなさい」

と、謝りながら苦笑い一つ浮かべる彼女、今野さん。

通りであんな壊れ方してたんだ……。

なんて、何処か納得するボク。

「噂って何なんだい？」

父さんは問いかけながら四人分のコップに抹茶入り玄米茶を注ぐ。

「うん『あの高杉家の子孫に今月にも嫁入りする者が居るらしい』

って噂が一族にね」

ふと、電堂さんを見るボク。

ボクが電堂さんを見ると、見る見る内に顔が真っ赤になって行く。それはまるで『私の事です』と言わんばかりに、正直な反応で。

「……そうそう、アンタの事ね。えっと……」

と、ゆつくりとした動きで視線を送る今野さん。

「初めまして、電堂ゆきめと言います。今更『初めまして』なんて言うのも変かも知れませんがよろしくお願いしますね。

……でも、あんまりよろしくと言えない気もしますが」

「ああ、そう。アタシはさっき言った様に今野あかねって言うの、ヨロシクね……アタシの一時的な『ライバル』さん」

……じわり。

突然、嫌な空気が漂い始めた気がするボク。

ボクは空気を換えるために、話題を変える。

「そう言えば……今野さんはボクの事を昔から知ってるみたいだけど……どうして知ってたの？」

「そっかー……妖ちゃん忘れちゃってるんだあ……。うん、まだアタシも妖ちゃん小さかったし忘れちゃっても仕方ないよねー……」
と、悲しそうな顔で言う今野さん。

あはは……。ちよつと危な気なのを踏んじやったかも……。

思わぬ地雷に、少々苦笑いをするボク。

けれど、次の瞬間にはパツと明るくなって、

「でもね、アタシはずっと覚えてるよ。今でも忘れてないし、時々あの時の妖ちゃんを思い出すんだアタシ。あの時からアタシは妖ちゃんに一目惚れなんだっ」

子どもの様な屈託の無い笑顔を見せる今野さんの姿。

ふと覗けば、隣の席に居る電堂さんは、何処か面白く無さそうな

顔をしている様にも思えたボク。

「あー……何で知ってるのって言う質問だっけね、あははは。それを話すのならアタシの正体と出会いから話さなきゃね」

コホンッ。と、一つ咳払いをして今野さんは語り始めた。

「アタシって見た目は極普通の女の子なんだけど、実はよく言われる『妖怪』なんだ。他には『もののけ』って言われてたりするんだけれどね」

あ、やっぱりそうなんだ。

彼女の言葉に何処か納得するボク。

いや、妖怪とかどうかは確信は無かったけれど、普通の人じゃないんじゃないかなってぐらいいは思ってたんだよね。

だって掌^{てのひら}から火炎弾を放つし、玄関の扉は焼き吹き飛ばされたし……。超能力者が何かかなってはね。

「アタシは俗^{ぞく}に言われている『妖狐^{ようこ}』に当たるかな？ でもタダの『妖狐』じゃなくて『多変^{たへん}属尾^{ぞくび}の妖狐の一族』でね、普通の妖狐は成長するたびに一本づつ尻尾^{しっぽ}が増えてくのに対して、アタシ達は成長するたびに尾が増えるほど様々な属性の妖術が使える様になる一族なんだ。一族の中で一番尻尾が多くてもアタシのママの九尾くらいかな？ 確か。アタシはまだ三本しか尻尾が無い三尾の妖狐だけど、いつかはママをも超えて見せるんだっ」

そう言う彼女の顔は凄く輝いていて、とても嬉しそうである。

きつとそのママの事が好きだし、自慢のママなのかも知れない。

なんて、彼女の笑顔から何処かそう思うボク。

「妖ちゃんと出逢ったのはアタシがまだ3才の子どもの時。3才って言っても、アタシ達の一族は体の成長が普通の狐よりも遅くて、普通の狐の2ヶ月くらいなんだ。なんでも生まれながら元々妖力が強いから、それを体が制御しつつ成長するから遅くなるとか言ってた気がするけど……ま、そんな事はどうでもいいっか」

そう言って照れ笑いを浮かべる今野さん。

確か狐って生後4ヶ月で大人になるって聞いた事がある気がする

な、ボク。

2ヶ月の大きさになるのに3年って、どれだけの『力』が体に影響を及ぼしてるんだろう……。

ふと、どこか哀想にも思えたボク。そんなの彼女からしたらボクの勝手な考えなんだろうけど。

すると、あれはね〜と、少し遠い目をしながら語り続ける彼女。

「まだアタシが妖力を持て余してて自由に使えない頃、子どもはまだ行っではいけないと言われてたんだけれど……ふとした好奇心から山から下りて遊びに行っちゃったんだ。そしたら人間の仕掛けた罠に見事に足がハマっちゃって、身動きが取れないは、物凄く痛い、恐ろしいはで狂いそうな時……。アタシは一人の人間の子どもに出逢い、そして助けて貰ったんだ。それが妖ちゃん、君なんだよ」

満面の笑みでボクを見つめる彼女、今野さん。

そう言われ、思い返してみれば、ボクが小学校3・4年生くらいに家族で山に遊びに行った時、罠にハマっていた子狐と偶然出逢ったのを思い出した。

ま……でも見つけたのはボクだけど、その罠を解いたのはそこに居る父さんだったりするんだよね……。小学3・4年生くらいじや罠を解く力も無いし、父さんに頼るしかなかったからね。

「あの時はゴメンねっ、妖ちゃん！アタシ痛くてパニック状態だったから、結構暴れちゃって怪我とかさせちゃったでしょう……。

怪我して動けないアタシを抱えて安全な場所まで運んでくれてたのに……」

「え？ ああーいいよそんな事。もう昔の事だし、それに罠にかかったばかりだから人間に脅え^{おび}たって仕方ないしね」

あの時を思い出し、心配そうな顔を向けた今野さんに軽く微笑^{ほほえ}んで返すボク。

あの後、実は母さんに『野生の動物に無闇に触ってはいけないでしょー！』って、こっぴどく怒られたただけだね……。実はそっちの

方が痛かったり……。

「でも、抱えられた時に言われた言葉は今でも覚えてるよ妖ちゃん」と、うつとりした表情で言う。

「覚えてる？ 妖ちゃん。あの時『ゴメンね、人間の身勝手に傷つけちゃって。君が受けた痛みや怒りも怨みも解るけど……それでも人間を怨んじゃダメだよ？ 人間の中にも悪い人ばかりじゃないから……。それに誰かを怨むと同時に自分の大切な心を失くしちゃうから、だから怨んじゃダメ。そんな事で君の大切な心を汚しちゃ悲しいからね……。でもその代わり、ボクでよかったら噛んでも引つ掻いてもいいからさ、それで許してあげてね』って言ったの」

問いかけられて、ああ、言ったような気がするかもしれないなと思ひ、頷いた。

でも、誰かを怨んだらこの件は、母さんからよく言われた言葉だったりもするんだよね。

じゃなかったら……そんな難しい事を当時のボクが理解出来てるかなんて、あやしいし……。

「アタシ、言われて少し経った後で、思ったんだ。

『この子、子どもなのに心理を突いてて凄い……それに自分が傷ついてもアタシの事や他の人間の事を心配してるなんて、どこまで優しい子なんだろう……』って。

そしたら、何だかどんどん妖ちゃんに興味が湧いて来て……好きになって……ここまで来ちゃった」

テヘツ。と、可愛らしい笑みを浮かべる今野さん。

「と、言う訳で妖ちゃん、アタシと一緒になろうっ！ アタシ妖ちゃんの事すごく好きだし、一生大切にするしっ！ 子どもは三人くらいでいいよねっ」

「え！？ ちよつと今野さんっ！？」

言い終った途端、急に横にダイビングをして、ボクの首を捕まえ抱きつくっ！

思わぬ事に慌てる僕をよそに、

「隣のあの子より胸は無いけど……きつとあの子よりは床・上・手
だから……ねっ」

語尾にハートマークをつけて語る……。

その今野さんの姿に慌てて、

「よ、妖一よういちさんから離れなさいっ！」

ぎゅう~~~~と、ボクの空いている片方の手を一生懸命引つ張る電堂さん。

と、父さん!?

思わず視線で父さんに助けを求めるボク。

けれど、ずずうつと食後のお茶を啜り、何やらほのぼのとしたものを眺めるかの様な視線でこちらに返す父さんの姿。

いやいや……実際そんなほのぼのとした後景では無いんですけど
……ねー父さん……。

ほら、電堂さんだつて……。

『妖一さんには私が居ますし、それに、と……床だつて……コレから上手になりますからお構いなくっ!』

なんて真っ赤になりながら叫んでるし。方や今野さんだつて……。

『アンタみたいな生娘が妖ちゃんをリードできる訳ないじゃない。それにアタシと妖ちゃんは昔から赤い糸で結ばれてるんだから邪魔しないでくれるかな!』

つて、対抗してるし……。

ボクは両手を引つ張られる痛みに耐えながら、ふと思う。

もしかしてこれからずっと、こんな毎日になるんじゃないかな……。

なんて。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第七縁『何処かの始まりは、きつと今からの始まりなんだなって、ボクにはそう思えたんだ』

第七縁までをUPして。（前書き）

注意。この先『第七縁』のネタバレ含みますので、まだ読んでいなかった方は、まずそちらを先に読んだ方がいいかと存じ上げまする。

まー……後書きみたいなの、そんなもんですから、読まなくても作品には影響は無いと思いますので、気分次第で読んでみてください。な^^

第七縁までをUPして。

と言う訳で、この『ボクと彼女と彼女の縁結び記』も、とうとう第七縁の更新を向かえました〜（ドンドンドンパフパフ〜ドンドンドン）。

さてさて、いかがなもんだったでしょうか……（汗）。

あんまり面白おもしろくなかったですか？ それとも読んでいく気が失せましたか……？（ジツトリ汗）

ジャム猫 的には、面白くなって来た所な気がするんですけど……（あはは……苦笑）。

さて、今回の話では、いきなり飛び込んできたおねーちゃんの正体と名前が明かされるとい話。

まー……扉を吹っ飛ばして、掌てのひらに火炎弾を生み出しちゃうくらい熱いハートの持ち主なんですから（かなり違うねー、うん）、そりや普通の人間な訳があるまいって所ですよ〜（頷）。

古典的な妖怪の『妖狐ようこ』を扱った訳ですが、ただ昔からある『妖狐』を使うのではなく、オリジナルな妖狐を作って使ってみました。昔からの妖狐を取り入れつつ、少しイジって作ったのが『多変属尾たへんぞくびの妖狐』です。

簡単に言えば、色んな属性、例えば火や水や風や土など五行ごぎょうが新しく使える様になるたびに、尾っぽが一つ一つ増えてゆくってゆうものですね、ハイ。

で、こちら、片方のヒロイン（多分……笑）であるあかねさんは、三尾の『多変属尾の妖狐』な訳で、三つの属性を扱える妖狐って事になる訳です。

どんな属性かって言うところ……って言うたらダメじゃん（ヨイライ）。

多分作品中に出てくると思いますが、良かったら楽しみにしてみてくださいくださいな

今回、ゆきめさんの出番ほとんど無かった気がするんですけど……アレでいいのかなあ……なんて。ゆきめファン減っちゃうんじゃないかと思ってみたり（んなの居ませんから、お気になさらずにと）。ま……ゆきめさんの性格上、前に出る事はあんまり無いとしても、今回台詞あったかどうかもあやゆいですね……（何処か遠い視線を虚空に）。

み……三つくらいな気も……（爆）。

あかねさんがキャラ濃いから、食われかけてるのかもですね（汗）。

あ、濃いといえば、ほとんど台詞無いのに存在が濃い、妖一のお父さんこと『博康^{ひろやす}』さん。

この人……マジメに ジャム猫 ですらキャラが掴めません（泣）。助け舟を出したかと思えば、今回は、のほほんとしてるし……かと思えば、前はフライパンで火炎弾消し去ったし……。

てか、作品中に出てきた噂の『あの高杉家』って何さ?? お父さんの名前『高杉 博康』って言うんだ……みたいな。

うーん……。この人って一体何なんだろう……。

はっ!? もしかしたら『ゆきめファン』やそのうち出来るかも。『あかねファン』よりも断然ファン数多くなる存在かも!?!? ゆ〜ん……。ほんと、良く解からないけど、変で凄い人って感じですね（苦笑）。

一番キャラが薄いつて言えば、今の所ゆきめのお母さんですね。だって名前しか出てないし、しかもここまで読んだ人の中で、覚えてる人が居るのかも不思議ですから（爆笑）。

でも、きつと作品中1・2を争う苦労人なんですよ、多分（↑ジャム猫 がソレ言う?w）。いつかは出ると思うし、ゆきめの母親だからきつと凄い美人で、同じく巨乳（あかねさんの的に言えば『

牛乳^{うしちち}」（なんでしょうね）。肌も白くて玉の様な肌で、妖艶な方なんでしょうね。

でも、いつ出てくる事やら（笑）。

と、何やら長々と話してしまいましたが、第七縁をUPしましたので、良かったら読んでみてください^^

期待通りに応えられるか解かりませんが……よかったら今後とも末永く（え？w）この『ボクと彼女と彼女の縁結び記』をよろしく願いますね……（切実）。なんだか長い話になりそうな気も何処かするんですよ……。

それと、ついででいいので ジャム猫 もかまってください・よろしくしてくださいな……（笑）。

第六縁を更新完了。(前書き)

えっとコレは、第六縁を更新した次の日に、ブログ『ジャム猫の煩惱のりくらり』で載せていたものです。

これの前に『第七縁までUPして』見たいのをUPしたので、ついでにというか、良かったらみたいな感じでUPしました。

ま、作品中とは関係ないので、これも飛ばしてくれても構いません^^

良かったら息抜き程度に、『こんなのあったんだ』と読んでもらえばいいかもです^^

第六縁を更新完了！。

と、言う訳で、少しずつしか書いていなかった第六縁。早くも（??）更新いたしました（輝）

ま……その、上手くも面白くも無いかもなんですけど（汗）
何かしら楽しんで貰えたらって思ってみたり（あはは……）。

えー、今回『第六縁』の見所は、多分……妖一のお父さん『博康
さん』ですかね（笑）。

何気にこのお父さん、動いてくれて助かった感じがしますね〜うん。

しかも、活躍した後の料理の品に、上記に出てきた調理器具は使わんだろ〜ww みたいなツツコミ入れられちゃうおちゃめっぷり（え？w）ですからね。

前々回（要するに第四縁ですね）にちょっとエッチな（？）シーンをを見せてくれたゆきめさんですが、今回は一切無いですね（笑）。前回の一応バスタオルシーンの流れだったりするんですけどね（アハ）。

てか、この先そうゆうシーンが出てくるか、ものすっごく未定なんですけどね（汗） ジャム猫 にそうゆうシーンを期待しないでくださいね（困惑）、ただでさえシットリとしたシーンとかエッチなシーンって書くの苦手なんですから……（↑ダメ♂ですみません……）。

ま、今回はほのぼのと楽しんで貰えたらいいかなって思ってたたりエッチじゃないんですけど……それでも良かったら読んでみてくださいね

それでは、今後とも更新遅いですけど『ボクと彼女と彼女の縁結び記』をどうぞよろしくお願いいたします（願）。

第八縁

「まー……なんだ」

ボクを右に左に引つ張り合う電堂さんでんどうさんと今野さんいまのを目に、「コトンッとお茶が入ったコップをテーブルに置き、改まった口調で一つ言う父さん。

その声に、ピタリと引つ張るのを止める二人の姿。

父さんは続けさま口を開き、

「電堂さんの件は私にも責任があるので白紙にして欲しいと思うのだが……」

電堂さんに提案をする。

「そんなっ！？ 博康様！？」ひろやす

そんな急な提案に、思わず驚く電堂さんと、

「じゃ、妖ちゃんようちゃんはアタシと一緒にしろね」

につこにことする今野さんの姿。

けれども、そんな今野さんに父さんは続けさま、

「待てまで、けれど今野さんの件に関しては、妖一が若干悪い所もあるかも知れないが、あまりに一方過ぎな気がするので、一緒になるとかいう話はまだ先にして欲しいと私は思う」

と、語る。

「そうです！ いくらなんでも一方過ぎですよねっ」

ここぞとばかりに、反撃する電堂さん。

「アンタだつてきつと同じような事してるんじゃないかなあっ」

しかし、そんな電堂さんの反撃を軽々と返す今野さん……。

バチバチバチッ！

ボクの目の前で、火花が散ってるいるのは、きつと気のせいじゃないと、ボクは……一人思う。

「そう言う訳で、二人共『まずは白紙にして』くれないだろうか？」「まずは？」

「白紙に??」

父さんの言葉に、花火を散らしいがみ合っていた女性二人は、思わず問い返した。

二人の顔をゆっくりと見て、父さんは言う。

「お互いスタートラインは一緒。思いも記憶も全部捨てなさいとは言わないから、許婚とか赤い糸でとか全部失くして、始めてはくれないかな? まーそうゆう事だよ。もしこの条件を呑めないのだったら、悪いが妖一は渡せない。でも呑んでくれるなら、もちろん手紙を貰った雹堂さんの方には私から手紙と直々に挨拶をしに行つてあげるけれどもね」

えっと……。どうゆう事……。なの? 父さん??

ボクは、満足げに語り切った父さんを前に、キョトンとしたままだった。

「妖ちゃん争奪の真剣勝負つて事ね、妖ちゃんパパ。アタシはそれでいいよ、負ける気しないからっ」

「……博康様がそう仰るなら……。私もそれで構いません。私だってこんな方などに負けてるとも、負けるともは思いもしませんから」

その言葉に、

「負けてるのはその牛乳^{うしちぢ}だけけどねー」

なんて売り言葉を吐く今野さん。

「う……。牛……。アナタつて本当にデリカシーが無いのですね。品性の底が見える様です」

顔をカァーッと赤くしながら、冷静に雹堂さんなりの毒を吐く。

と、どうやらボクをのけ者にして話が進んでいく様子……。

ボクつて……。一体何なんだろう……。ゲームか何かの景品ですか……。?? ひょっとして……。

なんて思えてくるのは、決して間違つてはいない気がする。

まあまあ……。なんて、にらみ合う二人を宥^{なだ}めながら、

「ルールは何でもありだけれど、ただ付け加えるのは、警察沙汰^{けいさつざた}などになる破壊行為などをしない事と、二人は今日から妖一のいとこ

同士という事。もちろん今夜からこの家で住んで貰うし、妖一と同じ学校にも通って貰うけれどもいいかな？」

言い聞かす様に二人に語る父さん。

ちよつと……いきなり二人もの女性と暮すの！？

急すぎる飛びぬけた話に、思わず気が動転しそうになるボク……。
いったい父さんは本当に何を考えて……。

「で、妖一」

突然声をかけられ驚きつつも、何？ と返すボク。

「妖一にはこの二人から将来の嫁を選べとは私は言っていないから自由にしなさい。二人には妖一を選ぶならという事で言ってるだけで、妖一に他の娘と恋愛をするなどは言っていない」

「う……うん」

「この二人の娘さんは、今からは家族でもあるし、妖一にとって大切な人になるかも知れない。ただそれだけだ」

父さんの真剣な眼差しと言葉に、コックリと頷くボク。

すると、ふと急に笑顔を見せて、

「という事で、頑張れ」

その二言だけをここに言い残して、テーブルの上にあった鍋などを持って部屋から出て行こうとする父さん。

あ、逃げ……。

「って事だから妖ちゃん、今夜からよろしくね。もうっ、寝床の世話なら任せてっ」

「寝床って……今野さん……」

「やーだ『あかね』って呼んでよ妖ちゃん。もう同じ苗字なんだし高杉あかねで『今野』じゃおかしいでしょう？」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、ギョツと片腕を引く彼女。

するともう片方の腕も引かれ、そちらを見れば電堂さんが赤くなりながら、

「……私も今日から『高杉ゆきめ』です……『電堂さん』じゃなくて『ゆきめ』と呼んでください妖一さん。その……妖一さんが望む

のなら私はどんな事だつてし……してあげますから、な、何なりとお申し付けくださつて……く、ください」

軽く斜め下に俯うつむいて恥はずかしそうにたどたと零す。

「い……いとはそんな事しないからつ、二人共！？」

何となく……二人の言葉の意味が解りかけたボク。

ガツシリとつかまれあたふたする中、再び父さんが部屋に顔だけを覗のぞかせ、

「妖一、今日はそこで二人共寝てもらいなさい。お布団はお前が出てあげる様にな。……それと、いとこ同士は一応結婚は出来る事になつてゐるからな、心配は要らん」

要いらぬ事までふと告げて、トコトコとキッチンへと向かう父さん。そんな父さんの足取りは、どこか軽くも聞こえた気が……するボク。

……。

……………。

父さん、何もこの状況で油を注がなくてもいいんじゃない……ばか！……。

「電気、消すね」

ボクはゆつくりと立ち上がり、電気のスィッチになっている紐ひもを三回引く。

すると真つ暗になり、直ぐ様両手を引かれるボク。

仰あおむ向けの状態から顔を右へ向けると、

「おやすみ、妖ちゃん」

甘い声でそう言う彼女、あかねさんの姿が。

そしてぐるつと左を向けば、

「お休みなさい、妖一さん」

同じく甘い声でそう言う彼女、ゆきめさんの姿が。

がんじがらめで動けないボクの二本の腕を確認し、ふと天井を見ながら、

「お休みなさい、あかねさんにゆきめさん……」

彼女達の返事をしたのだった。

お風呂に入ってからお布団を二つ用意したのはいいもの、二人は一向にボクの腕を放してはくれず、仕方なくこうやって三人で寝る事になってしまったボク。

ふー……。と、心の中で一つ大きくタメ息を吐いた。

『妖……ちゃん』

すると、あかねさんが小声でボクの耳元で呼ぶのに気が付いた。小さく、何？ と、返す。

「今日はゴメンね、色々。キスしたり抱きついたり、扉壊したった」

「はは……うん、もういいよ」

一つ苦笑いするボク。

ふと過ぎるは、抜けっぱなしになっている、その玄関……。

明日からどうしようかな……。なんて、心の中で吐いたタメ息と共に出てくるそんな言葉。

「ありがとう妖ちゃん。アタシね、キスしたり抱きついたりするのもいいけど……今こうやって妖ちゃんの手を握って眠れるのが、一番嬉しいんだ」

ふふ。と、小さな笑みを零し、ギュツとボクの掌を握って告げるあかねさん。

その言葉は、さっきまでのあかねさんとは違って、まるで子ども様にも思えたボク。

あかねさんにもこうゆう所あるんだな……。

なんて感心してた次の瞬間、

「でも、やっぱりキスとか抱きついたりとかしたい。もっともっといっぱい妖ちゃんになりたいな、アタシ」

少し前までの悪戯気味な声で言うのだった。

おやすみ。と、最後に告げて、ゆっくりと静かに寝息をたてて眠るあかねさん。

そうとう疲れてたんだろうな。ゆっくりと息をしながら直ぐに寝

ちゃったみたいだし。

ボクはそう思いつつ、小声でおやすみと返した。

『妖一さん……』

ボクが再び仰向けになると、ふと左のほうから声がしたのを耳にしたのだった。

「起きてたんだ」

ゆっくりと左へ首を向けて問いかける。

「はい。声をかけようと思ったんですけど……先にあちらが妖一さん呼び止めたので……」

小さな声でそう言うゆきめさん。

あ、小声だけど聞こえてたんだ。

ボクが、どうしたの？ と、問いかけるとゆきめさんは、

「その……したんですか………キス………」

言葉を詰まらせながら問い返した。

う。

ゆきめさんの問いに、思わず言葉が詰まるボク。

あかねさんと出逢^{であ}って、ほんの少しの間に確かにしてしまったのだ……。

いや……したと言うよりされた方なだけけどね……ははは。

「そうですか……」

ボクが言葉を詰まらせた微妙な沈黙に答えを見出して頷く。

「や……その、頬に。でもあかねさんが急にしてきたん………」
言葉が詰まる。

いや、言葉が出せないと言った方がいいかも知れない……。

この柔らかく気持ちの良い弾力感はもしかしたら……なんて思っている、フツと唇からの感覚が消えたのだ。

「……これは秘密ですよ、妖一さん。その……誰とでもじゃなくて、妖一さんとだからですから……ね？」

それは、暗闇に慣れたボクの瞳には、ゆきめさんが自分のした事を恥^{はじ}らうように、軽く俯いた様にも見えた……。

「それじゃ……お休みなさい妖一さん」

ギョツとボクの掌を握って、恥ずかしそうな声で言葉を紡ぐゆきめさん。

「お、おやすみなさい……」

その言葉を聞いてから直ぐに、ゆきめさんも寝息を静かにたてて眠る。

……………。

……………されちゃった……………。

あの一瞬の感覚を再び思い出し、ボツと顔が熱くなるボク。

きつと今日は……寝付けはしないかも知れない……………ね。

そう思いながら瞳を閉じて、ゆつくりと幾頭も数えるだろう羊を、ゆつくりと数えるのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第八縁『二つの証と気持ちキス。嬉しいのに何処か落ち着かないなつてボクには思えたんだ』

第八縁をUPして。　ゝあとがきゝ（前書き）

これはブログ『ジャム猫の煩惱のらりくらり』にてUPしたもので、タイトル通り後書きの様なものです^^; なので『第八縁』のネタバレ等を含みますので、よかったら『第八縁』を読んでから続きを読んでみてくださいね（滝汗）。必要なかったら飛ばしちゃってもいいので、飛ばしてください

第八縁をUPして。　　ゝあとがきゝ

と、言う訳でとうとう『ボクと彼女と彼女の縁結び記』の第八縁をUPしましたゝww

ほんと、少しずつしか書いてないから、次回をUPするのに時間がかかってしかたないですね（汗）。毎回読んでくれてる方にとっては、このダメ作者である　ジャム猫　が本当にご迷惑をおかけしております……（滝汗）。

まー……何とか無事第八縁（第八話）までUP出来たので、お許し願いたい（あはは……）。

さて、今回の話は、なんと二人の美少女が何でか急遽家族入り！？！？　という話。

流石は博康さん、発想が飛び抜けていて、　ジャム猫　の想像を超えるGOODなキャラです（笑）。

てか、ほんとどうするんだろ？　博康さんに妖一君。

現在男しか居ないという家に、いきなり女性軍二名を投入とか無謀な一手だしさ。ほんと、考えなしにしか思えん……。

……ン？　妖一君、噂に名高い嬉恥ずかしハーレム状態じゃん……をい。中学三年でそうゆうのってどーですか？　ねー、一応人の親である博康さん……。

ほら、そのお蔭で、妖一君のファーストキス奪われちゃってるじゃない（爆）。このまま芋ズル式に全部奪われちゃったらどーすんでしょーねー。

あー……『獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす』というアレですか？　もしかして？

いやいやいや……もしそうだったとしても、色々違うでしょうよ……博康さんよお。

うん。

とりあえず、頑張れ妖一君。

で、今回のあかねさんはどうだったでしょうね？

普段強気っぽいあかねさんが、再び一瞬だけ乙女に戻ってますし、なかなか良かったのかもしれない？

アレでも15歳ですから、やっぱりそうゆう部分はあるもんですよ。色んな意味で所で積極的過ぎる15歳も……またまた考えようかも知れませんが……（笑）。

まー、あかねファンさんが喜んでくれたらそれでいいか（テヘ）。

そんでもって今回のゆきめさんは、中々頑張ってたんじゃないでしょうかね？

あかねさんの言葉に反撃パンチを出してますし、負けずに妖一君にアピールしてますから。

なによりも、今回のゆきめさんの見せ場がありましたから、上出来でしょう（爆）。

全開なんて数えるくらいしか台詞無せりふかったのに比べれば、急成長ですよ（シミジミ）。

ゆきめファンも今回は喜んでくれるかもしれません。

うん、このまま頑張って欲しいところですね（親心）。

まー……何はともあれ、二人の女神の妖一君ち突撃編（何ソレ？

W）無事終了ですね。

ここまで行くのに第八縁までかかってしまいました（汗）。

手紙から始まって、ゆきめさんが現れ、あかねさんが妖一君ちの玄関扉を吹っ飛ばしながら現れ、出逢って早々喧嘩けんかするは、キスはされるは、何故か家族にはなってしまうはで、ドタバタな話で終わりますが。

でか、次回からどうするんだろ？ この三人と一人（もちろん博康さんの事 笑）。

そしていつ直るんだろ、玄関扉（笑）。作品中はまだ春だからいいけどね。

うーん……未だに博康さんのキャラが掴め^{つか}ないんですけど……（をい）。

まー……なるようになるしか無いんで、考えなしにフアイトですね。

こんなダメ作者の ジャム猫 で良かったら、この『ボクと彼女と彼女の縁結び記』を次回からよろしくお願いしますね（輝）。

第九縁

むにゅ。

それは、とても柔らかい手触りのいい手ごろなボールを掴んだ様な、そんな感覚にも似ていたと……ボクは思う。

凄く気持ちよく、何時までも触っていたいと心から望んでしまう、そんな柔らかさ。

その感触に、自然とか不自然とかそうゆう考えが入る余地は無かった。

そう。心地のいい小鳥の鳴き声と共に、ゆっくりと目覚めるまでは……。

「おはよ……妖ちゃん」

いまだ眠そうな寝ぼけ眼を擦りながら、優しく柔らかい口調で挨拶をする目の前の女性。

それは、ブロンドのショートカットに綺麗な青い瞳。少し小さめの端麗な顔立ちにプルンとした小さく可愛い口元をした美少女のあかねさんである。

「おは………」

挨拶を返そうとしたボクは、目の前に広がった世界に思わず言葉が途切れる。

ボクの硬直に、ああ……と、視線を自分へと落として、ふと納得するあかねさんの姿。

直ぐ様あかねさんとは反対方向へと背を向けたボク。

背を向けながら、何で、どうして、何が、どうゆう事だろうと、光の速さはあるだろうかというスピードで言葉達が脳裏を過ぎって行っただった……。

いくつもの疑問詞達が愉快に脳裏を過ぎ去った後、

「ああ……気にしないで妖ちゃん。これはこれで何も無いからさ」

あははは。と、軽く陽気に笑うあかねさん。

「な、何かあったらあったで……ボクは困りますっ。

そもそも……何で一階に寝ているはずのあかねさんがボクのベッドに居るんですか！？ 何で上半身裸なんですかぁー……」

窓から差し込んだ陽に当たって、美しく輝く綺麗な肌。そして綺麗な形をした胸が無防備にも露になっていたのである。

「ゴメンねー妖ちゃん。アタシ、昔から寝る時は服を脱いじゃうクセがあつて……驚かせちゃったね」

もちろん上半身裸なのは驚いたけれど……それ以前にボクのベッドに居た事が、物凄く大きな驚きである……。

ボクは、早く脈打ち暴れる胸の鼓動を静まらせながら、

「あかねさん……一体どうした……の？」

なんて問いかけてみる。

すると、一つ『うゝん……』と軽く唸^{うな}ってみせて、

「強^しいて言えば、涙を浮かべた寝顔の妖ちゃんが、何だかほっとけなかったからかな」

優しい笑い声と共に返したあかねさん。

え……ボク、泣いてた??

悲しい夢なんて見てもいない気がするし……。

突然言われた事に思わず驚いたボク。

するとあかねさんは、ボクの背中にピトツと、片手を優しく押し当てて、

「本当は妖ちゃんと色々したくてここに来たんだけどね、寝言で『ごめんね……』なんて言いながら泣かれちゃったら、こっちも何も出来ないし……ほらっ……ほっとけないじゃない。そしたら、そんな妖ちゃん見てたら一緒に横になりたくなっちゃって……気がついたら思わず朝まで寝ちゃったって訳なんだ」

と、少々恥ずかしそうな口調で語った。

このまま振り返ったら、もしかしたら、はにかみ笑いを浮かべるあかねさんが居るのかも知れないなって、ふと思うボク。

でもそんな思いとは裏腹^{うらはら}に、実は、急に背中に当てられた手に、

静めていた鼓動が再び一つ跳ね上がっていたりする……。

「……そっかあ」

ボクは、そう何処かドキドキしながら頷き返すと、あかねさんは、そつとボクの背中に両手と額をピッタリと付けて、

「だから……洋服とか散らかってるけど……本当に何もしてないんだ……よ？ 妖ちゃん……」

と、何処か消え入りそうな切ない声で、語ったのだった。

その瞬間、ギューウと、心臓を驚掴わしづかみされる様な、甘く苦しいモノを感じたボク……。

ふと、あかねさんの言葉にベッドから部屋の景色を覗のぞけば、言葉通りに脱ぎ散らかされたと思われるあかねさんの服やら下着やらの、男の部屋に似合わないモノ達の姿が……。

あははは……。何だか……。これだけを見ると僕があかねさんのを剥はぎ取って散らかしたみたいで……。変な感じがするなあ……。

なんて心の中で苦笑いを浮かべていると、

トットトットトット……。

と、一階から二階へと階段を上がってくる足音を一つ耳にしたボク。

え！！もしかして父さん！？

ボクは、今、色んな意味で見られたくない人物が真まっ先に頭に浮かんだのだった。

ボクが説明しようとする以前に、この間違い偏かたよった状況を色々とあらぬ方向に分析と把握はくして飛びぬけた答えと共に了承してしまい、そつな父さんに、どこまでも脱力感を味わうボク。

行動が全く読めない父さんだから、なお更である……。

だんだん近づいてくる足音。

……え。父さんにしてはこの足音は軽すぎる気が……。

……まさか。

だんだん近づいてくる違和感^{いわかん}を覚えるその足音に、ふと過ぎ^よつた不安。

そして、そんなボクの不安と共にボクの部屋の扉が開けられ、
「妖一^{よういち}さん、おはようございます。もう朝なので起きてくださいね」と、扉を開くと同時にこんな状況のボクへと向けたパジャマ姿の素敵な美少女の笑顔が一つ。

それは、背中まで伸びた黒く美しい長い髪に、どこぞのお嬢様かと見間違えそうな端麗な顔立ち。そしてその黒髪を引き立たせる様に白く透き通るような美しい肌をした、やや豊満^{ほうまん}な胸が魅力的な美少女のゆきめさんの笑顔である。

その笑顔は、しばし時を止めたかの様に固まりを見せてから、急速に赤々と顔色とその形状変えてゆくのだ。

やがて、

「ああかあねえさあああんつつつ!!」
怒りの色でこれでもかと染め上げた咆哮^{ほうごう}が、ボクの部屋を大きく振動させたのだった……。

「五月蠅^{ごもよう}いなあ……朝っぱらから」
むくつと、そのままベッドから膝^{ひざ}で起き上がった様な、そんな気配^{はい}を背中を感じたボク。

あれ……そう言えば……。

ふと散らかるモノの中から、先ほどチラッと見えて気になったあのモノを目で探す。

すると、案^{あん}の定^{じょう}その中から探し物があつた事に、心の中で大きなタメ息を一つ吐^ついた……ボク。

「ひっ……」

むくつと起き上がったあかねさんを見て、口元を引きつらせるゆきめさんの姿がチラリ。

うん……。状況が状況だけに、仕方ないよね……そうなくても。

「ア……アナタ、何で全裸なんですか!？」

床にクシャツと丸められ、他のモノと一緒に散らかり落とされて

いる、そのモノ。

「だから朝っぱらから五月蠅いって言うの。同性同士なんだからいちいち全裸くらいで驚かないでよ、まったく……。それに、服を着るか着ないかなんてアタシの勝手でしょう？」

迷惑そうな口調で淡々（たんたん）と告げるあかねさん。

そして一つアクビをしながら、トントとベッドから降りて、

「何だか妖ちゃんとの朝のいい気分がブチ壊しだわ……。アタシ下に戻るねー。ゴメンね妖ちゃん、また今度一緒にね」

散らかる自分のモノを拾い上げ、ウィンク一つしてボクの部屋を出て行くあかねさん。

……なんだっただろう。

なんて疑問と、真っ赤な顔のまま固まるゆきめさんを残して去って行くのだ。

「えっと……。言い訳に聞こえるかもしれないけれど……。本当に何も無かったからね」

ボクは苦笑いを浮かべつつ、固まっているゆきめさんに、一つ真実を伝える。

状況が状況だけに、自分で言っていて何処か信憑性（しんぴやうせい）に欠けてしまいうそである……。

でも……。本当の事だし……。ね。

やがて、硬直も解けて、落ち着き払ったゆきめさんは、にっこりと素敵な微笑を浮かべて、

「私は、妖一さんの事を信じてますから大丈夫ですよ」

と、ボクに告げ、それに……。と付け加えて、

「妖一さんには私が居ますから……。いつでもお傍にお呼び下さいね」
恥ずかしそうに頬（ほほ）を赤らめたのだった。

ボクはその言葉に『うん』とも返事は返せないながら、優しい口調で、

「そろそろ下に行こっか？　きっと父さんがゆきめさんを遣（つか）わしたんだと思うし、朝食が出来てるだろうから、一緒に朝ごはんにしよ

「ゆきめさん」

微笑み返した。

「はい、妖一さん」

ボクの言葉に嬉しそうに返すゆきめさん。

そんなゆきめさんに、シッカリと返せなかったボクが、何処か後ろめたくも思えたのだった。

「ただいまー」

未だ空きっぱなしの玄関から、ボクは帰宅の知らせをする。

「おかえりなさい妖一さん」

すると、ボクを出迎えたのは甘い香りを纏まとったあずき色のエプロン姿のゆきめさん。

元々美しい白い肌をしていたゆきめさんにあずき色の赤はとても映はえ、淒く似合っている様に思えたボク。

「あれ？ 父さんとあかねさんは？」

そんな素敵なゆきめさんに、何処か恥ずかしくも思えつつ、一つ尋ねてみた。

いつもなら父さんの声がボクを迎えに来るのに、全く声もしないのでふと不思議に思えたのだ。

それに、昨日は飛び込んでくるんじゃないかってくらいの勢いで迎えてくれたあかねさんの姿が無いのも、何処か気になるし。

「はい、博康様ひろやすとあかねさんは洋服とかを買うとかで一緒に出かけてますよ」

あ、なるほど。通りで二人共声も姿も無い訳だ。

「ゆきめさんも一緒にお買い物に行けばよかったのに」
と、微笑むと、

「いいえ、鍵もかけられないこんな玄関のままじゃ、誰か一人くらい居ないとですよ」

なんて、につこりと笑いながらも、真面目まじめな答えをが返ってきたのだ。

そっか……。確かにそうかも……。

そう言われ、感嘆かんだんとしていると、ゆきめさんは、

「それに……妖一さんの帰りを私一人だけで待ってみたかったんです」

頬を軽く赤らめつつ、そう言葉を続けたのだった。

ゆきめさんのそんな言葉に、何処かくすぐったくも嬉しく思えるボク。

「あ、今ちようどクッキーが焼けた所なので、その一緒にどうですか？ 妖一さん」

一呼吸分の間が空いたかと思えば、直ぐ様照れ隠しをするかの様な口調で、問いかけたゆきめさん。

「あー……甘い香りの正体はクッキーだったんだ。うん、それじゃ制服から着替えたらいいただきます」

ボクもつられ、照れ隠しをする様な口調でそう返して、玄関から上がる。

すると、小さくクスツと可愛い笑みを零したゆきめさん。

どうしたの？ と、問いかけると、彼女は嬉しそうに、

「ふふっ。いえ、何でもありません。何だか本当に家族になったみたいで嬉しいです」

唇に指を当てながら微笑んで返したのだった。

そんな彼女にボクは、

「もうゆきめさんは、ボクのかけがえの無い大切な家族ですよ」

優しい口調で伝える。

すると、ボツと顔を一層に赤らめるゆきめさん。

「あ、そうゆう意味じゃなくて……そのー……」

「はい、プロポーズとかそうゆうのじゃないって解かってますよ妖一さん」

真っ赤な顔をしたまま、それが間違いだとしても嬉しそうな顔をして微笑んで返すゆきめさん。

『温かい内に食べるクッキーも美味しいですから、出来るだけ早く

着替えて来て下さいね』

なんて言葉を二階へと上がって行くボクの背中に残して、奥の台所へと向かっていくのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第九縁『甘くも危険な新家族生活！？ こうやってボクの日常は始まるんだなって、ふとボクには何処か思えるんだ……』

第九縁をUPしてゝあとがき（前書き）

これは『第九縁』のネタバレ等を含みますので、よかつたら『第九縁』を読んでから続きを読んでみてくださいね（滝汗）。別に読んでも読まなくても作品本文には影響は無いと思いますので、面倒な方は飛ばしてくださいね

第九縁をUPしてゝあとがき

と、言う訳で最近恒例になりつつある、UP後の後書きです（笑）。

まー、なんとか『ボクと彼女と彼女の縁結び記』の第九縁をUPした訳ですが、どうだったでしょうかね^^;??

時間をかけて（ただUPが遅いだけです……）更新した割りには、面白くは無かったりしましたか^^;?? 文章力が乏しいので、内容だけでもって思うんですけど、中々上手くは行かないみたいで……。期待はずれでしたら、すみません^^; ;

さて、今回の話は、二人が住み始めて二日目くらいからのお話になる訳です。

普通なら、第一目から書くんですけど、何となく ジャム猫 の気まぐれで一日遅らせてみました（笑）。

一日目には何があったの!? なんて質問受け付けませんしお答えも出来ませんのでヨロシク

まー、飛び込んで来そうなほど妖一君よういちをあかねさんが迎えたという事ですから、学校へと行く妖一君を掴つかんで『妖ちゃん、今日は休もうよ』なんて、新学期早々欠席させようとしてもしてたんでしょうねー、あかねさんの性格からすると。

で、真面目まじめなゆきめさんは、そんなあかねさんに『妖一さんは今から学校へ行くんですから、その腕を放してください!』なんて言いつつ、妖一君のもう片方の手を引っ張ってたんじゃないでしょうかねゝ（うんうん）。

きっとその後ろでは博康ひろやすさんが、そんな三人を何げ無い顔で見届けてたのかも（あり得過ぎ 笑）。

……と、そう言えば今回の話でした（汗）。

えー、今回のあかねさんの見せ所はヌードですかね？ 文章中では結構サラツと流れてますけど。

寝る前に服を脱ぐって言うクセ、かなり凄いクセですねー……実際に考えてみると。暖かい時期なら別にいいですけど、現在（11月）みたいな寒くなる季節はそうそう服は脱げない気が……。布団に入れば暖かいでしょうけど、それでも結構冷えますからねー。

まー、でも、流石に妖一君の部屋で脱いじゃダメでしょう……。クセなんだからどうしようもないかも知れないけど……。

ほら、今回みたいに大事になりかけないし。

ん？ そっちの方があかねさん的には、都合がいいのかな？ もしかしたら……。だとしたら……。それを狙って……。て、そこまで狙って出来そうな性格でもなさそうですし、そうゆうのは無さそうですよね（今の所は 笑）。

いつもながらですけど、ゆきめさんの見せ所って少ししか無いですねー……。今回も本当に少しだけですし。

性格上、あかねさんみたいに襲ったり（え？w）とかは出来ないので、突発的な行動をとりそうなあかねさんの後ろに回ってしまうのは仕方ないのかも？ ですかねー。

それでも、妖一君の印象には残す事はしてますから、頑張ってるといえば頑張ってますよねー彼女。正統派と言えば、正統派なのかもしれません。時に ジャム猫 の予想以上の事をしでかすので、意外性 No.1 なのかもしれませんね（笑）。

ま、そうゆう所全部ひっくるめて、ゆきめさんのもう一つ魅力なのかも知れませんね

え？ もう一つは何かって（訊いてませんから）??

それは、中学生とは思えない豊満なバストですよ（キツパリ 笑）。

あ、今回台詞すら無かった博康さん。

でも、他の人の台詞中^{せりふ}には存在を確認出来たので、ある意味『流石^{さすが}』って感じですね。朝ごはんを作ったり、あかねさんの買い物に付き合ったりと。

やー……この方、本当に不思議。冗談^{じょうたん}抜きに、読んでくださっている方の中でファンが出来そうで怖いですね……。その内、キャラクターランキングでもしたら、上位には上がりそうな気配もしますからねー……。

ま、読んでくれる方はあんまり居ないので、ランキングさえ出来るかも解りませんが（苦笑）。

うんでもって、当主人公であらせられる妖一君ですが、今回はいい思いしてますねー（怒）。まったくもって遺憾^{いかん}です。今度とつちめてやるうかしらん（輝）。

何も無いのに女の子から出来立てクッキーとか、一緒に起床とか

……。

おま……中学生の分際^{ぶんさい}で、それでいいの！？ おかーさん羨ましくて『みのさん』か『ヒデさん』に電話しちゃうつ。

……ねー、ジャム猫の一生分の幸せをもう中学生で味わってるんだからね……。……。

と、言う訳で、あとがきらしくなあとがきでしたが、ここまで読んでくださった方が居たら嬉しく思います（涙）。

作品とはまた違った楽しみになって貰えたらなって、一人ジャム猫は思っていたり（笑）。

まだまだ続きますので、更新遅いくとも良かったですら、また楽しみに待っていてくださいね。まだまだ上手く書いてませんが（汗）。いつか、キャラクターランキングが出来たらいいな。なんて思ってます。その時は、皆様よろしかったらご参加くださいね（輝）。では、次回『第十縁』をお楽しみに。

追伸

もう10話目になるんだ……。自分で書いてて驚きだわ。

第十縁。

薄っすらとボクの瞳に映るのは、漆黒しっこくの闇の世界にひっそりと咲く、白く透き通る様な美しい肌。

あ……ゆきめさん……かな？

ハッキリしないばやけた頭の中で、そこにある答えを導き出したボク。

すると、目の前のゆきめさんは、何処か今にもポロポロと涙を零しそうな表情をボクに向け、

「妖一さん……」

一つ、ボクの名前を愛しくも切ない口調で呼んだ。
え！？ どうしたの！？

ボクはそのゆきめさんの様子に驚き、ばやけた頭を何とか鮮明にしようとする。

けれど、まるで雲の中に居るみたいに、全然頭がハッキリとしてこないのだ。

やがてゆきめさんは、ゆっくりとした沈んだ声で、
「私……妖一さんに出逢えて本当に良かったです……。わずかな日々でしたが、家族になれた気がして……。本当に嬉しかったです。あ……りがとう……。ございました」

と、最後にはとうとう堪えきれなかった涙と共に、感謝の言葉と一礼する……。

ふと上げたその顔は、ポロポロと悲しみの涙に溢あふれてつつも、何かを必死に堪こらえようとした、胸を切り裂かれる様なそんな微笑みだ。
え……何……？ えっ！！ ゆきめさん……！！？

いきなりの事に、困惑するボクの頭。

この状況にボクは何一つも着いていけないのだ。
目を真っ赤にさせながら、くるつと後ろを向いて、目の前から歩き去って行こうとするゆきめさんに、ボクは、

「ゆきめさんっ！　ちよつと待つ……ゆきめさんっ！」
考えるよりも何より手を出来るだけ伸ばしたのだった。

ボムッ。

何か大きく柔らかなもので軽く弾んだ気がしたボク……。
大きく柔らかく、そして温かくて優しい香り。

ボクは、寝ぼけた頭の中で、ふと何処かで味わった様な、それと似た感触を思い出した。

……。

あー……。

寝起きだと言うのに色んな思いが交差するボクの思考。
そしてゆっくり目を開けると、そこには……。

「お、おはようございます……妖一さん」

真っ赤な顔をしつつも、冷静を装うおごりとしている、何処か健気けなげなパ
ジャマ姿のゆきめさんの姿が……。

それは、ちょうど仰向けになっているゆきめさんをボクが押し倒
している。

と、いう構図がそこには出来上できあがりがっていた。

しっかりと、パジャマの上からも弾力のある豊満ほうまんな胸を体で感
じるボク……。

それよりも、ゆきめさんの優しい香りに押しつぶされそうになる
ボクの思考が、何処か切ない悲鳴を上げている様だ。

「何がどうしてこうなったのか解らないけど……何よりも先に謝ら
せてね……ゆきめさん。……すみま……」

「いえ……少しの間そのままお願いします妖一さん……」

そう苦笑いを浮かべながら体を引き起こそうとするボクを、ギュ
ッと自分へと引き寄せるゆきめさん。

……え。

ゆきめさんの優しい香りと、ボクを包む柔らかい感触が、より一

層に頭を侵食^{しそく}して、温もりが心を宙に浮かせて行く。

そしてお互いの早い鼓動が、いつしかシンクロしそうになるくらいの間、黙って両手でボクを抱いていたゆきめさんは、ふと抱きしめていた手を退けて、

「すみません、もういいですよ」

柔らかに優しい口調で告げる。

ボクはポーっとして良く解らないまま、

「どうした……の？」

侵食から開放し切れない頭でゆっくりと起き上がりながら問いかけると、

「妖一さんの温もりを……まだ感じてたいな……って」

真っ赤な顔のまま優しく微笑んでいるゆきめさんが覗けたのだった。

えっと……。……。

ちょこんと、自分のベッドに座りつつ、宙に消え行つた言葉を探すボク。

すると、目の前で正座をしてボクの言葉を待っていたゆきめさんは、

「優しい温もりは、空いた心に染み渡って行つて、決して忘れる事はないんです。もし、何処か心が彷徨っちゃったとしても、きっとこの温もりを思い出して……」

ボクの胸に人差し指をそつと当てて、小さな声で『またここに戻るんです』と、一つ笑みを零して言う。

「ね、何があつたの？」

そんなゆきめさんに、その綺麗な瞳を見て問いかけた。

いや……その『あつたの?』というよりも、何処か『あるの?』という気がするな……。

ボクは、一つ確信を掴めきれない思いをめぐらせる。

「私、昨日みたいに妖一さんを起こしに来たんですよ」

「え?」

問いかけとは違う答えに、思わず聞き返したボク。

「そしたら名前を呼んだかと思っただけに腕が伸びて、私を掴んだままゴロンとベッドから落ちてしまっただけ……それでさっきの様な格好に。こちら側の端に寝ていたので簡単に掴まれちゃいましたね」

「ゆきめさん……？」

言葉を続けるゆきめさんに、何処かはぐらかされた様な、そんな感じがしたボク。

もしかしたら、ボクに要らぬ心配をかけない様について、ふとそう思っただけなのかも知れないけれど……。

「でも……寝言でも私の名前を呼んで貰えて嬉しかったです」

そう、につこりと微笑んだゆきめさん。

その顔に、何処か不安が過ぎったボク。

あれ……なんだろこの感じ……。

ゆきめさんの微笑みに、何故か心が重く苦しいものを感じるのだ……。

ふと、そのゆきめさんの微笑から涙が溢れてくるのが頭に浮かんだボク。

……。

そっか、さっきの夢……その夢が何処か重なったんだ。

胸を切り裂かれる様な微笑みと、そして必死に伸ばした腕も空し

く何もかする事もない……喪失感。

ボクはベッドから降りて、

「え……！？」

降りたのと一緒に、ボクの手が突然肩を触れた事に驚いたゆきめさん。

うん。ゆきめさんはここにちゃんと居るし、ちゃんと触れる事だって出来る。

ここのボクならきつと……。

「……解らない。まだボクは、言ってくれないと解らない事ばかりだけど、何かゆきめさんにしてあげられる事がいっぱいあるかも知れ

ないね。

ね、ゆきめさん？ 今のボクじゃまだまだ出来ない事も沢山あるかも知れないけれど……今ボクに出来る精一杯で、ゆきめさんを何か助けてあげたいと思うんだ」

夢のゆきめさんを思い出しながら、夢では向ける事の出来なかった微笑みと共に話すボク。

ゆきめさんは、ボクの手の上から片手をそつと優しく重ね、

「ふふつ、妖一さんは本当に優しい方ですね。私はこの温もりと優しさが凄く好きで、いつも心には妖一さんが居るんですよ。

だから、今は、この手の温もりと優しさで胸がいっぱいでも何も要りません」

ボクの手を両手で大切そうに包み持ち上げながら、ゆっくりと自分の頬に当て、

「でも……私って意外に……かも知れません」

恥ずかしさのあまりに真つ赤な顔をしつつも、とても優しい瞳でボクを見、言葉を零すあかねさん。

包まれた手からゆきめさんの体温が伝わり、ドキドキとしたボクの心臓。

そして目と目が合ったかなと思った、その刹那。

「やっぱり……もう少しだけ、妖一さんを感じさせて……ください」
ギュツとボクを抱きしめて、耳元で消え入りそうな声で囁いたのだ。

耳元で囁かれながら抱きしめられ、ボクの両手はゆっくりとゆきめさんをそつするべきかの様に、自然と細い背中へと向かっていく……。

その瞬間……何故かあかねさんの顔が浮かんだボク。

それは、にっこりと明るい笑顔を見せるあかねさんの顔。まるで今にも『妖ちゃんっ』と元気な声で呼びかけてきそうな、そんな笑顔で。

このままゆきめさんを抱きしめちゃいけない……。

あかねさんの笑顔に救われたか様に、ボクの手はピタツと止まった。

うつん、そうじゃない。ゆきめさんだからとか、あかねさんだからとか、そうゆうのじゃなくて、今のボクは二人共抱きしめちゃいけないんじゃないかなって……。

未熟なボクだけど、何故かそう思える気がした。
すると、

「そろそろ行きましょう、妖一さん。博康様ひろやすが待ってますし」

ボクから離れ、赤々とこれでもかと染め上げた顔を俯うつむかせながら、促うながするゆきめさん

「え、あ、うん。行こうか」

考え事をしていた僕は、上手く言葉を返せないまま、言われるまま下へと降りて行くのだった。

それは、今日の帰りが早くなったボクと、家で暇を持て余していたあかねさん&ゆきめさんで買出しに行った、そんな夕飯終わりだった。

夕飯のお片づけをする父さんに、夕飯も食べ終わっただし遊ぼうよとボクに引っ付いたあかねさんと、それをなんとか剥むがそうとしていたボクに、突然ゆきめさんが言った。

「私……明日の休みに一度家に帰ろうと思っんです」
と……。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十縁『夢と現実と女心。交差したその先にあるものって……ボクはふと不安に駆かられたんだ』

第十縁をUPしてゝあとがき（前書き）

えー、これはタイトル通りに第十縁のあとがきらしきものが始まります。なのでネタバレ等を含みますので、よかつたら先に『第十縁』までを読んでから進んでくださいね（テヘ）

なお、別にコレを読まなくても本編とは関係ないので、要らなかつたら飛ばしてくださいね

第十縁をUPしてゝあとがき

と、言う訳で『ボクと彼女と彼女の縁結び記』も、とうとう第十縁を迎えました。

いやはや、更新が遅いだけあって第十縁上げるのに何ヶ月かかっているのやら……。ブログ上で9月11日に第一弾である第一縁が更新されてますから……。2ヶ月と3日ですかね？ 大まかですけど（汗）。

まー……。やや遅れ気味にですけど……。うん、一週に一縁づつと言った所ですかね（苦笑）。

うん。色々ありつつ第十縁までこぎつけた『ボクと彼女と彼女の縁結び記』です（笑）。

と、まー……。そんな今回の第十縁のお話はというところ。

『行け行けゆきめさん！ ファイトだゆきめさん！ あかねさんに負けるなゆきめさん！』

みたいなお話（？）だった様な、そんな感じですね。

ええ、いつも目立たないゆきめさんが、頑張つて妖一君にアプローチをかけてますよ、今回は。

……。ま、実際は言ってるぐらいに『行け行け』にアプローチをかけてる訳でもないんですけどね（汗）。妖一君を抱きしめてますけど（ニンマリ）。

うーん、何でしょうね？ 何かに心駆られて動いたみたい……。ゆきめさんらしくない様な……。せりふ

それに、ふと気になる台詞を残してますからねー。

「優しい温もりは、空いた心に染み渡って行って、決して忘れる事はないんです。もし、何処か心が彷徨っちゃったとしても、きっとこの温もりを思い出して……」

なんてまるで別人みたいなー。

ま、でも今回の話の中で自分の気持ちを少しでも言えた（伝えられた）事は、大きな前進かも知れませんか（笑）。

と言う訳で、今回の見せ場はなんと言っても、やはりあそこでしようかね？

自分の気持ちに向き合って、自分を少し理解したゆきめさん。そして思わず、気持ちのまま動いてしまった出来事。

そのゆきめさんの行動に、空気に、鼓動の高鳴りに、妖ようい一いちくんの男性としての自分に（笑）に突き動かされたその瞬間……！？

と、この辺かも知れませんか。この辺はやっぱり読んでもらった方がいいかも（ニヤリ）。

この第十縁、何となくゆきめさんオンリー話です。あかねさんの一切の邪魔じやまが無い、ラブシーン。

てか、第一縁から登場しつつ十縁もやってて、やっと2回目ですか？ みたいなですかねー（汗）。スローペースなのもゆきめさんらしいですけどね（笑）。あ、因ちなみに一回目はお風呂場のシーンです（輝）。大胆だいたんだけど、ちょっと切ない様なそんなちょっとしたラブシーン。邪魔や対抗意識などがあつてのシーンなら何度かあるんですけどね。

さて、今回のあかねさんの登場はあったと言えばあるんですけど、ちゃんとした台詞せりふは無かったですねー。あかねさんが登場して以来初めてですねーこうゆうの。

まー、いつも元気に目立ってるので、たまにはこうゆうのも『薬』になりますから、いいのかも知れませんが（をーいをい……）。

あ、ちゃんとその場に登場しての台詞はありませんが、一言で印象は残るものは残ってますので、あかねさんファンはガツカリしないでくださいね（汗）。

で、博康ひろやすさんかというと、いつもの様に登場はしてないです（笑）

。でも、誰かの台詞の中には出てきてますよ、この方。ホント、流^さ石^{すが}と言えますねー……。ある意味ここまでの皆勤賞です（爆）。このある意味皆勤賞はいつまで続くんでしょうね？ この方。

そして一応当小説の主人公でもある妖一君はというと、今回もにつくき……いえいえ、嬉^{うれ}恥^しずかしハッピー体験を重ねてますねー。ああん！？ 一度ある事は二度……とでも言いたいんですかねーこの方。

ええ……もうほんとうチネって感じですが何かありまして（にっこり）？。

ま、とりあえずなんとかここまでこれたのも読んでくださる皆様のおかげです（輝）。

行き当たりばったりな話ですが……よかつたらこれからも読んでくださると、とても嬉しく思います（滝汗）。

ジャム猫 自身、文才なんて本当に無いんですよ。ただ妄想^{もうそう}が出来るだけで、それをなんとか文にしようと四苦八苦です……。妄想が上手く文に現れてくれなくて……もうどうしたらいいのやらないな（ははは……）。

だから、上手^{うま}く展開とかも出来て無いかも知れないし……続きを讀んでみたいと思わす技術も無いです。でもそんな ジャム猫 の妄想とド下手な文章でも良かったら……また付き合ってくださいね（微笑）。

それじゃ、また第十一縁のあとがきに逢^あえましたら、逢いましょうね皆様（輝）。

第十縁をUPして　ゝあとがきゝ（後書き）

すみませう、本編に遅れながらのあとがきです（汗）もしも楽しみにしてくださいいた方がいらっしゃったら、本当に申し訳ありませんでした（滝汗）。色々あったので……本当にすみません。

第十一縁。

それは、今日の帰りが早くなったボクと、家で暇ひまを持て余していたあかねさん&ゆきめさんで買出しに行った、そんな夕飯終わりだった。

夕飯のお片づけをする父さんに、食べ終わっただし遊ぼうとボクに引つ付いたあかねさんと、それをなんとか剥はがそうとしていたボクに、突然ゆきめさんが言った。

「私……明日の休みに一度家に帰ろうと思っんです」
と……。

「え……？」

一瞬、ゆきめさんが言った事がよく理解が出来なくて、動きを止めたまま問い返してしまふボク。

動きをピタリと止めたのは、何もボクだけでは無く、その場に居たゆきめさん当人を抜いた三人共である。

あまりにも突然過ぎる事だったので、耳に入れた言葉の意味がボクのように解らなかつたのかも知れない。

やがて硬直から解けたあかねさんは、にっこりと微笑んで、

「アタシの勝ちって事でいいんだよね、ゆきめ？」
悪戯いたずらっぽい口調で確認する。

そんなあかねさんに、父さんは『待て待て』と制して、

「ゆきめさんは『一度帰る』と言っただけじゃないかな？ だから

まだそうゆう意味で言ってる訳じゃないと思うぞ。ね、ゆきめさん」

ゆったりとした何気ない口調で問いかけたのだった。

すると、

「あ……えつとつ、妖よう一いちさんさんを諦あきらめたとかそうゆうのじゃなくって
っ。その……当初の予定とは全く違つた形でこちらに滞在する事になつたので、一度報告もかねてっと思って……」

自分の語弊ごへいによって勘違いさせてしまった事に、思わず顔を真っ

赤に染め上げながら必死に弁解するゆきめさん。

そして『なーんだ』なんて残念そうに零すあかねさん。

「そっかー……。そうだね、その方がいいかも知れないね。」

「……なんて、その問題の中心になってるボクが言うのも何だか可笑しいかも知れないけれどね」

あははは……。と、苦笑いを一つ浮かべながら言うボク。

でも正直、ゆきめさんの言葉に何処か安心した様な……。そんな感じがしたんだ……。

もし本当に諦めたとかそうゆうのだったら、問題は一つ片付くハズだし、ゆきめさんだって自由になれるハズなのに……。居なくなるかも知れないって思った瞬間、心にポツカリと小さな空洞が出来た様な気がしたんだ。

だから、居なくならないで済むって解ったその瞬間、ふと安心した……。

「妖ちゃん？ どうしたの？」

「わっ！？」

急に問いかけられ、その声に気がつけば、目と鼻の先にあかねさんの顔が。あと数センチ近づいたら危あやうくキスをされてしまいそうなくらいである。

ふと、ボクは残酷な事を思う。

もし、居なくなってしまうのがあかねさんだったとしても、さっきみたいな同じ様な思いをするのかも知れない……。と。

ゆきめさんだからとか、あかねさんだからとか……。そうゆうのじやない、当人に見てみたら残酷な事をボクは思ったのだ……。

「ね、妖ちゃんどしたの？」

うん。ボクはどうしてそんな事を思っただろう……。？

どうかしてるのかも知れないな。

「妖ちゃん……。キスしていい？」

「うん。キスしていい」

……。キス！？ えっ！！

コックリと頷いて、ふと見た瞬間には、グツと迫ってくるあかねさんの顔が。

ボクは思わず『タンマっ！ あかねさん』と叫んでズルズルと座ったまま後ろへ逃げた。

「ちよつと、あかねさんっ！！」

咆哮するゆきめさんに、

「いいって言ったじゃん……妖ちゃん」

悪戯つぽい笑顔を浮かべながら、膝をついたそのままボクの後を追うあかねさんに、

「さて、片付けなきゃな」

この状況に、わざと我関せずとした姿を見せて楽しんでいる父さんの姿……。

「今のは無効ですっ！ 上の空の妖一さんの言葉ですしっ！！」

「知くらないっ。男には二言は無いつて昔から言うから無理」

「や……ちよつと待ってよあかねさんっ！？」

と、必死に逃げる、いつものボクが帰ってきたのだった。

「それじゃ、行って参りますね妖一さん」

「留守は任せたからな、妖一」

早朝5時、未だに大穴の様に空いた玄関の前で、二人はボクに告げる。

なぜ父さんも一緒に行くかと言うと、当初の条件を呑んでもらえば、父さんも一緒に行つて話すと言う事になっていたので、今こつやってゆきめさんの隣に居るのだ。

「行つてらっさい」

まだ眠い目を擦りながら、二人を玄関まで見送るあかねさん。

そんなあかねさんは、黄色のガールプリントのワンピースに黒のキヤミをパジャマ代わりに着るといいういでたちである。

「うん。行つてらっさい、父さんにゆきめさん」

ボクは眠気を我慢しながら、につこりと笑つて二人を送り出す。

いつも7時まで寝ているボクにとって早朝5時は、流石に眠い……。

けれど、見送りぐらいいはシッカリしたいって昨日思ったのは確かだからね。

まあ……今日は休みだから、この後眠ればいいから。

なんて思いながら、二人に手を振るボク。

するとゆきめさんは、数歩ほど歩いた距離にて何かを思い出した様に音も無くボクの目の前まで戻り、

「あの……昨日は色々とおめんなさい妖一さん。でも……いっぱい勇気を貰えた気がして嬉しかったです」

ボクの耳元で小さく囁き、そして薄っすら赤く染めた頬で微笑んだのだ。

その言葉に『ううん大丈夫だから』と微笑み返すと、視線を一度あかねさんに移してからまたボクへと戻って、

「妖一さん、隣の泥棒猫さんに大事な物を盗まれない様に気をつけてくださいね」

にっこりと一つ忠告する。

どこか、その笑みに黒く嫌な物を感じるボク。

それは多分……気のせい……では無い気がする。

「うるさいなあ。アタシはネコ科じゃなくて狐の妖怪だからイヌ科だって牛乳さん」

と、何気ない口調で軽い毒を吐くあかねさん……。

「うっ……牛乳……」

思わず言葉が詰まるゆきめさん。

そして見るみる内に顔が真っ赤になって行くのが良く解る。

「わ……私のせいじゃありませんこれはっ！ それよりネコ科かイヌ科かがなんて問題じゃなくて、アナタのこの前の行いを見て私は注意してるんですっ！」

「朝から大声出さないでよね……それじゃなくてもアタシは耳がいいんだから。ほらっ、もうバスが来ちゃうよゆきめ」

耳を押さえながら、淡々（たんたん）とバスがもう直ぐ来る事を伝えるあかねさん。

言われて時計を見、立ち止まっている父さんの所へ慌てて戻るゆきめさん。

慌てながらも『妖一さん、私が帰るまで頑張ってくださいねっ！』
と言いついてゆくのだった。

あははは……何だかなあ……。

やがて二人の姿が見えなくなったのを確認して、二階にある自分の部屋へと戻るボク。

まだ早し……今日は休みだし……二度寝しよう。

バサツとモーフをかけて横になって寝ようとする。

「寝よう寝よう妖ちゃん。睡眠不足は体に悪いからね」

と、何故かボクの隣で寝ようとするあかねさん姿がちらりと……。
へ……！？

ボクの戸惑いも何処かに、今にもギューとボクの背中に腕を回して眠る体勢バツチシである。

「……あかね……さん？」

「うん？ どうしたの妖ちゃん」

シットリとした口調と綺麗な微笑みを向けて問い返す……。

「や……どうしたのも何も……あかねさんの方こそです……よ」

「眠いから二度寝をしようかなって」

と、あっさり。

「ボクは一応男の子で、あかねさんは女の子で……」

「何それ妖ちゃん？ 知ってるよそんな事」

クスクスと、笑みを零すあかねさん。

そしてゆつくりと口を開いて、

「だったら……アタシをどうかしてくれるの？ 妖ちゃんが」

悪戯っぽい口調と笑顔でそう言った。

「そ……そんな事！？」

「うんうん、解ってる。妖ちゃんはそんな事しないって」

優しい声で頷くあかねさん。

良かった……いつもの様な冗談なんだ。

なんて安心した次の瞬間……！

「妖ちゃんはアタシみたいな娘がリードしてあげなきゃ……ねっ」

グイッとボクを仰向かせて、そして上に跨ったのだった。

ちょ……ま……！？

「だいじょーぶ、問題ない。妖ちゃんは何もしなくていいからいいから」

と、パジャマ代わりに来ているボクのＴシャツを捲り上げるあかねさんの姿。

柔らかくて細い指がお腹から胸へとゆっくり走る。

わ……ダメだって……。

くすぐったい様な変な感じが、ボクの中でざわめきを立てる。

ボクはざわめく何かを抑えつつ、

「ダメだって……あかねさん……こんな事は……いけないよ。この前も同じ様な事で……怒られたばかりじゃない。ね、や……やめようよ」

必死に言葉に出す。

「こんな事ってなあに？ 妖ちゃん。アタシよく解らないよ」

とぼけながら胸からゆっくりと下へと向かい、

「ね……いけない事ってどんな事か……アタシにして教えてよ……妖ちゃん」

艶っぽい口調で、何処か恥ずかしそうに頬を染めながら言葉を零すあかねさんの姿。

そんな……教えるも何も……。

慌てるボクに、

「……ゆきめ……」

ふと、あかねさんの口から静かに小さく零れ落ちた言葉が一つ。

「……えっ？」

「……ゆきめだったら、抱きしめようが何しようがいいんでしょう、妖ちゃん……」

続けて零れ落ちた言葉に、ドクツと痛み弾むボクの心。
もしかして昨日あんな事があつたばかりだから？

……でも、何であかねさんが……？

と、昂る中に薄つすらと冷ややかなモノが混じり、グルグルと回る。

ゆっくりと視線を合わすと、何かを耐える様な視線をボクに向けていたあかねさんは、

「アタシ……言つたでしょ？ 『アタシは耳はいい』って」

ボクの向けた視線から知りたい事を解つた様に、言葉で返す。

「キス……しようか、妖ちゃん」

一呼吸分。きつとそのぐらいの間、ボク達の中に柔らかな沈黙が流れた。

その瞬間、昂る心の中で、何処か切ない何かがスツと通り過ぎて行つた気がしたボク。

すると、突然あかねさんの空気が変わったかと思つた刹那、

「なんて、ゆきめに嫉妬しつとなんてしてるアタシってバカっぽいね。やっぱりアタシはアタシだし、アタシ流にやらなきゃねっ」

につこりと、まるでゆきめさんの様に頬を赤くさせてながら微笑むあかねさん。

「……えっ？」

「大切に……するからね妖ちゃん」

そして、グツと、ボクの黒い長ズボンを握り、

「妖ちゃん……」

物深い甘く切ない沈黙がボクの部屋に広がる。

「あ……あかね……さん」

ボクの胸が一段と高鳴つて……そして、

「そこじゃ、一気にGOじゃっ！」

と、小さな子が発する特有の可愛い声が聞こえたのだった。

『え？』

その声に二人共我に返り、声がした方へと顔を向ける。

するとそこには、見た事の無い小学生くらいの和服姿の女の子の姿が……あった。

しつこくも無く大人の鮮やかな花びら模様を散りばめた白い和服に、腰まであろうかという赤いロングストレートの髪をした可愛い女の子。

「なんじゃ？ その先をせんのか？」

ボク達の様子に、至極当然とばかりにこの先の事を求める少女。

「誰……？ 妖ちゃんの知り合いの子？？」

頭にはてなマークがいつぱい飛んでいそうなあかねさんは、ボクの方を向いてポツリと問いかける。

「いえ……ボクは知らないです。あかねさん……は知らなそうですね」

と、ボクもあかねさんと視線が合い、そして言葉を零した。

お互い目を点にするボクとあかねさん。

一体何なんだろう……この子。

「もういい童、それじゃワシが続きのお手本を見せてやるから見ておるといい」

……！？

突然音も無く現れた少女の言葉に、思考が一瞬停まるボク。

「なっ！？ 何を言ってるのよアンタっ！」

同じ様に停まっていたあかねさんは、ふと我に返って声をあげる。

「いいから退けてみよ」

声を上げるあかねさんを淡々とあしらい、そして……次の瞬間っ！

ガシャーッ！！

窓ガラスが割れる音が響き渡るっ！

「……え！？」

目の前で起きた事に、頭が付いて来れず、一呼吸分の沈黙を置いて驚き声をあげたボク。

何が起きたかと言うと、それは、赤子^{あかこ}か人形のように軽々と片手であかねさんを持ち上げ、そしてそのまま壁にある窓へと放り投げたのだった……。

「よし、五月蠅い^{なめじ}のが居なくなったようじゃの」

そう冷静に言い、ズルズルズルと情緒^{せいちゆう}とかも無くあつという間にズボン^{ズボン}を脱がす目の前の少女。

え……何……！？ えつと……。

驚愕^{きやうがく}しながらも、冷静に状況判断をしようと試みるボク。

そしてぐちゃぐちゃする頭の中で答えが見つからないままにも、一つだけ確かな事を見つける。

少女の前で黒のボクサートランクスのまま、何故か首以外に指一つも動かせないという事だ。

とういか、力が一切入らない……。

そしてゆっくりと小さな手がボクのに伸びてきて……

「あ、そうじゃ。続きをお手本として見せる相手が居ないでは無い^か」

ふと、何故かそうゆう点に頭が回る少女。

ぬー……しまったしまった。と、軽く首を傾^{かし}げて、やがて何かを思いついたのか手をポンツと軽く打って、

「一回アヤツの事を拾ってくればいいの」

そう結論を導き出した。

するとその少女の答えに、これでもかと怒りの色を滲^{にじ}ませた声が返ってきたのだった……。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十一縁『それはきつと天罰。優しい顔をした優しくないボクが招いた執行者なのかも知れないと、ボクは思っただ』

第十二縁。

「あ、そうじゃ。続きをお手本として見せる相手が居ないでは無い
か」

ふと、何故かそうゆう点に頭が回る少女。

ぬー……しまったしまった。と、軽く首を傾^{かし}げて、やがて何かを
思いついたのか手をポンツと軽く打って、

「一回アヤツの事を拾ってくればいいの」
そう結論を導き出した。

するとその少女の答えに、これでもかと怒りの色を滲^{にじ}ませた声が
返ってきたのだった。

「……けっこうよお譲^{じやう}ちゃん……。自分の足で戻ってこれるから」
長く足元まで伸びた輝くブロンドの髪をなびかせ、頭には同じ毛
色の耳と、尻には毛先を白く染め上げた三本の尻尾^{しっぽ}を揺^ゆらめかせて

姿はさっきまでとは違うも、声はボクの知ってるあかねさんその
もの。

「……妖ちゃんから……離れなさいよアンタ……。アタシ、この姿
で手加減出来るほど器用じゃないから死ぬよ……」

あかねさんの青い瞳が紫の瞳へとだんだんと変って行くのが見て
解るボク。

そんなあかねさんの姿に驚きもせず、

「怖い怖い。嫉妬^{しつと}に狂った狐ほど恐ろしいものは無いのー」

クスクスと軽く嘲笑^{ちやうしやう}する様に笑う少女の姿が、そこにはあったの
だった。

「お主、コレがそんなに好きか？」

と、コレとボクを……ボクのを指差して問いかける少女。

目の前でそんな事を言われて……何故か恥ずかしい思いがするボ
ク……。

「それもそうだけどアタシは妖ちゃん全部が好きなのよっ、何か悪
いかな!？」

彼女の何処かおちよくる様な投げかけに苛立てた声を上げるあか
ねさん。

それもって……ははは。

何処か、本当に何処か悲しい様な恥ずかしい様な……そんな感じ
である。

すると、突然温かく柔らかいものを感じたボク。

「な……!？」

「ほ……さっきまでしてた事と言葉とは裏腹と言った所かのー」

「そ、そこから……手を退けなさいっ!」

ぷにゅ。

ゾクッ!

今まで感じた事のない感覚がボクの中を凄まじい勢いで駆け上っ
た……。

そして直ぐ様、ゾクゾクッ!! と、次の感覚が走る。

ボクはおかしくなりそうな頭の中で、

「み……見ないで……く……ださ……いつ」

あかねさんに懇願する。

こんな姿を、何故か見せたくないと思ったのだ。

真っ赤な顔をさせつつボクを見ている彼女……。

う……見ない……で。

「純情じゃのーお主。まだまだこれからじゃと言っのに、もう赤面
しておる」

ゆっくりと柔らかく手を動かしながら、挑発をするかの様にニヤ
リと笑う。

すると、一つ下に顔を俯かせて、ゆっくりとした、それでも怒り
の色を滲ませた声で、

「……煩い。純情で何が悪いのよ……。いいからその汚らしい手
を妖ちゃんから退けなさいよ……」

と、言葉を零す。

「『嫌じゃ』と……言ったら？」

何かを含んだ挑発する少女の言葉に、キツとした鋭い視線を向け、
「妖ちゃんはアンタみたいのが触れて良い物なんかじゃないんだから
らっつっ！！！」

気迫きはくといものだろうか？ そうゆうものを込めて吼ほえた。

その瞬間、目の前に見えたのは、彼女がボクの上に跨またがって右手を出していた姿。

突然感じた体への重みに反射したボク。

「遅い遅い、こっちじゃよ童わらわ」

突然部屋の出入り口から聞こえた声に驚きつつ、そちらへと目をやると、ちつつちと指を横に振ってあかねさんをおちよくる少女の姿があつたのだ。

その様子からすると、あかねさんの動きにもボクはついていけなかったのに、少女はそれ以上の動きで攻撃をかわした事になる。

「ばか力のクセに素早いじゃない……」

ゆっくりと声の方へ視線を向ける。

「そうかの？ ただちよつと歩いただけじゃけどのワシは？」

「……そう。これだけ差があるなら、それじゃちよつとアタシは力を使わせてもらうけど別にいいよね……？」

静かな口調が、妙に恐ろしいあかねさんの言葉に少女は、

「はっはっはっは、構わんよ」

何一つ表情を曇らす事無く余裕たつぷりに笑って見せる。

それじゃ遠慮なく。と、あかねさんが言葉を零したその刹那せつな。

ブンッ！

突然、あかねさんの尻尾の一本が大きく振動し、今まで以上に輝きを強くした。

「妖尾……第一尾開放」

静かにそう呟いた次の瞬間、ブバフウッ！！！！ と、あかねさんを中心にして突如一瞬の暴風が舞い上がるっ！

フウウウ……と、ゆつくりと大きく息を吐き、

「完了」

静かにそう告げるあかねさん。

「驚いた、手加減出来て無いんじゃない？ 確か」

口では『驚いた』と言うけれど、全くそんな様子を微塵も見せない少女。

驚いたと言うよりも……どっちかと言えば喜んでいってた方が正しい気がするボク。

「アタシ狐だもん。化かすのが筋ってものでしょう？」

「あはは、違いないのう」

ふと見せた少女の不敵な笑みに、右の掌を天井へとかけられるあかねさん。

「……狐火……滅炎」

と、言う言葉と共に、

ゴオオオウツツツ……！！

突如、炎が燃え上がる凄まじい音を響かせて、かかげた掌から蒼い巨大な炎の塊を生み出したのだ……。

それは、以前にゆきめさんへと投げつけた火炎弾とは桁違いの威力である。その証拠に、ボクの家ぐらにはありそうかというあまりの大きさに、家の天井が瞬時に丸々焼き消えたのである。

「今度は逃げ場は無いけど、どうする？ お譲ちゃん」
につこりと微笑み、問いかける。

凄……い……。

ボクはその凄さを目の当たりにし、呆然とする。

「妖ちゃん危ないから、ちょっと結界を張らせて貰うね」

その言葉と共に、薄緑色の薄く幕みたいな物に包まれるボク。

多分これがあかねさんの言う『結界』という代物なんだろう……。目に見えるだけで、至って先ほどと何も変わらない感じがする。

「全く面白い娘じゃの、まだ第一尾開放だというのに妖気で肌がピリピリしよる。このまま第二尾開放を見てみたい所じゃが、そろそろ空間保存の時間切れじゃ……………」

よって、ワシの降参じゃよ、こんの今野あかね」

え！？

少女の言葉に驚くボク。

なぜなら初対面のはずのこの子の口から、ついこの前までの名前を口にしたのだから。

「待ってあかねさんっ！」

いつしか動けるようになっていたボクは、ギュツと彼女捕まえる。「ゴメン妖ちゃん……………待てないかも」

薄っすら苦笑いを浮かべて返すあかねさん……………。

……………え。

嘘でしょ……………あかねさん。

彼女の言葉が終わるよりも早く、巨大な蒼い炎の塊は、ボク達へと脅威を揮ふるおうとしていたのだ……………。

すると、全く何をしておるのじゃっ！ という少女の声が聞こえた次の瞬間っ！

ブバツと目の前で炎がいつぱいの桜の蕾つぼみに移り変わり、一気に咲いて、そして瞬時に小さな粒子となりてキラキラとピンク色に輝かせながら、舞い散らすのだった。

空いつぱいに舞い降りてくるこの輝きと、そのあまりの幻想的な美しい世界に、見ていた誰もが見入ってしまったしまいそうである……………。

「ふ……………危あやうく周りに張った結界までの妖気を分散させる所じゃったわ……………」

呟いて、

「後片付けをさせてもらっぞ……………」

少々疲れた口調で何かをする少女。

その刹那、ブンツと目の前の全てが一瞬の歪みを見せ、それこそ瞬きすらしない間に破壊された家が元のボクの家へと復元したのだ

った……。

「よし……これで空間は元通りと……。

で、今野あかね」

啞然^{あぜん}としてるボク達を見、あかねさんと呼ぶ少女。

「……え？ 今野？ ……てか何で年下なんか呼び捨てされなきゃいけないのよ、アタシ」

と、不満たつぷりに返すあかねさん。

この際、一応恩人だからそこは追及しなくても……。

なんて思うのは、きつとボクだけなのかもしれない。

「……不満はさて置き……さっきは試してすまなかったの」

「は？？」

「東の妖狐^{おさ}の長の娘が家出をしたって聞いたのも驚きじゃが、男を追って里を降りたと聞いたもんじゃから、ちよつと興味が湧いて試させて貰ったのじゃよ。長の娘がどれ程の男に惚れ込んだのか、そしてどれ程の娘なのかをのう」

そして淡々と、今までがテストの一部じゃよなんて語る少女。

ボクはその言葉に、どつと疲れが降りてきた気がする。

「まあ、楽しかったので、つい遊んでしまったのも事実だったり……してのう」

「この……ジジイ少女……」

「まあまあ、理由も解ったし、家もあかねさんもボクも無事だったんだしねっ……あかねさん」

今にも振り上げた拳を振り下ろさんとするあかねさんを後ろから抑えるボク。^{おさ}

「妖ちゃん止めないでっ！ お願いだからアタシにこの子殴らせてっ……！」

「気持ち解るけど、小さい子を殴っちゃダメだってあかねさんっはっはっはっはと、ボク達を見て笑う少女。

そして再び暴れようとするあかねさんと、それを抑える僕の姿が、何も無かった様に時を刻む部屋にはあるのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十二縁『きつと何もかもが嘘だったんじゃないかなんて、ボクには思えないだろうなって思ったんだ』

第十三縁。

ここは、ただ今、早朝6時を時計の針が示そうとしている、そんなボクの部屋。

教科書が立て並んで置かれた机、漫画や雑誌がいつぱいに詰め込まれた本棚、お気に入りのCDが積まれたMDコンポ、そして洋服タンスにベットというアツサリとした部屋に、ボクと彼女と少女がお茶を飲みつつ淡い青のジュータンが敷かれた床に座っている。

ふとここから覗き見た人が居るとしたらきつと、ほんの少し前まで屋根が塵も残らぬほど燃やし尽くされ、大穴が開いたこの部屋で、今や目の前で悠長にお茶を啜る彼女達が戦っていたなんてそんな事を、とうてい想像すら出来ないだろう……。

ズズツとお茶を飲み終え、コップを静かに置いて、

「で、アンタ誰なのよ？」

と、問いかけるあかねさん。

今はもう、さっきまでの姿とは違って、髪もいつも通りに短くなり耳も尻尾も生やしてはいない。

「ん？ ワシかの？」

はて？ と言った様子で問い返し、再びお茶を啜る少女。

なんでお年を召した方の様な口調なんだろう……。そのせいか和服姿のせいには解らないけど……小学生くらいなのに、お茶を啜る姿が合い過ぎてるよね……この子。

なんて事を思うのは、もしかしたらボクだけなのかもしれない。

「アンタ以外に誰が居るって言うんですか？ ねー……」

怒りの色を声に滲ませつつあるあかねさん。

きつと、何処かこれぞ『和』と言わんばかりの悠長で悠久さえも感じさせる少女に、苛立てたのかも……。

ピリツとした空気が、一瞬漂った気がするボク。

「そうか、まだワシの事を何も言って無かったのう」

はっはっはっは。と、子ども特有の声で年月を隔てた者が発する様に笑う少女。

ぶちっ。

音にしたらそんな音だろう、きつと。

隣で、漂わせる空気の色を今一つ深く黒く落としたあかねさんを、ボクは横目で捕らえてたのだった……。

「んー……『プリティー不思議少女 空ちゃん』でどうじゃろ？」

「それ、どんな少女向けアニメですか……」

何気ない口調で言った少女に、思わずツツコミを入れてしまったボク……。

しかも頭から『プリティー』って何時世代の少女向けアニメなんだろう。

「こうな、手を胸の前で横切らせ持ってきて『空ちゃんにお任せあれっ』とな」

「はいはい、お子ちゃまに付き合うほどお姉ちゃん達暇じゃないの」身振り手振りで『プリティー不思議少女 空ちゃん』のキメポーズらしきものを教える少女を、一蹴するあかねさん。

「なんじゃ、最近の若い子はノリが悪いの……」

「アンタの方が十分若いでしょう、お譲ちゃん」

「ふむ。まだツツコミを入れるこの子の方が可愛げはあるの」

「この子って……ははは」

ボクよりも小さい子に幼く呼ばれて、一つ苦笑いを浮かべるボク。ギッ！ と、そのまま貫きそうな鋭い視線を少女へと向けるあかねさん。

あははは……。笑うっきゃないよね……多分。

ボクはそう思いつつ、

「せめて君の名前くらい教えて欲しいかなって……ダメかな？」

優しく質問してみる。

隣で漂うオーラが何処か痛いし怖いので……。

「名前かー、本名はもう忘れたので、字の一部で空でいいかの？」

本名を忘れたって…… いったいこの子って……。

頭の中ではなマークが飛び交うボク。

とりあえず、

「それじゃ『空ちゃん』でいい？」

聞いてみる。

すると、につこりと子どもらしい満面まんめんの笑みを浮かべて、

「空ちゃんでおねがいする」

コックリと頷うなずいた少女…… 空ちゃん。

その笑顔にこちらもつられて笑顔になるボク。

「妖ちゃん、その子『ただの子ども』じゃないから気を付けた方がいいよ……。 じゃないとまた…… アレされるし」

「うつ。 うん……」

少し前の事をふと思い出して頷く。

確かにその…… アレもあったけど、それ以外にも不思議な力を見せてもらったから…… きつと人間じゃないって事くらいボクにも解るよ。 普通の人間が、あかねさんの変化+妖力を少し開放させた状態の巨大な炎を、いとも簡単に力の分散をさせる事なんて出来ないだろうし、それに…… 一瞬で破壊された部屋を元に戻すなんてね。

「別に獲って食べはしないから平気じゃよ。 まー…… たまにああゆう事をしてもいいと、この子が言うのならさせてもらうけれども」

「」

と、悪戯いたづらっぽい笑みを浮かべる空ちゃん。

「あの…… 妖一よういちでお願いします。 それと、そっちは遠慮えんりょさせていた
だく方でご賢答けんとう願えれば……」

ン？ そか。 と、呟つぶやいて一口お茶を啜すする。

「まー…… ワシは解るように『一応妖怪』みたいなもんじゃ」
ですよねー。

なんて、空ちゃんの告白に心の中で一つ頷いてみるボク。

「でしようね。 でも変な匂においもするのねアンタって」

「失礼な。 いくら女子同士おなじでもそうゆう言い方は失礼じゃぞー」

全くもう……。と、ばかりに言葉を吐く空ちゃん。

まー……。あかねさんの事だから、そうゆう意味じゃないとは思っただけだね……。ははは。

「失礼ついでに一つしつもん」

「ン？ なんじゃ？」

「この部屋を元に戻した『力』って、妖術じゃないよね？ アタシの知ってる感覚とも何だか違う感じがしてたし」

ふと、問いかける。

それはボクもどうやってと思っていた同じ疑問。妖術かどうかなんてのは解らないけどね。

「ふむ。お主の感覚は鋭いのう」

「褒められても嬉しくなーいアタシ」

そうバツサリと斬るあかねさん。

まあいい……。と小さく呟いて、

「これはこの世界で言う『科学』という代物しろものじゃ。ただし、この時代にはオーバーテクノロジーであって今の時代の技術じゃ到底無理なもんじゃ。

で、さっきやったのは『空間の特殊異空間転換保存』と『特殊ベクトル返還』と言うものの、簡単に言えばこの空間に全く同じ空間を、新たに作り出した特殊な異空間に作り、そしてその異空間を完全保存して小さく圧縮しておくのじゃ。そして部屋が壊れたりしたら、圧縮しておいた異空間を元に戻して、壊れた部屋と保存しておいた無傷の部屋と転換し、異空間を消滅させる。そのあとは特殊ベクトルで『交換する前のワシらの時間』と『壊れる前の部屋の止めていた時間』を同時に返還したのじゃよ」

色々難しい説明をしてくれる。

えっと……。どうゆう事だろ……。

正直良く解らないし、話に着いて行けなかったんだよね……。

ふとあかねさんの顔をみると、同じ様にちんぷんかんぷんといった様子だ。

「いい反応じゃの。もつと簡単に言えば『オーバーテクノロジーで部屋を元に戻した』って事じゃよー」

ボク達の反応を見て楽しむ空ちゃんの姿がそこあった。

とりあえず、凄い科学の力で元に戻したって事だね……了解。

と、納得いかせるボク。

「と、言う訳でこれからここでよろしく、妖一殿」

「え？ あ、はい、よろしく願います」

につこりそう言う空ちゃんに、こちらも言葉を返したボク。

……。

……………え！？

「な……アンタここで一緒に暮らす気なの！？ もしかして!？」

一番に声を上げたのは、言うまでも無くあかねさん。

「平気じゃ、博康殿には了承を昨日の内に得てるからのう」

淡淡^{たんたん}と言うて、お茶を一口し、急須^{きゅうす}からお茶を継ぎ足す。

「父さんとおつ!？」

思わず驚きの声を上げるボク。

昨日の内^{うち}って……ボク達が買い物に行った日の内^{うち}って事ですか

……。

ボクは頭を抱えて一つ真面目^{まじめ}に思う。

父さんは一体何を考えてるの……？ と。

「うぬ。それに、ほれ、部屋ももう作ってあるから部屋割りの心配は無いから気にするな、な」

そう言^いって、勝手に物置スペースとしてある場所の襖^{ふすま}を開ける空ちゃん。

するとそこには、小さな物置スペースとしてあった場所は無く、小さな小窓が付いたオレンジ色の扉が一つ存在するのだった……。

それは、知らない人が見たら、まるでそこに元から扉が設置されていたかの様なおかしい風景である。

「まー、まだ新築したばかりだけでも、良かったら入ってみるかの？」

そう言う空ちゃんに、ボク達はボクの家なのになぜか空ちゃんに案内されるのだった。

「ここは……どこなんですか？」

ボクは扉を開けた先に広がる世界に驚かされつつ、隣の空ちゃんに問いかける。

「ぬ？ どこって、妖一殿の家の中じゃないかのう何を言っておる」

と、あっさりと返されるボク。

いや……元々ならボクの家なんだった所なんだけど……こうも変わってしまうと、その事実の現実感も何も無い気がするんですけど……ねー空ちゃん。

目の前に広がるは、東京ドーム何個分ですか？ という広大な土地。そこは、様々に咲き乱れる花に植物達がしっかりと整理と管理されたどこぞのお邸やしきにある中庭の様な場所。中央には、これまたどこぞの国で世界文化遺産に登録されそうな素晴らしい造形美ほていが施された大きな白い噴水がある……。

「空って……ここ家の中だったよ……ね？」

と、ふと驚愕きやうがくの言葉を零すあかねさん。

そう。何故か『室内』であればあるはずの天井が無く……一面に広がる青い空があるのだ。

「ああ、リアルじゃろ？ なんせ本物だからの。ちよつとした異空間転送の応用で実際の空をここに持つてきてるから、当然本物の風が吹いたり雨が降ったりも出来るんじやよ、これ。」

まー、弄いじればここだけ思うがままの天候にもできるかの」

「……ここ室内ですよね……」

「うぬ、真正銘室内ちんめいじゃ。ただ高さがこの地球と同じぐらいあるってだけだから気にする事もあるまい」

……。

それって、室内って言うの??

なんて思うボク……。もう『ボクの家』という次元は超えきつちゃってます……。

「ここは植物フロアで、他にも別フロアが8箇所があるんじやが、全部見るのは大変だろうから……ワシの部屋に直通でいいかの？」

あははは……。

心の中でさえそんな渴いた笑いが零れてくるボク。

「……お願いします」

ボクはコツクリと頷いて、

「今来た扉の隣にある扉から行けるぞ」

隣の扉の奥へと案内されるのだった。

「ここがワシの部屋、特別研究室兼マイルームじゃよ」

そう言つて案内されたのは、先ほどとは違って奥が見える広さの研究室だった。奥が見えると言つても、広さ的には学校の体育館ぐらゐは余裕で納まるほど。少々大きいスペースにテーブルやベツトに日用雑貨が多少あるだけで、他にはあちらこちらに大なり小なりの見た事が無い機材の様なものが置かれており、研究室と言つだけの事はある部屋だ。

周りを見渡してから、ボクはふと思い、

「ね、空ちゃん」

問いかける。

「ん？ 何じゃ妖一殿？」

ボクは何気なく返した空ちゃんと、自然と視線の高さを合わせて言う。

「こんな広い部屋で一人で寂しくないの？ あのさ、空ちゃんが良かったら……」

すると、ボクの視線に優しい笑みを浮かべながら言葉が終わらぬ内に、

「ふふ、妖一殿は優しいのう。みなまで言わんでも妖一殿が言いたい事は解つた。でも平気じゃよ、ワシは今までずっと一人じゃった

からそうゆうのは慣れとるからの。今更いまさら広がるうが一人だろうが何も心配は無い」

優しい口調でそう言う空ちゃん。

あ……余計なお世話な事言っちゃったかな……。

ボクはそう思い反省する中、空ちゃんはにっこりと笑って、
「でも、ありがとう妖一殿。その温かい心がワシにはとても嬉しかったぞ。ま、折角だからたまには甘えさせてもらうとするかの」
そう返す。

その顔は、どこか嬉しくも恥ずかしそうな表情をしていた様に、
何故かボクには思えたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十三縁『プリティーで謎で超科学。……ボクには解らない事ばかりだなあと思っただんだ』

第十四縁。(前書き)

2010年、明けましておめでとございます^^ 今年もこの
『ボクと彼女と彼女の縁結び記』をよろしくお願いしますね

第十四縁。

それは、きつと歯車がまた一つ組み合わせ、そして動き出した音色なのかも知れない。

そんなボクの歯車は、ゆきめさんのお母さん『電堂 蒼樹』さんからの一通の手紙から始まっていたのかも。

ガコン。

そんな歯車が何処か遠くで奏で響いた音色と共に、まずはボクの目の前に突然ゆきめさんが現れた。

ガコンガコン。

そして、また一つ次の音色と共に、激しく扉を壊してあかねさんが登場して……。

ガコンガコンガコン……。

三度目の歯車が組み合う音色と共に、何処からとも無く空ちゃんくうちゃんがひょっこりと顔を出して行く。

ボクの歯車はこうやって複雑に組み合わせ、そして動き出してボクの日常を作り出していくんだと、何処か思うんだ。

もしこれが神様が戯たわむれに作ったパズルの中で、少しずつ歯車が複雑に組み合わせながら動いてるのだとしたら、そこに生まれた不確定要素の中でボクは蠢蠢いてるだけなのかも知れない。

そうだとしたら、やがて訪れるかも知れない次の音色を奏でた時、いつたいボクに何が起きるのだろうか？

ふと、そんな事を思うよりも先に、歯車はもう動き出していたに違ちがわないのかも……。

ほら、何処か軋きしむ様に動き出した歯車が音色を奏でてるから。

ギギギイイイ……。

ってね。

ジャラジャラ……。

そんな耳慣れないけれど、でも何処か知っている金属の鎖くさじが擦れた音が何処からかする。

それは、どうやらボクが動いたびにする様な……そんな感じ。何だろう……？

ボクはふと不思議に思いながらゆっくりと目を開けると、僕の腕に纏まとわりつく黒い物体が。

……ん？

早朝からの二度寝で、いまだハッキリしない眼まなこを、指で擦るボク。ジャラジャラジャラ。

眼を擦る動きと共に、ハッキリとした金属音を耳にする。

えっとー……なんだろうコレ……。

少し薄っすらとした視界に見えるのは、何故か僕の腕にされている見た目が凄く重そうな金属の腕輪と鎖……である。

そしてボクと鎖の間に見えるは、腰まではあるつかという綺麗な赤いロンストレートをベッドに乱れさせた、あどけなさがまだ残る可愛らしい少女が、理科の先生などが着る様な白衣姿でスヤスヤと安心しきった顔をボクに見せて眠っている。

空ちゃんくうちゃんがボクのベッドで眠ってるまでは、何となく解るんだけど……何で白衣姿で、こんな金属の腕輪と鎖がボクの腕にされているんだろう……。

気がつけば足首にも同じ様なものがされてる……っばいし。んー……。

と、軽く寝ぼけてる頭で考えるボク。

すると、空ちゃんがボクの腕の中で動いたかなって思えたその時、

「ふふっ、おはよう妖ようい一殿」

可愛く優しい笑顔で挨拶あいさつをした空ちゃん。

それは何処か、天使みたいに思えたボク。

「お……おはよう空ちゃん」

おかげで普通に挨拶が言えなかったのだ。

「どうしたんじゃ？ 妖一殿??」

「……ン？ いや何でもないよ空ちゃん」

と、不自然にも見たのかも知れないけれど、ふと空ちゃんから視線をずらして問いかけに答えたボク。

「そか」

軽く首を傾^{かし}げる様にし、一つ頷^{うなず}いてみせ、

「ここ、思っていた以上に居心地のよく気持ちいいものじゃの。初めて知った……の。何処^{なつ}か懐^{なつ}かしくも思えるが、それとまた違ういいものじゃ……」

ボクの胸板を優^{やさ}しく擦^{さす}ってスツと抜ける様な優しい声で零す空ちゃん。

そんな空ちゃんの顔は、何処か恥^はずかしさを見せる様に頬^ほを赤らめていたのかもしれない。頷きと一緒に顎^{あご}を引いてしまったままなので表情までは見れなかったけれどね。

「あはは、ずっと一人だったみたいだからね空ちゃん。きっとボクなんかよりもあかねさんや、今はここには居ないけどゆきめさんとかと一緒に眠ると楽しいし気持ちいいかも知れないよ？」

ニツコリと微笑んでそう返すボク。

そんなボク of 言葉に、ふと何かを零す空ちゃん。もそもそと何か聞こえた気がしたのだ。

もしかしたら気のせいかも知れないけれど。

「ところで妖一殿、体は平気かの？」

「え？ 体って??」

突然問いかけられて、問い返してしまったボク。

体って言われても……特別になんとも無いし……。あるとしたら……コレかな。

視線を腕に纏わりつく異物に向けるボク。物凄く重そうな、そんな金属の腕輪と鎖である。

って……あれ？ それって何だか変……じゃない??

自分で思っ^て、ふと疑問が浮かぶ。

何でこんな重そうな腕輪と鎖をしてるのに、何とも感じ無いのだ

ろう？ と。

「ふふ、気がついたみたいじゃの、妖一殿」

ニヤリと、悪戯いたずらっぽい笑顔になる空ちゃん。

あー……何だか嫌な感じがするんですけど……。この悪戯いたずらっぽい笑顔を別の誰かさんでよく知っているからなお更……。ね。

そうなると、これは空ちゃんの仕業しわざなんだろうなって、思えるボク。

「ご名答、妖一殿」

まるでボクの思案を読み取ったかの様に、ニツコリと笑う空ちゃんが目の前に。

あはは……。やっぱり。

ボクは一つ、タメ息を吐いて、

「この状況についてとか色々訊ききたい事あるんだけど……。ボクがあれこれと訊くより、空ちゃんが説明してくれた方が早そうなので、お願いしてもいいかな？ 空ちゃん」

腹をくくる。

すると嬉しそうな満面まんめんの笑みを見せて、

「そうこなくっちゃね、妖一殿」

楽しそうな声で頷いた、天才超科学者空ちゃん。

「ではでは、まずその鎖から説明をするかの」

「お願いします……」

スルスルとボクと鎖の間から抜けて、ベッドに正座する空ちゃん。そして、コホンと咳を一つして説明を始めた。

「その鎖付き腕輪はワシが作った特殊な物で、手首同士で一つ、足首同士で一つの計二つで構成されておる。それは先に言った様に特殊な物でな、普通の鎖付き腕輪とは違って重量を状況に係無く強制的に体全部に均等に掛けてくれるのじゃ」

「体全部って？」

「ほれ、鉄アレイあるじゃろ？ アレを持った時に重さがかかるのは何処じゃ？」

えっと、重さがかかるのはー……。

「持った腕だけ？」

「うーん、ちよつと違うかの。順に言えば持った掌に重さがかかり、それを腕や体・足などで支える。それが普通のものの仕組み。」

けれどこれは、重さを均等割りに体全体にかける。すなわち力を入れるのに必要な部分だけじゃなくて、頭や内臓から足・つま先まで体というものの全てに重さをかけるのじゃよ」

要するに…… バランスのいいインスタントメタボリック?? みたいなものなのかな? バランスの取れたメタボリックて言うのも何だか変な感じたけど……。

ふと、そんな事が頭を過ぎるボク。

「いや、簡単に言えばインスタント重加減装置かの」

またボクの頭の中を覗いた様に、ニツコリと微笑んで語る空ちゃん。

「妖一殿、少し動いてみてくれるかの？」

ボクは言われて、ベッドから降りて歩いたり、しゃがんだり、跳ねたりしてみる。

けれど、重さが体にかかっているなんてちつとも感じ無いのだ。

本当に重さがかかっているのかな……?

「ふふつ、あかね（狐）につままれた様な顔じゃのー妖一殿。ワシとしても嬉しい反応じゃ。妖一殿、その鎖付き腕輪によってどれだけの重さが体にかかっていると思うかの？」

「え? やっぱり重さ何てあるのこれに？」

「うむ」

「えっとー……全部で5キロか10キロくらい？」

何となく思った重量を言ってみるボク。実際言っただけは愚か、全く無いとも思えるのだ。

「あはは。もつともつとじゃよ」

「……えー!？」

正直、空ちゃんの言葉に驚かされる。

だって、到底10キロ以上もかかってるなんて思えないのだから。すると、ボクの驚きにクスクスと笑みを零して、

「実はその鎖によって、妖一殿の体重の4分の3キロも体に加えてあるのじゃよ」

と、恐ろしい数値を軽々言う空ちゃん。

[illegible]

いや、それは驚くというのが絶対に無理無理。

ボクの体重の4分の3って言えば…… 37・5キロもあるのだから……。

総重量で言えば、今のボクの体重は87・5キロだという事である。

「でも、重さを感じないじゃろ？」

その問いかけに静かにコツクリ頷くボク。

「それが解つたら、もう半分は説明が出来たのも同じじやの」

困惑するボクをよそに、ニッコリと微笑む空ちゃん。

えっとー……。

うん、解らないんだけど……全然。

ン？ と、疑問顔を浮かべる空ちゃん。

「うーん、体重が4分の3増えても全く何も感じ無いって事は、それがいつもの体重50キロと同じ感覚になっている訳じゃよ妖一殿」

「ボクの体重が4分の1になってるって事?？」

「半分当たりで、半分不正解」

微笑ながらそう言い、

「もしそうなら、妖一殿の体は凄くほっそりしてて、正に骨と皮とちよびつとばかりの内臓人間か2歳児ぐらいの体型になっておるの」。物質量が4分の1になるって事だからじゃの。ま、要するに「この世界の重力が4分の1になってる」って事じゃ」

とんでもない事をスラッとは何でも無い様に語る空ちゃん……。

……え、その前に『この世界』って……。

ボクは途轍も無く不安が駆け巡り、直ぐ様に直ったばかりの窓に駆け寄り、降りていた簾すだれを上げて外を見る。

するとそこにはあるはずの隣近所の姿は無く、その代わりに広がるのは一面の森……。

ここ……二階だったのに……窓から外に直ぐ地面があるなんて……。元々あったここから下の一階はどうなってるのだろう……。それにあかねさんはどうなってるのだろうか……。

その後景に、重くなつて来た頭がグラグラつと揺れ、そのままベツドに膝ひざをつけて座り込むボク。

ここは一体何処なんだろう……。

そんな疑問を持ちながら、スー……と空ちゃんに視線を向けるとお手上げじゃよ。と、何も言わないまま両掌を肩上まで上げて微笑む空ちゃんの姿が。

物凄い事をしてしまうくらい天才の空ちゃんがこのポーズ。

と、なると、本当にどうにも成らないのだと、その時心底思ったボク。

「ここは何処なの？ 空ちゃん。何でこんな事になってるの？？」

ダメ元で、天才空ちゃんに問いかけてみる。

うーん……。と、一つ唸うなり声を零して、

「ま、大きな原因は解ってるけど、何故この結果になったと言うのは解明出来ないの……。ここは何処と言う質問にも、シッカリと明確な事も言えないし……。

ただ解ってるのは、ここはワシらが居た世界とは別の世界じゃって事だけかの。重力が今まで居た世界の4分の1しかない所から考えて、急に地球の重力が減ったとも考えられないし、辺りの雰囲気や様子が元々とは全く違うから『別の世界』と考えるのが妥当だとうじゃないの」

と、語る空ちゃん。

そっか……。

頷き、ふと二言目を問いかけようとするボクに空ちゃんは、

「『原因が解るなら、元の世界に帰れるかも知れない？』じゃろ？」
先を読んでいたらしく、思ったそのままの質問を口にしたのだ。

「先に言っておくが、もしかしたら帰れるかも知れない程度の確立があつたら、真つ先にそつちを何とかしてるよワシは。それが出来ないから妖一殿の為にその鎖付き腕輪を作つてあげたのじゃからな
ー、当分の間ここで生活が出来る様に」

「そう……なんだ」

絶望に近い、そんな思いと共に頷いたボク。

「……でも、望みは捨ててないからこそ、元の世界と同じ体で居られる様にソレを作ったのかもしれないのっ、妖一殿。いつか戻った時にここの重力で体を壊さない様について」

ニツコリと、素敵な微笑を浮かべた空ちゃんの姿。

絶対の暗闇だとしても、そこに光を見たがつて捻^{ひね}り作り出すのが学者の悪い性分^{しやうぶん}なのかも知れないのー。ハイ、そうですか。なんてすんなり受け止めたくはないからの。なんて、笑いながら言うのだ。そんな諦めきつてない空ちゃんの姿に、少しでも希望が見えた気がしたボク。

ふと、ボクにも希望の微笑が零れて来た中……。

ギギギイイイ……。

何処かで、そんな何かの歯車が軋む様な音色を奏で動いた様に、ボクには聴こえた気がするのだった……。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十四縁『鎖と少女とボク。歯車が回り始めた先つて……ボクは
とんでもない事になってるじゃないかなって心なしか思ったんだ』

第十五縁。 近日更新！

と、言う訳で熱で浮かされつつも、ただ今頑張って書き進めていたりします（爆）。

次回でこのお話も『十五縁』というくらいになる訳ですね（シミジミ）。

次回までの間は二週間とかけっこう空いたりしますが、まだまだまともに更新してますよね、このお話も。

ほんと、何時まで続くのでしょうか？

ま、それは ジャム猫 の気力と財政（あ、何か物凄くリアルだわあ）、何より皆様のアクセス数や何気ないコメントから応援の声までが続く限り、書いて行けたらって思ってます（輝）。

本当に、この拙い文章力にも関わらず、読んでも貰えて嬉しく思ってますよ（感涙）。

ホントにね、実際に真剣で誰も読んで貰えなくなったら、作者って物を書く気も失せちゃうもんなんですよね……。読者があつての物語りなんですからね

そういった意味では、楽しみにしてくださってる皆さん、読者様には、感謝感謝の雨あられ（はい、ふる〜い 爆）です。

良かったね ジャム猫 。

さて、次回のお話は（まだ書いてる途中だつて 汗）、不思議な世界パート2ですね。

なんと、次回のお話で妖一君の姿がチラリと露になります

や……十五縁になってやっとかよ！ とかいうイタ〜いツツコミはお豆腐にでもツツコンで載いて……。え？ お豆腐がグシヤリと使えなくなる？？ 大丈夫、そうゆう時は挽き肉と一緒に混ぜ込んでヘルシーな力サ増し豆腐ハンバーグにでもして戴ければ、二度美味しいという素敵な結果に（超輝）。

……お話は戻りまして（汗）。

そして次回も、不幸体質にある妖一君の身に、更にまた厄介事^{やっかい}が舞い込んでしまいますっ！

流石^{さすが}は妖一君。天晴れ^{あっぱ}です（爆）。

と、未だ書き終えては居ませんが、それとなりに読んで楽しんで貰えたらって思う次第です……ハイ（滝汗）。

熱に浮かされつつあるので、もしかしたら更新が少し遅れるかも知れませんが、良かったらお暇^{ひま}な時にでも読んでみてくださいね（ペコリ）。

追伸。

ヤベー、間接とか頭とかメツチャ痛いし……近日中に書き終えられるかな……（汗汗）。

第十五縁。

「妖一殿、何かして欲しい事は無いかの？」

ふと、唐突に空ちゃんがボクに尋ねた。

それは、空ちゃんの特別研究室兼マイルームから自分の部屋に戻ろうとした時の事だった。

空ちゃんの言葉にガツチリとボクの腕を抱いていたあかねさんは、
「もう何もしてくれなくていいよアンタは」

少々苛立てた声でボクの代わりに言葉を返す。

まー……先ほどまで何があったかと思い返せば、仕方ない反応なのかも知れないけれど……。

「ま、何じゃ、引越祝いに直して欲しい所とか、付け加えて欲しい所とかあったらやってあげようかと思つての。これから色々世話になる身じゃからな」

と、もう片方のボクの隣でニッコリと微笑む空ちゃんの姿。

そんな空ちゃんにボクは目の高さを合わせて、

「別にいいよ空ちゃん。空ちゃんはもうボク達家族の一員なんだからそんなに気にしなくつたてね」

優しく微笑み返す。

すると空ちゃん、ボクの耳にそつと口を寄せて、

「お望みとならば生体強化だつてしてあげれるんじゃないぞ？ そうすれば色々な所が強化されて300年は余裕で生きられるしのう」

なんて提案する。

あはは……300年って……。もはやそれはそれで人間じゃない気がするな……。。

「それに誰しにでもあるじやろ？ 体に関してのコンプレックスとか」

チクリ。

ふと、思い当たる所を掠る音が何処からとも無く響いた気がする

ボク。

「例えば、男なのに女に見える中性的なルックスとか、その逆も然^{しか}り」

ザックリ。

掠った音がしたと思ったら、その次には見事に直撃を果たした音が心の中で大きく響いた。

そう。ボクは男なのに未だ未熟な身体^{からだ}ゆえに中性的に見られる事がただただ多いのである。しかも、どっちかと言うと女性寄りにが多いのだ……。

そんな事を思っていると、続け様にヒソヒソ小声になって、

「それに……他には口では言えぬ所だつて300歳超は今のまま元気で居られるけれどもー」

少女とは思えぬ事を口にする空ちゃん。

あはははは………。

心の中で空笑いを響かせてボクは、

「……空ちゃんが何かしたくてウズウズしてる様だつたら、良かったら壊れた玄関扉を直してくれないかなー……なんて」

ふと見つけた仕事を提案してみる。

すると、それだけでいいのかの？　なんて言う空ちゃんに『是非^{ぜひ}お願いします』と返したのだった。

それは、まだボクと空ちゃんが『この世界』に来る前の、些^{ささい}細なやり取りである……。

「ねー、空ちゃん。何でそんな白衣姿なの？」

ボクは、空ちゃんお手製のココナッツジュースを飲みながら、ふと問いかけた。

ありきたりなボクの部屋に、なんとも似つかわしくない南国の定番ココナッツジュースが二つ。

「ん？　これかの？　これは妖一殿と同じ様に体重に付加^{ふか}を加えるためと、研究する時にはコレを着てるからじゃな」

「へー、そうなんだ」

流石は科学者と言った身なりだなあ。この前の白い和服も似合ってるけど、こうゆう姿も何だか似合ってる気がするな。

なんて思いつつ、ふと何かが思考の滞りとどまりをしている気がしたボク。

……ン？ 体重に付加？？ えつと……。

ボクはチラリと自分の腕と足首に目をやる。

「ねー……空ちゃん」

「何か？ 妖一殿」

チュ〜とジュースをストローで吸い上げた空ちゃんは、ストローの飲み口を軽く指で摘つまんで水位を保ち、ボクの問いかけに反応する。「服とかそうゆう物でも付加を加える物が作れるんだね……」

すると、摘んでいたストローを放し、何を今更という顔で、

「当然じゃよ、このココナッツを育てた空間を作ったのも、妖一殿が付けてる特殊な鎖付くさりき腕輪を作ったのもワシじゃし、簡単な事じやよ〜」

なんて淡々と語る天才超科学者空ちゃん。

ふー……。

一つ、心の中でタメ息を吐くボク。

じゃ、そのこれはーというボクの視線の投げかけに空ちゃんは、「ちよつとした悪戯いたずら心の産物じゃよ」

ニツコリと笑みを浮かべて言い切った。

ははは……。

「ん？ でもその見た目のお蔭でこの事が解り易かったんじゃないかのう？」

確かに。視覚から得た情報と、体で感じた経験との差で違和感を感じる事が出来き、ここの世界を少しだけ知る事が出来たしね。

何処と無しか納得なっとくするボク。

……いや、もしかしたらきつと上手うまく納得させられているだけなのかも知れないな。

ボクは、ニツコリとする空ちゃん前に、ふとそんな事を思う。

「さて、ノドも潤^{うる}したし、外を見てみようかの妖一殿。もしかしたら何かヒントになるものがあるかも知れないし、この世界をもっと知る必要もありそうじゃしの」

と、ぴょんつとベッドから床に降り立った空ちゃんに、

「そうだね。……でもその前にこの腕輪とかの見た目を変えてくれると助かるかも」

苦笑い一つ浮かべるボクだった。

さてさて……どうしたものか。

ボクは道なき道の森の中で、大きなリュックを背負ったままふと一人立ち止まる。

まー……うん。さっきまで空ちゃんと一緒に『別世界探検隊』なんて言いながら色々見て回って居ただけど、いつしか空ちゃんとハグれちゃったんだよね……。

「空ちゃん、何処に居るの？」

森の香りが深く漂^{ただよ}う中で何度も呼びかけてみるが、ボクの声が広がるだけで空ちゃんの声は全く返って来ないのである。

弱ったなあ……。

うーん、来た道を引き返すべきか、このまま広い場所に出るまで進むべきか……。普通なら引き返した方が無難かも知れないけれど、何処が来た方向かさえもう解らなくなつて来てるしね。

とりあえず、先に進んで広い場所に出たら少し待ってみようかな？ 見渡しのいい所ならもしかしたら空ちゃんが見つけてくれるかもしれないし、ボクから見つけ出せるかも知れないしね。それに、どんな猛獣が居るかも知らないから何時^{いつ}までも同じ所に居る方が危険かも知れないし。

ボクはそう結論を出してみて、足を一步一步と進めてみる。

すると、あれからどれくらい歩いただろうか？ 山道など小さい時から歩き慣れた足がほとほと疲れ果てそうになった頃、卵が腐^{にお}った様な匂いが、スーッと吹き抜けてゆく風に乗ってこの森の先の方

から漂ってくるのに気がついた。

……あれ？ この匂いってもしかして……。

疲れ果てそうな足に鞭むちを打って、漂って来た方へと足を運ばせる。足を進める内に、辺りの森の木々がやんわりと湿っていくのが解るボク。

そしてそれは、先に行くほど熱をだんだんと帯びて行っているのだ。

うん。やっぱりそうかも知れない……。

ふと思つたボクの考えは、足を進めて行く内に『確信』へと変わり始めていた。

やがて匂いの元へと辿り着いた時、ボクは我が目を疑いつつも、そこに広がるソレに息を呑のんだ。

森を抜けボクの目の前に広がるのは、大きな湖である。

それも、温かい白い煙けむりがモクモクとあがり、ボクの視界を狭せまめるのだ。

……そう。

「やっぱり温泉だっ！」

ボクはあまりの後景に思わずはしゃいでしまった。森を抜けた先に温泉があるなんて誰も考え付かないものだしね。

「うん、熱すぎないくらいでちょうどいい湯加減」

恐る恐る手を入れて温度を確認すると、それは直ぐにも入れそうである。

……空ちゃんには悪いかも知れないけれど、森の中を長く歩いてくたびれちゃったし、汗臭くなつたから入ろうかな。あ、でもいつ空ちゃんが近くを通つたりするかも解らないから入らない方がいいのかも？ けれど、この湯気じゃどっち道探かっとうするのは難しいかな……。

と、気持ち良さそうな温泉を目の前にして葛藤かつとうするボクの思考。

しかしそう思つたら最後、ここは入らなくちゃ！ なんて思考に直ぐに変わり、脱いだ服を畳たたみ、リュックからタオルを出して腰に巻き、そしてゆっくりと湖に浸つかかってしまうボク。湯の深さは膝上

から太腿ふとももの中間くらいあり、浸かるにはさほどは困らない。

お湯の温かさと体の疲労もあつてか、体の奥の方から『はあ……』と上等な声が漏れ出てしまう。

「あ、これ錆びたりとかしないのかな……」

ふと、極楽極楽じごくじごくと自然と口から出てしまいそんな中、湯に浸かってしまった空ちゃんに貰った銀のペンダントを心配する。

それは、銀色の天使の少女が翼を大きく広げた様さまを模かたどったペンダントである。

一応……これアノ鎖付き腕輪の代わりの役目を果たしてるし……壊れると凄く困るんだよね……。

ま、空ちゃんの作った物だから硫黄いおう程度で何とか成っちゃうなんて事は無さそうだけど。

なんて自問自答じもんじどうをしていると、モクモクと上がる湯気ゆげの先の向こうに人影を見つけた気がした。

もしかして空ちゃんもここを見つけたのかも知れない！

ボクはそう思いつつ、濡れたタオルを腰に巻きなおしてその人影があつた方へと向かつてみる。

「空ちゃんもここに居たんだね」

なんて声をかけながら更に近づくと、そこには……。

「……貴様きさま、死にたくなければ大人しく質問に答えてもらおうか？」

と、何処か聞き慣れた声と共に小麦色の肌にブロンドのロングストリートをした女性が、薄布を身に纏まとったまま短刀ダガーをボクの首筋に当ててボクを制した。

「あ、あかね……さん？」

「動くなと言ったのが聞こえなかった？ それともアタシの言葉が通じない？」

思わず出た言葉に、目の前の彼女は声を深くして睨にらみを利かせる。違ちがう……みたいだけど、髪かみの長さと肌の色以外はあかねさんそのものだよね？

答えの返らぬ問いをしてしまうボク。そこにいる彼女は正に言葉

通りボクの知っている女性に何処か似ているのだ。

「貴様、何処からどうやってこの『エリクアクアの湖』に侵入した？」

と、彼女に問われ、ゆつくりと今歩いて来た後ろの方を指差すボク。

「まさか……この時期に『クレアントの森』からだって！？ この時期は重精霊結界で囲われて誰も入る事も出る事も出来ないハズなのに……」

そのボクが指した方向に信じられないという顔をする彼女。

ボクには何の事やら解らないんだけど……でも、その森から出てきたのは事実だし……何かマズイ事でもしちゃったのかな？

そんな事を心の中で苦笑いを浮かべながら思うボク。

「貴様、ファールトの高位の人間か？」

「え？ ファールトって??」

「は？」

ボクの言葉に思わず聞き返してしまう彼女。

そして再び、

「ではソラルトの高位の人間か？」

と、同じ様な質問をする。

さてさて……なんて答えればいいんだろう……。ボクにとって『ファールト』も『ソラルト』も全く解らないし、このまま黙っている訳も行かないよな……。

「どうした？ アタシの質問に答えなさい、少年。でなければこのままこのダガーの餌食^{えじき}にしまってもいいけど？」

そう凶器を相手の首元^{じょたん}にしながら表情を何一つ変えずにしれっと述べる彼女の瞳には、冗談^{じやたん}を言っている様には全く見えず、このままだと本当に危ない気がしてきたボク。

いつその事どちらかを言ってみようかとも思えたけど、もし第三・第四の選択肢がこれから表れてそちらのどちらかが正解だったり、述べた全部が彼女にとって不適切な回答だったりする可能性もある

から、未だに何も言えないままである。

けれども、このまま何も言わないままだと、きっとサックリい
れるじゃないかな……。

なんて思っていた次の瞬間、

『あ……』

はらりと彼女の薄布が湯に舞い落ちたのを目の当たりにしたボク
と、落ちるのに気がつき薄布を目で追った彼女の声が重なった。

ボクは咄嗟にその薄布を拾い上げて、直ぐ様に彼女の体に巻き、

「あははは……ボクは何も見てませんから……ね」

苦しい言い訳と共に苦笑いを浮かべつつ、一気に真っ赤に染まる
彼女の顔を見た。

「えっと……」

真っ赤に染まる彼女からプルプルと震えるのを見、何かを言おう
と口にするが、結局続ける言葉が見当たらずに言葉に困るボク……

どうしよう。彼女震えるくらい怒ってるし……これって最悪パタ
ーンだよなきつと。

と、自分の身に降りかかるだろう最悪の結末が脳裏に浮かんだボ
クの頭……。

「貴様……今、アタシの体を見たな……」

恥らう様に頬を赤らめつつも、キリッとした鋭い視線でボクを睨
みつける彼女。

「いや……見てません」

その気迫の様なものに負けて、小声でボソボソと言葉が零れた。

ジッとボクを睨み沈黙する彼女が、やがてその沈黙を『貴様……』

という投げかけで破った瞬間、いよいよか……なんて思え覚悟した
その刹那、

「……どうしよう」

「え??」

彼女はその場にしゃがみ込んで湯に浸かり、一つタメ息と共に迷

いの言葉を吐いたのだ。

その想像とはかけ離れた彼女の行動に、思わず口から言葉が出てしまったボク。つい、このまま殺されるのだとばかり思っていたのでなお更である。

「えつとー……どうしたの？」

頬を赤く染め上げて軽く俯うつむきながら湯に浸かる彼女は、どこか可愛かわいげにも思えて、助け舟を出す様に問いかけてしまうボク。先ほどまで短剣を片手に威嚇いかくしていて、一歩間違えればボクは殺されていたのかも知れないのに。

そんな彼女を見ていると、なぜだか放っておけない気がするんだ。もしかしたら、急に小さく思える所もあかねさんに似ていて、それでなのかも知れないけれど。

ゆっくりと浸かろうとするボクを見上げながら彼女は、

「貴様がフアーアルトかソラルトの人間こんじんが解らないけれど、アタシ達にもそれなりの昔からの婚姻しきたの仕来りなどがある」

と、何処か疲れた口調で語り始める。

「そ、そうなんだ」

「この世界に男女の比率が8対2と女性が優位にあるからか、昔からこんな仕来りがあつてね……」

「う、うん……」

「この『エリクアクアの湖』で男女二人が裸体らたいを見せて湯に浸かった時、お互いどちらかに死が訪れるまで添そとい遂げねば成らぬ。なんて仕来りがね」

「へー……それは何だか凄く無茶苦茶な仕来りなんだねー……」

「この世界に8対2の割合でしか男性が居ないとされてるし、男女がめぐり合わせる事すら難しいから」どうしても子孫を残すために作った仕来り』としか思えない様な仕来りが今でも続いているのよ……」

投げやりな口調で語りきって、ゆっくりとボクの方を見る彼女。その瞳はどこか悲しそうな辛そうな、泣きそうにも見える。

「な、何……？」

「はー……。と、タメ息を零して彼女は言う。」

「そんな仕来りなんてアタシは嫌だから、この湖に入る前に視界結界魔法をかけてたのにな。まさかある時期以外誰も寄り付かないし、入る事も出来ないクレアントの森から人がくるなんて思っても居なかったわ……。だから安心してそっちまでは視界結界魔法をかけてなかったからね」

と。

「ビジュアルって何？ クレアントの森って一体なんなんだろう？ よく解らないけど、話の流れからしてとんでもない事になってるのは、何となく解ったボク。」

と、とりあえず……。

そう思い、ボクは彼女に、

「その、ボクは何も見えてないし見せても居ない。だから今の話も知らなかったし、何も無かった。で、いいじゃない？ ね？？」

そう提案してその場を立ち去ろうと、二・三步程足を進ませた所で、ガクンツと腕を引っ張る彼女の手に気が付いた。

……え。

「アタシだってそんな仕来りは確かに嫌だけど……でも一族の仕来りを蔑ろにする程じゃないわ」

と、ボクの腕を引っ張りながら、その傍迷惑極まりな仕来りで作られた道を通そうとする彼女の姿がそこにはあった。

「ちょ……嫌なんでしょう？」

「その通り嫌だ。そんな仕来りはおかしいと思うし、好きな人くらい自分自身で選びたいと思うわっ」

「じゃ、その手を放して『無かった事』でいいじゃないっ。ねっ？」

ボクがグイッと引く腕を、立ち上がってギョツと両腕で掴む彼女は、その拍子にはらりと再び落ちた薄布さえも気にせずのまま、

「……アタシはランシャオ族の王の娘。だから昔からの伝統的な仕来りを蔑ろに出来るほど楽じゃないのよっ」

と、キツとした鋭く真剣な眼差しをボクに向けるのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十五縁『ボクと仕来りと彼女。そんな仕来りなんて不自由を作る^{ため}だけの存在じゃないかな……なんてふとボクには思えたんだ』

第十六縁。

「貴様……の名前は？」

ちやぽん。と、再び湯に浸かるボクに彼女は問いかけた。

「え？ あ、ああ……」

色々と考えつつ浸かったボクは、上手く返せずに少々モタついてしまう。

「アタシの名前は『アーシャ・クライン』よ。これから一緒になる男の名前くらい知らないとおかしいでしょ？」

何処か少し不機嫌そうに言う彼女。

もしかしたら少々モタついたボクに苛立てたのかも知れないし、急にこうなった境遇に対してなのかも知れない。

「ボクの名前は『高杉 妖一』って……一緒になる……」

「タカスギ ヨウイチ？ あんまり聞かないというか、初めて聞くイントネーションの名前ね」

そんな彼女の言葉に、ふと言葉が続かないボクをじろじろと覗く彼女……アーシャ。

えつと……何だろう？ 物凄く見られてるんだけどー。

やっぱり、この世界では男性が少ないらしいから物珍しいのかな？ それとも何処か変なのかな……。

なんて思っていると、アーシャの視線がある一点へと留まる。

「あのー……そんなにそこを凝視されると困るというか、恥ずかしいんだけどアーシャさん……」

そう、アーシャが目留めたのは、タオルで隠してるある部分なのだった

「貴様、じゃ無くて妖一。妖一の精紋は何処にあるの？」

と、もう一度ボクの体のあちらこちらを見、そして再びある部分を凝視してからアーシャは問いかけた。

ルマって何の事だろう？ もしかしてそのルマってのを探して色

んな所を見てたのかな？

だとしたら、そのルマってのがこの世界の人間には無いとおかしいのかな……。

「ど、どうして？」

何気なく問い返してみるボク。

すると、何を言ってるの？ とゆう様な表情で、

「どうしてって、普通気になるでしょ？ これからアタシの夫に成る人の精紋がどんな形でどんな能力なのかってくらい。これから生まれてくる子どもに夫の精紋が継承けいしょうされるんだからね」

説明されるボク。

うーん……、どうやら男性のその『ルマ』ってものが大きく重要で、その能力と形が子どもに継承されるって事らしいみたい。男性選びの基準にもなってるのかなあ、これって。

でも、何だか特殊な言い方されると不思議な感じがするけど、それって普通の『遺伝』と同じだよな？ もしかしたら。

なんて考えてると、アーシャはいきなり立ち上がってボクの目の前で体を隠していた薄布を外し、

「ほら、これがアタシの精紋よ。見える？」

自分の左胸、谷間と逆の側面の乳房ちゅうぶに描かれた印しるしを指差して教える。

「ちょ、いや……その」

急に脱おとがれた事に驚きつつも、そこにあるルマというものを見てしまうボク。

別に、その、変な気持ちで見てる訳じゃないんだから。

なんて自分自身に言い聞かせながらアーシャの指差した所をみると、そこにはくつきりとやや小さく紋章の様なものが存在していたのだ。

小麦色の肌の上に黄色い三重線で囲われた三日月の紋章。その三重線の間には何やら文字の様なものが描かれている様である。

「アタシの精紋は、三重線囲いの三日月の形で、能力は肉体強化。」

見て解ると思うけど最大強化の段階は三つまでね」

と、説明すると薄布を巻き直して湯に浸かり、

「で、妖一のはどこにあるの？ 精紋つて人それぞれある場所が違
うからね、一通り見た所には見当たらなかったけれど？ もしかし
てやっぱり……」

タオルで隠してある部分をジロリと見るアーシャ。

あはは…… そんなご希望な所になんて無いから。というか、そも
そもそんなのボクの体には元から無いからな……。――

すると、恐る恐るタオルへと手が伸びてくるアーシャに、

「無い無いっ！ そんな所にもボクには無いからっ」

思わずタオルで隠しながら、忍び寄った魔の手から横に飛び避け
るボク。

「……え？」

あ、マズい事言っちゃったかも……。

うっかり口を滑^{すべ}らせた事に、不安がボクを襲う。

うわ、だんまりしちゃったアーシャ。きっとルマが無い事に怪し
んでるのかも。

「あ、あのねアーシャ」

上手く誤魔化^{ごまか}そうと口を開いたボクに、アーシャは突然声を上げ
た。

「す、凄い！ 風の噂^{うわさ}では聞いた事があるけど、本当に精紋が無い
男性が居るんだっ」

と、喜びと驚きが入り混じった声を。

「えーっと」

「凄いのね、妖一って。見た目からはそんな風には見えないけれど、
そうなんだね」

そう言つて、一層に喜びを噛み締めているアーシャの姿がボクの
目の前にあった。

そう言われた当人であるボクには、何が何だかさっぱりって感じ
なんだけど……。

「そんなに凄いの？ 男性にルマが無い事って？ 生まれた時から何も無かったんだけど」

不安から恐る恐る問いかけてみるボク。

「精紋を継承させる男性にその精紋が無いって凄い事よ。知ってると思うけど、精紋ってあっても二つくらいしかないのが普通だし、それでも片方、母方ははかたからの方はあっても力は小さくて消えちゃったりするから、例外を除けば事実上一つの力だけか、少しだけもう一つ使えるってくらいなんだけど、その力を必ず継承させる男性が生まれながらに無いって事は、要ようするに『継承された力が多く強すぎて一つの精紋として形を体に表し残せない』って事だからね」

異様に興奮こっぴんしながらそう語るアーシャ。

そうなんだー……。

でも、元から無い世界で生まれてるボクだから、きつと物凄い勘違いさせちゃってるなー。

「そして力の継承は、子どもが生まれたその時に、その妻にも同時に継承されるんだから、凄い事じゃないっ。もしかしたらアタシと妖一に子どもが生まれたら、この戦いも……」

と、ボクの事実を知らないまま、ふと視線を湯へと落として考え込むアーシャの姿。

どうしよう、本当に何も無いって知った時が何だか怖い気がする……。

うん。でもそうゆう事をしなければいいし、する気も無いから要いらぬ心配かもしれないな。

なんてボクは思いつつ、立ち上がらない様にゆっくりと静かにその場を離れようとする。

これ以上の長居は無用、長居は無用と。

しかし人生つてもものはそう簡単に上手くは行かないもんで、

「何処行くの妖一？」

どうやってかは解らないけれど、一瞬でボクの目の前まで回りこんで、短剣ダガー片手に問われるボク。

「ちょっと荷物を取りに戻ろうかな……なんて」

と、苦しい言い訳と共に苦笑い一つ浮かべるのだった。

「ここよアタシ達の街は」

軽量型の胸当てに真つ赤なマントとキャロットスカートの様な銀の鎧よろいを着たアーシャは、ふと立ち止まって後ろを歩いていたボクを手招きする。

そんなアーシャに半分以上無理やりに連れて来られた場所は、何も変わらない森の風景が広がるばかりの所。

ここよと言うわりには、街らしいものはやはり無くて、騙だまされている様にも感じられるのだ。

「アーシャ、何処に街があるの？」

「いいから真つ直ぐ歩いてみなさい」

と、疑いの眼差しまなざしを向けながらも言われるまま先を進んだその瞬間、眩まばゆい光に包まれ、

「……凄い」

目の前に広がるその後景に思わず言葉が零れたボク。

「ようこそ、大森林の都バルウへ。ここはいくつもあるランシャ才族の街や村の中でも最も大きく、中枢ちゅうしゅうを担になう所でもあるわ。そのお蔭かげで各地のランシャ才族の特産品や稀少品きせうぶが集まり、いつでも街からは賑にぎわいがみれるのよ」

街の入り口で片手を広げて一礼をし、そして説明するアーシャ。

そこは、物凄く広大な土地に緑の木々が溢れており、大きな大木の一本一本がそれぞれの家となってる様で、その大木に窓や扉がくつついている。そしてそんな家が見渡す限りに何百・何千とあちらこちら並び、人々が賑にぎわいを見せて生活をしているのだ。中にはアーシャの説明通りに色々なアクセサリーを売っているショップがあったり、木の実や果物・肉や魚などの食品を扱っているお店もいっぱいある様だ。

「この通称『ショップ大街路』だいがいろを抜けてさらに奥に行くと、そこに

はちょっとした広間があつて色んな人が憩^{いこ}を楽しんでるわ。どう？　ここも妖一の村や町（街）にも負けないくらい広いでしょ？」

「うん、凄く広いね。森の中にこんな場所があるなんて思っても見ないよ。さっきだつてこんな全く見えなかつたし……」

「ああ、それは視界結界魔法でこの姿を隠してるからね一応。外からじゃただの森にしか見えないから。ちなみにシツカリとした道順じゃないと魔転^{レント}移通路を通つてここまで辿り着けない様になるから、ランシャオ族以外は辿り着くのは難しいかもね」

そう嬉しそうに自分の街を語るアーシャ。

どうりで、ここまで来るのに色々クネクネと動き回つてた訳だ。

ふと今までの可笑^{おか}しな道のりに納得するボク。

「で、ずっと先の方にあれが見えるでしょ？」

あれと指差すアーシャ。

それは、ボクの視界の中央に遠く聳^{そび}える様に存在する超巨大の大樹。見た目の距離から言つてもかなり遠くにありそうなのに、ここからでも解るくらいその大樹だけは大きく太く神神^{ウツリ}しいまでの存在感があり、その姿に息を呑^のんで圧倒される……。

「う、うん。見えるも何も存在感がありすぎて見るなつて言われても見ちゃうよ……」

「そうでしょ？　ふふつ、今からあそこへ向かうからちゃんと着いて来てね妖一」

圧倒されるボクを尻目^{しりめ}にそう言つと、アーシャは先を歩いてゆく。

「あ、待つてよアーシャ」

と、少し大きな声で呼びかけて、先に行くアーシャを追いかけると、その場に居た小麦色の肌をした人々が突如^{とつじょ}こちらへと一斉^{いっせい}に振り向いたのだ。

……え？　何？？

その後景に驚くボクをよそに、次の瞬間、歓声と驚きの声が入り乱れた。

「あつ！　アーシャちゃんお帰りっ！」

満面まんめんの笑みでアーシャを出迎える人々に、

「わあああつ！！　アーシャ様が村に誰かを連れて来たみたいよ！」

アーシャの直ぐ後ろに居たボクをいち早く見つけた人たちの驚きの声。

「アーシャ様、ご無事で何よりですっ！」

感涙かんだいで顔がボロボロになる人々も居れば、

「わあ〜可愛いあの子〜、こっち向いて〜」

と、ボクをどこぞのアイドルかのように呼ぶ女性も居たりとかで……
わんやかんやでアーシャへの喜びの声だったり、ボクへの注目の声だったり、それは凄まじい声の群れである。

「アーシャ……ちよつと怖いかも」

「何も怖がる事は無いよ妖一。皆はアタシ達の事を歓迎してくれてるんだからさ」

アーシャの背中で脅えるボクにそう言いながら、ただいまー、皆ありがとっ！　なんてこの大人数に圧倒もされずに手を振るアーシャの姿。

「ほら、妖一も小さく縮こまってないで皆に手を振って胸を張りなさいよ」

優しい微笑を浮かべながらボクに言う。

ボクはその言葉に、胸は大きくは張れないけれども、腕を振って応えてみると、

「キヤー、あの子、男の子みたいな女の子してて綺麗きれいで可愛いかわいい〜」

「手を振ってるわ、なんか少しオドオドした所が『クル』みたいで愛くるしい〜」

更にキヤピキヤピな声が一層に強くなったのだ。

確かに男なのに女の子みたいな中性顔ってただただ言われた事あるけど……ここでも言われるなんて思わなかったな……。――

「ほら、大人気でしょ妖一？」

「ボクはこれでも男の子だから『可愛い』って言われても……あん

まり嬉しくは無いかも」

「それじゃ、妖一の為に綺麗なドレスでも見立ててあげようか？」

「それ……イジメだよな？ アーシャ」

ジト……とした視線で投げかけるボクに、

「いいや、何処か愛くるしい妖一への愛情表現の言葉だったりね」

あははは……と、晴れ晴れしく笑うアーシャ。

何だか嫌々仕来りで一緒になるとは言え、何処か嬉しそうに見えるのはボクだけだろうか？

なんて思えてくるボクである。

「まー、皆の事は許してあげて。ここに一族以外の誰かが来るのなんて500年ぶり以上くらいだし珍しいのよ」

「何だか初めて訪れたパンダの心境が解る気がするな……今のボク」

アーシャの言葉に、ふとそんな言葉がぽつりと零れてくる。

「何か言った？ 妖一」

「うっん、何でもない」

首を軽く横に振って、アーシャの後を着いてゆくボク。

やがて長い人々の歓声の間を抜け切り、途中大きな踊り場にある椅子で休んでから進み、目的地へと到着するボク達。

「これ、一体樹齢何千歳くらいあるの？」

遠くからもしっかりと確認できた目の前のその大樹を指差して問いかける。

するとアーシャは軽く、

「80万年くらいって聞いた覚えがあるけど、確かな事はちょっと解らないかな」

とんでもない年数をさらりと言うのである。

80万年！？

「根回りだけでも直径5kmはあって、樹高は3200mあるとかだった気がするけど……その記録自体が随分も昔に測ったものらしいからね、未だ生長をしているという報告もあるから確かなものは

解らないかもね」

あはは……凄い大樹の中に家を作ったもんだ。高さだけならボクの世界にあるあの富士山から500m弱少ないだけの高さだって言うのだから……。しかも未だ生長を続けてるらしく、まだまだ大きくなるらしい。

ボクは改めて、その大樹にはめ込まれた5メートルはあるかという鉄製の大門を目の前にして呆気にとられる。^{あつけ}

大門があるという事は、きっと今まで見てきた様に、この大樹の中には衣食住の空間が存在するだろうなんて、^{あんい}安易に想像が出来るのだ。

そして、そんな事を考えていたボクにアーシャは、

「ようこそ我が家、ババルウ城へ」

やっぱりそう来るよね。というボクの予想通りの言葉を告げるのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十六縁『ボクとルマと大森林の都ババルウ。豪い所^{えら}に呼ばれちやったなって……ボクは目の前にして思ったんだ』

第十七縁。

「……妖一よういち、きつとこの先には理不尽りふじんな言動や態度があるかも知れないけれど、決して逆らう事はしないで。ただ、側にいてくれるだけでいいから。約束、出来るな？」

と、この巨大な大樹の中に出来た凄く広い城内に通され、立派な装飾がされた大きな門がボク達を迎えるとある部屋の前に立ち止まり、神妙な面持ちしんみょうおももでアーシャはボクに忠告をする。

「え？ ……うん。でも急にどうしたのアーシャ？」

隣に立つアーシャの空気が、先ほどまでの陽気で温かく優しいものから色を換え、何処か重苦しく張り詰めたものに変わって行くのを感じたボク。

「妖一の為ためにアタシが出来る精一杯の優しさよ」

ボクの問いかけに、何処か影を潜めた優しい微笑を浮かべ返すアーシャの姿が、そこにはあった。

一体この先に何があるのだろうか？

妙な緊張感に囚われつつも、アーシャの『行くよ』と言う言葉の合図と共に、目の前の大きな門が両サイドに押し開かれたのだった。扉が開かれ目の前に広がるのは、大聖堂の様な広さに圧倒されそうな大きな部屋が広がっていたのだ。その空間には金や宝石で厳おごそか且かつ綺麗に装飾された柱や壁があり、何処からともなく神聖な空気を醸かもし出している。そしてその部屋の一番奥には、周りに負けないくらいの威厳がある大きな王座が三つ置かれており、そこから汚れ一つも無い深紅のカーペットが扉まで敷かれ、ボク達を出迎える。ボク達二人はカーペットの上をゆっくりと歩き、一つ段差が出来た所の王の座よりも少し離れた位置に立ち止まり、

「ただ今戻りましたアウザー様」

と、片膝かたひざを立ててしゃがんだアーシャは、中央の一番大きな王座に座る男の前で一礼をする。

王座に座っているのは、白い修道服の様な服に袖端や襟端などに青いラインが入った服を着た、蒼い肩まである長い髪をした少々釣り目気味の美形の男。肘掛けに頬杖つき、足を偉そうに組むその態度と顔からは、何処か性格かきつそうで傲慢そうな印象を受ける。「ン？ やつと帰ってきたか。全く何をモタモタしてたかは解らないが、随分と遅かった様なアーシャ。私が思っていたよりもそんなに手強く遠征が長引いたのか？」

と、予想した印象を全く裏切らない男の口調がボクの耳に障る。「いえ、アウザー様の予想以内の敵戦力であり、想定内以上に時間がかかってしまったのは帰路の途中に『エリクアクア』にて戦場で受けた思わぬ傷を癒していた為で、アタシの力が及ばぬせいであります。今後はその様な事が無い様に努力に務めて行きたいと思えますので、どうかお許しください」

アウザーと呼んだ男の言葉に、何一つ文句を返さずにただ肯定するアーシャの姿。

それはまるで、言葉遣いからしても全く別人としか思えないくらいである。

「ふん、やっぱりいまいち使えない女だなあアーシャは。……まあいい、遠征が成功したのだからそれで良しとしとおこうかアーシャ」
何処か退屈そうな口調で不満を交えて言葉を吐くアウザー。

……ム力つく。

その一言に彼の全てが言い表せる様な、そんな気がするボク。

遠征にて負傷をおいっつも勝利を告げに帰ったアーシャに対して『いまいち使えない』だって？ それも退屈そうに不満まで零して

……。まずは劣いの言葉の一つでも言うべきだろう！？

「有り難きお言葉に感謝いたします」

頭を下げたまま、感謝の言葉を口にする。

ボクはそんなアーシャとアウザーを見て、心の底からイライラが昇ってくるのを感じるのだ。

すると、そんなボクの空気を察したのか、アウザーがふとボクに、

「その女、誰にその様な目を向けている？」

中性的なボクの顔と未だ未熟な体に女と勘違いしながら、不機嫌
そうに問いかけたのだ。

その言葉にカチンと来たボクは、

「おっ！」

「恐れ多くもアウザー様へと向けたのではなく、きっとこの至らぬ
ばかりのアタシへと怒りを向けているのでしょう」

お前にだよっ！ と、声を上げようとしたその瞬間、直ぐ様ボク
の言葉をアーシャが遮って言葉を続けたのだ。

……しまった。アーシャと二つの約束を破る所だった。

心の中で苦笑いを浮かべるボク。

一つは部屋の前でした『何があっても逆らうな』という約束と…
…。

「フン、まあいい。アーシャ、その女はどうしたんだ？　そして何
故私の前で平伏させない？」

「失礼しました。この女性は帰路の途中で出会い、傷の手当をして
くれた恩人にして、アタシの専属世話係として働きたいと申しでき
たので連れて参りました。その無礼の責任はまだ何も解らぬ新人に
何も教えていないアタシに有ります。どうかこのご無礼をお許しく
ださい……」

と、アーシャはボクを同じ様に座らせて頭を持ち、グイッと下げ
て謝らせる。

「最初で最後だ。心の広い私は、その義妹のシャロンにも負けそう
なその胸に免じて無かった事にしてやる。シャロンは腕のいい診療
薬師だから、豊胸の薬草でも煎じて貰うといい」

嘲笑気味に言うアウザー。

「ありがとうございますアウザー様」

「それとアーシャ、その女に女らしい服装を着せろ。それじゃまる
で男の様に見えてしまうからな」

と、ボクの姿にイラついた鋭い声でアーシャに命令する。

「畏まりました。後ほど仰せの様に致します」

アーシャはそう告げ、アウザーの下がってよいと言葉と共に再び一礼をし、ボク達はこの部屋から出て行ったのだった。

「そう怒らない妖一、ああするしか無かったんだから」

ボクはいかにも『お城の王女様』という綺麗に飾られた部屋に通されて、アーシャに言われる。

「ボクはアーシャに怒ってる訳じゃないし」

誰もが言われて想像するあのお姫様ベッドに座りながらムクれるボクは、そっぽを向いてぶつきら棒に告げる。

あの男、アウザーだとか言う奴に腹を立ててるのだ。

全く……何なんだアイツ、最低にも程がある。

再び先ほどの事を思い出し、更に腹立たしく思えてくるボク。

「ほらほら、そんなにムクれると、折角の可愛いメイド服が可哀想よ、妖一」

その声に振り向くと、七部丈の淡いジーンズのようなパンツに、クリーム色のレースをあしらったナチュラルフェミニンなチュニックスワンピースという女の子らしい出で立ちに着替えたアーシャが、何処か悪戯っぽい笑みを浮かべながらボクへと歩き寄る。

その姿からはとても一族の王の娘という威厳は感じられなく、ボクと何も変わらない普通の女の子の様に思えるのだ。

この世界にもボク達の世界の様な服があるんだな……。そうゆう姿もとても似合ってる可愛い。

なんて見とれていたボクに、ふと気がついたか、

「何？ やっぱり何処がおかしい？」

と、自分の姿を見直すアーシャ。

「いや、似合ってると思う」

こちらを向き直ったアーシャと視線が合い、何気なく零すと、
「ふふっ、ありがとう妖一」

小麦色の頬にほんのり赤みを帯びさせたアーシャ。

「遠征先の途中にある町に休憩と食料の買い足しに行った際、店の店主に『最新のファッションだから』と上手く買わされてしまった服だけど、そう言っただけでもこの服に価値が出たわ。」

まー……この様なレースをあしらった女の子した服なんて、実際アタシには可愛すぎて勿体無い気もするけれどね」

と、直ぐ様に照れくさそうに謙遜するのだ。

全然そんな事無いのになー……アーシャ。

「何で？ アーシャだって『女の子』なんだから、そんな事は全然無い気がするのになー……。剣士の様な姿のアーシャも確にかっこ良くて似合っているけど、そういう女の子な姿もとても似合っていて綺麗だと思うよ、アーシャ」

ボクがそのまま思っただ事をアーシャに告げると、アーシャは少しビックリした表情を見せ、

「あはは、この世に生を受けて男性にそんな事を言われるなんて思ってもいなかったわ。何処か不思議ね、妖一って。例えばそれが戯言だとしても、そのまま受け入れちゃいそうね」

クスクスと可愛らしく小さく微笑んだ。

戯言じゃなくってと、言葉を続けようとするボクに、

「妖一も似合ってるよそのメイド姿」

はいはい、もう終了。と、ばかりにボクの姿を悪戯っぽい笑みを零しながら褒めるアーシャ。

紫色の良くある可愛いメイド服姿のボク。

これで『いらっしやいませ、ご主人様』なんて語尾にハートマークなんか付けて言ったら、本当に洒落にならないよね……。

「あんま……嬉しくない褒め言葉だよ、普通」

そんな自分自身の姿に思いやられながら、悪戯っぽい笑みを浮かべるアーシャに空笑いを交えながら答えるボク。

「でも、このババルウの中では約束した通りに『女性』という事で通して頂戴ね、妖一」

ベッドの上に置いておいたフリルのカチューシャをボクの頭に挿

しながら、ニツコリと微笑んだ。

そう。二つの約束の内、もう一つの約束は『女性として振舞^{ふるま}っている事』である。

「お父様が帰ってくるまでの間だから辛抱^{しんぱう}して頂戴、妖一。そして男であるとはバラしてもいいから」

ゆつくりと腰を下ろして、ボクの右隣に座るアーシャ。

その瞬間、フワツと甘い様な優しい香りが鼻腔^{びじう}に広がり、何処か脳^脳を蕩^{とろ}けさす様な気がしたのだ。

「アウザーにバテて殺されない様にだっけ……」

自分自身で言っていて気の重くなる様な言葉に、軽く項垂^{うなだ}れるボク。

「そう。知つての様に男に生まれた者の地位が高く強くなるからね。偉^{えら}そうにしてるアウザーは第二王妃の子どもであつて、実質第一王妃の娘であるアタシの弟。でも、男であるから自動的にアタシより地位も権力も上がるから、お父様が居ない今は最高権力者^{最高権力者}つて事になるわ。

そこに、アタシの夫が今ここに来たらどうなると思う？」

問われ、ふと考えて直ぐ様見えてきた結論を口に出すボク。

「第一王妃の娘であるアーシャに夫が出来れば、それは自動的にその夫になる男性が王位継承権第一位となり、ゆくゆくランシャオ族の王になるつて事だね」

「そう。そうなると今まで自由気侘^{じゆうきま}にやって来たアウザーの地位が危^{あや}ぶまれる事に繋がる訳ね。

でも、仕来^{しきた}りとは言え、一族の婚姻^{こんいん}にはその街の最高権力者……

つまりは、お父様が出席しなければ認められないと成ってるから……

…と、まあこの先は言わなくても解るわね」

そう恐ろしい事を簡単に告げるアーシャ。

つまりは、もしそんな男性……ボクが今この時点に現れたら、アーシャのお父さんが帰るまでに秘密裏^{ひみつり}に自殺か事故かの何かに見せかけて闇に葬^{むす}るかも知れない。

と、簡単且つ明瞭な訳で、アウザーにとってボクという男性の存在が目障りなのである。

あの傲慢そうな態度といい、きつと暗殺の依頼を何の躊躇もなくして亡き者とするだろうな、アイツ。

先ほどの態度等を思い出し、そんな思案が直ぐ様に考えられたボク。

すると、そんな事が思いついていたボクに、アーシャは次の瞬間、「それとも……アタシをこのどうしようも無い世界から、妖一が攫って逃げてくれるのかな……何処かこの誰も知らない様な世界へと」

ソツとボクの肩に頭をつけて軽くもたれながら、何処か物思いのタメ息と共に零したのだ。

それは、優しくも何処か強く頼もしいアーシャの面影は無く、一人の少女の様に感じられたボク。

ふとボクは、アーシャは一族の仕来りや世界のルールにがんじがらめに縛られすぎつつも、それでもその一切に負けない様に気丈にしているだけなんじゃないかなって、何処かそう思った。

「アーシャ……」

アーシャから醸し出す空気に流されつつあるその刹那、

「アーシャお姉様、頼まれた物を持って来ましたよ。入りますね」

明るい、子どもの様な声が部屋の扉の外からノックと共に聞こえ、部屋に誰かが入って来たのである。

マズいつ、アーシャとのこんな姿を見られたら、勘のいい子だったらボクが『男』だってバレちゃうつ。何とかしなくちゃっ！

そう思ったのも既に遅く、

「もしかしてお邪魔しちゃいましたか？ アーシャお姉様？？」

メイド姿で中性のボクを一目で『男』と見破ったと思われる彼女は、何気なく確信を突いた問いかけをした。

……ヤバい、バレてるかも。

「いいえ、ちょうどいい時に来てくれたわシャロン」

あたふたとするボクをよそに、シュツと先ほどまでの空気を換えて、ニツコリと微笑み迎えるアーシャの姿。

「おかえりなさいアーシャお姉様、遠征ご苦労様でした」

アーシャの微笑みに、同じくニツコリと返す彼女。

足首まで届く白のワンピースに透かし編みのカーディガンというお嬢様スタイルを着た、黒のロングを小さな宝石で輝く何かで両側に結ったツインテールに、まだ幼さが残る可愛い顔が微笑ましい、薄茶色の肌をした11歳か12歳くらいの少女である。片手には白い箱の様なものを提げている。

「この部屋に来てる時くらい『お姉ちゃん』でいいし楽にして、シヤロン」

「うんっ、アーシャお姉ちゃん」

中に入り、ゆつくりと迷いの無い足取りでボクへと近づくと、

「初めましてお兄様、私は第三王妃の娘で、シャロン＝クラインて言うの。これからよろしくお願いしますね、お兄様」

スカートの端を軽く摘んで上げ、礼儀正しく可愛らしい一礼をする彼女、シャロンちゃん。

「えっと……」

「ああ、事情はお姉ちゃんからの手紙で知ってるから、そんなに身構えなくてもいいよ」

戸惑うボクを目の前に、クスクスと可愛らしく笑うシャロンちゃん。

ふー。と、彼女の言葉に一つ肩の荷が下りた様なそんな気がしたボク。

「よろしくね、シャロンちゃん」

ニツと笑うボクの言葉に、スツと頬を赤めさせてニツコリと頷いて返す。

何処か素直そうで可愛い女の子である。

「それじゃ、来て直ぐで悪いんだけど妖一にメイクをお願い。この

ままでも十分女性に見えるけど、メイクすれば完璧に女性に見えるからね」

「うんOK、アーシャお姉ちゃん。でもアーシャお姉ちゃんもメイクくらい覚えた方がいい気がするな」、急にパーティーにとか呼ばれた時に必要になるし」

言われたとおりテキパキとボクの顔を色々と弄りながら、メイクを覚える様に薦めるシャロンちゃん。

けれど、そんなシャロンちゃんの言葉に、

「そうかも知れないね。でも、アタシが自分でするよりシャロンが一番上手いし、アタシの肌に一番合う粉の調合の仕方も出来るからシャロンがいのよ。」

それに、アタシはキラビラかなドレスと綺麗なメイクでパーティーに出て挨拶あいさつをしてるよりも、短剣タガ片手に魔法を駆使くしして乱戦の先陣で戦いくさつてる方が性しょうにあつてるしね」

褒め言葉と微笑で返すアーシャ。

「ふふつ、アーシャお姉ちゃんは本当にバルドお父様の性格に似てるよねつ。戦いくさしてる方が何も考えなくて好きだって所とか。きつとアーシャお姉ちゃんってほとんど鏡を見ない人でしょ？」

と、メイクをしながら言うシャロンちゃんの表情には、ニコヤカさが零れ表れていた。

「そうね、アタシにとっては一生必要ないものだと思ってるし」

「勿体無くい、義妹の私から見てもアーシャお姉ちゃん凄く綺麗なのになあ」

「そんなに褒めても何も出ないわよ」

軽く笑って言うアーシャに、えへへと、笑みを浮かべるシャロンちゃん。

その微笑ましい二人の姿は、本当の実際の姉妹の感じられるのだ。

「はい、完成」

そう言い終わると、ボクの顔へ丸い手鏡を向けてメイク終了の出

来を見せる。

「……複雑だあ」

向けられた手鏡の中に完璧な女性の顔が映し出された事に、ボクはつい本音が零れ出てしまうと、

『あはははっ』

そんなボクの言葉に二人して顔を見合わせたアーシャとシャロンちゃんは、笑い声を重ねハモラせたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十七縁『クライン一族とメイドさん。ボクは映し出された顔に……何処か大切なものを無くしかけそうになる様な、そんな気がしたんだ』

第十八縁。

「待つて、アーシャっ！」

ボクは、木々の間を神業かみわざの様にハイスピードで駆け走るアーシャの後姿に投げかけた。

「急いでっ、妖よういち一」

チラリとボクに振り返り、ボクの足を更にと急がせるアーシャ。

流石さすがは戦っている方が性に合あっていると云っただけあって、草が生い茂り足場もそれほどいいとも言えない森の中で、あれほどのスピードで駆け抜ける事が出来るアーシャに感服かんぷくするボク。

「もっと急いで妖一っ！」

「と、言われてもこのメイド服姿で走るのは大変なんだってアーシャ……」

アーシャの檄げきに、ポツリと零こぼしてしまうボク。

ボク達が何故、こんな風に森を疾走しっそうしているかと言うと、それはシャロンちゃんが言っ言葉にあったのだった……。

「あ、そう言えばアーシャお姉ちゃん……」

ボクの女性としてをより見せるメイクが完成して、ふと休憩きゅうけいを取っていた時、シャロンちゃんがその可愛い顔の眉間みけんにシワを寄せながら、

「クレアントの森なんだけど……もしかしたら重精霊結界フオニスウムが解かれていたかも知れない……よ」

と、アーシャに重い口調で話したのだ。

「そんなまさか！？ まだクレアントフォールが見られる時期じゃないでしょ！？ シャロンの思い違いか何かじゃないの……？」

シャロンの言葉に信じられないと言ったアーシャの姿。

クレアントフォール？ クレアントって確かボクが抜けてきた森の名前だった様な……。

「うつん、きつと思ひ違ひじゃないと思う。だって私、今日『クルの実』を取りに行った時に、いっぱい『クル』の姿を見たもの」
首を横に振って、アーシャの言葉を否定したシャロンちゃん。

「『クル』に『クルの実』って……何？」

ちんぷんかんぷんなボクは、二人に何気ない問いをしてみる。

ただでさえこの世界の言葉は聞き慣れないものとかが多いし、何が何やらという感じである

「ああ、そっか。クレアントの森の知識が無いと知らなかったわね」
アーシャはボクをふと見てポツリと零す。

「いやー……何かと言えばこの世界の事は全て知らないんですけど……」。

なんて思いつつ苦笑いを浮かべると、そんな表情のボクにシャロンちゃんは説明をしてくれるのだ。

「うんとね、お兄様はこの辺の人間じゃないから知らないかもしれないけれど、クレアントの森には、数々の未発見動植物が存在してるの。そしてこの『クル』と『クルの実』もその未発見動植物の中の一つだったもので、聞いた通りに『クルの実』は植物の一つなんだ」

そう言つてニツコリと微笑みを浮かべては、ふと何かを思い出した様に白い箱の中を探りながら、

「えっとー……あつたあつた。これはね、クレアントの森にしか生息してない不思議な木から取れる実なんだよ。この実を食べると、あらゆる毒とか体に害を及ぼす物を体の外へと排出してくれて元気になるの。その代わり……ちょっとした難点があるのも事実なんだけどね」

と、その綺麗な小さく細い指に摘まれ取り出されたのは、まるで胡桃の様な殻からみに包まれた木の実が一つ。

どうやらこれが、その『クルの実』とやららしい。

「へー……ボクの知ってる木の実にそっくりだけど、これは何にでも効く『万能薬』って感じなんだね」

まじまじとシャロンちゃんの取り出した『クルの実』を見、相槌^{あいづち}を打つボク。

何も変哲^{へんてつ}も無いただの木の実にしか見えない……よねーコレ。

「次に『クル』についてだけど、この『クル』っていうのは小動物の事でね、体長は全長で30〜40cmくらいで、柔らかいモフモフでキュートなエメラルドグリーン毛に覆^{おお}われてて、細く長い耳にルビーの様な赤い瞳^{かわい}をしてるの。ぴょんつと跳ねたりしながら走って、凄く可愛^{かわい}いんだあ。絵で書くとかんな感じ」

そう言っ箱の中に入っていた紙に、ペンで『クル』とかいう小動物の絵を描いて見せてくれる。

うーん……この絵からすると、エメラルドグリーンのウサギなのかな？ この『クル』という小動物^{こどうぶつ}って。体長もそのくらいだし。そしてモフモフでキュートらしい。

にしても、きつとここは重要なポイントなんだろうなあ。モフモフでキュートと言った時のシャロンちゃんの表情が凄く愛くるしい感じだったしね。

「それでね、何でこの『クル』の姿が見えると重精霊結界^{フオニスウム}が解かれましたって思っのかと言っとな、このクル達^{おきょう}って臆病^{おくびょう}でオドオドした性格をしてて、近くに何か危険を感じると体毛と同じ色の特殊な光を発して逃げるの」

「まー、走る子だと、アタシ達の街の近くまでね。普段クレアントの森に居るクル達がこっちまで来れるという事は……」

「クレアントの森の性質上、出入り不可能な重精霊結界^{フオニスウム}から越えて来てるって事になる訳で、そんな事が出来るのは重精霊結界^{フオニスウム}が解かれた時、即ちクレアントフォール^{すなわ}が見れる時期だけと考えるのが一番理論的な」

シャロンちゃんの説明にアーシャが合いの手の様に言葉を続けて説明をし終える。

なるほど、どうやら解^とかれるにも周期的な時期があるにも関わらず、時期が違うからアーシャは驚^{おどろ}いて、その『クル』の出現がフォ

ニスウムが解かれた事実を語ってる訳か……。――

呑み込めたものを軽く整理してみたボクは、ふとある事が気になる、問いかけてみる。

「でもそれって、もしかしたらその『クル』は、昔に逃げてきたクルの可能性もあるんじゃないかな？」

しかしボクの問いにシャロンは首を横に振って、

「クレアントの森の外に逃げたクルは、どうやってかは解らないけど……重精霊結界が再度出来る時間が解るみたいで、その時には全員が必ずクレアントの森へと戻ってゆくのだ。」

だからお兄様の考えた様な事はないと思うよ」

そうボクに返す。

うーん、動物がそれぞれに持つ帰巢本能の様な、ちょっと特殊な力って訳ね。流石は野生動物って事だ。

「……何故こんな時期外れにはかは解らないけど、急いでクレアントの森に向かった方がいいかも知れないわね。シャロン、この事はまだ誰にも？」

難しい顔をして問いかけるアーシャ。

「うん。私が外から帰った時には、まだ皆は気がついては居ないみたいだったし、兄上様もきつと知らないと思うよ」

「確かに。もし気がついていたら王座に座ってなんか居ないで、兵を招集して我先にと出向いてるハズだしね」

シャロンの言葉にコクリと一つ頷きを見せて、

「それじゃこの事は皆には黙っててシャロン、アタシが事実を確かめに行ってみるから。もし誰かに言ってアウザーの耳に入り、何も無かったとしたら噂の出所であるシャロンが酷い目に合わされちゃうから……。アタシが行って戻った後にアタシから話せば、例え何も無くても『アタシの勘違い』で何とかなるし、何か見つかったも『確証が持てなかった為に申せなかった』と言って状況等を話せば、悪くてもお咎めはアタシだけになるからね」

姉が妹に優しく微笑んで言い聞かせる様にするアーシャ。

そんな姿から、本当に義妹^{いもこと}思いのいいお義姉ちゃんなんだと感じてくるボク。

「アーシャお姉ちゃん、帰って来たばかりなのにゴメンね。私が余計な事を言っただけにゆっくり出来なくて。それに私の……」

と、ふと表情を曇^ならしてしまふシャロンちゃんに、アーシャは頭をよしよしと撫^なでてあげながら、

「お姉ちゃんが勝手にやってる事でシャロンが何を気にする事があるのよ？ そんな顔をして気にする暇があったら、疲れて帰ってきたお姉ちゃんの為にシャロン特製のアップルパイを焼いて待って欲しいな」

ニツコリと優しい笑みをみせるのだ。

そんなアーシャにボクは何気なく、

「気をつけてね、アーシャ」

と、ボクからも優しい口調で言葉を送ると……

「何を言ってるの妖一？」

そう真顔で問い返されたのだ。

「へっ!？」

送りの言葉をかけたボクは、問い返されて思わず面^{めん}を食^{くら}う。

「妖一は今日から一応アタシの専属^{せんぞく}世話係でしょ？ 『専属』なん

だからアタシの後を着いてくるのが常識だからね？」

至極^{しごく}当然とばかりな口調でまじまじと見られて言われるボク。

えー…… っと。

「あ、あのー…… 一応訊いてみますが、ボクに拒否権はー……」

「そんなのある訳が無いじゃない」

ボクの言葉は、アーシャの悪戯^{いたずら}気味な笑顔とアッサリとした言葉と共に何処かへと流される始末。

あはは……。ボクの人権って何処にあるのかなー。男性ってこの世界じゃ特別扱いじゃー……。

と、そこまで思いつつ自分の姿を見て言葉に詰まるボク。

ふー。今はシツカリとメイド服を着た『女性』なのね、ボクは。

何処と無く情けなさを感じつつ『ほら早く脱がせなさいよ』と、悪戯気味な笑顔のままボクを待っているアーシャに苦笑いを浮かべながら固まるボクの体。

やがて『脱がせたりは冗談よ』と言うまで固まったボクは、再び戦闘装備をして部屋を出て行くアーシャの後に続く。

すると、ボクが部屋から出ようとした時、ボクのスカートを軽く引っ張ったシャロンちゃんに気がついたボク。

「ん？ どうしたのシャロンちゃん？」

何気ない問いかけにシャロンちゃんは、少々恥ずかしそうにしながらも、

「アーシャお姉ちゃんの事を…… よろしくお願いしますお兄様。いつもああゆう強い感じだけど、お姉ちゃんは誰よりも優しいし、何より誰よりも女の子らしい所もあるから」

照れ笑いを浮かべてアーシャの事をボクに任すのだ。

お互い、いい姉妹なんだなあ。

ボクはそう感じつつ、微笑んで、

「うん、そうだと思うよシャロンちゃん。とても優しくていい女性だとボクも思うよ」

優しい口調と共に告げた。

その瞬間、ニッコリと一層嬉しそうに笑って『お兄様も気をつけて行つてらっしゃいませ』と、スカートの裾を持って一礼をしたのだった。

辺りの緑の色が濃く、深い新鮮な空気が漂^{ただよ}って来た頃、ふとアーシャは立ち止まる、

「……妖一、ここからは十分に気をつけてね」

と、遅れてアーシャの側まで辿り着いた時、アーシャは気配^{けはい}を消すのと同時にボクに忠告をした。

アーシャのそれは、側にアーシャが居るはずなのに、全く側に居る事を感じさせないくらいだ。

正直、ボクは驚いた。

例えば、獣が気配を押し殺して待ち迎える様に消すボクとは違って、アーシャのそれは独特で、小さい頃に教えてもらったものとはまた違う凄いものである。まるで自らの空気みずかを森の空気と同化する様にして存在をカモフラージュするのだから。

……て、あれ？　ボクは一体誰に気配の殺し方を教わったのだろ
う？？

ふと、記憶が曖昧あいまいになるボク。思い出そうにも思い出せない、そんなジレンマに似た感情が湧わきあがる。

「どうしたの？　妖一？」

「え？　うつん……何でもない。それより何でこんな事をするの？
アーシャ」

ふと問いかけられ、苦笑い一つ浮かべて問い返したボク。

「来る前に言ったでしょ？　ここには未発見動植物がいっぱい居る
って。どんな凶暴な動物やモンスターが生息してるか解らないし、
それに……敵にこちらから見つかる訳にも行かないからね」

敵？　動物やモンスターならなんとなく解るけど……敵って何の
事だろう？？

そう思った次の瞬間、ボクはアーシャと出逢って直ぐの事を思い
出した。

『貴様きさま、ファールトの高位の人間か？』

『ではソラルトの高位の人間か？』

と、訊かれた事を。

もしかしてそのどちらかがアーシャの敵って事なのかな？？

そんな事を思っていた刹那せつな、一陣の風がボクの目の前を去って行
った……。

「危なかったね妖一、それ人食い植物科のヒデルラビスという花よ」

「……へ？」

それと言われアーシャが指し示す方を振り向けば、そこには短剣ダガー
に突き刺されたチューリップの様な花の形をした馬鹿ばかでかい花が、

一本の太い木から生えて垂れ下がっていたのである。拳こぶしくらいある太い茎がドクドクと脈の様に打ち、逆さに咲いた花からは赤い液体が滴したたれ落ちている……。

ダガーが刺さっているという事は、先ほどの目の前を去った風は、アーシャが投げたダガーが空くうを切った時のものらしい。

「あ、ありがとうアーシャ」

「いいえ。でもこうゆうのがまだまだあるから、ちゃんと気を抜かずに気配を殺してアタシの後を着いて来てよ？ 妖一？」

と、食人植物を目の前にしてクギを刺されるボク。ちよつとした事で命を落としかけないそんな恐ろしい森に、ボクはちよびつとばかり後悔に似た思いを馳はせつつも、何処か疑問が浮かぶ。

何故アーシャはこんな恐ろしくも危ない森に急いでも入らなければならぬのか？ ……いや、アーシャの言葉からすれば、他にもここに入ろうとする者が居ると言う事にもなる。ならば何故『アーシャ達』はここへと入るのだろうか？ と。

ボクの前を歩くアーシャの足は、確実に少しずつだけスピードを上げて行くのが解るボク。

ボクは今までで解る事を整理して考える。

このクレアントの森に入れるのは、フォニスウムが解かれてる時期のみで、それは時期が一定だと考えられる。それが解かれてる時期に何かが見れるとか言っていた様な……えっと確か……くれあんとふおーる？ だったかが見れる時期らしい。そしてここにはアーシャの敵も来るかも知れない？ のでアーシャの足は急いでいる。そう考える方がどこかシツクリ来る気がするな……。

それじゃ、何で急ぐ必要があるのだろうか？ 誰よりも先に行かなくちゃ行けない所があるからかな？ いや、それじゃ近い様で遠い答えな気がする……。まだまだパズルを完成させるにはピースが足りないのかも知れないな……。……。

結局、散々考えてそこに行き当たるボク。

「きっとボクにはホームズの様な名探偵になる素質は無いかも知れないな」

なんて零した瞬間、アーシャが今までとは違った真剣な声で、
「動かないで、妖ー」

と、ボクを制したのだった……。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十八縁『ボクとアーシャとクレアントの森。それは神が創った悪戯の入り口なのかも知れない……ボクはどこか思ったんだ』

第十八縁（後書き）

数ある物語の中、この ジャム猫 の物語を選んで読んでくれて
ありがとうございますっ（超感謝）。

前から読んでいる人は何となく解つてるとは思いますけど……

ジャム猫 の物語にはルビが多く、読みにくい所が何点もあるかと思
います……。別に振らなくても平気じゃない?? とか、ここは
振るべきじゃ……? とかがただただあるとは思いますが（汗）。

でもこれは、皆様をバカにしているとかがなくて、多く幅広い年
代の人（特に小中学生くらい??）が漢字の読み方に出来るだけ困
らない様に、漢字があっても読んでもらえる様にと書いて振ってる
訳です。頭が足りない ジャム猫 ですから、ルビ振りのセンスも
あんまり良くないので、ここには何で?? と思われる事もある訳
です……。

なので、読みにくい場所もただだあったり、携帯では煩わし
くも思えたりしてますが……：そういう理由があつてなので、どうが
ご了承を願えたらと思つてます（涙）。

……うん……：そんな訳で、良かったらこれからも読んでもらえ
らなつて、そう思う今日この頃な ジャム猫 です（苦笑）。

第十九縁。(前書き)

今(今日)、出来立てほやほやです(笑)。

第十九縁。

「どうしたのお嬢ちゃん？　こんな危ない森の中で？」

ボクにそう問いかける目の前の一人の女性。

それは、狩人風の緑色の服を着た、茶色のボーイッシュなショートカットをした大人の女性である。左手に弓を持ち、右手には焦げ茶色のグローブをしており、そして背中に背負った筒の中に矢が何本も入っている。

「えっと……ご主人様の為に木の実を探しに来てたら、どんどん森の奥へと迷い込んでしまつて……」

声色を女性の様に変えて、思いついた嘘を吐くボク。

どうやら、このメイド服とシャロンちゃんがしてくれたメイクもあつてか、ボクはただの女性と間違われているらしい。ま……嫌だけど、ボクの見えた目が中性的存在だつて事も大きく影響をしてると思うけど……ね。

「そうなの？　主人の為にこんな所までなんて、何て健気なメイドね」

ジリッ。

そんな優しい声をかけながら、ジリジリとボクへと寄ってくる女性の姿。……何故か、不思議なオーラをぶんぷんに匂わせて。

「アナタ何処の主人のメイドなの？　良かったら私に教えてくれないかな？　ここは危ないから私がそこまで送つてあげるよ」

何か別の事を含んだ様な、優しい微笑を浮かべて、さらにジリジリと寄る彼女の姿。

ゾクゾクう……。

そんな鳥肌にも似た感覚がボクの肌を走る。

嫌な空気がするそんな彼女から後ずさりするボクは、コンツと太い木に背中をぶつけてしまうと、

「ほら、危ないよね」

と、素早い動きと共にすかさずボクとの間を詰め寄った彼女。
それは、彼女の息がボクにかかるくらいの、色々な意味で危ない
距離である。

ボクはそうなって、やつぱりと何処か確信したのだった。
はあ……。この人……。噂に聞く百合な人って奴だ……。
と。

「お嬢ちゃん、ここは危険だから安全な所まで連れて行ってあげよ
うか？」

と、ニツコリと素敵な笑顔。

きつと漫画やアニメなら、彼女の周りには綺麗な花達で飾られて
るかも知れない。

「いいえ……。そんなご迷惑はかけられませんから……」

そんな彼女に、背中にじつとりと嫌な汗をかきつつ、ニツコリと
微笑み返すボク。

先ほど『主人の家まで』と言っていたのに、言った舌の根も乾か
ぬ内に『安全な所まで』と変わっている所から、凄く身の危険を感
じるボク。何より一番危険なのは、こんな命を落とす危険性もある
危ない所なのも関わらず、ボクを口説こうとしているこの人が一番
危険な気がするのだ……。

「怖いのか？ 大丈夫？ 震えてるけど？」

迫り寄るアナタに怖くて震えてるんです……。なんて事は、口が裂
けても言えないこの状況。

「大丈夫、安心して。私に任せれば全部守ってあげるから」
艶かしい視線が、色濃く見えた彼女。

きつとここには『安全』なんて言葉が存在しないのかも知れない。
早く……。アーシャ助けに来て。

彼女の手が慣れたような手つきでボクが着ているメイド服に手を
かけ、ボクは心底から助けを願ったその瞬間……。

「アタシのメイドに手を出すなんていい根性してるわね、アンタっ
て」

彼女の後ろの方から、聞き慣れた天の声が聞こえたのだ。

「なっ！」

その声と共に我に返った彼女は、振り向きながら自分の腰へと片手を伸ばして、身構える。

「あ、もしかしてコレ？」

何気ない口調で問いかける彼女、アーシャの手には一本の短刀ショートソードが握られていたのだ。

「何時いつの間に！？」

身構えた片手に有るはずの得物えものが無い事に気がついた彼女は、驚愕きやうの声を漏らした。

「さーね、何時だろう？ アタシのメイドを主人の家まで送ると言った時でしょうか？ または口説いた時でしょうか？ それともその手が彼女の服へとかかった時でしょうか？」

ニツコリと悪戯いたづらめいた顔で笑いながら、問題を出す様に問いかけるアーシャ。

「ふふ……バカね、この距離からじゃ弓も撃てないと安心してるのでしょうか？ その余裕よゆうがアナタの命取りよっ！」

そう言って彼女が背中にある矢を取ろうとしたその瞬間っ！

ドゴッ。

鈍く重い音が響き、そして目の前の彼女がゆっくりと倒れこむ。

「正解は、アンタが短刀ショートソードに手をかける直前にでした」

と、ゆっくり倒れこむ彼女に正解を告げるアーシャは、更に付け加えて、

「どうせ鋭く尖った矢に毒でも仕込んでたんでしょ？ 小さな傷口からでも殺す事の出来るくらいの猛毒をね。それを持って刺すか投げ刺すかして毒殺しようとしてたんでしょうけど。でもそんなの短刀トソードが何時盗られたかも解らない様な技量じゃ、意味なっただんじやないかな？」

淡々と語ったのだ。

助かったあ……。

と、ボクは安心したのもつかの間、ふとアーシャに問いかけてみる。

「もしかしたら最初から見てて、ボクの反応を楽しんでたでしょ？
アーシャ」

「さあ、どうだったろうね」

ニツコリと微笑みながら返した答えには、シツカリと見てました
という意思表示が出ていた気がするボク。

数が多いから、敵を分散させる為に一旦は二手に分かれよう。こ
っちが終ったら直ぐに助けに行くからと言ったのはアーシャの方な
のにな……。

ボクはふと、早くおいでよと前方で手招きをする、そんなアーシ
ヤの姿にむくれっ面する。

「怒らない怒らない妖一つ。アタシは妖一の女の子姿が可愛くて、
つい見とれてしまったただけなんだから」

「そんな褒め言葉なんて『男の子』のボクには嬉しくなんか無いか
らね、アーシャ」

晴れ晴れしい笑いを浮かべるアーシャに、ジー……と視線を向け
て言葉を零したボク。

悪い悪い。と、言いつつきつとそんな事これっぽっちも思っ
て無さそうなアーシャに、タメ息を一つ吐いたその瞬間、ガラリとアー
シャの気配が変わったのを感じたボク。

「ど、どうしたの？ アーシャ」

その真剣な表情を浮かべるアーシャに、恐る恐る問いかけてみる。
すると、小さく舌打ちを鳴らしたアーシャは、

「ご丁寧ていねいにそんなものまでここに持って来てたのね……」
厳しい顔で、何処からか感じた何かに警戒していたのだ。

また何か……来るのかな？ さっきまで簡単にあしらったアーシ
ヤが警戒するくらいだから、もし来るのだとすると、きつと凄いも
のが来るのかも知れないな……。

アーシャのそんな姿にボクも緊張が走る。

「妖一、ここはひとまずババルウまで戻るわよ。今のアタシじゃ、妖一を助けながらなんて一体が精精せいせいで二体以上なんて無理だから」
「え？ ……うん。でもこのまま戻ってもいいの？ ここに何か用事があつたんじゃないの？ アーシャ」

「大丈夫。さつき分かれた時に敵を探しながらも森を大きく見て回ったから」

ボクの問いかけにやや早口で答えるアーシャ。
きつとそれほどこの場を急いでるに違いない。

「解とつた、戻ろう。シャロンちゃんも心配してるだろうからね」
頷うなずき、そしてこのクレアントの森を後にするのだった。

カコンツ。

と、鹿威しんがしの竹筒が打ち鳴らす清音せいおんが、何処からとも無く響いてきそうな大浴場。

そこには、ヒノキの様な香りがする物で作られた湯船に、頭上3mから流れ落ちる打たせ湯。そしてほのかに鼻に香る柑橘系かんきつのミストサウナと、極め付けには岩盤浴といった種類がこの広い大浴場に完備されている……。

「ここは、本当に木の中なのかな……」
目の前に広がる無茶苦茶な世界に、ポツンと立って呆然ぼうぜんとするボク。

そんなボクに、当たり前でしょ？ と、至極当然しごく当然に言い返すアーシャは、赤く綺麗な石で出来た椅子に腰掛けながら、向けた視線が何かをボクに語りかけている。

そんな石の椅子に座るアーシャは、見えてしまいそうで見えはしない、軽そうな薄いワンピース風の湯浴み着ゆあみぎを着て、どうやらボクを待っている様子。

クイッククイッと、カモンって人差し指で招いてボクを呼ぶアーシャ。

その姿に一つタメ息をついて、トボトボと向かうと、

「はい、妖一はアタシの背中を流してね」

オレンジの様な香りがする石鹸せっけんとタオルを渡されるボク。

近くに寄れば解る通りに、アーシャの着ている湯浴み着は透けなくとも薄く出来ているので、徐おもむろに揺れるそのラインが見て解ってしまふのだ。

視線を少しばかりアーシャから外して、ふとぼやくボク。

「……ボクはアーシャの一体何さ？ 三助さんすけさんか何かなの？」

「何それ？」

と、見事にボクは問い返され『うん、何でもない』と答えたのだ。

三助さんとは、銭湯などの浴場で垢あかすりや髪梳かみきなどの『流し』のサービスを行う人の事を言うんだけど……なんて、ボクの世界の事なんてアーシャは知る由よしは無いよね。

そう思いつつ、

「別にこんな事くらいボクじゃなくてもいいんじゃないの？ アーシャ。望めばごまんと人は居るんだしさあ……」

ふと先ほどの事を口に出した。

それはアーシャの城に帰った後の事。疲れたアーシャが『お風呂に行く』と言って、ボクを強制同行させようとすると、帰宅のアーシャの周りに集まったメイド姿の女性達がやんややんやと騒いだのである。

「ン？ ああ、アレね。ほら、アタシってこんなんでも第一王妃の娘で、一応『王女』だからね。世話係にしてみたら一緒にこのお風呂に居る事その事体がなんでも光栄らしいのよ。

それにさ、アタシって昔から義妹いもが出来るまではお風呂はいつも一人で入ってたから、専属で誰かを付けるとか無かったかし、なお更世話係達が驚いてんでしょうね」

「それで……羨望せんぼうと怨み妬ねたみの生暖かい眼差しがボクへと降り注いだ訳ね」

やんややんやと騒いでいたせいで、周りが何を言っているか解ら

なかったボクは、それでも恐ろしい視線を向けられていた意味をや
つとここで理解したのだ。

何だかシャロンの弟のアウザーよりも先に、お世話係の人達に殺
されたりして……ね。

嫌々想像をして、軽い身震いを覚えたボク。くわばらくわばら。

「ん。はい、お願いね」

そう言つと、突然、湯浴み着のサイドにあつた小さなボタンを一
個一個外して、背中を露にするアーシャ。

「ちよつ、何で脱いでるの!？」

「はあ? 脱がないと妖一がアタシの背中を洗えないでしょう?」

急に目の前で脱がれたボクが慌てて言つた言葉に、しれつと返す
アーシャの姿。

開いた脇わきから胸がチラリと覗のぞけ、思わず視線を宙に向かせながら、
「心の準備とか、ボクにだって色々あるんだから……ね、アーシャ」
大きく鼓動うつろする心臓の音が聞こえやしないかと、冷や冷やな気持
ちになるボク。

「今更何を言つてるの妖一。アタシの全部見たクセにね」

クスクスと、笑いを零しながらそう言うアーシャ。

いや、それは不可抗力ふかこうりょくであつて……なんて今更聞く耳を持たない
だろうなあ、アーシャ。

ボクは深いタメ息を吐いて、仕方無ししかたに石鹸で泡立てたタオルで
背中を洗う。

あ……柔らかいんだな、女性の背中つて。少し強めに力を入れた
だけで、皮膚ひふが切れちゃいそうで少し怖いけど、何処どこか気持ちいい
気がするな……初めて知つた……。

なんて初めて触れた女性の背中に、何処どこか不謹慎ふきんしんな事を思つてし
まったボク。もしかしたら最低かも知れない。

すると、またクスクスと笑うアーシャにボクは、

「え!? くすぐつたかった?？」

慌てて慣れない手を止めて問いかけた。

誰かの背中を流すのは、小さい時に父さんに流したのが最後の
で、加減が解らないのである。それも男の背中で女性とはまた違
うのだから、なお更だ。

「ううん、そうじゃないって」

笑顔でこっちに振り向いて、

「ただ、今日一日が初めてつくしだなんて。初めて身体からだを男性に見
られて、初めて義妹以外と一緒に風呂に入って、そして初めて男
性の手を背中を感じたな……って」

ほんの少し、頬ほほを赤らめたアーシャ。

もしかしたら、お風呂の温度のせいでそうだったのかも知れない
けれど。

「え？ だってお父さんとか、お母さんとかと一緒に入ってたん
じゃないの？ 流石さすがに最近は無いかも知れないけれど、子どもの時
と……」

すると、ボクの言葉が終わらぬ内にアーシャが言葉を言葉で遮り、
そして続けた。

「アタシのお父様は今と何も変わらずにいつも戦場へと出向いて、
アタシの側には居てはくれなかったかな。だから一緒に入った記憶
も無いかも知れない。ううん、きっと無い。お母様は……物心つい
た時から、小さい時に死んだってお父様に聞かされてるから、全然
記憶には無いの。弟は……男性だからね、生まれた時からアタシ
よりも高位だったし、向こうから望まない限り一緒に入る事なんて
出来ないから。」

だから、3年くらい長い遠征えんせいから帰ったお父様が、シャロンを連
れて帰って来た時は、すっごく喜んだっけ。これで家族と一緒にお
風呂に入ったりとかも出来る！ って」

と、辛い言葉をニツコリと笑って何処か懐かしむ様に。

あ、そっか。だからお世話係と一緒に入らなかったのか、アーシ
ヤ。出来るだけ家族と一緒に楽しみたいし、こうゆう時間を大事に
したい。

……もしかしたら、このアーシャから感じる強さは、いつも一人で居た孤独（じやく）と、守らなきゃいけない義妹を思ふ気持ちから来てるのかも知れないな。

そんな事を思ったボクは、アーシャの肩を思わずギュッと抱きしめた。

「よ……」

「ボクもね、昔に母さんを亡くしてるんだ……」

ゆっくりとアーシャから離れて、頭を、その長い髪を愛おしい位（いと）に優しく撫なでた。

偉いねアーシャ。ボクはそこまで強くないけど、その気持ちは解つて上げれるかも知れない。

ニツコリと微笑むと、茹蛸（ゆでたこ）の様に真つ赤に染まるアーシャを見て、ボクは自分がした事にふと気がついた……。

あ、しまった……。思わず抱きしめちゃった……。

「だ、抱きしめられたのも……男性とは初めてで……」

真つ赤になつてごによごによ口調になるアーシャをボクはクルツと背中を向かせて、

「痒かゆい所は、ありませんか？」

まるで、美容師さんがお客さんにシャンプーをしている時の様に問いかけ、そして思わず自分がしてしまった事を誤魔化（ごまか）す様に背中を洗つのを続けたのだ。

「……が少し痒い……」

小さくごによごによとした口調だったので、上手く聞き取れなかったボクは、

「え？ もう一回お願い、アーシャ」

「ここ……何でもないっ。背中はどういって言うただけよ」

と、問いかけに軽くつつぱね返されたのだ。

「あ、うん。それじゃ前は自分でお願ひします」

やっぱりマズかったかな……。あはは。

そう苦笑いを浮かべつつ、泡まみれのタオルをアーシャに手渡し

てお風呂場から出るのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第十九縁『危険と大浴場と家族。お風呂場とは色々裸^{はだか}にしてしま
うとても危険な場所なんだって……今更になってボクは思ったん
だ』

第二十縁。(前書き)

すみません(汗)。今回もルビ振^ふりが多いですけど……。中学生でも読める様^{よう}にと思って振^ふっているだけで、皆様をバカにしている訳じゃ無いですからね……。 (滝汗)。

第二十縁。

「月……綺麗きれいだな」

ふと目にした月明かりに誘さそわれる様にボクは、この巨大な大樹の中に作られたテラスの様な場所に出て月を眺ながめていた。

この世界にもあんなにも綺麗な月があるんだな。白くて、まん丸に丸くて、大きく美しい月。そして柔らかで優しい月明かりのカーテンが。

この月は、もしかしたらあつちの世界に居るゆきめさんも、あかねさんも、そして父さんも見てるのかな？ そうだったら、何だかいいな……。

月明かりに照らされて、何処どこかそんな事を優しい気持ちで思うボク。

そんな中、どこからとも無く一つ声が聞こえて来た。

「月、好きなんだ？」

なんて言う、そんな可愛かわいく綺麗な声が。

「あ、いや、好きとか嫌いと言えば好かもしれないかな。ただ、綺麗きれいだなんて思っただけ」

「綺麗、なの？ お兄様」

ちよこんと、隣となりの部屋のテラスの様な場所に出てきたシャロンちゃんすがたは、ボクにそう言う。

少々薄手の生地すがたに、上品にレースを所々にあしらった綺麗な寝巻きの様なワンピース姿のシャロンちゃん。長い黒髪を今は後ろで一つに結ゆっている様だ。

「シャロンちゃんは月は嫌いなの？」

ボクの問いかけに、ひょいっと軽々に手すりへと後ろ向きで跳とび座り、

「うーん……そうだなあ、好きとか嫌いとかは考えた事はないけど、夜は……あんまり好きじゃないかも」

月明かりが黒髪を照らし、どこか艶つぽく見える中、苦笑いを浮かべて返す。

「へ？」

その意味深な言葉に、つい言葉が口から零れ落ち、聞き返したボク。

小さい子が暗闇を嫌うのは昔からよくあるけれど、シャロンちゃんの『夜はあんまり好きじゃないかも』という言葉には、また違う別のものに感じたのだ。

「知ってる？ お兄様……」

問われ、ボクは今から話そうとするシャロンちゃんに耳を傾けた。

「……夜はね、命がゆつくりと沈んで行ったり、激しく荒られる時間なんだ。何も知らない人々はゆつくりと眠り、また繰り返し昇る朝日で目覚めるのを待つ瞬間でもあるけど、それ以外は正反對で、虚ろな闇に差し込む月明かりに魅入られた獣が、他人の肉で晚餐をする、鮮血の宴を開く幕の時間……なの」

と、物憂げに答えるシャロンちゃんの姿。

その姿は、何処か小さい子とは思えぬ妖艶さと、身が引き締まる様な恐ろしさを感じるボク。

「私達にとつても後者だからね、夜つて。命の獲り合い削りあいをするドス黒くて醜い時間が流れるの。きつとこんな私にもそんな血が流れてるんだけど……私つて戦向きの身体じゃないから、いつもこの時間はここで外を眺めてるんだ」

物憂げに語るシャロンちゃんはそう言つて、ふとボクをみつめる。

すると、ボクを見つめたその瞳には、うつすら涙の様に何かが月明かりに照らされて光ったのだ。

「泣いてるの？ シャロンちゃん」

泣いている様に見えたシャロンちゃんに、優しく微笑んで問いかけたボク。

酷く怖い事を言いつつも、泣いている気がしたんだ……。

「うつん、何で私が泣くの？ 泣いてなんかいないよ、お兄様。ど

うして泣いてなんか……」

そう否定する声は、何処か涙声で儚げである。

「ちよっと待っててシャロンちゃん」

「え？ 何？」

ボクはシャロンちゃんの言葉を制すと、よつと手すりに登り、

「えいつ！」

掛け声と共に隣へとジャンプして渡ったのだ。

隣との間は1mは無さそうだし、ジャンプで行けるかな？

そんな簡単な目測で実行に移したのである。

「ビツクリしたあ……」

ボクの着地を見届けて、目をまん丸にしてポツリと零すシャロンちゃん。

「ごめんごめん。でも、こうすれば一人で泣いたって寂しくも無いでしょ？ まー……ボクなんかじゃあんまり役にもたたないかも知れないけれど」

「それだけの為に……？ ここ10m以上も高さがあって落ちたら大変な事になってたんだよ……？？」

何処か呆然と言われ、ふとたった今跳び越えたその間から下へ覗き込むボク。

10m以上……。暗がりですんなに解らなかったけど、確かに落ちてたらタダじゃすまなそうかも。

軽く青ざめる思いをしつつ、

「大丈夫、大丈夫……。ほら、無事にここまで来れたしね」

笑って返した。

「あんまり無理しないでね？ アーシャお姉ちゃんじゃないんだからね？」

と、心配そうにまじまじと見るシャロンちゃんの姿。

ボクはそんなシャロンちゃんにVサインを向けて、平気だよとアピールする。

すると、さっきまで涙を浮かべていたのが嘘の様に、弾ける様に

笑い声を上げたのだ。

「良かった、やっと笑ってくれたね」

ボクはそう戻って来たシャロンちゃんの笑顔を喜び覗くと、

「あ、ちよつと待ってて」

ボクはふと見つけた頬ほほに浮かぶ雫しずあとを、ポケットから取り出したハンカチで優しく拭ぬぐってあげた。

「頬ほに夜露よじつがかかってつたい落ちちゃったみたいだね」

ちよつぱり濡ぬれたハンカチを見せてそうニツコリと微笑んで、

「どこか物憂ものげなシャロンちゃんも大人っぽくて綺麗だなんて思えたけど、やっぱり初めて会ったみたいな元気なシャロンちゃんの方が似合あってて、ボクはその方が好きだな」

軽く、その月明かりが照らす綺麗な黒髪くろかみの頭を撫なでたボク。

そしたらシャロンちゃんは、何処かむず痒かゆそうな表情を浮かべて、
「……シャお姉ちゃんが……ちよつとだ……ましい気がするな……」

聞こえるか聞こえないかの小さな声でこによくと零こぼしたのだ。
上手うまく声を拾ひろえなかったボクは、もう一回言つてと聞いて見ると、
「ヤーダ。何でもないから気にしないでお兄様」

可愛く小さい舌したを出して応こたえたシャロンちゃん。

あははは、嫌われちゃった。でも、元気が出てきたみたいで本当に良かった。

そつ心の中で安心する。

「ね、お兄様おにいさまって不思議ふしぎな人だよね」

月を見ながら、ふと唐突とうとつに言うシャロンちゃん。

一日で二人の女性に同じ事を言われるボク。しかもこの義姉妹しまいからだったり。

「ここ一日よく言われます……」

「あ、やっぱり」

苦笑いを浮かべたボクに笑顔で言う。

やっぱりなんだ、そっか……。あんまり自覚が無いんですけどね、ボクとしては。

ン？ それってけっこう重症って事だったりして……。

「お兄様、今は女性の格好してるけど、本当は男性なんだよね」

「まー……うん。シャロンちゃんのお蔭で人一倍・二倍に磨きがかかって今は女性に見えちゃうけどね」

実際、女性と勘違いされたままそっちの人に危ない目にもあったしね。

なんては、口が裂けても言えなかったりする。

「この世界中に、お兄様みたいな男性が居るなんて思ってもいなかったなあ私。ほら、男性って、生まれた時から私達女性より位が高位になったり、権力があつたりして強い立場でしょ？」

「ここだとボクよりアーシャの方が十分強い気がするけどね。今日なんて子どもみたいに意地悪されたりしたし」

シャロンちゃんの言葉に、ポツリと愚痴ちゃうボク。

そう言えば、この世界に来てから一日しか経って無いのに、色々不幸にあつたなあ……。空ちゃんに鎖付き腕輪されたりで、森ではハグレちゃったし。いきなりアーシャのお婿さんにされて、あれよあれよと女の子の格好させちゃうは、あっちの方には襲われかけるし。お城に帰るなりお世話係の皆さんに生暖かい視線の集中砲火は浴びるはで、色々あり過ぎる濃い一日だな……。

ふと、今までを振り返ると、涙がちよちよ切れそうになるボク。

「何だか、色々あつたみたいお兄様」

そんなボクを見て、流石のシャロンちゃんも苦笑いを一つ浮かべる。

「でも、アーシャお姉ちゃんがそんな風に見せるのって初めてかもしれないかなあ」

「え？ そうなの？？」

「うん、アーシャお姉ちゃんっていつも優しくて、強くて頼りがある、自慢のお姉ちゃんだから、義妹の私からしたら、すっごく新鮮な反応のお姉ちゃんて感じたよ」

嬉しそうにそう語るシャロンちゃん。

確かに今日のアーシャは、シャロンちゃんの前だと凄く『お姉ちゃん』だった気がするな。優しくて強くて守ってくれていたし。

「だから、お兄様の前では子どもみたいになって言われてビックリ。でも、もしかしたらそれもアーシャお姉ちゃんの本当の姿なのかも知れないねっ、お兄様の前だけ見せるそんなアーシャお姉ちゃんのさっ」

可愛らしいウィンクを一つして、そう告げると、

「私も……今日の月は綺麗だなんて思えるな」

ゆつくりと月を眺めて呟いたシャロンちゃん。

月明かりに照らされたその顔は、最初ここで見た時よりも可愛らしく輝いていて、凄く綺麗だと思ったボク。

「今度、皆で十五夜でもやろうか？」

「ジユウゴヤ？」

「あー……えっとボクの居た所（世界）だけに伝わる風習で、涼しくなった頃の夜が長い時期に見せる満月の夜に開く宴かな？ お月見饅頭きげんじょうという白くて丸いお菓子と、ススキっていうサラサラした綺麗な植物を飾って満月を見て楽しむんだ。少しだけお酒を飲んだりしてね楽しいんだよ」

「へ〜」

ボクの話に楽しそうに聞き入るシャロンちゃんの姿。

「満月がいつか解らないけど、今度満月になったらね」

と、ニツコリと微笑んで提案したボク。

「本当に不思議だねお兄様って！ 好きじゃない夜をこんなにも満月が楽しみな夜に変えちゃうんだものっ！ わ〜〜早く次の満月にならないかなあ〜」

「あははは。そうだね、早く満月の夜がくるといいね」

そう言って笑みを零すと、ふとあるビジョンが浮かんだボク。

赤いお猪口ししづに入れたお酒を片手に白い和服姿の空ちゃんが飲み、その横でお饅頭を持った青竹色の浴衣ゆかたを着た、髪を上げて結ったゆきめさんがお饅頭を勧めている姿と、そのすぐ横でお酒が入ったコ

ツプをピンク色の浴衣を着たあかねさんがボクへ勧め、二人で喧嘩けんかをしている姿に、そんな二人の姿にたじろいでいるボクが居て、そんな中でも静かに満月を見上げて風流を楽しんでいる父さんの姿が浮かんだ。

その瞬間、クスクスと何処か微笑が零れて来てしまうのである。

「どうしたの？ お兄様？」

「あ、ううん、何でもないこっちの事だから気にしないでシャロンちゃん」

不思議そうな顔をしてボクを覗いていたシャロンちゃんに、本当に何でもないからねと返したボク。

するとその時、ボタンツと後ろの方で扉が開いて閉まる音がしたのを耳にし、そちらを振り向いたボクは、

「……あ。ゴメンね、シャロンちゃんつ、ボクちよつと急用を思い出しちゃったので行くねっ」

と、目を点にして再び手すりを登って元居た部屋へと跳び帰ったのだ。

「何処にも居ないと思ったらこんなシャロンの部屋に……。逃げるな妖よういち一つ、妖一はアタシの専属の世話係でしょ！？ だったら寝る部屋だつて同じに決まってるでしょうがっ！」

そう吼えるアーシャにボクは逃げる様に、

「それはやっぱり、例えば女同士だったとしても勘弁かんべんしてよ〜アーシャ〜」

泣き言を言い残して急いで部屋を出て行く。

「今夜は特別に外へ出なくてもいい日なんだから、そうゆう日こそ気を遣つかいなさいってっ！」

「あははは、何だか大変だあ」

再び吼えたアーシャの声と、笑いながらそう言ったシャロンの声が、ボクの背中の方で聞こえた気がしたのだった。

「シャロン……何か言ってた？ 妖一」

ジャラ……。

少し動くと、例のあのベッドの上でボクの首の辺りから冷たい金属音が小さく鳴り響く。

それは、皮製の少し細めの輪に、そこから繋がれた軽い金属製の鎖。その鎖を何処へ行くのやらかと辿つてみれば、言わずと知れたアーシャの手の中に。

そう、余りにもボクが逃げるので、今夜は鎖付きの首輪を首に巻かれ、一緒にアーシャのベッドで寝ているのである。あの所謂お姫様ベッドという物の上で、あまりにも似つかわしくないシュチュエーションで……。

「……うん。夜が嫌いだって泣いてた」

直ぐ隣で眠るアーシャに背中を向けて横のなるボクは、シャロンちゃんの言葉を思い出しながらそう呟いた。

「そっか……夜が嫌いか」

と、タメ息混じりにアーシャは、

「それは酷だよ、シャロンにとっても。アタシ達ランシャオ族って妖一も知ってると思うけど……夜になると力が戻り、肉体の底に眠ってる先祖譲りの本来の獣の血が騒ぐんだよね……」

ゆっくりとした口調で語る。

「……………」

「まあ……シャロンは幸か不幸か戦タイプじゃないから、無理に見なくてもいいものを見ないで済むから、アタシとしては嬉しく思っているんだけどね。闇に魅入られた仲間が、狂気に深くエグく熱気でむせ返す様な血の臭いのする戦場で倒し倒される姿を見なくて済むから……」

胸に、重い何かを抱えた様に零すアーシャ。

「夜は、いつもああやって外を見てるって」

「……そっか」

ボクの言葉に何かを含みながら頷いた。

アーシャの言葉とシャロンちゃんの言葉から推測すると、夜にな

るとアーシャ達はいつも戦いとなつて誰かを倒しに行くらしい。そして、戦いに参加が出来ないシャロンちゃんは、ああやって外を眺めては、きつとアーシャ達が無事に帰つて来れる様に見てるのかも知れない。

「妖……シャロンは優しいんだ」

「うん。ボクもそう思うよ」

アーシャの言葉に素直に頷いた。お姉ちゃん思いのいい、可愛くて優しい女の子だから。

「『頑張つて』ていつもアタシ達を見送りながら、心の中じゃ『敵も味方のどちらにも傷つかなければいい』って思い願つてるくらい、あの子は優しいのよ。」

……さつき戦タイプじゃないって言ったけど、シャロンは頭がいいし、戦おうと思えば敵と直接対峙しないで十分戦えるくらいの才能はあるわ。

でも、その才能は診療薬師としての才能に使う事をあの子自身で選んでる。『傷つけるばかりが力じゃない』って思うくらい優しい子だからね」

そうシャロンちゃんの事を話すアーシャは、何処か優しくも嬉しそうに語る。

同じ様に、アーシャも本当に優しい女の子なのだ。

すると、アーシャは辛そうに、

「でも……戦なんてものは、そんな感情だけでどうにか成るもんじやないし、命を狙われるからには、その命を守る為に相手を殺めなければならぬ事の方が多いのは当然だよ……。アタシ達にだって明日を生きる権利はあるハズだから、明日を生きてゆきたいから戦わなくちゃいけない。嫌でも肉を裂き、血に塗れなくちゃ生きてゆけない。それは……戦わなくていいのなら、戦わずに済めばいいってアタシだっと思うけどね……」

と、言葉を零すのだ……。

「きつとシャロンちゃんだって、解つてると思うよ」

ふと、優しい口調で言うボクの言葉に、

「そんなの解つてる。だから……あの優しいシャロンだから『夜が嫌い』って泣いてるんじゃない。どうしようもないから泣くしかないんじゃないさ……」

ボロボロと涙声で言うアーシャ。

ボクは背中を向けるアーシャの方へ振り向いて、その長い綺麗な髪をそつと撫でる。

指通りのいい、シャンプーとアーシャの優しい香りがする綺麗な髪。

「妖……」

ゆつくりと振り向き、ボクを見るアーシャ。

その瞳は濡れていて、ふと差し込んだ月明かりがアーシャの頬を照らし、日の差す時のアーシャとはまた違っていて、何ともいえない切ないものを感じさせる。

その姿は、何処か思わず『綺麗だ』なんて口から零れ出てしまいそうなくらい。

「アタシ達は……どうして生まれたのかな？ 誰かを殺す為に？

それとも殺される為に？ ……何百年何千年もその歴史を繰り返し、それを伝える為にアタシ達は生まれて来たの？？ ねー……妖ー」

ギョツとボクへと繋がる鎖を握り締めながら、額をボクの胸へと埋めて泣くアーシャの姿が、そこにはあった。

どうしようも無く、抗える事も無く続く連鎖に、ただひたすら悲しみの涙をする女の子の姿が、ボクの胸にはあった。

普段あんなにも強く勇ましいくらいなのに、今のアーシャは、とても小さくて、ふとした事でも崩れ落ちてしまいそうなくらい、か弱い姿を見せている。

……ここにも、ボクの世界にある戦争と何も変わらない、悲しみや遣る瀬無さがあるらしい。戦争が作る傷や傷痕に苦しむ、そんな人達が存在しているのだ。

怒りの拳を振り上げるも何処へ落としていいか解らなくなる様な、

ボクは何とも言えない思いを感じ噛み締めつつも、

「そんな訳……無いじゃないか」

涙が零れ落ちそうなのを堪えながら、ギュッと、アーシャの頭を抱きしめる。

誰かを殺す為だけに存在する理由。

誰かに殺される為だけに存在する理由。

そんなくだらない理由だけで存在しているなんてあってたまるもんかつ。人はもつと自由に生きていいハズだから、ボクはそんなの絶対に認めたくは無いつ！

すると、そんな事を思っていたボクに、アーシャはゆっくり顔を上げて、

「ね、妖一。アタシ、これからもきつと醜く酷い事をすると思う。

何千人も殺したくないと思いつつも、殺すしかなくてしちゃうと思う。そしたら、血と肉と闇で汚れて、これ以上は綺麗な身体のままでは居られないけど……妖一はアタシを抱きしめてくれる……かな？ 愛していてくれる……かな？」

切なく苦しそうに、ボロボロと涙を零しながら必死に微笑を浮かべて、問いかけた。

ボクは、ズルくて最低だ。そんなアーシャの言葉に何も言えない……のだから。

でもそれは、いずれボクの世界へと帰る日が来るかも知れないからだ……。だから、そんな出来ないかも知れない約束は出来ないし、しちやいけない気がする……。のだ。

ボクは、言葉には出来ないけれども、ゆっくりとアーシャの頭を胸へと抱きしめた。それは一生懸命なアーシャに対して最低で低俗な行為かも知れないけれど……これが今のボクに出来るアーシャへの精一杯の応えである。

やがて、そのままの状態でゆっくりと時が流れ、

「ねー、妖一。この戦が終わったら、しき……」

「へ？」

ボクに呼びかけては、言葉の途中で睡魔^{すいま}に誘われ眠りに着いたアーシャの姿。

何処か安心しきった静かな寝息をボクの胸で立てるアーシャは、まるで子どもの様にも思えたボク。

夜は血が目覚めると言っていたけど、今日は色々あったし疲れてるのかもしれないな、アーシャ。

そう思いつつ、アーシャの後ろ頭を二・三回撫でて眠気に襲われるボク。同じ様にボクも色々あったから疲れてるのだ。

ボクは、アーシャとボクを照らす月明かりを眺めながら、

『どうか今夜だけは、この義姉妹^{しまい}にその穏やかな月明かりの祝福^{しふく}があります様に……』

と、ふと漆黒^{しつこく}を照らす月明かりに願い、体を眠りに預けたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十縁 『ボクと月明かりと義姉妹。どうか今夜だけは……そう

ボクは心の底から願ったんだ』

第二十一縁。

「おはよう、妖一」

睨まぎに感じる明るい光にボクは目覚めると、ぼやけた眼差しの向こうにはニツコリと優しい笑顔で迎えるアーシャの姿。

「おはよう」

ジャラリと軽く鳴る金属音を耳に、ボクの首輪からと繋がる鎖くさりを目で辿れば、ニツコリと微笑みながらもシツカリと何処へも行かぬ様にと握り締めていゝ様子。

きつとこの鎖が無かったら、凄くいい絵に見えたんだろうな……なんて思っていると、

「妖一、今日は少し付き合つて欲しい場所があるんだけどいい？」
ふと問いかけられるボク。

そんないいも、悪いも、アーシャの言葉にはきつとボクに拒否権なんて無い事は解つてゐるハズだろうにね。

「そう、ありがとう」

頷うなづくしかないボクの頷きに、嬉しそうに笑つて返すアーシャ。
うん。とりあえずこの鎖と首輪を外して欲しいかな……なんて、ボクはアーシャのベッドに座りながら思ったのだった。

人間、何事も慣れがある様に、鏡が映すボクの姿に何処か『本当は男の子だという現実』が薄れて来ているのかも知れないと思えるボク。ただ、当人のボク一人を抜いては。

「はい、これで完了だよーお兄様」

テキパキとボクのメイクやら着替えやらを済ませてくれたシャロンちゃんは、ボクと映る鏡の前で、笑みを零しながら仕事の成果を確認する。

「妖一、一日しかしてないのに、まるで昔から着ていた様にシツクリとくるね、そのメイド服姿。とても綺麗で可愛いよ」

くるぶしまである茶色いジーンズにクリーム色のＴシャツ姿のアーシャは、悪戯いたずら気味な微笑を見せながらボクへと近寄る。

「……どーせボクは中性的ですよ。そりゃメイクも完璧なら女装も似合にあいすぎてますからねー。ましてメイド姿なら、そこら辺のメイド喫茶店のスタッフさんより似合にあってますから。」

なんて心の中で少々自暴自棄みじけなさ的な事を呟つぶやいてしまうボク。

「あははは、褒ほめてるのにそんな顔をするもんじゃないよ、妖一」

鏡に映るボクの顔を見て、ふと笑いながら言うアーシャ。

「前にも言っただけれど、ボクは男の子で、そんなのは褒め言葉でも何でもないんだからね？ アーシャ……」

と、タメ息混じりに言葉を零すボク。

きつとアーシャは解とってはくれないのかも知れないし、もしかしたら解とっていつつもからかうのが面白おもしろくて同じ事を言うのかも知れないなあ……。

「綺麗なものを『綺麗』と言うぐらい、別に何も構せりふわないでしょ？」
そんな言われた方が何処どこか恥はずかしくなる様な台詞を、ニツコリと微笑みながら言うアーシャ。

「……でも、この姿で言われてもなあ。なんてポツリとボクは呟つぶやいた。」

するとアーシャは鏡の前でヘアゴムの様な物を口に銜くわえながら、その綺麗なブロンドのロングストレートを後ろ頭で一つに集ゆめて結ゆい上げる。

「ん？ どうした妖一？」

「うっん、何でもない」

正直ドキドキした。フワツと広がったアーシャの優しい香りが直ぐ隣で香り、髪かみを一つに結い上げたアーシャの姿もとても似合にあってたから。ボクを綺麗と言うアーシャの方が、何倍も綺麗に見えるのは、きつと気のせいじゃなとボクは思うんだ。

「あ、そうだ、お兄様」

ポンツと、唐突とうつに何かを思い出した様に手を打ったシャロンちゃ

んは、メイク道具やらが入った白い箱の中を探り、

「はい、お兄様に私からプレゼント」

そう言って箱から持ち出してきた赤い指輪をボクの指にはめる。

それは小さい赤い宝石の様なものがついた銀の指輪である。あんまり大きくも無い小さな石なので、赤という派手な色にも関わらず、悪目立ちは全くしない。

「綺麗な指輪だね。でもいいの？　こんな綺麗な指輪なんてボクが貰っちゃっても？」

首を軽く傾げつつボクは問いかけると、シャロンちゃんはそんなボクの言葉にクスクスと笑いながら、

「その指輪はお兄様じゃなきゃ意味が無いの」

と、意味不明な答えを返すのである。

へ？　どうゆう意味……だろう？

なんてボクが不思議がっていると、シャロンちゃんは何やら口元で呪文の様な言葉を小さな声で詠唱し始めたのだ。

やがて詠唱しきり、一つ力のある声で、

「フォーチュ・リイズ
転換具現っ！」

そう言い放ったのだ。

その瞬間、目の前がいきなり暗幕を落とされた様に真っ暗になり、ボクの目に光が戻った時には愕然とする後景が待っていた……。

「……胸が」

しばしの沈黙を破り、ポツリとボクの口から零れたのはそんな一言。

「うん、上出来でしょ？　アーシャお姉ちゃん」

「そうね。いきなり胸が大きくなって驚くし、少し控えめぐらいでちょうどいいかも知れないわ」

鏡に映るボク自身の姿に頭が真っ白になるボクを置いてけぼりにして、楽しそうに二人は会話するのである。

ボクは身に起きた事を信じられずに、恐る恐る出来立てのモノを自分で触ってみる。

……何コレ。柔らかいし、まるで本物みたいに触れた感覚と触れた感覚があるんですけど……。ちよつと待つてよ、それじゃ何？　ボクは中性的じゃなくて本物の『女の子』になつちやつた訳！？　戸惑とまどいっつもボクは、今まで付き合つてきたそこはあるハズのものへと嫌な汗で汗ばんだ手を運ばせる。

あははははは……あるハズの物が無くて『始めましてこんにちは』な変な感覚が……。

「大丈夫だよ、お兄様。それ全部は二セモノで、本物はちゃんとあるから」

「へ？　二セモノなの？　ちゃんと本物はあるの！？」

「うんうん。疑似体験ぎじたいけんに近いもので、この魔法にかかつてる時は実際の本物のモノは眠らされてて、作られた二セモノの方の感覚を感じるの」

死にそうな程に慌あわてながら、それはまるつきり女性の声で問いかけたボク言葉に、シャロンちゃんは頷きながら、

「この魔法、普段なら12時間くらいの時が来れば元に戻るから心配しないで。でも今は、指輪の力を借りて4倍まで効果をもたせるから元に戻るのは二日後かな」。あ、ちなみに指輪は元に戻るまで外れる事はないからね、お兄様」

かけた魔法と指輪について説明する。

二日もこの感覚を体感しなきゃいけないのか……。

なんてげんなりするボクにアーシャは優しい声で言うのである。

「これで妖一に万が一の事が起きても『男』と見つかる事はないし、安心ね」

と、ボクにとって悲しくも何処か嬉しい事を。

もう、何だか勝手にしてって感じだよ……ボク。

「それじゃ行つて来るね、シャロン。指輪作つてくれてありがとうね、それともしも何かあったら直ぐに呼んでねっ」

「あ、はい、どういたしまして。それじゃ楽しんできてねアーシャお姉ちゃんに、お兄様」

アーシャの言葉に微笑みと手を振って部屋から見送るシャロンちゃん
の姿。

「てか、何処に連れて行く気なのさ!?　ね、アーシャ……」

「いいからいいから」

答えにならない答えを返されつつ、ボクは何処かへと連れて行かれながら、シャロンちゃんへ手を振り返したのだった。

「ここは？」

「ここは街の西区で、通称『ババルウの大キッチン』と呼ばれてる区間。様々な地域からの食べ物や道具や武器が集まる大商業区街よ。ここなら特殊な経路を使つて海の無いババルウでも魚や貝なども手に入るし、珍しいアクセサリや服も手に入れる事も出来るわ。まー、それだけあつて他の場所より少し価格は高いけれどね」

どこまで店舗てんぽがあるのか解らないくらい店が連なり、店を持つていない人も路上の少しのスペースに布を敷しいてお店を開いていたりする。そしてそれだけでは無く、車が四台横に並んでも平気なくらいの大きな道に、何処から湧わいて来たのか解らないくらいの大勢の人で埋め尽くっさんとしている、そんな後景がボクの目の前に広がっているのだ。

『今日は新鮮しんせんなファース産の魚が獲れたよ!　どうだいそこのお姉さん?』

と、何処からかお魚屋さんの様な声が飛んだと思えば、

『安いよ安いよ、見てこの綺麗な形をしたお野菜は?　野菜嫌いな子どもにおススメの美味おいしい野菜だよ』

なんて八百屋さんらしき場所からの客呼びの声が行き交っている。それはとても一生懸命で、街の人々一人一人が輝かがやいている様に見える。ボク。

「賑にぎわつてるでしょ？」

ここに居る街の人々と同じ様な服装をしたアーシャは、ニコリと微笑みながらボクに問いかけ、

「うん。凄い人数でこっちが圧倒されそう」

いいなあこうゆうのと感動しつつも、人数に苦笑い一つ浮かべて
頷き返したボク。

するとそんなボクに、ドンツと一人の10歳くらいの小さい女の子がぶつかった。

「ご……ごめんなさい」

と、ぶつかり、ボクのメイド服を汚してしまった事に脅えながら
謝る少女の姿。ぶつかったのと同時に手に持っていた何かパラパ
ラと零れ落ち、そして自分の足で踏みつけてしまった様子である。

ふと彼女の服装を見れば、それは何度も何度も洗っては着たのだ
ろう、その子が着ているワンピースは元の色が解らないくらい薄れ、
ボクらの世界でならもう普通は捨ててしまう様な、そんなみすばら
しいワンピース姿に、泥や砂で真っ黒になったままの素足である。

「あ……クローバーが」

悲しそうに零して、自分の足を退ける少女。そこには踏み潰され
て無残な姿になってしまった四葉のクローバーが10本近く落ちて
いたのだ。

そんなクローバーの姿に悲しくて涙を零しつつも、ボクへと謝る
少女。

「洋服を汚してごめんなさい……一生懸命働いて……弁償しますか
ら……」

涙を服で拭いしつつも、次から次へと涙が零れてきて仕方ない様子
である。

え……。そんなに謝らなくてもいいのに。前を見てなかったのは
ボクも同じなのに……。

ボクはそう思いつつ彼女の視線の高さに合わせ、ニツコリと微笑
んで頭を優しく撫で、

「綺麗なクローバーね。良かったらそのクローバーを全部アタシに
売ってはくれないかな？」

そんな泣かなくてもいいよ？ と、そう言おうとしたボクより

も先にアーシャは優しく問いかけたのだ。

そのアーシャの言葉に戸惑う少女の姿。

「手持ちは少なくていくらかも出せないけれど……これで品代と詫^わび代は足りるかな？」

と、真ん中に穴の空いた銀の小さな硬貨の様な物を一枚手渡すアーシャ。それは何処かボクの世界にある50円硬貨と同じ様なものである。

「気にしない。前を見てなかった妖……アタシのメイドに非はあるんだから」

「でも……私、それに服を汚しちゃったし……」

銀の硬貨を握りながら、震える唇^{くちびる}で零す少女。

そんな彼女にボクは再び頭を優しく撫でながら、

「メイドの服は汚れてもいい様に着てるから気にしないで。それに汚れないと『この子』が仕事をしてるのに仕事をしていない様に見えて可哀想^{かわいそう}だったから、ボク……じゃなくて私の方こそ逆に助かったよ。ありがとうね」

ニツコリと微笑んでお礼を言うボク。

すると、涙を拭いた少女は笑みを取り戻して『ごめんなさい。そして、どうもありがとう』と一礼と共に言っ^ててボク達の前から去って行ったのだ。

「あんな小さい子が商売をしてるんだね」

ふと、賑わう商店を見ながら零したボク。

アクセサリーや小物、フルーツに肉や魚、そして剣や盾など沢^{たく}山の色んなものが並んでいて、商品売っている人の年齢も様々である。

「まあ……ね。ここは様々な物が集まる天下のババルウだから、あやう孤^こ児とかは生きる為^{ため}に色々売れそうなものを見つけてはここに持ってきて売ってるからね」

「え……孤児なんだ。いや、でも服装がそんな感じはしたけど……」

あの子のみすばらしいワンピースと真っ黒な素足の姿を思い出す

ボク。

「……妖一の住んでる場所では珍しいかな？ 孤児なんて」

重いタメ息まじりに問いかけるアーシャ。

うつん、珍しくは無いけれどね。様々な理由で施設などで生活しているボクと同じくらいか、またはそれよりもずっと下の子どもはいっぱい居るからね。戦後何年も経つと言うのに。

「ここじゃ少なくとも無いよ、ああゆう子なんて……。今は戦をしてるからね、戦で町や村を襲われたり戦場に出向いて戦死で親を亡くしたり、親から見捨てられたり。もっと酷いのは大金を出してでも作った子どもなのに、生まれたのが女つて事だけで捨てられるケースよ……。その場合は町や村の外に捨てられるから、運がよければ生きれるけれど、大概はモンスターとかの餌食にあって死んじゃうわ」

と、重い口調で語るアーシャ。

その表情は、とても品物を見てるとは思えない悲しい表情である。

「大金？？ お金で子どもが買えるの！？」

「そんな子どもは買える訳ないじゃない。買えるのは『子種』の方で、それも闇の市や月一回ほど行われる正規のオークションで一晚一回1万ソル以上とか高額で落として男性と夜とぐの。精紋の良し悪しや男性のルックスから階級や家柄で上限も大きくなるらしいし、品質って言っちゃうと変だけど、そうゆうのをあんまり気にしないなら闇の市でもっと安く出来るそうだけれどね」

はいっ！？

ふと問いに返された答えに思わず硬直するボク。

子種って……。そして夜とぐ？ 高額で？？ えっとー……それってもしかして。

「秘め事を大金を出して競り落とし、そしてするって事……？」

背中に変な汗が出る感じを何処か感じながら、苦笑い一つして問いかけるボクに、彼女、アーシャは何処か疲れた様な表情を浮かべて頷いたのだ。

…… あはは、馬か牛か犬か何かですか。

心の中で虚しくも悲しいツツコミを入れつつ、

「平均月収ってどれくらいあるの？」

気になった事を問いかけてみるボク。

アーシヤは少し考えて、

「そうね、階級や仕事の内容にもよるけれど、だいたい普通の階級では7万5千〜8万ソルくらいかな？」

おおよその金額をはじき出してくれる。

そうになると…… 階級とか解らないけれどボク達の世界で平均30万円と考えると、ここじゃ4分の1くらいになるんだ。それじゃ1万ソル以上というとな4万円以上？ くらいかな。

…… そっか。この世界では男性である事が特別だから、生まれた子どもが男の子だと、物凄い玉の輿こしが狙えて、尚なお且つ資金源にもなり産んだ母親にも様々な特権が貰もらえたりするんだ……。

だから生まれたのが女の子だと、育てるだけのお金があればいいけれど、それさえも無ければ育てられずに捨てるしかないし、大金払ってまで作れた子どもでも希望が持たなくて孤児になっちゃうんだ……。

ボクはそんな辛い現実を聞いて、何とも言えない悲しさに襲われる。

「さっきの子ども、きつとそんな子どもの一人よ。この先、戦が続く限りもつともつと増えてくわ」

「辛いね」

アーシヤの言葉に、胸の痛みを感じながら零す。

「辛いよ。でも、アタシ達『ランシヤ才族』は知ってる様に『生きているだけで罪深い一族』とされてるから……ね」

「へ？」

「でも、アタシはそれでもあの子達の様なのを増やしたくないし、今居るあの子達を守りたいと思う。だからアタシは戦うの、どんなにアタシの身体が血に塗まみれてでも。」

だってさ、いつか素直に笑いあえる日を迎えたいじゃない、あの子達や今居る小さな子達に同じ様な思いをさせたくないじゃない。こんな思いはアタシ達の世代でもう十分だからね」

と、太陽の様な素敵すてきな微笑みを浮かべて語りきるアーシャの姿がそこにはあった。

本当にアーシャは、強く優しい心の持ち主だとボクは思う。

ボクは今になってアーシャがここに連れて来た意味が解った気がした。

「皆、一生懸命生きてるんだね。ここの賑わいと、皆が見せる一生懸命さと輝きを見て思っただボク」

すると、ボクの言葉に微笑んで、

「そっ、皆は必死に生きてる。そして毎日色んな事があるけれど輝かさせてる。」

ね、妖一、ここに居る人々の姿は妖一が知ってる人と何ら変わらないでしょ？ アタシ達『ランシヤオ族』だって同じなんだよ」

優しい声そう言うアーシャ。

ボクは素直にその言葉に頷いたその時、

「あ、ごめんなさい」

行き交かう人で混雑する中、ふと誰かの肩が何かにぶつかったのはボクは直ぐ様に謝るが、誰にぶつかったか解らないのである。

うーん……こんな混雑してる中で誰と特定するのは流石さすがに難しいかもね。

なんて思っていたその刹那せつな、今まで立っていた場所から急に地面が消えた様な感覚に襲われ、足元を確認する間も無く地面へと吸い込まれたのだった……………。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十一縁『ボクと指輪とババルウの大キツン。何も変わらぬものがそこにはあると……ボクには思えたんだ』

第二十二縁。(前書き)

お待たせしました〜〜(汗)。すみません、ちょいと一週間ばかり遅れてしまいました……。

あの、それでもいいって方、良かったら読んでみてください(輝)！

第二十二縁。

ゴロゴロゴロゴロ……。

と、いう振動と共に、

ジャラ……。

何処か聞きなれた、金属が擦れたり揺れたりする音を耳にしたボク。

揺れの中で、時々大きく揺れる感覚に不快感を覚え、暗闇から光ある世界へと目を覚ますと、

「やっとなお目覚めの様ね」

黒のＴシャツにフード付きの赤いパーカーと、茶色のハーフパンツジーンズを着て、赤い色をした瞳にブロンドの髪を背中にかかるとの長さの三つ編みにした、細身の綺麗な女性がドスを利かせた声でボクの目覚めを迎えたのだ。どうやらその小麦色の肌の色から、アーシャ達と同じランシャオ族だという事は何となく解るボク。

「……へ、ここは一体？ 確かボクは『ババルウの大キッチン』にいて……そ、そう、いきなり地面が無くなったかの様になって……」

と、軽い頭痛が響く頭で今までの事を思い出すけれど、落ちる様な感覚に襲われてから先が全く記憶に無いのだ。

ここは何処だろ……？ それにこの揺れは……？

思い出しながら頭を軽く押さえた右手首をふと見れば、そこには黒くて丸い懐かしいものがチラリと確認できるボク。

……まさかねー。

なんて思いつつも、ヒヤリとした首元を確認すれば、そこにはしっかりと触りなれた冷たいモノが見事に居座っているのである。

あー……うん。

お帰りなさい、このひんやり感……。

何処か虚しい言葉が、ボクの胸の中でポツリと零れたのだった。「早速だけど、この状況を理解してもらえるかな？ お嬢ちゃん」

懐かしさと虚しさに浸るボクに、赤い瞳を鋭く変えて問いかける彼女。

ボクはそんな言葉に周りを見ると、ボクの周りには他に五人の同じ様に鎖付きの腕輪と首輪をされた女性や少女までもがこの場に収容されている様子。

そして時々外から聴こえてくる馬の息遣いや蹄が地面を蹴る音から、ここは馬車か何かの中といった所らしい事は想像は出来る。

どうやらこれらの様子から、ボク達を乗せたこの一行は、何処かへと連行されているらしい。

うーん……。目が覚めたら腕輪と首輪に、見知らぬ馬車か何かの中で数人と一緒に移動中、と。

これってもしかしくなくても、やっぱりアレなのかなあ。

ポリポリと右こめかみを掻きつつ、

「けっこうヤバ目ですよね……これって」

苦笑いを向けながら、問いかけた彼女に問い返す。

すると彼女は、鼻で笑いを一つして、親切にもコクリと頷いてくれるのである。

「『悪魔の誘い（デイビーコール）』と、言えば解ってもらえるかな？」

デイビーコール？ 何ソレ??

言われ、首を傾げるボク。

きつとボク以外ならこの呼び名で全てを理解するのもかも知れないけれど……いかんせんボクは元々この世界の人間じゃないので、全く理解に苦しんじゃうんですけどー……。

「あははは、驚いた。この『悪魔の誘い（デイビーコール）』と聞いても顔色一つ変えない女が居たとはね。この仕事を何年もしてて初めての体験ね、これは。普通ならこれを聞けば青ざめるか泣き顔を浮かべるかして顔色を変えるのに」

ボクの表情を見て笑い声を上げる彼女。

やー、言われても意味が解らないから理解に苦しむだけだし、恐

怖とかそうゆうのは二の次なだけだからね。

でも、何となくこの状況から『誘拐』の類たぐいかなって事は解るし…
…怖い怖いけど、何処かリアル感が感じ無いんだよね、本当の所
多分、今日一日で不思議な事が続きすぎてボク自身が少し麻痺まひし
てるのかも知れないなあ。ほら、まるでゲームかアニメや漫画の世
界に居る様なそんな感じで。触れるものとか全部リアルに感じるん
だけけど、頭の何処かでは『ゲームかアニメや漫画のリアル感』で
膜まくかなんかで覆おおっちゃってるのかも。

そんな事を考えていると、彼女は笑みから冷静な表情に戻して、
「まあいいわ。アナタがこれから起こる事も理解してるのか全く理
解して無いのかは解らないけれど、ここに居るアナタ達のこれから
の運命は変わらないから。とりあえず目的地までの中継地点で一度
身体検査するけれど、妙な気は起こさない方が身の為ためだって事は言
っておくわ。一応その魔錠マブリスはさせてるから魔法も精紋ルマも扱えない様
にはしてるけれどね」

淡々とした口調でクギを刺した。

やがて沈黙ちんもくが再びこの場に戻らされると、ふと見た少女と視線が
合う。

それは、何処かで……と考えたその瞬間、ババルウの大キッチン
にてボク達にぶつかったあのクローバー売りの少女だと気がついた
ボク。

すると向こうもボクに気がついたらしく、声には出さぬ様に微笑ほほえ
みを向ける。

そっかー……彼女もボクと同じ様に捕まっちゃったんだ。

こんな幼い子までいったいどうするつもりなんだろう？ 身代金みのしろぎん
を要求するにしてもこの子の姿から見て解る様に、親なんて居そう
にもないし、居たとしてもお金なんて取れそうも無いハズだし……。
ボクは微笑みを向けてくれた彼女に、微笑みながら小さく手を振
って返した。

と、すると身代金以外の目的の為にここへと集められて、何処か

へと運ばれてる訳か。それじゃ一体何の為なんだろう？

そう言えば、さつき何処かに着く前に途中の場所で『身体検査』するって言ってたっけ？ 体を診るって事だから……もしかしたら、自身売買とかそういうかなりヤバ目のなんじゃないかな……。

すると、背中から嫌な汗がツ……と一筋流れ落ちたのを感じたボク。この命の危機的状況と浮かぶ思案に、寝ぼけてた頭からリアルさが滲み出て来たのだろう。

そうだ、何とかしなくちゃ！

そう思えたのもつかの間、次の瞬間には、

でも、どうやって？ 元々『魔法』や『ルマ』なんて使えていないボクに、どうやってそれらが普通に使えている相手から逃げれるというのだろう……。

なんて言葉が浮かび上がってきたのだ。

……解んない。でも、きつといつかは好機はあるとは思うからその時に何とかすれば、ひよっとしたらこの状況を打開出来るかも知れない。

やがて、馬車馬のブフウツという息が聞こえたのと同時に馬車も動きを止め、

「さ、着いた。一人ずつ馬車から降りて私達の言う通りに動きな」
彼女の一声がボク達を縛ったのだった。

「次」

森の中に、ひっそりと隠れる様に作られたやや大きめテントへと一人ずつ案内されるボク達。

テントの前には、二人ほど短剣を腰に携えた見張り役の女性が立っている。あの短剣には『少しでも可笑しなマネを見せたらたたっ斬るよ？』という警告と威圧を兼ねているのだろう。

そんなテントがボクから見える限りで三箇所あり、同じ様に短剣を携えた者が立っている。ここではボク達だけでは無く、他の所かも同じ様に連れ去られたんだと思える人々が集められて居て、それ

なりに大所帯おおじょたいになっっている様子である。

「次っ」

然程さほども変わらぬペースで、一人一人が入ってはテントを出てゆくのを黙だまって見るボク。

やがて、テントの中に居る者の『次っ』という指示に、ボクもテントの中へと押し込まれた。

押し込まれ、数歩程歩いて目にするのは、抜き身の短剣ショートソードを片手に持った一人女性と、テントの奥であぐらをかきながらこちらを見据みすえて座っている、あの一緒の馬車の中に居た女性の姿。

「そのすぐ足元にある魔法陣の中に入りな、お嬢ちゃん」

ボクはそう指示され、言われるままにそれらしい二重線の円の中に五芒星ごぼうせいと何やら文字が描かれた円形の石の上へと足を運ぶ。それは直径1mはありそうな円形に、厚さが薄くも丈夫じょうぶそうな石である。「今からその魔錠マフリズを横に居る私の部下が外すけど、その魔法陣の結界かいから出たり余計なマネはしない事ね。別に何かあるならしても構かまわないけどー……こっちが妙な動きを感じたら、直ぐ様その短剣ショートソードがアナタの首をサックリと落とすから、そのつもりで行動してね」

ニツコリと微笑まれつつも怖い事を言う彼女に、苦笑いを浮かべるボク。

そのつもりで行動って言われても、この状況じゃねー……。

なんて思っていると、彼女が鳴らす『パチンッ』という指の音と共に、ボクの周りの空気が一瞬にして変わり、そして今までつけていた腕輪と首輪がいとアッサリと外されたのだ。

「それじゃ、邪魔になりそうなものは外れたし、その服脱いで裸体らたいを見せて貰おうか？」

その姿を見て、淡々と次の指示を出す彼女。

こんな身体からだなので、ボクとしてはすごく嫌です。

なんてキツパリと言えないこの状況に、しぶしぶと自分の身体なのに自分の身体じゃないものを露あにして行く。着慣きなれないブラに必死で背中に手を伸ばして外し、パンツの端はじに親指を入れて……。

「……ン。何を戸惑^{とまど}ってる……？」

その声に少々苛^{いらだ}立ちの色を滲^{しみ}ませて彼女は問いかける。

そりゃ……戸惑^{とまど}うでしょう？　だってボクはこんな声と身体をし
てるけど中身は男の子なんだよ？

男の子感覚だから上半身のことを脱ぐのは然程は抵抗は薄いけれ
ど……自分でこうなってるのを見るのは恥^はずかしいんだからね……
？　それなのに、この下も脱ぐなんて出来る訳が無いじゃないっ。

「う、上だけで……勘弁^{かんべん}してくれませんか？」

「無理に決まってるでしょ？　今まで脱いで何処にも精紋^{ルマ}が見当た
らないんだから、そのどこかにあつたらどうする？　私達にした
らその精紋^{ルマ}の種類でも多少はアナタの価値が変わるんだからねえ。
女の場合は継承^{けいしょう}確立は悪過ぎるけれど、買い手にしてみたら、ある
意味、精紋^{ルマ}事体がコレクションの一つだから、継承問題なんてどう
でもいいのよ」

……なるほど。どうやら話からしたら人身売買^{じんしんばいばい}は的中^{てきちゅう}してるとみ
える。ここはその為の大よそな値踏^{ねぶ}みをする場所って事らしい。

ボクはそう納得^{なっとく}しながら、

「残念だけど……ボクには生まれつきルマは無いよ？　知り合いに
身体を見て貰^{もら}ったけれど見当たらなかったし」

そう彼女に告げる。

知り合いにと言いつつも、実はアーシャの事だったりするんだけ
れどね。

すると、しばしの沈黙がテント内に漂^{ただよ}い、

「あはははっ！　なるほどね。どうりで馬車の中で私達の組織を聞
いても顔色一つ変え無かった訳ね。

……これはもしかしたら凄い稼^{かせ}ぎになるかも知れない。いや、そ
れよりも……」

突如^{とつじつ}彼女は笑い声をテントに響かせたと思つたら、直ぐ様何やら
考え出し、一つボクへと提案する。

「アナタ、私達の仲間にならない？」

と。

……へ？

彼女の言葉に、親指をパンツの端に差し込んだままという何処か情けなくも恥ずかしい格好のまま、その場に呆けてしまうボク。

あー……そつか。やっぱりこの彼女も何らかの誤解をしてる訳かー……このルマの無いって事自体に。

そう納得しかけるボクに、彼女は言葉を続けるのである。

「アナタの階級シンボルが何処にも無いから服装からしか判断は出来ないけれど、多分12階級中の真ん中より少し低いくらいの使用人か何かでしょ？ 最下級は元々シンボルは持てないけれど、そのなかなか良さそうな服装から最下級なんて事は無さそうだしね。もしそうだったら月に4万ソルぐらしか貰えないだろうから……私達の仲間になれば月にその倍の8万ソルは出すけれど、どうだろう？」

8万ソルと言うと……約四倍ぐらいだから日本円にして32万円くらいかな？

言われて、ふと計算してみたりするけれど、別に『仲間』なんかになる気はさらさら無いボクは、

「悪いけれど、あんな幼い子どもまで連れ去る様な連中の仲間なんて願い下げだね。それにお金に魂を売り渡すほどボクは器用に人生を歩んできた訳じゃないからお断りするよ」

目の前の彼女を睨みつけながら、吐き捨てる様に言うボク。

「あははは、流石だね。女にしては威勢がいいだけはある。けれど、コレだけは覚えておきなさい、お嬢ちゃん。威勢がいいだけじゃ、何も変える事は出来ないし、例えばアナタ一人がとんでもない力があるんだとしても、それを上手く使えなかったりしたら、たった一人で出来る事なんて思っている以上大きくは無いつて事。この世界、ずる賢くてでも、賢くなければ生き残れないって事を。きっとアナタが言う『幼い子』にだって、生まれてからずっと嫌って程に身体や頭に刻み込まれてると思うわ。」

……まあ……そんな事はどうでもいいわ。明日の『ユマゲラナル聖樹の日』の

夕方までに気が変わったなら私に言ってくれればいいわ。因みに私達^{ちな}の仲間になった暁^{あかつき}には、絶対に後悔はさせない事を約束してあげる」と、言う事は、ボクのタイムリミットは『明日の夕方まで』という事らしい。それまでにどうにかして何とか逃げ出さなければ……。そう考えながら、彼女の『服を着ていい』という言葉に脱いだメイド服を着、再び腕輪と首輪を隣に立っていた女性に装着されて外へと出たボク。

「大丈夫だった？ お姉ちゃん」

すると、そんな子どもの声に問いかけられ、その声がした方向へと振り向けば、そこにはあの一緒の馬車に乗っていたワンピースの女の子が、とても心配そうな顔を覗かせていたのだ。

「うん、平気だから。えっと……って言うかまだ名前を聞いてなかったね。君の名前は何ていうの？」

あははは……と、苦笑いを浮かべて尋ねてみると、彼女は一瞬視線を地面へと落として、

「名前、私には無いんだ。私、捨て子だったから」

ニツコリと微笑みを浮かべたのだ。

そんな彼女の言葉に、ズキンツと一瞬の痛みが胸を通り過ぎて行く。

ボクに、当たり前の様に親から貰った『妖一^{よういち}』という名前があるのに、この子にはそんな当たり前の様にある名前さえも無いんだ……。

改めて、この世界の悲しい現実を思い知らされる気がしたボク。

「……名前が無くてこれからは平気かも知れない」

へ……？ 名前が無いと不便だと思っただけ……？？

でも『これからは』ってどうゆう意味なんだろう？

「不便だと思っただけ……それってどうゆう事なの？」

ボクの問いかけに、意表を突かれた様な不思議な顔を浮かべた彼女は、次の瞬間にはフンツと可愛い^{かわい}笑みを零して、

「だって『悪魔の誘い（デイビーコール）』に呼ばれた時から私達

は人間でもなくて、変わりがいっぱいあるモノと同じだから。もし
かしたら直ぐに要らなくなるかも知れないモノに名前は必要ないと
思うし」

当たり前のように、非常識な事を日常事にちじょうじの様に説明する。

何……ソレ。

と、心の中から言葉が零れ落ちた。

「そんなのおかしいよっ、何でそんなに平然としてられるの？ 要
るとか要らないとか……」

ボクの驚おどろきに、彼女は少々困惑こんわくした表情を浮かべ、

「おかしいの？ 私にはそうゆうのよく解らないけれど……それが
私が見て来た日常だったし、もしそれが本当に『おかしい事』だっ
たとしても、最下級の階級の私達にはどうする事も出来ないから、
仕方ないかも。」

……それに、私は生まれた時から親からは『要らないモノ』だっ
たからね」

最後に苦笑いを見せて語ったのだ。

抗あらがえない運命だから？ それが当然だから仕方しかたない??

そんなのおかしいし悲しいよ……。

それが当たり前としてるのを目にしている事実が、ボクには苦しく
切なくなるのである……。

すると、ボクがそんな事を思っている中、

「さっ！ ぼやぼやしてないで目的地め的地へ向かうよっ！」

と、あのリーダー格の彼女の檄げきを飛ばす声が聞こえてきたのだ。

「さ、何かされる前に馬車に乗ろうか」

「うんっ」

差し出した手に、まだ小さい手で握り締にぎめる彼女。

小さいこの手には、幾度いくどの不幸に悲しく握り締め、いくつの苦し
い涙を拭ぬぐったのだろう？ そしてこれ以上どれだけ土や泥どろなどでこ
の小さな手が荒れれば、救われるのだろう……。

ボクは、この子の手を、心の底から言葉に出来ぬ優しい思いと共

に握り返した。

ボクと少女は、再び同じ馬車へと乗り込み、やがてパチンツと鞭むちを打たれた馬の声を耳にして、馬車は行方ゆくえも知らぬ場所へと向かい出発したのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十二縁『ボクと少女とドナドナ。そこにある抗い様にも無い非常識な現実には、ボクは……苦しく切なかったんだ』

第二十二縁。(後書き)

お疲れ様でした。

本当に遅れてしまつてすみません(汗・汗)。この時期から花粉症で身体が悲鳴を上げるんですよ……なので少し辛いので遅れてしまつたりするんですが……こんな ジャム猫 のお話でよかったら、また読んでやってくださいな(苦笑)。

第二十三縁。

人は、いつか見る光を見たいから、その暗闇の中で見つけた唯一の灯りを、勇気と力に変えているのかも知れない。きつとこれは、その灯りを点けたモノが、偶然違ってしまった。ただ……それだけなんだと、ボクは思う。

光が無いから、何時まで経っても光が見えないから、間違ってしまったんだよね？
きつと。

再び馬車がその動きを止めたのは、降ろされた場所の空が紅く澄んだ夕焼け空だった頃。

それは、ババルウほど巨大と言う訳では無いけれど、大きな街にボク達は降ろされたのだ。

「ここは一体？」

鎖付きの腕輪と首輪をつけながら、辺りを確認するボクに、一緒に乗っていたあのリーダー格の彼女は、

「ここは、祝福されし魔石の街、エナ。……まあそんな名前なんてもう随分昔に呼ばれなくなってるけれどね。今はこの呼び名で呼ばれてるかな。聞いた事は無い？ 『眠らずの街、エナ』って」

淡々とした口調で説明して、

「さ、着いてきな」

ボク達一行を街の中へと歩ませる。

足を踏み入れれば、そこは木造や石造りの家々が並び、街の中にはボク達の世界にある街灯の様なものが街を明るく照らしている。

と、言う事は、ここには『電気』の様なものがあるって事なのかな？ もしかしたら。

ふと見上げた街灯らしきものを良く見てみれば、それは電球が光っているのでは無く、幾つもの大小の石が一つにまとめられ、それ

らが自ら輝いて街を照らしている様だ。

「魔石と呼ばれる石の中には、昼間は光を吸収する特殊な石があつて、この街ではそれを使って街を照らしてる。お蔭^{かげ}で、明るいままの夜を明ける事が出来る^{でき}って訳さ」

隣を歩くリーダー核の彼女が、上を向いて歩いていたボクに説明する。

「凄いね……」

「ここは他の街とは全部が違^{だて}うからね、伊達に独立してる訳じゃない。何も出来ないババルウとは違^{だて}うから」

感嘆^{かんたん}するボクの言葉に、ふと口調を強くして零す彼女。

口調からババルウを敵視している様にも思えたボクは、何故^{なぜ}かと問いかけようとしたけれど、彼女の憾^{うら}む様な表情を見て口を噤^{つく}んだ。やがて街の奥へと進むと、一軒の大きな建物がボク達を出迎えるのである。

それは洋館の様な建物で、門構えもシツカリとしていて物静^{ものしず}かに高級感を漂^{ただよ}わせている。

一体ここは……？ まるでこの街の一番偉い人の家の様な感じがするけど……。

や、まさかそんな人が、こうゆう事を自ら^{みずか}してるなんて考えられないしね。

なんて思っていた矢先、大きな両手開きの扉の前で彼女は言う。

「ようこそ『悪魔の誘い（デイビーコール）』の館へ。ここはこの街……いや『独立国エナ』の女王の私の家。そしてアナタ達の運命の館よ」

と、声を高々にして。

あははは……。人身売買^{じんしんばいばい}を公認し、国王自らが行ってる国って事ですか……。

心の中で苦笑いを一つ浮かべ、彼女の話を聞くボク。

「ここから先入りたくない者は別にこのまま逃げても構^{かま}わない。けれど、知ってると思うけれど、このエナでは街の人間や使役^{しえき}され

ている者以外の生死やどうなろうと構わない決まりがあるから、それでもいいって者だけ逃げるといいわ。その魔力も精紋ルマも使えない様になつて身で、扱あつかえる者どこまで戦えるかは容易よういにアタ達にも想像は出来ると思っけねどね。

それと、自分達の街から助けが来ると思わない事ね。ここは元・魔石の街にて『独立国エナ』よ？ 他の所のルールが効く訳が無いし、もし争いになつてもこの街の魔石の力を持つてすれば、どんなに連合して武力があるババルウだとしても、勝てはせずとも引き分ける事ぐらいは出来るわ。戦争をしているこの中で、そこまでの戦力を削つてまでアタ達を助けに来ると思つて？」

そう言つて彼女は、色々な所から集められたボク達の表情を窺うかがい、「少しでも生きながらえたい者は館に足を踏み入れなさい。その代償しょうにアタ方の運命の羅針盤らしんばんを私達が少し弄いじらせて戴くわ。

でも、選ぶのは……アタ達自身よ」

と、その目の前の大きな扉を開けてボク達を招き入れるのだ。開かれた扉は、まるで自らが選り入る地獄の扉の様に大きく開くきつとこれは逃げるチャンス、なのかも知れないけれど……後ろを振り返つても、そこには道は存在しないのかも知れない。このここに連れて来られたボク達にとつて。

だったらまだ……。と、同じ様に思つた人々なのか？ 次々と館へと足を踏み入れる。中には諦あきらめに似た表情を浮かべる人や、もう悟さとりきつてゐるのだろうか？ 無表情で館に踏み入れる人も。

ボクは側そばに居たクローバー売りの彼女の手を握にぎつて、

「これは決して諦めじゃないからね？ まだ小さくても、希望への手段だから。一緒に行こう」

彼女と目の高さを合わせて、ボクは力強い口調で誘つと、

「うん。いいよ、お姉ちゃん」

ニツコリと微笑ほほえんで頷うなずいた彼女。

ボクはシツカリと彼女の手を握つて、力強く館の中へと足を踏み入れたのだつた。

「アナタには特別な部屋を用意させたから」

リーダー格の彼女の言葉に、ボクとクローバー売りの彼女はとある部屋の前で引き離されたのだ。

それは、各部屋に四人ずつ入れられ、ボク達の順番に来た時である。

「絶対に諦めないでっ」

パタン。

と、扉が閉まる前に彼女に言ったボクの言葉が、この広い木造の廊下^{ろうか}に響き渡る。

「行くよ」

吐き捨てるように言ったそんな言葉と共に、彼女は歩き出してボクを案内する。

案内する中、彼女はふと軽く笑い、

「この館に足を踏み入れた時点で、どんなに道の途中まで強気な女だって大概是諦めるのに『諦めないで』ねえ。本当に流石^{さすが}だわアナタって」

片手を軽く上げて、手振りをつけながら言い、

「誰も助けになんて来ないし、例え館の外に出られたとしても危険だらけだっていうのに、どうやって自分の運命^{あらが}から抗^{あらが}うって言うの？」

と、ボクへと問いかけた。

そんな事言われても……正直^{まこと}言えは困る。

でも、諦めれば道が開けるなんでも思えないし。

なら、小さくても希望を持っている方がいい気がするんだ。その方が見えなかったチャンスだって見えて来るかも知れないしね。

「ただ何もしないのと、希望を持ちつつも今は動けないのとは、全く違うと思わない？」

ボクは、問いかけた彼女へと問い返した。

でも、彼女はボクの言葉に一つ鼻で笑って、

「その時点で結果が何も無いんじゃ、一緒だわ。結果が出ないそんな気持ち次第しだいで何とかなるのなら、この世界に孤児こじは存在しないんじゃない？ 戦争なんて起きては無いんじゃない？ 間違ってるかな私は？」

嘲笑あざわらうように言う彼女の言葉に、何一つ言い返せないボク。

それは、例えば、患者かんじゃは医者いしゃに痛い所を解とけて優しく言葉かけて欲ほしくて訪おもれたのではなく、痛い所を理解して治して欲ほしくて訪おもれていると同じ事。

ボクがした事は、患者に『頑張がんばって』と言葉をかけただけで、患者に何一つ処置しちしをしてあげてないのと同じなのだ。

「知ってる？ あの子達にとっては、この暗闇くろやみを明るく灯ともす『松明たいまつ』なんて欲ほしくは無くて、この暗闇くろやみを貫つらぬく様に照らしてくれる『太陽の様な光』が欲しいって事。

アナタのした事なんて、ババルウみたいなほとんど何も変わらない戦いくさで、国民全員をまやかす様なもんよ」

そう言葉を続けられるボク。

凄く何か言い返したい気分だ。

でも、彼女の言うとおり何も出来て居ない無力さが、ボクの口から言葉を噤しむませる……。

毎晩しなくていいならしたくない戦おもむいに赴おもむくアーシャの気持ち、そして毎晩その帰りを『誰も傷つかなければいい』なんて甘いけれど、凄く優しい気持ちで待ち続けるシャロンちゃんの気持ちを踏ふみ躪にじる彼女の言葉に、ボクは何かを言いってやりたい……。

「……何が解とるって言うんだよ。あなたにババルウで戦たたかう彼女達の気持ちの何が解とるって言うだよ……」

言い返せない気持ちこころが、そんな言葉を小さく零させる。

すると、先を歩く彼女はふと立ち止まり、そして振り返って、

「知らないし、そんなの知りたくも無いわ。何も変えられないババルウの戦士せんしの戯言おれこに付き合うほど私達は暇ひまでもないし、心広くは無
いから。」

アナタが何を知ってるか解らないし、どれだけあつちに肩を持つかは知らないけれど、結果が出ない戯言なら、誰にだって口に出来るもんじゃないかな？ そんなくだらない事で世界が変えられるなら、私達はいくらでも聞いてあげる」

キツとした鋭い視線を向け、怒りの色を言葉に滲ませながらボクへと言うのである。

……あれ？

彼女の言葉を聞き、ふと思うボク。

彼女はババルウへの非難の言葉を言うけれど、でもそれを返せば、みんなババルウへの期待から来てるものなんじゃないかな？

なんて。

「だから、そんなババルウの代わりに私達が居る。その昔……孤児だけで出来た街のこのエナが世界を変えてあげるわ。ここには他には無い魔石が沢山眠っているし、他の国や街から奪った盗品で貯めたお金だってある。もっとも貯めれば、情報や、それだけじゃ無くアレだって手に出来るわ」

アレって？

ふと、語る彼女の言葉の中でアレと指す事が気になったボク。

戦で役に立ちそうなものだと、何処か推測は出来るけど……武器が何かなのかな？

「アレって……一体？」

「……」

何気なく問いかけたボクの言葉に、瞳の色を深くさせて沈黙の眼差しを向ける彼女の姿。

それは、瞳が『それ以上は訊か無い方が身の為よ？』と語っているかの様である。

ボクは彼女から漂う気配に、思わず気圧され、言葉を続けようとした口をゆつくりと塞いだその瞬間、彼女の気配が若干和らいだ気がしたのだ。

そんな気がした次には、彼女は小さく息を漏らして、

「まあいいや、教えてあげる。私達がお金を貯めてるのは、そういう情報などを仕入れて動きを探る為と、もう一つの理由の為よ」

軽いタメ息を混じりに教えだした。

「もう一つ理由……って？」

「それはアレを……この世界に存在する最大の武器『奏魔人』^{ノヴァニス}を手に入れる為に大金を稼いでるのよ」

ノヴァニスって一体……？

ダメだあ……やっぱりこの世界には難しい言葉がありすぎて、何がだか解らないや。彼女が『武器』って言うってくれるから『ああ武器なんだ』って解るけど、何も説明が無いと解らな過ぎで大変だ。なんてボクが思っていると、彼女は言葉を続け、

「それも一体だけじゃなくて、せめて二・三対は欲しいから、物凄くお金が要る。エナの魔石もあるけれど、最低でも二方向から攻められるだけの戦力として二体は必要ね。万が一なんて無いと思うけれど、そんな時の為に予備にもう一体居たら完璧よ」^{かんぺき}

一つ握りこぶしを作って語ったのだ。

武器なのに、一体・二体？

説明されて更に困惑するボク。^{こんわく}

でも、それでも解る事は一つある。

「お金に困っているからって……人を誘拐していいなんて事は無いんじゃないかな？」^{ゆうかい}

と、言う事である。

人の人生を勝手にどうこう出来る権利なんて、彼女にある訳が無いのだから。

「アナタは彼女達の姿をよく見た？」

そんな事を思っている中、淡々とした口調で唐突に問いかけられて、ボクの考えはポツンと止まる。

……え？

「彼女達は全員、何をどうされもいい最下級の娘達よ。きっと私達がその身を奪わなかったらどうなったと思う？　ろくに食事も着

る服も無い彼女達はどうなると思う??」

……何ソレ? どうゆう事……?

戸惑^{とまど}うボクを置いて、彼女は語る。

「きつと放^{はな}つておいたら、彼女達はもつと痩^やせ細^こつて死んでしまいかもね。でも、ここに来る少しでも裕福な人に身が渡れば、最低限の食事に生活は保障されるんじゃないかな?」

と。

「え……それって救^{すく}つてるって事?」

戸惑^{とまど}いながらも、問いかけたボク。

彼女の言葉からしたら、やり方はどうあれ最下級の彼女達を救っている事になるのである。

「間違^{まちが}つてもそんな事は無いと思うけれどね。私はその子達を売^うつてお金を稼^{かせ}いでるに過ぎないから。例え結果的に彼女達が最低限の生活を保障されてるとしてもね」

と、クルリと体の向きを元に戻して、

「何だかお喋^{しゃべ}りが過ぎたわ。アナタって何処か不思議^{ふしぎ}な空気を持つてるからかもね。ほら、さっさと着^きいていらっしやい」

そう言葉を残して先を歩み始めた彼女の姿。

そんな後姿に、ボクはどこか彼女なりの優しさを感じた気がしたのだった……。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十三縁『ボクと彼女とエナ。それは、道の違う同じ到着地点なんじゃないかなって……ボクにはふと思えたんだ』

第二十四縁。(前書き)

えー……毎度毎度ですけど、ふりがなが多くてすみません(汗)。別に振らなくてもいいだろうって所まで振ってますが、決して皆様をバカにしてる訳ではなくて、より多くの人が漢字にあまり抵抗を感じ無いようにと思って、いっぱい振っています。

なので、少々読んでいくには疲れるかも知れませんが……良かつたら読んで貰えるといいなあ……なんて思う ジャム猫 です(滝汗)。

第二十四縁。

パタン……。

彼女は「それじゃ考えてみて」と言葉を残して、静かに部屋の扉を閉めた。

ボクが彼女に通された部屋は、とてもアツサリとしていて、天井てんじょうの四隅よんすみに設置された光る石以外は何も変哲へんてつの無い部屋である。ポツンと置かれたベッドに壁掛けの鏡かがみと窓が一つずつというそんな部屋。それでも彼女の言う通りならば、この部屋は『他の部屋よりもさらに特別な力で魔法も精紋ルマの無効化をさせちる部屋』らしい。

うーん……。ボクの姿が元に戻っていない所を見ると、この指輪の効力が強いって事かな。

シャロンちゃんから左手の薬指にはめられた、小さな赤い宝石がついた銀の指輪のそをふと覗く。

にしても……。

「考えてみて……ねー」

ボクはベッドに腰掛けながら天を仰ぎ、ポツリと零こぼした。

『あの小さい子の精紋ルマは、まだ力は発揮はつきしてないけれど、かなりのレアな精紋でね、これから考えると重宝じゅうほうするわ。だからあの子はオークには出さないで私達が引き取るつもり。

そこでアナタにもう一度問いかけてるの』

私達の仲間にならない？

……ですか。

ボクは、ふう。と小さいタメ息を吐いて、バフツとベッドにそのまま後ろへ身体からだを埋める。

アーシャ達とはやり方が違うだけで、目指してる事は同じかあ……。

……
やってる事は許ゆるせない事なのに、どこか彼女への敵意が、あの言葉を知らなかつた最初よりは薄れてる気がするな。

抑^{よく}圧^{あつ}された世界から自由になりたいって気持ちが見えちゃったかな？ それとも『利用してるだけ』って見せても孤^こ児^じを出来るだけ救おうとしてるんだって知ったからかな……。

もし、ここからあの子を救い出せても、待ってるのは抑^{よく}圧^{あつ}されたまた同じ世界……。

ボクがしようと思ってる事は、もしかしたら本当の救いにはなら無いのかも。

……だったら。

ぐちゃぐちゃと色んな事が思い浮かぶボク。

そう言えばアーシャ達どうしてるだろう？ 連^つれ攪^{まじ}われた中にはアーシャの姿は見え無かったから、そっちは大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶだけど。

きつと、急に居なくなっちゃったから心配してるだろうなあ……。ふと窓から覗^{のぞ}けた空が、暗闇へと色を染め、街の魔石の明かりが強^{つよ}く光るのを見て、思う。

誰も憎^{にく}まなくても泣かなくて済む本当の夜は、この世界に何^{いつ}時^じ訪^まれるんだろう。

と、涙を浮かべたアーシャとシャロンちゃんの顔が頭の中で薄^{かす}つすらと霞^{かす}めながら。

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

鳴り響く、けたたましい程の警戒音。

ふと耳にした、そんな耳を貫く音にボクはいつしか眠っていた事を知らせられる。

な、なんなんだろうコレ……？

そう思いながら眠っていたベッドから身体を起こし、窓から外を眺^{なが}めるけれど、そこにはただ魔石の街灯^{がいう}が輝^{かが}くだけで、何も変わった様子は無いようである。

と、なると、何かあるとしたらこの建物の中だけって事かな。

ボクは様子を見に扉まで行き、ドアノブを回すと、

「ロックがかかてる？」

まるでロックか何かがかかっている様に、回したノブは半回転で回転を止めて扉を開ける事は出来ない。

ボクは扉の外の音だけでもと思い、扉に耳を押し当てて状況を把握しようとする。

すると聞こえてくるのは、声を荒上げる女性達の声。

『この館に侵入者よっ！ 早く探し出さなきゃっ！』

『魔石で街は何処も明るくしてるって言うのに、どうやってこの館まで来たって言うの！？』

『解らないわよそんなのっ。でもこの館に侵入するなんて無謀な事をする他人が居るなんてね』

『このキャンセラーリングが無い限り魔法もルマも使えないから見つけ次第簡単に捕まえられるわ』

『一体何の目的で……誘拐した者の奪還とでも！？ まさかね』

『魔石狙いかも知れないし、そんなの解らないけれど、急いで探すわよっ！』

『一階の見張りがやられてるわっ！ 皆、魔法もルマも使えないからと言って気を抜かないでっ！！』

うっん……。

話からすると、この警報は外部からの侵入者を許した為に鳴り響いてるらしい。

しかもかなり腕が立つ人物らしく、魔法もルマも使えないらしい館だというのに、使える相手と対峙して尚勝利してしまうぐらい。

ボクはその瞬間、ふとある人物の顔が浮かぶ。

ブロンドのロングストレートを軽く揺らめかせては、魔法という不思議な力を駆使する相手を短刀片手になんとも無いように軽々と薙ぎ倒す美女の姿。

まさかね……。

なんて思った次の瞬間、

「また何か新しい遊びかのう？ 妖一殿？」

聞き覚えがある声と共に、突然小さな正方形に抜けた天井から

ひよっこりと顔を出して問いかける、あどけなさはまだ残る可愛らしい少女の姿がそこにはあった。

綺麗な紅いロングストレートの髪を少々ホコリなどで汚しながら、につこりと不敵な笑顔。天井から顔を出しているせいで、その長い綺麗な髪はそのまま逆さに垂れ下がっている。

それはまるで、幽霊か妖怪がこちらを脅さんばかりに覗く様である……。

「……空ちゃん!?」

ボクの色んな意味での驚愕の声に、猫の様にクルリと回転して見事に着地をした空ちゃんは、

「プリティー不思議少女 空ちゃん、ただ今参上よつ、じゃ」

いつ日かの胸の前を腕を滑らす手振のキメポーズを披露する。

そんな空ちゃんの姿は、どこから見つけ出して手に入れたのか、胸にはエメラルドグリーンに光る小さな球体の宝石が真ん中に付いた大きな淡い水色リボン、肩には天使の翼の様に装飾された肩アーマーに、同じ様な翼の装飾をされた水色と白のミニスカートと白いハイカットのブーツ、ブーツのカカトにも翼の装飾が施されているという、どこぞかのアニメにありそうなセーラー服ちつくな魔法少女衣装を身に纏っているのである。

につこりとするその顔には、百点満点! と、自ら言わんばかりの表情を浮かべている。

あー……なんだろうねこの衣装って……あははは……。

天井から突然現れる空ちゃんは、別の意味で確かに不思議少女かもなんて思うボク。

何処かしら、会えた嬉しさと、から笑いを浮かべそうな疲労感を感じるボク。素直に会えた事に喜べないのは何故だろう。

「そんなにそうゆう腕輪とか好きなら、その天使の飾りを元に戻してもいいけどのう? それに中性的とは思っておったけど、そっちの女性の身体の方が良かったとは思わなかったの」

何処か感心する様な口調で言っていると、直ぐ様クスクスと意地悪そう

に笑う空ちゃん。

「いや、別に好きとか嫌いとか、そうゆうのじゃないからっ！　コレっ！」

ビシッ！　と、手を芸人さんバリに出してツッコむボク。

ツッコむ所はシツカリとしておかないかね……。あとで天才超科学者の空ちゃんに何をされるか解ったもんじゃないし。

きつとボクがあそこ否定しないで頷いていたら、二つ返事で面白がりながら身体を変えられちゃうだろうから……。

「元気そうで何よりじゃ、妖一殿」

ゆつくりとボクの側に寄りながら、今度は可愛らしい笑顔で零す空ちゃん。

「元気そうで何よりって、空ちゃんはこんな所で何をしてるの！？　てか、何でボクの居場所が解った訳？　いや、それより今の今まで一体何をしてたのさー……」

「まあまあ、妖一殿、まずは落ち着いてからじゃよ」

のん気な口調でボクを宥めて、ひょいっとボクの隣に飛び座る。

「に、しても少々騒がしいのう。うん、ちょっと静かにするぞ妖一殿」

「へ？」

ふと不満を漏らしたかと思えば、次の瞬間には、パチンツと二つ指を鳴らすのと共に、このけたたましく鳴り響く警戒音を静めさせる空ちゃん。

まるで一瞬にて、周りの景色はそのままに防音設備が万端な部屋に移り変わったかの様に、ほとんど音が聞こえないのである。

「うん、これでよし」

頷き言った空ちゃんの言葉が、一際綺麗に聞こえる。

「これも、魔法か何か……なの？」

そんなボクの問いかけに、一瞬目を点にしてボクを見て、

「そんな訳なからう、妖一殿。そもそもその『魔法』事体扱えぬワシがどうやって扱うというのじゃよお」

パツと大きく笑みに変えた空ちゃん。

まー、確かにそりやそうでした。

言われて思うけれど、ふと何処か『空ちゃんなら』なんて思えてしまふボクも、居る事には居たりして。

「ちよつと空間を新しく作り出して、外部の音を遮断^{しやだん}しただけじゃ」
はっはっはっは。と、ボクの理解を超えた事をさらりとやってのける空ちゃん。またお得意の『超科学』なのだらうけれど、やつぱり流石^{さすが}は空ちゃんと言った所だ……。

「まー、あくまでも『簡易^{かんい}』だから直ぐにこの空間も元に戻ってしまふからの、その前に説明しなくてはならぬから、ちよいちよいとつまんで話すぞ？ 妖一殿」

いいかの？ なんて問われて、簡易でも凄^{すご}すぎるから空ちゃんと思いつつ、二つ返事で返したボク。

「えつと、まずは『こんな所で何をしてるか？』と言うとな、ちよいとこの館に用事が出来て、ここに來たのじゃよ」

「用事？」

おうむ返しに問い返したボク。

「うむ。ちよつとした研究に使う為、ここにあるという不思議な石を求めてのう」

不思議な石？ そう言えば確かここって。

そう言われ思い浮かんだのは、この街にしかないという『魔石^{まごし}』という代物だ。

いや、でもどうやって空ちゃんはこここの事を知ったのだろう？

そんな疑問^{ぎもん}に囚^{とら}われつつも、話を進める空ちゃんの言葉に耳^{かたむ}を傾ける。

「しかし探してみたものの、さっぱり何処にあるかも、どんな形をしているかも解らなくてのう……。ただ単に『不思議な力を秘めた光る石』としか情報が無くて難儀^{なんぎ}しておった所、偶然^{ぐうぜん}に妖一殿と逢^あった訳じゃよ。

しかし、妖一殿も何やらあつた様じゃの？ はぐれてから逢つて

みたら女性の身体に成ってる様じゃし、メイドのコスプレはしとるし」

「こ、コスプレ……」

ガックシと、空ちゃんの言葉に首をうな垂れさせたボク。

ははは…… やっぱりそうだね、ボク達の知ってる世界からすれば、普通の中学生のボクがこんな格好をするって、そりゃコスプレしてるしか思えないよねえ……。

改めて指摘されると、やっぱりショックだあ。しかも胸まであるから、言い訳で出来ないしさ……。

「まあ、妖一殿の新しい趣味はさて置き」

「新しい趣味でも何でもありませんから」

と、力なく一応までも否定するボク。

何だか悲しくて否定する言葉にも力が入らないし。ははは。

「何があつたのかの？ 妖一殿」

今度は真面目な眼差しを向けて、問いかけてくれた空ちゃん。

ボクは今までの経緯を、全く自分はそうゆう趣味が無い『白』なんだよ？ という事を力強く含めて説明する。

すると、一つ、ふむ。と、頷いて、

「妖一殿もこの世界に来てから色々あった様じゃの。ワシもワシで色々あって、その途中じゃしのう。うーん…… それじゃ、ひとまず、こつちのここでの用事が終り次第ここから妖一殿を助けるって事でどうじゃろう？」

そう提案する。

その提案にボクは少々考えて、空ちゃんに、

「でもね、ボクがここから逃げ出したとしても、問題が片付く訳じゃないんだよね…… 空ちゃん」

そんな言葉を零す。

ボクがここから逃げ出せても、残ってる問題が解決する訳じゃないし、それにあの子はどうなるのだろうか……。

「このままじゃいけない気がするんだよね、何がどうって上手く言

えないけれどさ、そんな気がするんだ」

ボクがそう言うと、空ちゃんは少々困ったような表情を浮かべ、
「でも、オークとか言うもので売られる心配も、そのいきなり出来た婚約も放棄出来るじゃろ？ アーシャじゃったか、その女性は探すかも知れんけれど」

正論を告げる。

確かに、空ちゃんと一緒に行けば、今のボクにある問題は全部投げ出せる。

「でもね、空ちゃん。ボクさ、女の子が苦しくて悲しくて辛くて涙を流す姿を見ちゃったんだ。誰も傷つかなければいいって願う女の子に、傷をつけたくなくてもそうしなきゃいけないって、自分の身体や手が汚れていくのも知りつつ、他の人の涙を見たくないから、自分の涙を拭^{ぬぐ}って頑張^{がんば}る女の子の涙をさ……」

月明かりに照らされたアーシャとシャロンちゃんの姿を、ふと思出したボク。

泣かせたくないよ。あんなに優しいんだから。

それに、あのクローバーの少女だって。

ふう……。なんて一つタメ息を吐いた空ちゃんは、真剣な面持^{おもて}ちで、

「ふーん。で、妖一殿は英雄^{えいゆう}でも何かになったつもりか？ 自分がどうにかすれば、その子達は救えるとしても？」

と、問いかけた。

「や……。そこまでは」

そんな真っ直ぐな言葉に、ボクは上手く言い返せずに口ごもってしまう……。

「じゃ何かのお？ ここに居たら何か浮かぶとでも？ 何かを変えていけるとでもかの？」

「それは解らないけれど、でも」

何とか口を開けて言葉を続けようとするけれど、

「何にも変える事は出来んよ妖一殿。妖一殿の一人が出来る力なん

て小さいもので、世界を変えるとかなんて無理じゃ。元の世界に戻れる手段さえもまだ解らない妖一殿に、一体何が出来るというのかのう」

ボクの言葉を遮る様に空ちゃんに続け言われて、ボクは沈む。

確かに空ちゃんの言う通りに、ボクは帰る手段の何も解っていないし、ボク一人が出来る事なんて……。

「でも、何とかしたいって思っちゃダメかな？　してあげたいって思っちゃ変かな？　目の前に居る子だけでも救えたらなんて……力も無いのに思っちゃダメかなあ……空ちゃん」

自分で言っていて、その無力さに悔しくて涙が零れてくる。

自分自身が無力なのが悲しいな。せめて、ボクに何かしらの魔法やルマがあれば、少しは力にはなれたかも知れないのに。

悔しさと悲しさに拳をギュツと強く握るボク。

すると、そんなボクに空ちゃんは突然につこりと微笑み、

「でも、そんな優しい妖一殿もワシは好きじゃの。考えなしだけれど、そうゆう誰かを思い遣る気持ちって人間にとって大切じゃからのう。

ま、ワシもまだまだ甘いから、そうゆう気持ちは凄く解るぞ、妖一殿」

さっきとは一変したのだ。

「へ……？　だってさっき……」

「ン？　さっきのはただの一般論じゃ。一般論は一般論で、精神論は精神論で別物じゃよ妖一殿。まー、その精神論を伴えるだけの力があつた方が更にいいけどのう。力の足らないその分、ワシが力を貸してあげるから頑張れる所まで頑張ってみてはどうじゃろうのお、妖一殿？」

そんな空ちゃんの優しい言葉に、何処か力が湧いてくる気がしたボク。

うんっ。何処まで出来るか解らないけれど、やってみようっ。

ギュツと、さっきとは違った気持ちで力強く拳を一つ握り締め

た。

「とりあえず、もう空間維持くうかんいじの時間がなくなつて来た様じゃから、お互い出来る事を頑張ると言う事で、今日の所は解散とするかの。それじゃ妖一殿」

ひょいっとベッドから降りた空ちゃんは、開いた天井の板を手に持つて穴を見上げる。

「ね、空ちゃん。ボクには……どれだけ目の前で泣く人達に手を差し伸べて上げられるのかな？ どれだけの涙を拭つてあげられるのかな……？」

頭の中で、再び二人の涙が過ぎるボクは、戻ろうとしていた空ちゃんに何気なく問いかけてみた。

すると、ふふっと一つ笑つて空ちゃんは、

「そうだのお……。妖一殿なら、もしかしたら『差し伸べたい・拭つてあげたい』と思つたその数だけ』の手を差し伸べて、その涙を拭つてあげられるかも知れんのう」

そうニツコリと微笑んで言葉を残して跳とび上がったのだ。

そして空ちゃんの気配けはいが無くなるのと共に、けたたましいあの警戒音が部屋に戻つて来た。

どうやら言葉通りに直ぐに部屋は戻つたらしい。

やがて鳴り響いた警戒音は、元の無音へと静まり返る。

ボクはベッドに再び横になりながら、心が熱く燃えるようなものを感じるのである。

もしかしたら空ちゃんの言葉のお蔭かげかも知れない。

もしかしたらそれがまやかしても、何処か希望が湧いてきた気がするからかも知れない。

『思ひは、例え小さくても力に変わるんだ』
そんな熱さを胸に秘めながら、ゆつくりと瞼まぶたを閉じたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十四縁『ボクと涙と不思議少女。もし本当に思う数だけ拭えるのなら……ボクは目の前で零れる涙は、全部拭ってあげられたらなと思ったんだ』

第二十五縁。(前書き)

お待たせしました!! 第二十五縁の更新です!!

またこれも、今までの様に数多くの漢字にフリガナを振ってますので、もしかしたら読みづらいかも知れません(汗)。そして、作中には振らなくてもいいだろうと思われる漢字までにフリガナを振ってますが、これは皆様をバカにしてる訳では無く、漢字に対する抵抗感が少しでも無くなる様にと思っ振ってあるだけです、ご了承ください(汗)。

それでは、久々の更新となる第二十五縁をお楽しみください!!

第二十五縁。

ガランコロン ガランコロン。

何処とも無く、少々重い鐘の音が鳴り響いてくるのを耳にしたボク。

それは街の外から聞こえてくる様だ。

起床時刻の鐘の音？ かな??

眠い瞼を擦りながら窓から外を眺めれば、朝日の光が眩しく差し込み、もう夜は明けている事を告げている。

「眠れたかな？」

そんな女性の声が突然聞こえ、ボクは驚きつつもその声の方へと振り向くと、そこにはあのリーダー格の彼女の姿があった。

「この鐘の音色が聞こえた様に、今日が『ユマグラナルの日』で、連れて来た娘が売られる日よ。と、言ってもまだ夕方まで時間はあるわ。

それで、あれから気は変わった？」

腕を組みながら、部屋の扉に背をもたれさせて問いかける彼女。

彼女の言葉からすると、この鐘の音は『ユマグラナルの日』を告げるものらしく、そして彼女がただにソレだけを告げに来ただけでは無いらしい。

「その顔からすると、いい答えはまだ貰えそうも無いわね。

OK。時間ならまだあるからよく考えておいて」

そう言い残して彼女が部屋を出て行く、その瞬間だった。それが起きたのは……。

ズンッ!!

この建物を揺らし、体に伝わる大きく重い振動。そしてその刹那に轟音と爆発が起きたのだ。

「えっ!? まさか無闇に殺生をしてはいけないこの日に攻撃を受けたとでもっ!?」

思わず驚愕の声を漏らした彼女は、ボクが居る部屋の窓から外を

覗^{のぞ}き、一つ舌打ちを響かせて部屋を出て行くのだった。

え……。一体何が起こったの？

煙^{けむり}がモクモクと昇る窓の外を覗き見ながら、ふと思うボク。

今は何時^{わか}だか解らないけれど……日差しの感覚からきつと10時は回^わってないのかも？

そんな早い時間帯から、どうやら何者かに奇襲^{きしゅう}を受けたらしい事は何となく解るけれど、でもどうやって奇襲なんてかけられたんだろ？ 眠らない街^{まち}って言うだけあって、夜の間は魔石による街灯が街を明るく照らしてたし、窓から覗いてみただけでも、この館の外には結構な見張り^{みはり}の人も居たはずなのに……。

そこまで考えて、ふと浮かぶは『プリーティー不思議少女 空^{くう}ちゃん』の存在。

あ……。――

昨日^{けふ}の易々^{やすやす}とここへ侵入^{しゅとく}した事を考えると、何も見^み当たらない所からの奇襲なんてありえない話でもないかな。

なんて、何処^{なうとく}か納得^{なつとく}がいつてしまう。

それに『何かを探^{たづ}してる』って空ちゃんが言^いってたしね。

と、そこまで思^{おも}いつつもポツリと何かが引^ひつかかるボク。

あれ？ 警報^{けいほう}は鳴^なったものの、昨日は破壊^{はかい}も無く侵入出来たのに、何で今日は破壊なんてしなくちゃいけないんだろ？ 昨日と同じ経路^{けいろ}を通れば破壊なんてする必要もないハズ。そんなの、まるでここに居るよって来^きてるよって自ら知^しらせる様なものだし……。

そもそも空ちゃんにか^{ひみつ}つたら、容易^{ようい}に巨大な出入口口を秘密裏に建造できそうだしね――……。

そうなると、侵入^{しゅとく}する為^{ため}以外の何か目的があ^あって爆発をさせたとしか思えないかも。例えば映画とか漫画にある様な『とある所への道案内をさせる為』とかね。昨日侵入^{しゅとく}させている事から嚴重^{じふじふ}に警備はしてるだろ^{だいじ}うから、何かあれば大事なものを守りに行くだろうし、そうゆう風に使うかも知れないからね。

なんて考えていると、突然^{とつぜん}部屋の扉のロックが外れる様な音を耳

にしたボク。

そして、グルリ……とドアノブが回る。

さっきの彼女？ それとも空ちゃん？？

やがて、ガチャリと開いたそこに現れたのは……。

「大丈夫ですか？ お兄様」

と、知っている声と共に現れた、黒のロングストレートを二つに結った少女の姿が一つ。

「シャロンちゃん！？」

意外すぎる人物の登場に、驚愕するボク。

しかも、シャロンちゃんの姿は、あのまま白のワンピースに透かし編みのカーディガンという姿にも関わらず、その服装には少々の汚れはあるものの大した汚れは無いのだ。

「ど、どうしたの……？ というか何でこんな所にシャロンちゃん……」

「あはは、なんだか凄い顔。私、お兄様を助けに来たんですよ？」
クスクスと可愛い笑みを零すシャロンちゃん。

そんなシャロンちゃんに思わず問いかけてしまうボク。

「え？？ それじゃさっきの爆発ってシャロンちゃんが？」

と、目が点になりそんな気分で。

すると、ボクの問いに、一つニッコリ微笑み返して、

「うん、私だよ。」

あ、でも厳密に言うとお爆発なんてしてなかったりするんだけどね」

「え、だって煙だって上がってるし、それにあの振動と爆音……」

そう窓の外を指差すと、シャロンちゃんは、ああゝなんて言うって顔して、

「それは、風の魔法で一瞬だけ建物を揺らして爆発の音を建物にだけ響かせてから、建物の全部の窓に視界結界魔法をかけて煙と爆発を見せてるだけだよ。だから外からは何も壊れてもいないし、音が聞こえない外の人は平然としてるしね」

右の人差し指一つ立ててボクに説明する。

え？ でもここつて魔法もルマも無効にしちゃうんじゃない……。

説明を聞いて、ふと浮かぶとある疑問。

けれどボクの表情からシャロンちゃんは言いたい事を読み取ったらしく、

「そうみたいだね。中に入って幾つものそれらしい魔石を見つけ
たから。」

でも、それつて中は無効化しちゃうかも知れないけど『建物の表面』には効果は無いみたい。だから視界結界魔法を窓の外側表面にかけたんだあ」

なんて嬉しそうに満面の笑みで話すのである。

「でも魔法は中で無効化しちゃうなら、その風の魔法とかで音を伝えるのは無理なんじゃない？？ それにあんな大きな爆発音なら外に居る人にだつて聞こえちゃうだろうし……」

「聞こえないよ。だつて『音は外に出して無い』から」

「……………」

そんな言葉を遮つて答えたシャロンちゃんの説明に、思わず困惑するボク。

出さずに音を聞かせる？ あんな大きい爆発音を？？

いや……確かに音は聞いたんだけど……。

「うーん。それじゃお兄様、音つてなんだと思う？」

困惑するボクに、ニコヤカに一つ問題を出すシャロンちゃん。

音つて何つて……言われても『音は音』だし、それ以上も以外でも……。

なんて考えて、昔テレビでやっていた事をふと思い出した。

あ、そういえば確か新しいヘッドホンだかイヤホンの説明で……。
「流石お兄様、解つたみたい。」

うん、答えはその通り『振動』だよ。音つて耳で振動を受けて聞き取つてるからねっ。

だから簡単に言えばね、建物に魔法で作った『爆発の音の振動』

を与えてるだけだから、魔法が中に届かなくても振動が中の人の体の一部に届けば聞こえるんだよ。」

サラリと、難しい事を言つてのけるシャロンちゃん……。

この歳でそんな事まで解つてるなんて凄いなと思うボク。

そう言えば前にアーシャがこんな事を言つてたっけ。

『戦タイプじゃないって言ったけど、シャロンは頭がいいし、戦おうと思えば敵と直接対峙しないで十分戦えるくらいの才能はあるわでも、その才能は診療薬師としての才能に使う事をあの子自身で選んで。』傷つけるばかりが力じゃない』って思うくらい優しい子だからね』

なんて。

ボクはシャロンちゃんの凄さを目の当たりにして、ふとアーシャの言葉を思い出したのだ。

「さっ、お兄様。皆が視界結界魔法の方へ気をとられてる内にここから出ようよ。近くに行けば直ぐに偽物^{にせもの}で解つて『畏^{おそ}』だつて気がつかれちゃうし、アーシャお姉ちゃんと一緒に来てる訳^{わけ}じゃないから敵と鉢^{はち}合わせになると大変だもん。それに……出来るだけ傷つけあう事なんてしたくないし、戦闘をしなくて済むならそれが一番いいからね」

少し辛そうに苦笑いを浮かべて手を差し伸べるシャロンちゃん。でも、ボクは差し伸べられたその手に、ふと戸惑^{とまど}ってしまう。

このままシャロンちゃんと一緒に逃げていいのかな……。それつてやつぱり、昨日空ちゃんに言つた通り……。

すると、ボクが表情を濁^{にご}したのを見てシャロンちゃんは、

「お兄様、今しなきゃいけない事・出来る事をしないで後で何かが出来る事って無いと思うよ？ きつと優しいお兄様だから、背負^{せお}わなくていい問題とかを抱えて、それが重くて動けないんじゃないかなって思っただけだね。」

アーシャお姉ちゃんみたいには成^なれないこんな私だけど、それを少しでも一緒に持つてあげるから一緒に行こうよ。今ここでお

兄様が動けなくなっちゃうと、その問題だって解決出来るモノでも出来なくなっちゃうからね」

優しい微笑やさと共に、ボクを外へと誘いざなうシャロンちゃん。

そっか……。

小さい子でも解ってる事を、ボクは解ってる様で解ってなかったんだなあ。ここから逃げる事が問題から逃げてるなんて思えてたけど、本当はここから逃げる事は、落ち着いて物事を考える為でもあるって前向きな事なんだって。

うん、そしたらあのクローバーの子を本当の意味で助けられる方法だって浮かぶかも知れない。

ボクは胸の中で渦うず巻いていたモヤモヤが取れた様な気がして、シャロンちゃんが差し伸べた手を握にぎりに行く。

……すると、シャロンちゃんの後ろに人影が現れたと思った次の瞬間、

「きゃっ」

ドカツという音を響かせて床に倒れこむシャロンちゃん。

「大丈夫だいじょうぶっ！？」

「子どもの悪戯いたづらの様なマネをしてくれてなんて思ったら、本当に子どもがやってたなんて思いもしなかったわねえ」

倒れこんだシャロンちゃんの姿を睨にらみながら、突然戻ってきたあのリーダー格の彼女は嘲あざわらう様な口調くちやうで言う。

「どうやってここまで来れたかなんて解らないけれど、よくここまで来たねお嬢ちゃん。ご褒美ほうびにオークに出す娘こと一緒に出品してあげるわ。まー、まずは品定めしなためしてからだけだね」

そう薄笑いを浮かべながらゆっくりと近寄る彼女に、

「この子は関係無いだろっ」

ボクはシャロンちゃんを庇かばう様に前に出て睨にらみを利きかせる。

まずい……シャロンちゃんがババルウの王女だってバレたら、敵対してる彼女の事だから何をするか解らない……。もしかしたら何かしらの戦争の道具にさせられちゃうかも知れないし……。

「そう……。それじゃこの子を魔錠マフリズをしたまま街の外に放り投げて
もいいけれど？ そしたらどうなると……思う？」

意味深な笑いを含みながら淡々と語る彼女。

そんなの答えなんて訊かなくても、ボクにでも容易に想像は出来る。魔法もルマも使えないシャロンちゃんはただの子どもでしかなくて、きつと……。

「……やめろ。望み通りにボクはするから、この子は街から出してあげて」

ボクは覚悟をしてゆつくりとした口調で彼女に告げた。

今、目の前のシャロンちゃんさえ救えなくて、一体ボクに何が救えるの！？

その時だった、二回目の爆発音と振動で館が揺れたのは。

「また悪ふざけ？ もうその手は食わないし、今更何の効果がある
っていうの？」

厭あきた様な素振りそぶでシャロンちゃんに言う彼女。

けれど、言われたシャロンちゃんはその言葉に驚きつつ、

「わ、私じゃないよ、これは」

腰こしに手をやりながら決め付けていた彼女に返したのだ。

「ここからじゃ魔法も使えないし、今更目の前で偽物の爆破なんて
したって意味が無いもん……」

確かにその通りである。それにシャロンちゃんの性格からして、
誰かを巻き込む様な爆破を意図いとう的にするなんて思えないし。

すると、下の階の方からこんな女性の声が聞こえて来たボク達。

「嘘うそでしょう！？ 今の衝撃で壁かべにあった結界層けっかいそうまで爆破されてる
なんてっ！」

と。

聞こえて来たそんな言葉に、思わずシャロンちゃんの顔を驚愕の
表情で見る彼女。

「何をしたの……？」

「だから、私は何もして無いよ」

「くっ……。今入った侵入者を捕らえなさいっ！ 侵入者はこの街で暗躍しつつ壁の結界層を破壊出来るくらい上手らしいから、この館の中だとはいえ十分に気をつけてっ！ それと万が一があるからあの娘とアレをシツカリ守りなさいっ！！」

嘘を吐いていない様子のシャロンちゃんから、キリツと後ろへと向き直って檄と共に指示を送る彼女。

そして彼女が視線をこちらからずらしたその微かな一瞬に、ボク達は……。

「お兄様っ、行きますっ！ シツカリと手を握ってっ！！」
シャロンちゃんの力強い言葉と共に、一緒に窓から飛び降りたのだ！

ちよっとシャロンちゃんっ！？ 勢いで一緒に飛び降りちゃったけど、ここって地上から7階もあるんだよ！！

凄い勢いで空気が上昇する様な感覚を全身で感じながら、半ば泣きそうになるボク。もちろん空気が上昇してる訳ではなくて、ボク達が下降して空気を切っているだけである。

ボクの手を掴みながら、何やらを口元で唱えている様なシャロン

ちゃんは苦笑いを浮かべ、

「浮遊空域結界っ！」

魔法を解き放ったのだ。

バフウッ！！

地上にぶつかるすれすれで、ボク達二人の体はフワッと柔らかくワンクッションをして、淡い青色の球体に包まれながら浮かび上がる。

それは後数ミリで鼻先が地面にめり込む、そんなギリギリまで一度は下がったのである。

「よかったあ……『間に合わなかったらごめんね』って言ったけど間に合っつて」

安堵のタメ息を吐いて、あはは……と喝いた笑いを浮かべるシャロンちゃん。

「あはははは………」

その言葉と笑いに、釣られる様にボクも一つ渴いた笑いを浮かべた。

正直、死ぬかと思いました。

耳の鼓膜が痛くなりそうなくらい激しい鼓動が、ボクのそれを物語っているのだ。

「とりあえず、この街を抜けるね、お兄様っ」

「う、うん……」

グイツと体が上昇し、徐々に飛行スピードが上がるボク達。しかしそれは、目に映る感覚からいつて時速45キロ程度くらいで、それほど速い感じはしない。

なのに、飛んでいるシャロンちゃんは凄く辛そうに額に汗を浮かべているのだ。

「大丈夫？ シャロンちゃん」

「う、うん、大丈夫。少し辛いけれど、追っ手が来るかも知れないから少しでも出来るだけ遠くへ行かなきゃいけないしね」

ボクの問いかけに苦しそうにしながらも、ニツコリと笑顔を見せるシャロンちゃん。

少し？ いや、凄く苦しいんだろうな。

それは、ボクの手を握る手が汗ばんでくる事からも感じれる。

「降ろしてシャロンちゃん。そんな無理しないでいいから……走って街を出よう、ね？」

「無理だよお兄様……。さっきの爆発で街の人は異変に気がついてるし、とてもじゃないけど走って逃げるなんて不可能だよ。それにこの風の結界を解いたら、この結界壁が無くなって魔法の狙い撃ちされちゃうし……」

なるほど、この淡い青色の球体は身を守る為の盾にもなってるんだ。

それじゃ、

「この結界を張りながら走ったらどうか？ ボクを持ちながら浮

かぶより少しは楽になるかも知れないし」

なんて提案ていあんしてみるボク。

けれど、その言葉に首を横に振って、

「この魔法は風の結界を纏まとって空中を飛ぶ魔法だから、結界を纏うと浮かび上がっちゃうし、浮かばない様にして走る方が魔法のコントロールが難しいよお……」

そう返されたのだ。

どうしよう？ このままじゃシャロンちゃんの身が危なそうだし

……。

ふと考えながら、何気なく後ろを見れば、一つ、遠くの方で何やら輝かがやくのを見つけたボク。

「あれ？ 今何かが光った様な気がしたんだけど？」

「え？ 何？ お兄様」

と、言葉が零れた瞬間、目の前で何かが結界の外で大きく赤黄色の光を散ちらして、グンッ！ と、やや大きくボク達を揺らしたっ！
レギア・フレア・アロー
「瞬遠撃烈火炎矢！？」

「え？？」

「普通、数十本の燃え盛る炎の矢を飛ばす『烈火炎矢』フレア・アローの力を一つにまとめた、超長距離用の炎の矢の魔法ですっ！ 炎の矢の標的ひょうてきまでの距離によって威力いりよくが下がる特性を無くし、更にスピードまで上げた火炎中級魔法の一つですよお！」

そう説明すると、シャロンちゃんは顔色を曇くもらせて、

「一撃ずつなら何とか続けて二回まで防ぎ切れるけど……いつぺんに三本も四本もくらうと、流石さすがに魔力が弱ってる今の私の風の結界じゃ貫ぬかれて落下するかも……」

恐ろしい未来を零すのだ。

それって、今はいいけど、このままじゃ危ないって事だよね……？

ゴクリと固唾かたずを飲み込むボクは、

「シャロンちゃん……避よけてっ！！」

今、とても見たくない状況を目にしたりする。

それは、一つや二つや五つという生^{なま}温いものではなく、ボク達の後方に無数に見せる嫌^{いや}あゝな輝き達だった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十五縁『ボクと血路^{けつろ}と聖樹^{ユマグラナル}の日。それは鐘の音と共に訪れた

道なのかも知れない……なんてボクには思えたんだ』

第二十五縁。(後書き)

また何週間か後になっちゃんかもしれませんが……良かったらまた読みに来てみて下さいね

では、今度の第二十六縁にてお逢いしましょう(輝)、

あ、因みに、最近ですが『ついったー』を始めました (だから何？w

第二十六縁。(前書き)

お待たせいたしました、やっとこさ更新いたしました『第二十
六縁』です(疲)。

今回も同じ様に……振らなくてもいいだろうという漢字までルビ
を振ってるので、読み辛いかもかもしれませんが……それでもよかった
ら読んでみてください(涙)。

では、さくさくつとどうぞ(輝)。

第二十六縁。

「あれ？ 今何が光った様な気がしたんだけど？」

「え？ 何？ お兄様」

と、言葉が零れた瞬間、目の前で何かが結界の外で大きく赤黄色の光を散らして、ゲンツ！ と、やや大きくボク達を揺らしたつ！

「瞬遠撃烈火炎矢！？」

「え？？」

「普通、数十本の燃え盛る炎の矢を飛ばす『烈火炎矢』の力を一つにまとめた、超長距離用の炎の矢の魔法ですつ！ 炎の矢の標的までの距離によって威力が下がる特性を無くし、更にスピードまで上げた火炎中級魔法の一つですよお！」

そう説明すると、シャロンちゃんは顔を曇らせて、

「一撃ずつなら何とか続けて二回まで防ぎ切れるけど……いつぺんに三本も四本もくらうと、流石に魔力が弱ってる今の私の風の結界じゃ貫かれて落下するかも……」

恐ろしい未来を零すのだ。

それって、今はいいけど、このままじゃ危ないって事だよね……？

ゴクリと固唾を飲み込むボクは、

「シャロンちゃん……避けてっ！！」

今、とても見たくない状況を目にしたりする。

それは、一つや二つや五つという生温いものではなく、ボク達の後方に無数に見せる嫌あゝな輝き達。

急に上げたボクの言葉に驚きつつも視線だけで後ろを確認したシヤロンちゃんは、

「……やってみます」

静かに呟いて目を瞑ったのだ。

シャロンちゃんが目を瞑ったその刹那、音も無く紅い閃光が淡い青色の風の結界の直ぐ側を過ぎ去ったつ！

そして次の瞬間には、微かに右へと体ごと結界全体を傾け沈めるシャロンちゃん。

すると、再び紅い閃光が傾け沈めて空いた上の虚空を通り過ぎ去った。

「すごい……」

一瞬輝くだけで全く音も何もなく高速の炎の矢を、何も見ないで避けてるなんて。

それはまるで研ぎ澄まされた野生の勘の様なもので避け切ってるかの様だった。

微かに動かしては、二本・三本をも同時に避ける驚愕の芸当を見せるシャロンちゃん。

そんなシャロンちゃんの姿を見ながらボクは、この調子なら全部避けきれるかも知れない。

なんて、何処か思えてくるのである。

「このままなら大丈夫……」

大丈夫だね。と、微笑みかけようとしたボクの言葉が途切れる。

次々と襲い来る炎の矢を簡単に避け切るシャロンちゃん。

けれども、その目を瞑ったままの表情には、何処にも余裕なんてものは無く、逆に苦しそうな表情を浮かべ、微笑みと共にかけたボクの言葉が途中で出なくなったのだ。

凄く必死なんだ。

そりやそうだよ……二人で一緒に飛ぶのも辛そうだったのに、その中で物凄いスピードで襲い来る炎の矢を避けるんだから。しかも一本・二本所じやない数多くの矢を相手に、こんな小さな体で二人の体を支えつつ頑張ってるのだからね……。

すると、何かを感じたのか、悟ったのか、何やら呪文の様な物を詠唱し始めるシャロンちゃん。クルリと体勢を後ろへと向き、頭上の方へと目をやって手を伸ばし、

「魔風断空斬っ！」

力ある言葉と共に魔法を解き放ったのだっ。

その力ある言葉に応えるか様に、風の結界より数十センチ離れた上空にて虚空が刹那の揺らめきを見せ、次の瞬間には一面に大きく赤黄色に光を散らす数々の炎の矢達の姿。

それはまるで、ちよつとした花火を観ているかの様に輝いて、不謹慎にも綺麗に思えたボク。

「凄いつ、シャロンちゃん凄いやっ！」

感動に思わず上に居るシャロンちゃんへと向くと、そこには息を更に苦しそうに荒げるシャロンちゃんの姿があつたのだ。

「まだ……ですよお兄様。まだ……来ますっ」

「う、うん」

その張り詰めるような空気に気圧され頷き返す。

と、上を向いた拍子に思わずワンピースのスカートの中が覗けてしまったボク。

それは、綺麗な薄茶色の肌をした細くも柔らかそうな脚に、淡い青色のショーツ。そして、右足の太腿の内側に光輝く青色の小さな紋章。

……あれ？ これってもしかしてルマって物なのかな？ でも……何だかアーシャとは何だか違う様な気がするけど……。

確かアーシャのは、黄色い三重線で囲われた三日月の紋章で、その三重線の間には何やら文字の様なものが描かれていた様な。

なんて、シャロンちゃんのそこにある小さな青い輝きの紋章を見て、アーシャの左胸の乳房外側にあつたルマを思い出すボク。

で思い出したり何してんだろ……ボクって。

急に途轍も無いくらいの恥ずかしさに囚われて、それを紛らわせるか様にボクは、

「大丈夫？ シャロンちゃん。凄く苦しそっだけれど……」

そう問いかけた。

すると、そんなボクにシャロンちゃんは、声に疲労の色を滲ませつつも、

「大丈夫だよ。お兄様は私なんとか守って見せるから」
ニッコリと微笑み返したのだ。

が、その直後である。またやも結界全体が大きく揺れたのは。
今度のは前の時とは違い、衝撃しやうげきと共にやや高度が下がるくらいである。

きつと力の消耗じゆうりょくで、衝撃に対して高度の維持いじが難しくなってるんだ、シャロンちゃん。

「ごめんねっ、お兄様。ちょっと感覚違いで一撃避けそこなっちゃった……。大丈夫？」

「うん、大した事無いよ。こっちは気にしないでいいからね、シャロンちゃん」

ボクと言葉に、うん。と、頷うなづいて懸命けんめいに次の魔法の為に呪文の詠唱に入る。

何て事無い言葉しか返せないなんて、ちょっと悲しいな……。

そう自分自身の力の無さを痛感するボク。

ふと、頭上に輝きを見た気がしたボクは、上を見上げるてみるとそこには飛行スピードをやや上げながら早口に呪文を詠唱するシャロンちゃんの姿。そしてシャロンちゃんの遥はるか上空では、先ほど魔法で防いだ時よりも広い範囲はんいで輝きが一面に見えたのだ。

それは、回避不可能な程の範囲による炎の矢の激雨攻撃げきうを意味していたのである。

「……ふう」

小さく息を吐つき、詠唱し終えたシャロンちゃんは、
バンデガンドフィール
「風束滅波域っー!」

炎の矢の雨が襲いかかるその瞬間、力ある言葉と共に魔法を解き放ったのだっ。

すると、視界が一瞬揺らめいたかと思った次の瞬間、その降り注ぐ炎の矢達は何やら中央に引きずり込まれているのである。引きずり込まれて行く炎の矢達は、次々へと赤黄色の輝きと共に目の前で消滅しょうめつを見せていく。

それはまるで、突如^{とつじょ}作られた小さな空間の穴に炎の雨が吸い寄せられて行き、消滅させられている様だ。

やがて、直前まで風の結界へと直撃する軌道^{きどう}を取っていた炎の矢達は全て消滅させられ、なんとか無傷^{むきず}に終えたボク達。

「！？……しまった」

何かを感じたのか、疲労の色が色濃く見られるシャロンちゃんは、零れ落ちた言葉と共にハッと驚愕の表情を見せて、大きく下降するつ。

グイッと大きく下降したかと思った次の瞬間には、今まで居た場所^{ところ}に七つの紅い閃光が走り去り、その刹那^{せつな}っ！

ズズズンッ！！

バブウツツッ！！

炎の矢を三連続でくらった衝撃と急に生まれた暴風^{ほうふう}共に、ボクの体は急激^{きゅうげき}に下降して行くのだっ。

風の結界が砕^{くだ}けた！？

驚きつつも、目の前には物凄いスピードで下降するボクの体を追う様に手を伸ばすシャロンちゃんの姿。

ボクもシャロンちゃんが差し出す手を握れる様に、無我夢中^{むがむちゅう}で腕^{うで}を伸ばせるだけ伸ばすっ。

シャロンちゃんの手まで後数センチっ。あと少しっ！

しかし、シャロンちゃんはあと少しで手が届く所で手を引っ込めたのだ。

えっ？

ボクが疑問を浮かべたその時には、一つの紅い閃光が過ぎ去った後^{のち}だった。

紅い閃光の後^{のち}、シャロンちゃんが手を伸ばし、やっと握^{にぎ}る事が出^で来たボクの体は、

「翔風域結界っ！」
^{ウインリア}

微かに聞こえたシャロンちゃんの声と共に、下降して行く体が、グイッツツ！ と、上昇を始めたのだ。

「助^{たす}かったあ……」

風の結界に包まれながら、安堵^{あんど}の声を思わず漏^もらしてしまうボク。しかし、その言葉にシャロンちゃんは真剣^{しんけん}な口調で、

「まだ安心は出来ませんよお……お兄様」

と、ギョツと力強くボクの手を握った。

そっか、さっきの炎の矢が来ないなんて保証はまだ無いし、気が抜けないよね。

ボクはそう思いつつ下を見ると、先ほどとは全く比べ物にならないくらいのハイスピードで飛行していたのだ。

風の結界のお蔭^{かげ}なのだろうか？ 風圧などは全くと言っていい程感じれないけれど、目に映る景色が素早^{すはや}く縦スクロールして過ぎ去って行く……。

「……いくら何でも速すぎない？ シャロンちゃん」

「最低でも『浮遊^{エアリアル}空域結界』の三倍のスピードが出るから……お兄様」

ポツリと問いかけた言葉に返すシャロンちゃん。

「でも、この魔法なら風の結界も強化されてて、あの魔法にも結構^{けっこう}耐^たえ切れるし安心だよお」

そう語る側^{そば}から、結界の外では細長い炎の塊^{かたまり}が幾つも結界へと勢^{いきお}いよくぶつかり、そして赤黄色の光を散らしている。

どうやらこちらのスピードが上がった分、先ほどからの炎の矢の形状^{けいじょう}が確認しやすくなっている様である。

と、言いつつも炎の矢のスピードは速いらしく、ふと形が見えては結界へとぶつかるか、あっという間に過ぎ去って行く。

「うん、確かにぶつかってもピクリとも振動^{しんどう}が無いし、結界の強度は上がってるみたい」

そう頷^{うなづ}くと、シャロンちゃんは一つゴメンと謝り、

「想像以上に体に無理^{むり}をさせてるみたい……。もうちょっとスピードを上げて離れたら地上に降りて休むね、お兄様。本当はこのままババルウに戻りたいんだけれど……体力も魔力ももたないみたいだ

から」

出来るだけの微笑を浮かべながらそう告げるのだ。

ボクは優しい笑みで、

「ありがとう、シャロンちゃん」

と、心の底からの感謝の気持ちを込めて返した。

するとボクの言葉に、ニコツと返して、更にスピードを上げたシャロンちゃんだった。

ストツ。

と、ボク達が降り立ったのは、高台に広がったとある森。

地上に着地するなり、よるめき尻餅をついてしまったシャロンち

ゃんは、

「あははは……私の精紋^{ルマ}まで発動させちゃったから結構体に負担^{ふたん}かけちゃったかなあ」

苦笑いを浮かべつつ背中^{せなか}の太い木を背もたれにして座^{すわ}って言う。

私のルマ？ あ……もしかして青い光の紋章の事かも？

「それって、青く輝く紋章のやつ？」

ふとしたボクの問いかけに、急に真っ赤に頬を染めて言葉無く一
つ頷き見せ、

「うわあ……恥ずかしい。でも、お兄様なら……いっかなあ」

赤らめた頬^{ほほ}で顔を上げて、ニコリと微笑み返したシャロンちゃん。

あははは……こうゆう時って何て返していいんだろう……。こんな事慣れて無いし、言葉に凄く困る（こま）や。

その微笑みに苦笑いで返したボクは、うん？ と、とある事に引っかかる。

「あれ……私のルマって……？ えっと、父親のルマが継承^{けいじょう}されるんじゃ無かったっけ？ 母親^{はは}の継承されるけど、ほとんどが消えちゃったりでされないとか。確かアーシャと義姉妹^{しまい}だから、シャロンちゃんにあるのはアーシャと同じ黄色い紋章のやつじゃあ……？」

そう。言われてふと気になったのはそこである。

アーシャから教えて貰ったこの世界のルマの仕組みから言えば、シャロンちゃんもアーシャと同じ紋章なハズなのに、さっき見たのは青い輝きをしていた全く違った紋章なのだ。

「基本的にはそうだよ。でも、中には『特殊精紋』があつて、母親のものもシツカリと残るケースもあつてね、私のコレはその『特殊精紋』なんだ。勿論、アーシャお姉ちゃんと同じ精紋もアーシャお姉ちゃんとは逆の右胸に刻まれてるだよ」

疑問そうに見たボクに、服の上から順々に指を指して説明するシャロンちゃん。

なるほどお……ルマって深いんだなあ。

「それじゃ、シャロンちゃんのルマってどんな能力があ……」

しゃがみながら何気なく問いかけたその時、ボクは急に言葉が終わらぬ内にシャロンちゃんに突き飛ばされたのだ。

思わず尻餅をついてしまったその瞬間、

ヒュッ、ピキピキキンッ！

目と鼻の先を蒼く一閃した何かが隣の木に当たり、見る見るうちに凍り付いて行ったのだ。

危なかった。シャロンちゃんがボクを突き飛ばしてくれなかったら、きっと今頃は冷凍人間に成ってたかも知れない……。

ボクは恐る恐る何かが向かって来た方へと目をやると、木と木の間の向こうに薄っすらと浮かぶ人影が一つ。

「まさかっ!？」

「……そのまさかみたい、お兄様」

驚愕するボクに、ゆっくりと力いっぱい疲労でボロボロの体で立ち上がるシャロンちゃんの姿。

「迂闊だったなあ……。この魔錠を直ぐにでも外すべきだったね。きっとコレには逃げた時の追跡用に魔石か何かが埋め込まれたんですよお……」

と、自分の犯したミスに落胆しながら、

「ね、そうだよね？」

影が浮かぶ方へと問いかけた。

すると、クスクスと小さな笑いを浮かべながら出てきたのは、やつぱりあのリーダー格の彼女……。

「お嬢ちゃん凄いわね、私の姿を見ては直ぐに見破るなんて。それに幼いにしては中々強いよねえ、夜でも無いのにあんなにも中級魔法が使えるなんて。」

あの様子からしたらお嬢ちゃんの特化属性は『風』かしらねえ？
普通、特化属性しか私達には昼間じゃ中級魔法なんて使えないし、
やや嘲つかの様に語る彼女。

「それはどうでしょうねーっ」

そんな彼女の言葉に、両手を腰に隠してべーっ舌を出して返したシャロンちゃんは、

『何とか一瞬の隙を作るから、その時に逃げるね……お兄様』

小さな声で彼女に聞こえない様にボクに教え、そして小さく呪文の詠唱に入る。

「ま、どっちにしろもう追いかけっこは終わりにしようか？ お嬢ちゃんは強いけど、私には勝てないと思うしね」

話しながらゆっくりと近づく彼女。

そう勝ち誇っている彼女にシャロンちゃんは、一つ詠唱を終えたらしく、少々呼吸を整えてから、

「何で？ もしかしたら勝てるかも知れないよお？」

彼女に合わせて問いかけ、再び聞こえない様に小さな声で新しく呪文の詠唱に入ったのだ。

隣で立ち上がったボクは、これが彼女に気取られないかと少々不安な気持ちを押し殺す。

森の中だと言っても、きっと距離が縮まれば呪文の詠唱だって聞こえてしまうかも知れない。

そしたら、ボク達に勝機は多分訪れはしないと思うのだ。

やがて、彼女が話しながらも大分ボク達との距離を詰めた時、シ

ヤロンちゃんの呼吸が整い、詠唱を終えて魔法が完成した様である。
「さて、長話しもここで終わり。観念かんねんしてもらおうかなあ」
フツと、彼女の空気が鋭く恐ろしいものに変わったその瞬間！
シャロンちゃんは渾身こんしんの力と共に魔法を解き放ったのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十六縁『ボクと逃亡と炎の雨』

第二十六縁。(後書き)

と、言う訳で、お疲れ様でした。(感謝)。今回も遅くなつてすみません……。(泣)。この調子だとまた次回も間が空いてしまいそうなのですが……良かつたらまた読みに来て見てくださいね。(微笑)。

第二十七縁。(前書き)

お待たせいたしました！ 色々あって、やっとこさ書き上げた『
第二十七縁』です！（輝）

今回もいつもの様に簡単な感じまでルビがいつぱい振ってあるの
で……読み難いかも知れませんが……。良かった読んでみてくださいさ
いね（苦笑）。

ではでは、本文へどうぞ〜。

第二十七縁。

彼女の言葉に、両手を腰に隠してベーっと舌を出して返したシャロンちゃんは、

『何とか一瞬の隙を作るから、その時に逃げるね……お兄様』

小さな声で彼女に聞こえない様にボクに教え、そして小さく呪文の詠唱に入る。

「ま、どっちにしろもう追いかけっこは終わりにしようか？ お嬢ちゃん**は**強いけど、私には勝てないと思うしね」

話しながらゆっくりと近づく彼女。

そう勝ち誇っている彼女にシャロンちゃんは、一つ詠唱を終えたらしく、少々呼吸を整えてから、

「何で？ もしかしたら勝てるかも知れないよお？」

彼女に合わせて問いかけ、再び聞こえない様に小さな声で新しく呪文の詠唱に入ったのだ。

隣で立ち上がったボクは、これが彼女に気取られないかと少々不安な気持ちを押し殺す。

森の中だと言っても、きつと距離が縮まれば呪文の詠唱だって聞こえてしまいかも知れない。

そしたら、ボク達に勝機は多分訪れはしないと思うのだ。

やがて、彼女が話しながらも大分ボク達との距離を詰めた時、シャロンちゃんの呼吸が整い、詠唱を終えて魔法が完成した様である。

「さて、長話もここで終わり。観念してもらおうかなあ」

フツと、彼女の空気が鋭く恐ろしいものに変わったその瞬間っ！

シャロンちゃんは渾身の力と共に、
ブレイズ・フラスト

「烈波風昇陣つつ！！」

魔法を解き放ったっ！

すると、地面に突如現れた風と共に白く輝く光の線で魔法陣が描き出され、そしてその刹那には、ビュオオオオオオオツツ！！と、

魔法陣の外枠で勢いよく高く激しく風が舞い上がって周りを囲ったのだ。

それは砂埃と共に舞い上がり、ボク達と彼女の前に境界壁の様なものを作り出すかの様だった。

魔法にて生まれし突風に周りの景色を遮られた空間。

「しゃ、シャロンちゃん!？」

何かをするとは思っていたけれど、急な突風に驚いて声が漏れたボク。

「お兄様っ、彼女がこの魔法を崩し切る前にその魔錠の開錠をしますっ。きっと彼女の力量では崩し切るなんて時間の問題ですし……なので早く手を貸してくださいっ」

ボロボロの体で必死の表情のシャロンちゃんが言うままに両手を差し出すと、何やらマブリズの上に両手をやって難しい顔をする。

どうしたの？

なんて問いかけたいけど、そんな事を問いかけられる状況じゃないのは、一生懸命なシャロンちゃんの顔を見れば重々解るボク。

「……違っ、三つ目の鍵は風じゃない……」

ふと、呟くと、カチカチカチと何かが動く様な感覚を手首に感じ、後一つ、きつと最後は氷の魔法っ」

カチカチカチと、今度は首元に感じたその瞬間、ゴロツと腕輪と首輪のマブリズが抜け落ちたのだ。

「おお……」

身に慣れたそのものから開放された事に、感嘆の声が零れた。

「お兄様、走りますのでそれを持ってたまついで来て下さいね」

そうニツコリとボクへと笑ったシャロンちゃんは、地面に片手をつけるなり、

「地導魔穴球っ」

魔法を解き放ち、黄色く輝く光の球の中に何やら回転する掌サイズのもの誕生させる。

すると、その誕生と同時に、立っていた地面が大きく割れて魔法陣と同じぐらいの大穴を開けるのだ……。

グゴボツ。と、真下に大穴を開けた後、球体を横に向けて穴を開け進めるシャロンちゃん。

随分と固そうな地層なのに、その輝く球体が地層に触れた瞬間に大きく削り消滅させ、やや大きな大人の背丈くらいがスッポリと入る空間を作るのである。

こんな小さな球体の何処に、そんな力があるんだろう……。

なんて思いながら、走るシャロンちゃんの後ろについて行くボクは、ふと、シャロンちゃん右胸が服の下から黄色く輝いているのを目にする。

この光、さっきの青いのと同じ原理だとすると、もしかしてアーシャと同じルマが輝いてるのかな？ 確か効果は肉体強化って言うてた様な……。

そこまで浮かび、気がついたボク。

そっか……。シャロンちゃん、今までの戦いでこのルマを使わなきゃ動けない体なんだ……。

と。

……ごめんね、ボクのせいでそんなにも無理させちゃって。

「ごめんなさいお兄様」

急にそう呟くと、先を進むシャロンちゃんは、歩みのスピード下げたのだ。

え？ 何で謝るの??

もし、謝らなくちゃいけないとしたら、断然ボクの方なのに。

「シャロンちゃんが謝る事なんて無いと思うよ？ むしろボクの方こそシャロンちゃんに感謝しなきゃいけない事はあっても、謝られる事なんて無いよ」

「ううん……。やっぱり私のタイプが凄く悔しいって思う。もし私がアーシャお姉ちゃんみたいになら『戦タイプ』だったら、もっとちゃんとお兄様の事を守ってあげられるのになって……。体力も力も魔

力も全然^{ぜんぜん}足りない自分が、戦場に立つてみて嫌^{いや}って程^{ほど}思い知らされる。

もしかしたら、このまま逃げられないかも知れないし……最悪の結果にだって。だからアーシャお姉ちゃんみたいに強くなかってごめんね……お兄様」

何処^{なみだこえ}か涙声にも聞こえたシャロンちゃんの声が、魔法球の輝きだけで照らされるこのトンネルに小さく響^{ひび}いたのだ。

挫^{くじ}けそうなそんなシャロンちゃんの小さな背中にボクは、

「そんな事無いよ、シャロンちゃん。シャロンちゃんは力とかそうゆう物じゃない強さがあるとボクは思うよ？　だって、誰^{だれ}かを傷つけたくないって信念^{しんねん}を貫^{つらぬ}いてるじゃない。それに、実際にあそこからボクを助けてくれたのはアーシャでもなくて『シャロンちゃん』なんだよ？　それだって凄く勇気が要^いる事だと思うし、全然弱いなんて思えない。だからシャロンちゃんはシャロンちゃんのやり方で、アーシャはアーシャのやり方でいいじゃないっ。

それにね、あの炎の矢の雨からだって、目の前まで追って来たあの彼女からだって、今もこうやって立派^{りっぱ}にボクを守ってくれてるのは、シャロンちゃんだよ。大丈夫、シャロンちゃんは自分で思ってるより弱くは無いから、きっと大丈夫だよ。

ありがとう、シャロンちゃん」

優しく語りかけた。

「ふふっ。やっぱりお兄様^{ふしぎ}って不思議な人」

一つ振り返ったシャロンちゃんの顔には、優しい表情と共に笑顔が浮かんでいたのだった。

「ここはいい……？」

地下の穴の中から地上に出て辺りを見ると、そこに広がるは木々が立ち並ぶ森の中。大分^{だいぶん}走ったけれど、空から見えた感覚から言えば、きつとあのさっきの森の中から抜けてはいないだろうなと思うボク。

「大分掘り進んだけど、風の魔法と比べたらスピードは遅いし、さ
っきの所からはそんなに離れてないかも。お兄様」

と、フワリと風の結界に身を包みながらゆつくりと上がるシャロ
ンちゃん。

もっ少しやる事があるからお兄様は先にながってね。と、言われ
てボクは外したマブリスを手渡した後に、先に同じ風の結界で地上
に上がったのだ。

「歩くスピードとあの飛行スピードじゃ違い過ぎるし、それは仕方
ないよ、シャロンちゃん」

フワリとゆつくり上昇してくるシャロンちゃんにニツコリと微笑
むと、

「あ……」

ふと零れた言葉と共に一瞬よろめき、結界が消滅して再び地下へ
と落下を見せたのだ。

「危ないっ！」

ボクはそれに気がつき、咄嗟に手を差し出したボク。

「ありがとお、お兄……」

地上に引き上げられ、そんな安堵と共に出た言葉が、ふと目の前
の人物を目に硬直して途切れるシャロンちゃんの姿。

ゆつくりとシャロンちゃんを片手で引き上げたのは、一人の美少
女である。

それは、背中まで伸びた水色の綺麗なロングの髪を一つに結い、
背は低めながら見事なプロポーションを黒のハイソックスにジーン
ズ風のショートパンツと紺のブラウス、そして紺色のマントに身を
纏った17、18の高校生くらいの少女が、ニツコリと笑顔を向け
ながら自分より少し背が小さいくらいのシャロンちゃんを軽々と片
手で持ち上げているのだ。

「え……」

その状況に驚愕するボク。

いや、それよりも、いつの間にかに音も気配も感じさせぬまま現

れた彼女に驚くべきなのだろうけどね……。

「あ、あのー……」

と、ボクが問いかけようと声をかけたその瞬間、

「シャロンちゃんあゝんつつ」

「はう……」

目の前の彼女は、ふんわり甘い声を森に響かせて、引き上げたシャロンちゃんを、ぎゅううつつと、思いつきり遠慮無しに抱きしめたのである。

その熱い抱擁に、何処か魂の様なものがシャロンちゃんの口からはみ出ていた様に見えたのは、きつと気のせいじゃないと思うのはボクだけだろうか？

一つ呻いてピクピクとしながらも、抱きしめられるその腕にポンポンと手で叩くシャロンちゃん。

ロープ、ロープ……。と、まるで言わんばかりに……。

「あら？ こんなにボロボロでどうしたのおーシャロンちゃん？」

その抱きしめた腕で今にもトドメを刺しそうな彼女は、そんな姿のシャロンちゃんにどうやら気が付いたらしく、ちよんつ。と、地上に返す。

「あ……相変わらずお元気そうで何よりです……フローラお母様」
血の気が引いた青い顔をしながらも、無事生還を果たしたシャロンちゃんは、ニコツと彼女へと苦笑い混じりに微笑んだ。

「シャロンちゃんはー……今は元気なそうだけど、大丈夫う？」

苦笑いを浮かべつつ、なんとか平気です。と、返す。

「そう、良かった。で、こんな所で何をしてるのお？ シャロンちゃんー……」

ふと向けられたボクへの視線に、

「あ……妖一です」

彼女に名乗ったのだ。

と、言うか、この人って一体何者なんだろう……？ さっきシャロンちゃんは『フローラお母様』って言ってたけど……。

ン？ お母様？？

「シャロンちゃん、この方はもしかして……」

「つんつん。と、肘で軽くシャロンちゃん小突きつつ小さな声で問いかけると、

「……うん、お兄様の思ってる通り、この人は私のお母様……第二王妃のフローラ「クライン様。いつも『世界探求の旅』とか言つて、一年に一回書き溜めた研究書とか置きにしか殆んど家に帰って来ないから、こうやって姿を見るのは1年ぶりかも」

少々疲れた口調で丁寧に説明してくれるのである。

確かに言われて見れば、髪型と髪の色以外は目元とか鼻とか可愛らしい所がシャロンちゃんに似てるけど……って、いやあ待てまてマテ……どう見たって17、18歳しか見えないこの人がシャロンちゃんのお母さんだって！？」

あまりの現実離れた真実に驚きを隠せないボクは、目をシバシバとしばたたかせてしまう。

「フローラお母様こそここで何を？　って、訊くのも意味は無いのかも……」。

私達はちよつと色々あつて、追っ手から逃げてる途中なの」と、お母様……フローラ様に軽く説明するシャロンちゃん。

するとその瞬間、ふと笑っていたフローラお母様の表情からスーッと笑顔が消えたのだ。それは表情だけではなく、その場の空気さえも一瞬で鋭いものへと一変させる。

スツと、鋭い視線をシャロンちゃんに向け、

「ボロボロになりつつも逃げ出してる途中なの？　シャロンちゃん」は

冷たくも淡々とした口調で問いかけたフローラ様。

その姿に、心臓を突き抜かれたかの様に動けないシャロンちゃん、静かにゆつくりとした動きで一つ頷いたのだ。

「フローラちゃん、前にシャロンちゃんに言わなかったっけ？　『最初から勝機が見出せない物には手を出してはいけない』って。」

シャロンちゃんはアーシャちゃんの様に実際に激しい戦闘せんとうをしながら戦略を見出す『戦タイプ』とは違って、最初から何百通りの秘策を瞬時に描いて、その中から見つけ出した最良の作戦で戦に挑む『策士タイプ』なんだよって。だからアーシャちゃんの様に激しい戦闘が出来る様な身体じゃないんだから、身体が耐え切れなくなつてボロボロになるんだからねって、フローラちゃんが言つてあげてたでしょ……?」

と、ふんわり甘い声とは打って変わつて、重く低い声で眉一つ動かさずに告げるフローラ様は、まるで蛙を物静かに睨みつける蛇の様にシャロンちゃんを見下ろして問いかける。

そんなフローラ様に口籠りながらもシャロンちゃんは、

「した……私がしたかったから、体が動いちゃったからそうしたのっ！ 考える前に体が動いちゃったんだから仕方ないじゃない!？」

……考えも無しに出てきちゃったから、こんな有り様にもなつちやつてるけどお……」

そう真つ直ぐな瞳で必死に言い返したのだ。

必死に言い返すシャロンちゃんに、しばしそのまま冷たい表情で沈黙すると、次の瞬間には唐突に、

「うえ〜ん、シャロンちゃん〜んが反抗期い〜。フローラちゃん悲しいい〜」

グスンと、可愛く泣き真似をするフローラお母様の姿。

その姿に、さっきまで漂つていた張り詰めた様な空気は何処にやらと言わんばかりに、パツと華やいだのだ。

『へ……』

と、フローラお母様の突如の豹変に、間拔けた声を二人して零したボク達。

「なあんで、シャロンちゃんもそろそろそんな乙女な時期なのよね。フローラちゃんもちゃんと我が娘の成長を認めてあげなきゃっ。シヤロンちゃんがそこまで思うなんて、きっと隣の子は、凄くいい人なんですよっね」

ニツコリと、最初に出逢った素敵な笑顔をボクへと向けるフローラ様。

……え？ それって、ボクが女の子の姿をしてるっていうのに、しっかりボクが『男の子』だって見えてるって事？ あの魔法を使えなくさせるとかいふ魔石を打ち負かしたというに？？

「あ、あのー……もしかして本当の姿が見えてたり……します？」

苦笑いを浮かべながら問いかけると、

「そうね、このくらいの仕掛けなら簡単に見抜けるけどお？」

実にあっさりと言いのけたのだ。

「あはは……流石はフローラお母様。娘ながらフローラお母様の眼力にはお手上げですよ……」

同じく苦笑いを浮かべたシャロンちゃんは、

「残念ながらお兄様はアーシャお姉ちゃんのお婿様になる方ですよ、フローラお母様」

そう言い返したのだ。

しかし、その言葉にフローラお母様は、ちゅちゅちゅ。と、左手を腰につけて右手の人差し指を立てて横に振り、

「この世界には種族はいっぱい居るけれど、性別は細かいのを抜けば『男と女』しかないのよーシャロンちゃん。男と女は至極単純でね、一緒に居ればその内どちらかが惹かれちゃって伽っちゃうもんなのっ」

グイッとシャロンちゃんに顔を近づけて熱く語るのである。

いや……あのー……フローラ……様？

何か声をかけようとするボクをよそ目に、フローラお母様は続けた、

「シャロンちゃんはまだ11だけど、もう半年くらい待てば12でしょ！？ 12歳といえば婚姻の儀は出来なくとも婚約の儀は出来るのよお？ だ・か・ら、この際、気に入ってるならここは上手くやって既成事実とか何でも作って奪っちゃおうっ！ ね、シャロンちゃん」

何だかとてもない提案を、右手に作った拳をニギニギしながら熱く語って進めるのである……。

「……はいはい。その『半年』って口で言うのは簡単だけど、実際にしてみれば長い期間だし、だからフローラお母様の冗談はこまでにしましょうね。それに、そんなアーシャお姉ちゃんから奪う様な事は出来ないし、しない私の性格を知ってるでしょ？ フローラお母様??」

「えゝ、何だか1年見ない間にノリが悪くなったよぉーシャロンちゃん。フローラちゃん、半分本気だったのになぁ。それにフローラちゃん公認なんだからしちやってもいいのにつ。バルドちゃんには後で会えた時にでもフローラちゃんが上手く言ってあげちゃうしいゝ」

「前から私はこうゆう性格ですフローラお母様……。そんな事より、今こっちは大変な事になってるし、先を急ぐねっ」

ふうゝ……。と、タメ息交じりの息を吐いて立ち上がシャロンちゃん。

「あら、そうみたい。シャロンちゃん達が通って来た地下の方からシャロンちゃんより強そうな魔力を持ったのが遠くの方……400メートル後ろの方から段々と近づいてくるし、その上空にも10人近づいてるのねえゝ」

ふと、フローラ様が無気なく零した言葉に驚愕するボク。

え！？ 何でそんな事が解るんだろぅ……。それにこっちにだって人数とかまで把握してないのに……。

「流石はフローラお母様……。それぞれが持つ魔力の力とその数をそんなに離れた場所でも感じれるなんて、相変わらず桁外れな潜在能力だよねえ……」

「実はもつと前から気がついてたけど、シャロンちゃんといっぱいお話したかったから言わなかったのよねえゝ」

キャハツと、一つ嬉しそうな表情を浮かべながら、やはりとんでもない事を零すフローラお母様。

いたい……この方って何者なんだろう……。でもきつと、そんな事を考えるだけ無駄むだなんだろうな。

何処どことなしか、全くつかめないフローラ様を見てそう思うボク。すると、一つ手をポンツと打ったフローラ様は、

「そうだ、たまには親らしい事もしてあげなくっちゃね。シャロンちゃん、ここはフローラちゃんが引き受けるから逃げてよお」

ニツコリと微笑たんみを浮かべて10人以上もの相手をたった一人で戦うと、そう淡々たんと言うのである。

「え、そんな無茶むちゃな!？」

思わず言葉が零れたボクに、

「だいじょ〜ぶ。未来の義母様おかあさまに任せなさいって。それにヨウイチちゃん? だっけ? ウチのシャロンちゃんの事ヨロシクねっ。

親ばかじゃないけど、ウチのシャロンちゃん凄くいい子ちゃんだからね、好きな人の為ために無茶を通り越して頑張がんばっちゃう様な子だし、ちゃんと見ててあげてね。まあ〜当人とつにんは否定するかも知れないけれどっ」

と、ウィンク一つして言うフローラお母様。

いや……未来のって……。

「フローラお母様っ!」

「やんっ、怒っちゃ、メ〜。……と、これ持って行きなさいシャロンちゃん」

声を上げたシャロンちゃんに、ひょいっと何やらを手渡すフローラ様。

「エリクアクア付近に三年に一度しか咲かない花から採取さいしゅした蜜星みつぼし玉たま。ボロボロの身体だから完全には体力は回復はしないかも知れないけれど、少しはそのバルドちゃんの精紋ルマに頼らなくて済むくらいは動ける様になると思うから」

「フローラお母様……こんな稀少なものの……」

手に渡された黄色い飴あめの様な物にふと視線を落として、言葉が零れたシャロンちゃん。

「ふふつ。いつつも離れてるけど、フローラちゃんシャロンちゃんの事忘れた事無いし、ちゃんと心配もしてるんだよお、口にはした事無いだけでね」

と、シャロンちゃんの頭を優しく撫^なでて、次の瞬間には突然抱きしめ、

「ガンバツ、恋する乙女つ。フローラちゃんがしてあげれる事はしてあげるけど、最終的に選択するのはシャロンちゃん自身なんだよお」。

だからガンバツ、何を選ぶのもどうするかもシャロンちゃん次第。迷^{まよ}ったつてもいいし壁^{かべ}にぶつかつてもいい。ただ……一つだけ、その道を選んだからには自分を疑^{うたが}っちゃダメよお？ 立^たつてた場所が見る見る内に崩れ落ちちゃうから。ね、フローラちゃんの自慢^{じまん}の可愛い可愛いシャロンちゃん」

そう、ギュツと抱きしめた顔が、優しい母親の様な表情を見せるフローラお母様の姿が、そこにはあつたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十七縁『ボクとシャロンちゃんと意外^{いがい}な救世主^{きゅうせいしゅ}』

番外縁（前書き）

ほんつつつとおゝにつ！ お待たせいたしましたあゝ！！ 今回もやたらルビが多いのですが……多くの人が漢字に対して抵抗感を覚えないように思い、毎回多く振らせて載けてますっ（汗）。

えー……今回はタイトル通りに『番外』のお話です。ですが……主人公『妖一』君からは語れない部分を書いてますので、ある意味『番外』とは言い辛い』お話になっています。

そんな『番外縁』ですが、良かったらこのまま先を読み進んでみてくださいねゝ

では『ボクと彼女と彼女の縁結び記 番外録』の始まり始まりゝ（パチパチパチゝ）。

番外縁。

「ううんっ。さあ〜てとっ」

それは、背中まで伸びた水色の綺麗なロングの髪を一つに結び、背は低めながら見事なプロポーシオンを黒のハイソックスにグリーン風のショートパンツと紺のブラウス、そして紺色のマントに身を纏った17、18の高校生くらいの少女が、背伸びを一つする。

よかったあ〜。中々シャロンちゃんに逢えないから様子が見れなかったけどお、いい子に育ってくれててフローラちゃんホント安心したよお〜。

なんてポツリと胸の中で零した彼女、フローラさん。

一見、そんなまだいくらか幼そうに見える彼女でも、実際は11歳の娘を持つ母なのである。

と、なると……実年齢は幾つなんだあ！？　なんて気になる所だけれど、きつと本人に訊いて見ても、語尾にハートマークが付いた口調と共に微笑んで返されるだけで、真実は語られないのかも知れない。

シャロンちゃんとヨウイチちゃん、この後無事に逃げれるかちよつと心配なんだけどお〜……まあ〜多少の困難と一緒に経験してゆくのも色々と効果的でいいかも？　うん、きつとそうだよねっ。

ガンバツ！　シャロンちゃんっ！　フローラちゃんの為にも頑張って可愛い孫の顔見せてねえ〜。

と、崩れたニンマリ笑顔のまま森の中で立つそんなフローラさんの姿は、きつと森の中では出くわしてはいけない危険人物なのかも知れないと、これをふと覗いてしまった誰しもが思うかもしれない。

……
さあ〜て……半分本気の冗談もこの辺にして、そろそろ迎え撃たなきゃねっ。

あ………久々の戦闘になるから感覚が鈍ってるし、ちゃんと力加減

出来るか心配だなあ……。殺さない様についてシャロンちゃんと約束したしい……。ちよつと二・三人間違つちやったら、軽く埋めて誤魔化しちやおっかなー。きつとバレないと思うし。

真剣な表情を浮かべて首を傾げながら、とんでもない事を考えてるフローラさん……。

さてさて……この後どうなる事やら。

そんなフローラさんに、やがて一人の女性が地中にある穴の中からフワリと浮かび上がったのだった。

それは、黒のＴシャツにフード付きの赤いパーカーと、茶色のハーフパンツジーンズを着て、赤い色をした瞳にブロンドの髪を背中にかかるほどの長さの三つ編みにした、細身の綺麗な女性である。

「ただの通行人。って訳じゃ無そうね、アナタ」

ストツ。と、ゆつくりとした動きで地面に着地した彼女は、目の前に居る彼女、フローラさんに鋭い口調で問いかける。

「うーん……通行人って言えばそうだし、そうじゃないって言えば、そうかも？」

相変わらずな、ひよろんとしたまま彼女の問いに返したフローラさん。

そのまるでおちよくる様な言葉と態度が彼女を逆撫でたのだろう。フローラさんを見る彼女の視線が更に鋭くなり、明らかに怒った様子が見て取れるのである。

「……そう。ここはエナの領土だつてアナタは知つててここに立っているんだよね？　ここで起きた事は全て自己で責任を持つて事。だから例え殺されたつて文句は言えないって事を」

「あらら、そうだったのぉ。フローラちゃん、そんな事を全く知らないまま知り合いと逢う為だけにここに来たから……。ごめんなさいね」

その言葉に、ピンツと来た彼女は、状況を把握し、

「あの子達は何処（どこ）に？　素直に話すのならそれほど痛い目

に遭わなくても済むけど……そんなつもりはここに立っていた時点でないみたいね」

淡々と語りながら一つ横に飛び退いたのだ。

この子、頭もいい子なのねえ。力も十分あるみたいだし。

「まーね。それじゃ話が早いし、ちゃっっちゃつと始めましょーか？」

ニツコリと笑顔で返すフローラさん。

その瞬間、はらりと微かに身を動かしたかと思えば、今までなんとも無かった地面に焼け焦げた痕がくつきりと刻まれているのである。

「……………」

「うーん、そことそことそこと、あっちとあっちに、そして後ろに二人。上空全部10人で間違っていないよね？」

一瞬の出来事に沈黙する彼女をさて置き、虚空を順々に指差して、そう確認を伺うフローラさん。

「視界結界魔法で隠れてるつもりだと思うけどお、これって大気中に微量の魔力を感じちゃうから解る人には意味が無いって知ってたあ？ あ、でも森が発する力の流れの中で魔力を紛れさせてるっていうのは、凄いと思うよお」

と、ニツコリと問いかけて感嘆するのである。

魔法で姿が見えない相手を、大気中に漂う微量の魔力だけで見つけ出したフローラさん。しかも、森からも力が流れている中で、それだけを見つけたというのである……。

「やや上手の样ね。でも、それでも何とかしてみようじゃない」

それだけを言うと、彼女はサッと瞬時に森の中に身を潜めたのだ。つた。

あ、さっきまでの気配が感じ無あ。い。まだ幼そうなのによほど慣れてるのね。こうゆう戦闘。

それって……何だか凄く不幸ね……。そうゆう技術がないとこの世の中では生きていけないって事だから。

ふと、表情に陰りを見せたフローラさんは、さらにポツリと一つ胸の中で零した。

これもランシャオ族ゆえにかあ……。

という言葉。

！ 右前方からっ！

ビュオオオオオッ！！

突然感じたものに反応したフローラさんは、瞬時にはらりと燃え盛る炎の矢を避けきったのだ。

危なかったあ……ちよっと考え事して……！？

まずいつ！ 今度は全方向からだあ……。

と、不意を突かれた一撃を避けきったのもつかの間、次の瞬間には、全方向から襲い来る強い魔力を体を感じ取ったフローラさん。

これでどう？ いくら魔力を感じる事に優れていたとしても、不意の攻撃から転じた全方向からの烈火炎矢の集中砲火は？ 例え気がついたとしても魔法が間に合わないんじゃない？

木の影に隠れながら、胸の中で零す彼女。

そして彼女の思惑通りにか？ フローラさんの立っていた場所から連続する大きな爆発音を森に響かせたのだ。

放たれた魔法によりモクモクと上る爆煙に、薄ら笑みを浮かべる

彼女の姿。

やがて煙が晴れた時、彼女が見たものは……。

そんなっ……風の結界だっ！？

そう。爆煙が晴れた時、彼女が見たのは淡い青色の球体に身を包み纏ったフローラさんの姿。

あれだけの烈火炎矢を風の結界一つで……。

その事実には驚愕を見せる彼女。

ふう……呪文の詠唱が中途半端のまま発動させちゃったけど、

何とか成ってよかったあ……。

と、フローラさんが苦笑いを浮かべると同時に、全方向からの炎の矢を防ぎ切った風の結界は、まるでガラスで出来た球体がパン

ツと粉々に砕け割れる様に綺麗に割れ、その場から消滅したのだ。
そっか……解った……アナタの特化属性もあの子の様に『風』ね。
特化属性には本来の力よりも数段の力が上るからねえ……。

木の陰から気が付かれない様に覗き見ながらそう分析する彼女。
動きも勘も良く、防御系・即発性にも長けた風を特化してるか……。
正直やり難いわねアナタとやるのは。

……でも、それでも私はこんな所で負けてなんか居られないっ。
アナタなんかには躓いてられないっ。

と、彼女は強く心の中で思う。

さあ……てさて……気配は全く感じ取れないし、魔法を放った後の魔力を消す技術も高いみたい……それに全方向から魔法を放ったお蔭で辺りから魔力の流れが漂ってるから、探しにくくなってるっ。とおまけに意外に統率力もあるからややこしさ倍々よねえ……。

この際、大技で辺り一面を薙ぎ払っちゃった方が楽かも……？

そう一つ右の掌を頼につけて考えるフローラさん。

ピュッ！ ピキピキピキッ！！ ブゴオッッッ！！

突如真後ろから狙われた氷の矢の魔法と、今まで立っていた足元から鋭く尖って突き上げる岩の魔法の二つを、高さのあるバク宙で軽々と優雅に避けるフローラさんは、直ぐ様一つ呪文を詠唱するっ。
「浮遊空域結界っ！」

ドドドドドンッッッ！！！！

空中で魔法を解き放った瞬間のフローラさんを、四方と上空からフレア・アローの烈火炎矢が包み込んだっ！！

ちっ。

爆煙を纏うフローラさんを見て、一つ舌打ちする彼女。

後方と地中からの魔力を感じて飛んだはいいいけど……直ぐにも一つの魔法に気がついて反撃用に唱えてた呪文をキャンセルして、魔法を防御へと回して正解っ。危うく黒焦げに成る所だったあ……。
ふう……と風の結界に中で胸を撫で下ろすフローラさんは、直ぐに気配を探る。

あちゃあ、皆、魔力と気配を消すのが上手いから、見当たらないねえ。

ふと心の中で零すフローラさんは、ゆっくりと地上に降り立ち風の結界を解いて、

「ねえ、何でそんなにあの子達を追ってるの？ あの子達が何か君達にしかしちやったりとかかなあ？？」

と、唐突に辺りに居るだろうシャロン達を追って来た彼女達に問いかけ始めたのだ。

シャロンちゃん。なあんてありふれてるけどお、名前で王女様ってバレたら大変だもんねえ。シャロンちゃんのあの口ぶりからすれば、きつとアーシャちゃんとかに断り無く出て来てるだろうし、後で怒られちゃうもんねえ。

フローラさんの問いかけに、しばしの沈黙を置いて、

「私達の目的の為にあの子が必要なのよっ！ この世界を変える為の力が少しでも多くなっ！！」

何処からともなく、返答が森の間を抜けて来たのである。

そう、あの子の精紋の無い底知れない未知の力が私達には必要不可欠……。世界から弾かれた私達がこの世界を創り直すにはねっ！

だから、ここで負ける訳には行かないっ！！

思わず握った手に力が入る彼女。

……あ、一瞬右の奥に方で気配が生まれた様なあ……。

グワツと漂った気配の方へと視線を向けるフローラさん。

！！

その瞬間、早口にて呪文を詠唱し、

「浮遊空域結界っ！」

再び風の結界を作り出したっ！

ドドドドドドドドッッ！！

先程よりも威力を増し、数も増えた烈火炎矢がフローラさんを襲うっ。

何とか持ち応えは出来るかな？

風の結界を張りつつ、凄まじい烈火炎矢を防ぎながらそう思うが……。

ズドオツ!!

更に一段と大きい衝撃の一撃が結界を襲ったのだつ。

くうう……これ、結構効いてるかも……。精紋を発動させちゃうけれども、もう一段上の『翔風域結界』に変えて方が……。

爆煙に包まれる結界内で、一つ苦笑いを浮かべるフローラさん。

「厚い風の結界を作る『翔風域結界』をも貫くこの『烈貫炎撃矢』を防いでるなんて……」

強力な魔法さえも堪えるフローラさんの風の結界を目の当たりにして、彼女は思わず驚愕の言葉を漏らしたのだ。

ならもう一撃っ! ってしたい所だけど、さっきまで追っていた時の魔力の消耗と、術者のレベルを考えると無理ね……。

仕方ない……もしかしたら魔法の完成前に気が付かれて反撃されるかも知れないけれど、私がこの術で何とかするしかないっ……。

彼女は一つ苦渋の決断を下し、呪文を詠唱し始める。

すると、フローラさんの上空にて空間がやや歪みを見せ、それと同時に大きな魔力が蓄えられて行くのである。

「……え?」

爆煙に包まれ辺りが見えず、強力な一撃を堪えてながら中々新しい魔法の呪文を詠唱出来ないでいるフローラさんは、頭上に集められていく魔力に反応した。

が、

「どうしよお……早く何とかしないと大変な事にっ。でもこの状態じゃ完璧に呪文の詠唱が出来ないで不完全なままで発動する事になっっちゃうし……」

その存在に反応するも、それに対して上手く対処出来ない様子。迷ってる暇は無あゝいつ、不完全でもいいから何とかしなくちゃっ!

と、直ぐ様に頭を回転させて、そのままの状態で呪文の詠唱をし

始めた。

やがて彼女の呪文の詠唱が終わり……。

「ラグ・サンク・ラッシュァー
重魔降雷轟撃っ！」

力ある言葉と共に魔法を解き放ったのだっ！

ズガズガシヤアアアツツンツツッ！！

物凄い轟音ごうおんを森に響かせ、迷いの無い太い一筋ひとすじの青白く輝いた道かがやを、上空で歪めた空間から降臨こうりんさせたのだ……。

その凄まじい威力に、大地を大きく亀裂きれつさせドス黒く焦がし、降り注いだ一面の草を消滅させている。

そして、風の結界を張りつつ呪文を詠唱していたフローラさんの姿は……。

「間に合ってよかったあ……」

と、冷や汗を腕で拭ぬぐいつつ、安堵あんどの声を漏らすフローラさん。

その足場を見ると、黒く焦がし亀裂で窪んだ大地の直ぐ隣となりに立っていたのである。

「……避雷撃ひらいげきねえ」

彼女がゆっくりとした悔しそうな口調で、ポツリと零したのだ。

良かったあ、一瞬『突貫岩撃ぐれいど』か『雷招撃サンダー』で迷ったけど、こっ

ちの『雷招撃サンダー』で遠くに誘発させて……。

まじまじと、その誘発させた場所の痕を見て、軽い身震みふるいがするフローラさん。

で、やっぱりこんな大きな魔法をしたって言うのに……隠れるのが上手いまいのねえ……。魔力もいっぱい漂ってるし。

うーん……それじゃコレで何とかしてみようっかなあ？

フローラさんは一つ呪文を詠唱して解き放ち、三度風みたびの結界を張って空中に浮かび上がるのである。

浮かび上がり、何をするかと思えば、その空間に止まりつつ新しい魔法の呪文の詠唱に取り掛かったのだ。

何か来るっ！……クソっ、力が全力で出せない夜以外で強い魔法を放った影響で体が頭についていけないっ。

ガラ空きのフローラさんに反撃に移りたい彼女だが、先程の魔法で少々力を使ってしまった反動で、上手く体が動けない様子。

よいしょっと。あとこれと……。

ふと呪文を詠唱し切ったフローラさんは、その魔法を待機させつつもまた新しい魔法の呪文を詠唱し始めたのだ。

十分に力が発揮出来る夜でも無いと言うのに、風の結界を張りつつコントロールし、完成させた魔法を待機させ、さらに新しい魔法を準備するフローラさんは、やはり只者では無いのかも知れない……。

やがて呪文が詠唱し終わり魔法の準備が出来たフローラさんは、右の掌を下の森へと向けて、

「魔風圧激波っ！」

待機させていた魔法を解き放ったのだっ。

バフウウツッ！！

魔法を解き放つと同時に、フローラさんを中心としてやや激しい風が辺り一面の森に波紋状に広がったのである。

風の力に木の先がやや折れそうになるものがあれば、全く風を受け流している木もあり、その威力はどうやらそれ程強いものではないらしい。

？ 一体これで何をしようっ？

攻撃らしい攻撃を受けた訳では無い彼女は、そのフローラさんの行動に困惑の表情を浮かべる。

が、しかし次の瞬間、突如唱えてもいないのに包み込んだ風の結界に、一つ悪い予感が脳裏を走ったのだ。

突如出現した風の結界は、彼女だけではなく、辺りに隠れていた10人へもそれぞれ包み込んでいたのである。

クソっ、急げっ！

悪い予感が走った彼女は早口に呪文を詠唱し始めるっ。

……流石あゝ、やっぱり頭がいいのねあの子。この感じからすると何が起こるとしてるか理解が出来てるみたいだしねっ。

二つ目の魔法を解き放ったフローラさんは、更に魔力を注いで行く。

すると、風の結界で包み込まれた彼女の仲間達が、次々と蹲り、そして苦しそうに倒れては気を失って行く……。

よつと。

と、しばらくしてから地上に降りたフローラさんは、
「起きていいよ。倒れたフリだって解ってるから」

にっこりと微笑んで、倒れている彼女へと声をかけた。

「……アナタ、本当に強いね」

ゆつくりと立ち上がった彼女は、その恐怖に震えながらもフローラさんに睨みを利かせるのである。

「魔力も気配も出来るだけ消してた私達をどうやって見つけたかは解らないけど、アナタってそれ以前に凄いわ」

恐ろしさに渴いた笑いを浮かべつつ、彼女は言う。

「ん？ あゝ、ホント君達って凄いのっ、フローラちゃんって、魔力とかそういうの凄く敏感な方なんだけど、何も感じ無いし、やら攻撃した魔力は漂うしで探すの大変だったよ。」

だ・か・らっ、辺り一面をフローラちゃんの魔力で覆って真っ白にして、その中でふと浮かんだ違和感がする場所を見つけ出したって訳よ。」

で、見つけ出した人達を風の結界で包んで、結界内の酸素を死なない程度徐々に抜いて行つたのよね。」

そうフローラさんは、凄い事をしつつも物凄く恐ろしい事を、それはまるで子どもの様な笑顔で説明したのである……。

「でも凄いねえ、それに気が付いて風の結界の内側から自分の風の結界を作って無効化させるなんて、やっぱり凄いねえ……」

敵である彼女を前に、感嘆するフローラさん。

私、勝てないかも知れない。でも……。

「私はもう逃げも隠れもしないから、互いに力を込めた一撃の真面向勝負を受けてっ」

うんうんと頷くフローラさんに、真っ直ぐな瞳で決闘を申し込んだ彼女。

ここでもうにも成らなければ、もう先なんて進めそうに無いかも知れない。

……… けれどっ！ 私は自分自身とも戦うっ！！

気迫のあるその真っ直ぐな瞳に、フローラさんは「うん、やろうっ」と頷いたのだった。

ここは、先程の森からやや離れた辺り一面の木々がひらけた場所。向かい合って決闘するには持つて来いな場所である。

「私はコレでキメるっ！」

と、互いに十分な距離を取った場所から彼女は、パーカーの背中裏から、掌よりやや大きいサイズの真ん中に穴の空いた円盤状の刃物を取り出したのだ。

「あれって確かあゝ、チャクラムだっけ？」

ふと目にした武器に首を傾げるフローラさん。

チャクラムなんかじゃフローラちゃんの風の魔法には勝てないけれどなあ……。

そう思っていると、突然彼女の左肩が緑色に輝きだしたのだ。

それは、二重の円の中に何やら文字が描かれており、円の中央にランプのダイヤの形が刻まれている精紋が緑色に輝いているのだ。クッ……… 精紋を発動させると体力を消耗し続けるから……… 今の状態だと厳しいかも知れない……。

でもっ！ 全力でぶつかるとのみよっ！！

彼女はそう思いながら、呪文を詠唱し、
ラグ・サンクフラッシャー

「重魔降雷轟撃っ！！」

力ある言葉と共に魔法を解き放ったのだっ。

すると、やや上空を歪め解き放たれた一筋の凄まじい雷は、彼女の手に持たれたチャクラムへと力を宿したのであるっ！

へえ………。一部の特別な人にしか特化として使えない『雷』の

属性魔法を使える時点で凄^{たぶん}いって思ったけど……精紋^{ルマ}の能力も凄^{たぶん}いね。多分^{たぶん}あれば、唱^{とな}えた魔法を手に持った物に付加^{ふか}と定着^{ていちゃく}させる能力かも。それが証拠^{しやうこ}に、流れ消えてしまっ^て『雷^{ライ}』が消えずに武器に宿^すったままだしね。

彼女の様子から、分析をするフローラさん。

この『雷^{ライ}』が宿^すったチャクラム……その速^{すみ}さは神速^{しんそく}を越え、威力は何倍にもな^なった雷と同等程度^{どうとうていど}。今、私が出来る最大攻撃^{さいだいこうげき}にかけ^けるっ！！

グツと、チャクラムを握^{にぎ}る手に力がこもる彼女。

それじゃあ……こっちも。

何やら思^{おも}いつき、右手を地面につけて呪文^{じゅもん}を詠唱^{えいしょう}し、

「突貫^{くわい}岩撃^{がんげき}」

何故^{なぜ}か語尾^{ごび}にハートマークが付^つきそうなくらいに柔^{やわ}らかい口調^{くこう}で魔法を解^とき放^{はな}つフローラさん。

ググゴボツ。

その影^{えい}響^{きやう}かどうかは解^とらないが、やや軽^{かろ}い音を響^きかせて、大地^{だいち}から同^{おな}じく掌^{てのひら}よりやや大き^{おお}きめの黒^{くろ}い石^{いし}で出来^{でき}たチャクラムを作り出^だした。

そのチャクラムを作り出^だすと、突然^{とつぜん}フローラさんのジーンズ風のショートパンツに隠^{かく}された左足^{ひだりあし}の太腿^{ふともも}付け根^{つけもと}辺^へりが青^{あお}い光^{ひかり}で輝^{きら}き始めた^{はじ}めたのだ。

うう……久々^{くく}の精紋^{ルマ}の発動^{はつどう}だから、この疲労感^{ひろうかん}にものすっこく違和感^{わいかん}を感じるう……。

なんて思^{おも}いながらも再び呪文^{じゅもん}を詠唱^{えいしょう}し始め、チャクラムを持^もったまま右^{みぎ}の手^てを彼女^{かのじょ}へと向^{むか}けて、

「風束^{ふうた}滅波域^{めつぱいき}っ！」

魔法を解^とき放^{はな}ったのだっ。

それは、彼女^{かのじょ}へと向^{むか}けた手^ての前^{まえ}で空間^{くうかん}が揺^ゆらめき、それと同時にまるで辺^へりの空間^{くうかん}が歪^{ひず}められた一点^{いってん}に収束^{しゆしよく}される様に大気^{たいき}が集^あまり、作り出^だしたチャクラム事^{こと}飲^のみ込^こんだのだ……。やがて歪^{ひず}みが止^とまっ

たと思えた時には、掌の前に掌大の緑色の球体が現れたのである。
一見普通よりも小さな風の結界にも思える球体。

……あの球体、あんなに小さいのに凄くヤバイ。そう全身で警告を鳴らしてる様に感じる。それにあの光、きつと精紋だと思っけど……発動した瞬間から身がピリピリしてくる……。

発動されたフローラさんの精紋と生み出されたその球体を前に、嫌な汗が背筋を伝い流れ落ちた彼女。

そして、ふー……っと、ゆっくりと大きく息を吐いて、

「準備はいいっ!？」

「うん、いいよぉ」

「それじゃ、互いに『1・2・3』のタイミングで勝負っ!！」

勝負の仕方を確認する。

「1っ!」

彼女が始めのカウントを叫び、

「にいつ!」

フローラさんがセカンドカウントを上げ……。

そして、

「3っ!！」

互いにラストカウントを気合と共に吼えたのだっ!

その刹那、互いの手から撃ち出されたチャクラが、音も無く凄まじいスピードで喰らいにゆくっ!!

彼女の手から撃ち出されたその瞬間、強大な雷の威力で大地が大きく半円状に削り取りながら真っ直ぐに向かうチャクラム。

フローラさんの手から撃ち出されたその瞬間、走る空間を連続して小さく歪めながらも真っ直ぐに向かうチャクラム。

互いにその凄まじい威力と共に衝突し、そしてっ!……!

バタンツと、人が後ろへ倒れたのと同時に、雷が落とされて轟音を轟かせるのと大爆発を起こした様な爆音が重なったのだ……。

倒れた相手へと歩み寄ってくる足音を、耳にする。

と、言う事は負けたとしても生きてはいる様である。

ふと、その手を負けた相手へと差し出す勝利者。

「……なぜ？」

そう問われて、差し出した手がピクリと止まる。

「なぜ?? うーん……フローラちゃんには言ってる意味が解らないんだけどなあ……」

差し伸べながら、不思議そうに首を傾げたフローラさんの姿。

「なぜ……殺さなかった。私のチャクラムを打ち消すほどの威力なら……この程度で済むハズが……無いじゃないっ」

凄まじい攻撃で着ていた服はボロボロになり、破れた服から大きく胸などが露出した彼女は、悔し涙で顔をクシャクシャに歪めながら問いかけたのだ。

「え? 殺されたかったのあ?」

涙でクシャクシャの彼女に、いつもと変わらない何気ない口調で問いかける。

「私は全力で……私の運命をもかけて臨んだの……。なのに、負けて死ぬのならまだしも、敵に情けをかけられて生かされるなんて……」

全身の痛みと疲労感で体が思う様に動かせられないながらも、悔しさから唇をキュツと噛む彼女の姿。

「うーん……殺して欲しいのならこの場で息の根を止めてあげてもいいけど……別に殺さなくてもいいんじゃない? と、言うか今のでフローラちゃんも楽しめたし、そこに生き死にが何となく付いてくるかもあってくらいでいいじゃない。何もそれだけが全てじゃないって思うしねえ。それに『生きるって事』はそうやって簡単に『死ぬ事よりも大変な事』だとフローラちゃんは思うし、それが『生き残った事が屈辱』なんて思ってるなら考え方を変えてみたらどうかなあ?」

そんな彼女の血を吐く様に言う言葉に、ニツコリと微笑みを浮かべて悠長に答えるフローラさんは、続け様に、

「うーん、それじゃこう言う事でいいじゃん。そう『運命が、君は

まだ生きて居なさいって言っていた』って事でえ〜」
語尾にハートマークが付く、甘く柔らかい声で完結させるフロ
ーさん。

その言葉に、

「『運命が生きて居なさい』ね……。なら、私はこのまま自分がや
るべき事・やろうとしてる事を続けてもいいのかも知れないのね…

…」
篤い涙を零しながら言う彼女の姿。

世界をかあ……。同じランシャオ族だから気持ちは少しは解るか
なあ、フローラちゃんも。

でもね。

「あの子達にまた手を出すって言うならフローラちゃんが何度でも
立ちはだかって邪魔させて貰っちゃうからねえ〜」

と、右の人差し指一つ立てて、ウィンクをしながら警告するフロ
ーさん。

そして、

「心に留めておくわ〜」

涙を零しながらも微笑みを返した彼女。

そんな二人の姿が、ここにはあったのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

番外縁『王妃様と彼女と負けられぬ気持ち』

番外縁（後書き）

と、言う訳で、ここまで読んでくださってありがとうございます！
っ！ お疲れ様でした！！

今回、何気にいつもより長くなってるという罫（なのか？）で、すみませんでした……。ある意味で番外って事だったので、前編後編と続きにしないで書き切ってしまったので長くなってしまいました（反省）。

さて、そんな今回のお話ですが、どうだったでしょうか？ 妖一君もシャロンちゃんも出て来ない、あの二人のお話。何となく、ここ（番外縁）を全部切ってしまうのは勿体無いなあって思えて、時間はかかったものの気合で書いてみました（テヘツ）。まあ……楽しんで読んで貰えたら、凄く嬉しいなっ　と、いった感じです（輝）。

またいつかこんな感じに『番外縁』をやるかも知れませんが、良かったらその時もお付き合いして頂けたらなってます。では長々と話すのも何なので、後書きもこの辺に。それではまた次回に皆様と逢える事を楽しみにして、この辺で（ペコリと一礼と共に）。

第二十八縁。(前書き)

お待たせいたしました！　今回は本編である『第二十八縁』ですつ！！

今回も例外なく(笑) いったい漢字にルビを振らせていただきます(汗)。読み難いかも知れませんが……良かったらこの先を読んでみてくださいね(輝)。

では、ズズイツと先にお進みくださいませ。

第二十八縁。

ポツポツとボクの肩かたや頭に降り出したにわか雨が、次第に本降りほんぶへと姿を変えて行く。

ザアアア……………。

それは、まるで全ての音を掻き消すかの様に降り注いで、太い木を背に立っているボクの存在を飲み込んで行く様にも感じてしまう。

「どう……………しようか」

誰だれに言うでもなく、ふとボクの口から零れ出たそんな言葉。

見上げれば、そこにはこの森の葉と枝の間から見える黒い雨空が見えて、雲が黒いうねりを見せてる。

「どうしよう……………」

再び零れた言葉に、ボクは顔を伏せて何処どことない小さな笑みも一緒しよになつて零れ落ちた。

……………別に面白くもなんとも無いのにね。

と、ボクがそんな風になつてしまったのは、この雨がまだ降り始めてもない頃ころだった……………。

「大丈夫だいじょうぶなのかな？ 本当に一人にして来ちゃったけどさ」

森の中を先導せんどうする様に前を走るシャロンちゃんに、ふと問いかけたボク。

「大丈夫ですよーフローラお母様なら。と、言うより別の心配事があるくらい……………ですから」

あははは……………と、渴かわいた笑いを交えつつ返すシャロンちゃん。

「別の？」

「ええ……………そうですね。フローラお母様って自分が楽しいと最初の目的を忘れちゃう事があるので、身の危険とかそういう事よりも、むしろこっちの方が心配ですねえ……………。遊びになつてなければいいんですけどお……………果てしなく心配です」

「そりやまたー……お茶目なお母様だね、シャロンちゃんのお母様
って」

と、何処か苦笑いにがわらを浮かべたボク。

シャロンちゃんのお母様のフローラ様をあの場に残して、ボク達
は森の中をさらに進んでいるのだ。

フローラ様のくれた薬のお蔭かげでシャロンちゃんも元氣を取り戻し
つつあるし、あのフローラ様の様子だと多分たぶん大丈夫なのかも知れな
いね。

ボクはそう思いつつ、

「そう言えば……ボク達って何処へ向かって走ってるの？ シャロ
ンちゃん？」

肝心かんじんな事を訊いて見る。

「この森をあと少し走ると、ここにも『魔転移通路レント』があるんだよ
お」

レント？ あー、確かあの光の異次元いじげんトンネルみたいなヤツね。
そう言えば、アーシャと一緒にババルウまで行くのにも幾つかの
そのレントを使って行つたつけ。

ふと、アーシャに訳も解らないまま案内あんないされて行つた事を思い出
したボク。

「ここは今、まだ『エナ』の領土りょうどなんだけど……元々はババルウ
の領土だった場所なので隠し魔転移通路がまだ存在するんだよ。
隠してあるお蔭でまだ見つかってないみたいだし、きっと今でも使
えると思うからねっ。コレを使った方が、色んな所に行きながらバ
バルウに帰るから相手に見つかりにくいし、魔力も消耗しょうじょしなくて済
むからいいと思うの、お兄様」

ニッコリと、説明して最後に微笑み向いたシャロンちゃん。

あ、シャロンちゃんに笑顔えがほが戻ってる。

そう言っても完璧かんぺきに疲れが取れてる訳では無さそうだけれど、何
処かその笑顔に心が安らいだのだ。

連続の戦闘せんとうだったし、色々無理させちゃってたみたいだから、本

当に良かったあ。

なんて、ボクが安心したその瞬間、突然森の中から紅く大きなものが誕生したのを見たボク……。

「え……」

その紅く大きな存在に、一言漏らして言葉を失うシャロンちゃん。

何……あれ。

まさか……あれってロボット!?

ボクはその存在を目に、ボクの世界にある言葉が浮かぶ。

それは、二階建の家くらいの大きさがある人型をした二足直立をする、紅の上からオレンジでかつこよくカラーリングされた紅き機械である。騎士兜からユニコーンの様な角が生えた頭に、兜から覗ける黄緑の瞳。肩には見事な装飾を施された騎士の肩アーマーの様な物をし、そこからは、まるで何百・何千枚もの羽根を重ねて出来た様な紅きマントをしている。マントからはふと何やら尻尾の様な物を見せる、大きくも細身の機体が少し離れた場所で姿を現したのだ。

あははは……何だかロボットアニメや漫画に出て来そうな機体……。

でも、ロボットだとしては何だか生き物の様に呼吸をしている様な気が……。

ふと、胴体を見ると、確かに一定のリズムで呼吸をしている様に動いているのだ。それだけじゃなく、この尻尾も何処か生々しい質感を見せていて生き物のモノの様に感じられる。

もしかして、コレってロボットじゃなくて生き物なの!?

「シャロンちゃんっ、コレってもしかして生きてるんじゃない?」

ボクはこの目にした不思議な存在に、思い浮かんだ疑問を問いかけると、

「何でこんな所に『奏魔人』がいるの!？」

ボクの言葉はまるで聞こえてはいない様子で、それを見ながら驚き零すシャロンちゃんの姿。

ノヴァニス??

……あれ？ 確か何処かで聞いた事がある様な……。
すると、ボクの中で、ふと、

『それはアレを……この世界に存在する最大の武器『奏魔人』を手
に入れる為に大金を稼いでるのよ』

そんなあの彼女の言葉が思い浮かんだのだ。

え……武器って……ロボットだったの!?

「お兄様……まだアレはこっちには気がついていないみたい。だから今の内にこの場を離れましょ！ もしも気づかれたら私じゃ絶対に逃げ切れないから……」

驚きながらも、冷静に判断を下すシャロンちゃん。

ボクは、驚愕をしながらも、シャロンちゃんの提案に頷いて返し、
そして出来るだけ気配を殺してシャロンちゃんの後をついて行く。

流石はアーシャの妹だけあって、気配の殺し方は上手く感じるボク。目の前に居るといふ事が見えなければ、きっとボクはついて行けないんじゃないかなと思えるのだ。

気配を殺しながらも急ぐ様に逃げるボクは、どうかこちらを見ません様に……と祈りながら進む。

あれ？ 何だかあの紅い機体、何処か疲れてる様な気が……。

大きく動く胸に、直立不動に見えていても、良く見えればやや前かがみになって見える姿勢。

そう、まるで人間が運動した後に疲れてる様な、そんな感じなのだ。

「お兄様っ、こっちっ！」

と、静かな声でボクを呼ぶシャロンちゃん。

すると、シャロンちゃんが呼んだ木と木の間のそこには、ひっそりと、まるで陽炎の様に霞み見える場所が存在しているのである。

へー……これが隠してあるレントなんだ。

なんてボクが思ったその瞬間……

「こんな所にも居たなっ！ ランシャオ族っ!!」

機体からシャロンちゃんを発見した女性の声が聞こえたのだ。

マズイー！

そう直感したボクはその場から勢い良く前へと跳び、そのままの勢いでシャロンちゃんをレントの中へと押し飛ばしたのだつ。

その直後、ボクの手より少し先の地面が大きなアリ地獄の様な形だけを残して、一瞬にて消滅したのである……。

間に合って良かった……。

ボクは地面に腹ばいになりながら一つ大きく息を吐いた時には、今までであったその紅き存在は姿を消し去っていたのだつた。

チャツチャツチャツチャツ。

俯いたボクは、何処から聞こえて来る足音に気が付いた。

それは、濡れた道をこちらへと駆け走る足音である。

「うわあ、びつしょびしょに濡れたあゝ。あんたもこんな所で不運だね」

大きなこの木の下へと入ると同時に、そんな言葉をかけられるボク。

ふと、声をかけられた方へと向くと、そこには二人の美少女の姿がニツコリと微笑んでいたのだ。

一人は、170くらいの身長をした赤いショートカットにライトグリーンの綺麗な瞳と端麗な顔立ちをしており、細身にしてはやや膨らみのある胸とスタイルのいい体を、ヘソ出しの赤いTシャツに黒のジーンズジャケットとやや生地が厚そうな黒のミニスカートという服装で包み、腰には80cm以上ありそうな長剣を鞘に入れて携えている高校生くらいな美少女。

そしてもう一人は、背が低く幼い顔に白銀のサラサラなロングストレートをお尻の辺りまで伸ばし、同じ様なライトグリーンの綺麗な瞳と端麗な顔立ちをし、青みを帯びた何処かの民族衣装風の薄布のワンピースを着た美少女である。

「フレリアとアシュレーも、ちよつと不幸」

赤い髪かみの美少女の後ろに隠れる様に、フワツと浮いている彼女は、まるで天使の様な綺麗な声でそう漏らす。

「まーねっ。ウチも色々あってこの有様ありさまだし、もしかしたらアシュレーが思うちよつと所じゃないくらい不幸かもねっ」

ビシヨビシヨに服を濡らした彼女は、ニツと、不幸と言いつつも元氣そうに笑みをを見せて隣となりの彼女に返す。

「でも、アシュレーは濡れる事も無いからいいじゃないっ。ウチなんて、ほらっ、見てみてよこの有様……。これで風邪かぜでも引いたら冗談冗談抜きにホント最悪だって」

「フレイアなら、大丈夫。フレイア、元氣だけなら誰にも負けないから」

クスクスと可愛らしく笑いながら、フレイアと呼んだ彼女に、
「だけって何さ、だけって」

と、笑いながらツッコまれるのである。

「……なんだろう、この人達って。髪色は違ちがうけど、顔は似にてるから姉妹姉妹って感じだけれど……」。

そんな突然現れた二人を呆然ぼうぜんと見ていたボクは、

「あ、ごめんっ。ウチはフレイア＝シュレイドで、隣に浮かんてる子が妹のアシュレー。ちよつと色々あってこんな所で休憩きゅうけいがてら雨宿りあまやどりって訳。

で、あんたは？ 何だか元氣げんき無さそうだったけど、どうしたの？」

フレイアと名乗なのった彼女にウィンク一つして問いかけられたのだ。
「話したくなかったら、別にそれでいいと、思うよ。フレイア、ただのお節せつかい焼きさん、だから」

半分隠れながら、柔らかく微笑んで言う彼女、アシュレーと言われた彼女。

「あー、はいはい。どうせウチはお節焼きお姉ちゃんですよー」

「うん、お節焼きお姉ちゃん。でも、そこがいい所だと、アシュレーは思うよ」

「褒ほめてるんだか、貶けなしてるんだか……姉ながら今でもホント解ら

ん性格^{せいかく}してるなあ」

頭をポリポリと照れくさ隠しに搔く^かフレイアさん。

なんだか二人を見ていると、ちよつとした漫才^{まんざい}を見ている様な気にもさせてくれる気がするボクは、

「あはははっ」

自然と自分の口から笑いが零れたのだ。

「何だ、いい顔出来るじゃん、あんた。その方が美人さんでいいよ。その雨に濡れて薄っすらとブラウスから覗ける肌^{はだ}もセクシーだし」

と、言われた時、ボクは今更^{いまさら}になつて気が付いた。ボクは今は女の子の体になつて、メイド服を着ている事に。

ゆつくりと意識^{いしき}して視線^{しせん}を胸へと落とすと、そこには小さくもブラウスから覗けるふつくらした肌色が見て取れるのだ……。

その瞬間、何とも言いようが無い恥^はずかしさがブワツと込み上げ、耳を熱くさせる……。

「気にしない気にしないっ、どうせ女同士だし、同じ物が膨れてるか膨れてないかぐらいの違いだしね」

あはははっ。と、笑いながら、その生地が少し少ない赤いＴシャツをペロリと捲^{めく}り見せるフレイアさん。

すると、ペロリと捲られたそこには、綺麗な肌色の形のよさそうな胸が、何も付けぬままドーンツと姿を現すのである。

……え。何で下に何にも着てないのっ!?

「フレイアのは、膨れすぎ。アシュレーに、少し分けても、きつとバチ当たらないと、思う」

ペチペチと自分の胸を叩いたアシュレーちゃんは、ギュツとフレイアさんの胸を摘^{つま}み、

「いやいや、摘んでも取れないし分けられないから、アシュレー……」

冷静^{ていじやう}に手振り付きでツッコまれる。

「いつかアシュレーもウチみたいに大きくなるから大丈夫大丈夫。心配^いは要らないって」

そう言いながらアシュレーちゃんの手を退かしてTシャツを戻す彼女。

「アシュレーの分の、栄養までフレイアが持つて行っちゃってたら？」

「こつゆうのは精紋^{ルマ}みたいに親から子どもに継承^{けいしょう}されるから大丈夫だからねー……」

「ダメだったら、フレイアの、搾乳^{さくにゅう}して元^{もと}に戻すからね」

「『元』とか良く解らないって。それにウチは牛や山羊^{やぎ}じゃないから」

アシュレーちゃんの何処まで本気が解らない微笑みと言葉に、苦笑い一つするフレイアさんは、

「で、どうしたのあんた？」

ニツコリと笑って再び問いかけたのだ。

本当に漫才を見ている様だったボクは、ふと二度目の彼女の問いかけに、

「色々あって、ボクを助けてくれた娘^ことハグレちゃったんです。知らない場所で、それも大きなこんな森の中で。そしたらハグレちゃった子も心配だし、雨も勢い良くなって降って来ちゃったし、どんな不安に駆られちゃって、何だか悲しくなってきた……」

苦笑いを交えつつ端折^{はしよ}って答えたのである。

見るからにシャロンちゃん達とは肌の色も違う彼女達に、名前とか全部を話していいのか解らないので簡単に伝えたボク。

「ふーん、そっか。だからその服が泥^{どろ}とかで汚^{よご}れてるのねっ。」

と、言うか、そんな何やら特別な事^{とくべつ}が無い限り^{かぎ}こんな森に人が居る訳も無いからー」

ボクの説明に、ふむふむ。と、頷いて、

「そうだね、そのあんたを助けに来てくれた娘も無事^{ぶじ}だといいねっ。ううん、きっと無事だから、あんな暗い顔してちゃダメだって迎え^{むか}に来てくれた時にその娘^こが心配するしね」

ニツと笑って優しい言葉^{やさ}をかけてくれたのだ。

この人達…… ちょっとしか話してないけど、凄く優しい人達なんだなあ。何だか一緒に居るこの空気事体が、そんなのを醸し出してる気がする。

「その娘がフレイアじゃ無くて、本当に良かったね。フレイア、方向音痴だから、アシュレー居ないと何処で迷うか解らないから」

「だからそれは、世界がウチを惑わすんだって。ウチは真っ直ぐ目的地に向かつてるつもりなんだからさー」

「それを、この世界では、方向音痴と、言っんじゃない？」

と、クスクス可愛らしく零すアシュレーちゃんの姿。

そしてつられる様にクスクスと笑いが零れてしまうボク。

本当に二人を見ていると飽きない気がするのである。

雨音が響く中、ボクとアシュレーちゃんの笑い声が小さく咲いた次の瞬間、微笑みを浮かべていたアシュレーちゃんの顔からスツと笑みが消え去り、

「フレイア、体力と魔力、どれくらい持ちそう？」

そう今までは違う真剣な声で問いかけた。

「……そうね、大きく見積もっても、正直に大体いつもの三分の一くらいって所かな」

「一人だから十分、だと思っけど、一気に仕上げた方がいいと思う、アシュレーには」

「アシュレーこそ平気？ ウチよりも負担が大きいのに？」

そのフレイアさんの問いかけに、クスツと一つ零して、

「……この身体になってから、そんなのは慣れたよ、フレイア。それに、アシュレーとフレイアの目的を果たすまで、アシュレーは頑張れるから、心配は要らない」

言葉に魂の様な物を込めて、告げるアシュレーちゃん……。

「そうだね、ウチはアシュレーの事信じてるっ。それじゃ迎え撃とうかアシュレー」

ニツと笑みを零して、

「それじゃ用事が出来たから行くね。また何処かで会えたら気軽に

声をかけてよつ。ハグれちゃった娘と元気に再会出来る事信じてるから、頑張つてねっ！」

ボクに手を振つて、やや離れた場所へと走る彼女達。

そして、ふと止まったかと思つたその刹那……。

「……光と影の理において制約せし我らが汝

我らと汝がもちて 今ここに悪を討ちつくさん……」

呪文を詠唱するかの様な二人の声が重なり聞こえたのだ。

その二人の詠唱にまるで共鳴するかの様に、辺りの空気がズズズと振動し始めるのである……。

「我が身に宿りし焔焼の鉄槌

この贅と共にその扉の楔を解き放つ」

アシュレーちゃんの詠唱と共に、その小さな体が紅く輝きを放ち、我らと汝をもちて一つの魂とす

今 我らが願いと神炎の名の共に……」

フレイアさんの詠唱と共に、同じ様に身体が紅い輝きに包まれ……
「等しく全てを焼き尽くさんっ！」

我らの声に清浄の劫火となり目覚め降臨せよっ！ スウォームシ

エイガー！！」

二人の力ある言葉と共に、眩しいくらいの紅い輝きを見せた二人の姿はその場から消え去ったのだ。

そして、二人の姿に代つてそれは、ボクの前に大きく勇ましい姿が現れたのだ……。

ボクと彼女と彼女縁結び記

第二十八縁『ボクと雨とシュレイド姉妹』

第二十九縁。(前書き)

お久しぶりです皆様!! 何ヶ月ぶりの更新となってしまう
したが……覚えていらつしやいますでしょうか(汗)? 忘れてし
まったという方がいらつしやいましたら、お手数ですが前のお話か
ら読んでもらえると助かったりいたしますです、ハイ……。

と、言う訳で、やっとこさ更新となりました。今回も例外な
く、本文では漢字へのルビ振りが満載となっております(笑)。読
み難いとは思いますが……少しでも漢字への抵抗を無くせる様にと
の思いから振らせて頂いておりますので……その辺の所はよろしく
お願いします(汗)。

ではでは、久方ぶりの本編へ、ずいずい……と、進んじやいまし
よ(輝)。

第二十九縁。

「……光と影の理ことわりにおいて制約せいやくせし我われらが汝なんじ

我らと汝がもちて 今ここに悪を討ちつくさん……」

呪文を詠唱えいしょうするかの様な二人の声が重なり聞こえたのだ。

その二人の詠唱にまるで共鳴きようめいするかの様に、辺りの空気がズズズツと振動し始めるのである……。

「我が身に宿りし焰焼えんしょうの鉄槌てつち

この贅にえと共にその扉の楔くさびを解き放つ」

アシュレーちゃんの詠唱と共に、その小さな体が紅く輝きを放ち、

「我らと汝をもちて一つの魂たましいとす

今 我らが願いと神炎しんえんの名の共に……」

フレイアさんの詠唱と共に、同じ様に身体からだが紅い輝きに包まれ……

「等しく全てを焼き尽くさんっ！

我らの声に清浄しじやうの劫火てつかとなり目覚め降臨こうりんせよっ！ スウォームシ

エイガー！！」

二人の力ある言葉と共に、眩まぎしいくらいの紅い輝きを見せた二人の姿はその場から消え去ったのだ。

そして、二人の姿に代ってそれは、ボクの前に大きく勇ましい姿が現れたのだ。

なんとそれは、紅あかの上からオレンジでカラーリングされた紅き人型の『ノヴァニス』と呼ばれた大きな生命体の様なロボットが、まるで何百・何千枚もの羽根を重ねて出来た様な紅きマント身に纏まとい、雨を弾く様にバサアッ！ と翻ひるがえして出現したのだ……。

……え。何でここに……シャロンちゃんを襲ったロボットが！？すると、驚愕きやうがくするボクの姿に気がついたのか？ ふと軽く後ろへ振り返り、片手をゆつくりと優しく振ってその場から跳とんだのだ。

その瞬間、背中の紅いマントが天使の様な大きな翼に変身を遂とげ、
『今度は逃がさないっ！』

と、聞き覚えのある二つ声を混じらせてボクの前から飛び立って行ったのだった。

あははは……嘘だよね、そんなのって。

ボクは心の中で渴いた笑いを響かせた。

状況的に考えたって、シャロンちゃんが『ノヴァニス』と呼んできたロボットの正体が、あの優しそうな二人の姉妹にしか考えられないからだ……。

二人の人間がロボットだって！？ そんなのありえないっ！

……なんて、魔法とかルマだとか不思議な物・事が当たり前にある様なこの世界だから、きっとこれも真実なんだと、何処かボクには思えるんだ。

そっかー……。

虚しさを感じながら頷くボクは、ふと気がついた。

「と、なると……さっきの言葉からしたら、迎え撃つ相手つてもしかしたら……シャロンちゃん！？ そっか……きっとボクを探しに戻って来てくれたんだっ」

そう、二人が飛立ち戦いに行った相手を。

マズいっ！ シャロンちゃんを助けなきゃっ！！

……でも、ボクなんかがどうやって？ あんな巨体を相手に不思議な力も使えないボクが……。

いや。うっん、そうじゃないっ！ そんなの解かんないけど行かなくちゃっ！！

雨でぬかるむ道を、ボクは二人が向かった方向へと走り出す。

あのスピードだと、たった少しの時間でも結構な距離を行ってるかも。高速移動魔法とかも使えないボクが間に合うかも解からないけれど……急げるだけ急いでみよう！

途中ぬかるみに足を取られて転びそうになるボクは、必死に走って後を追う。もしかしてなんて思う頭を振り払いながら、三人とも無事で居る事を祈って。

やがて何やらを探しているノヴァニスと呼ばれたロボットを視認しにんにしたボクは、何処か近くにシャロンちゃんが居るハズだと思って、辺りの木の間を注意深く探る。

なぜなら、さっきの二人の会話からすれば、あのノヴァニスを動かすのには色々と力を使う様である。

と、なれば、身の小ささを使って隠かくれながら移動してるだろうシヤロンちゃんに対して、何処に居るかも解らないまま下手に魔法を放よりよくつて余力をも考えずに力を消耗しょうしょうする訳わけにもいかないだろう二人。だからそのお蔭かげで、その場で辺りを探るかの様に森の中を見る姿が、近くにシャロンちゃんが居るといふ事をボクに教えてくれるのだ。

しかし、やや小さい声で呼ぶけれど、一向に姿を現せないシャロンちゃん。

アーシヤに似にて気配けはいを消すのが上手いから、ボクも全く解らないし、探すのが大変かも……。

そんな事を思っていた矢先である。

よしっ、見つけたっ！

ふと木の陰かげに隠れながら背をつけ気配を殺しながら休んでいたシヤロンちゃんの姿を見つけ出したのは。

静かに息を吐はきながらも、青と黄色の二つのルマの輝きを見せるシャロンちゃんの姿からは、くつきりと疲労の色を色濃く見せているのが見て取れる。

ボクはゆっくりとあの二人に気取けどられない様にシャロンちゃんへと近づき、

「シャロンちゃんっ」

小さな声で呼びかけた。

「お兄様っ！？ 良かった、無事だったんだあ……」

「うん、なんとかね」

と、ニツコリと微笑ほほえみ返したボクにシャロンちゃんは、

「お兄様つ、もうあんな事は二度としちゃいけないからねっ！」

真剣な眼差しまなざしを向けるのである。

え？　もしかして怒って……る？　シャロンちゃん??

その眉間みけんにシワを寄せてちよっぴり怒っている様なシャロンちゃんの表情に、何処かたじろきそうなボク。

すると、次の瞬間には、

「でも本当に良かったあ……。私だけが助かってお兄様に何かあったらつて、心配だったんだあ」

愁眉しゅうびを解いた表情を見せるのだ。

「ゴメンね。でもボクもシャロンちゃんが無事で良かったと思うよ。まー……でも、これから二人共無事で居られるかって言うのは解らないけどね……」

そう言つて、視線を木の間からノヴァニスへと向けるボク。

どうやってここから逃げようかな？　このまま隠れて行けば見つ

かりはしないよね？　……多分たぶん。

何処どこにも根拠こんきょが無い事に頷うなずいてみせるボクに、

「大丈夫だいじょうぶ。私が何とかしてみせるよお」

ニツコリと微笑ほほえんだシャロンちゃん。

けれどその姿は、二つもルマを発動させて疲労を隠せないままである。

シャロンちゃん……そのアーシャと同じルマを輝かせてるって事は、また身体に無理むりをさせてるんだ……。

ね、ボクは知ってるよシャロンちゃん。そのルマも輝きを消した後に激しく体力を奪われちゃった事。

それは、シャロンちゃんのお母様のフローラ様から貰った『蜜星玉』っていう回復薬を飲む前に、輝いていたルマを消した直後に見えたのだ。

大丈夫？　というボクの問いに『大丈夫だよお』と何気ない声で返して飲み込んだけれど、輝きを失った瞬間に物凄ものすごいい汗の量と身の震えがあつたのをボクは見逃みのがさなかつたのだ。

肉体強化のルマらしいけど……どうやらその使用した後の反動も大きいらしい。

それにシャロンちゃんは……フローラ様の『激しい戦闘^{せんとう}が出来る様な身体じゃないんだから、身体が耐え切れなくなつてボロボロになるんだからねっ』という言葉通りならば、同じルマを持っているアーシャと比べても、もっと重い負担^{ふたん}になつてゐるのだらう。

でも、何故^{なぜ}だらうね。ボクじゃ何にも出来ないって身に沁^しみてるせいか、とても辛そうなのに、そんなシャロンちゃんに頼るしかないんだよねって頭の何処かで理解してるんだ……。

ボクがシャロンちゃんを守らなきゃっ！！

そう激情^{げきじょう}にも似た想いもあるのも事実なのに……想いと実力が伴^{ともな}つてなくて悔しいや。

「うん。でも、出来るだけ無理しないで行ける様に、二人で考えようね」

シャロンちゃんの微笑みに、優しく頷いて返したボク。
無智^{むち}と非力^{ひりき}なのが、ボクの心とシャロンちゃんを苦しめてるんだ。ぴとつ。

やんわりと熱を帯びた少し小さな手が、そつとボクの手の上に重なつた。

「うん、大丈夫だからね、お兄様」

そうニコツとしたシャロンちゃんの瞳^{ひとみ}が、まるでボクの心を見透^{みす}かす様に優しく語りかけていたのだ。

触^ふれられたその個所^{かしょ}が、何故か異様^{いよう}に熱く感じるボクは、

「そ、そうだつ。ボク、ちょっとだけあのノヴァニスっていう機体に乗っている人と面識^{めんしき}があるから、それを利用して引き付けておくから、その間にシャロンちゃん逃げてよっ！」

ブワツと浮かんだ恥^はずかしさを隠す様に、思い立ったアイデアを提案する。

な、何だつたんだらう……今の。

と、そんな事を思つた次の瞬間……。

「言ったよ……そんなの嫌だからねって、お兄様」

重ねた手でボクの手を握って引いた反動と共に、ボクの胸に抱きついたシャロンちゃんは、ポツリと涙で湿った様な声を漏らしたのだ。

雨で濡れたせいで、服の上から直接シャロンちゃんの小さな身体と体温が伝わって来る。

雨で少し冷えつつも、確かに伝わる温もりがあった。

え、え。えっ!?

「あの時、別れ離れになった時からすっごく心配だったし、胸が痛かったんだよお……お兄様。あんなの一度だけで十分だもん。だから……」

そのまま真っ直ぐ顔を上げて、戸惑うボクを見上げたシャロンち

ゃんは、

「絶対に困とかそうゆうのは反対だからねっ?」

ニツコリと優しく微笑んでボクにクギを刺したのだ。

可愛い……。
可愛い……。

ふと浮かんだ言葉は、ソレだったボク。

今まで一人っ子で育ったボクに、もし妹が居たとしたら同じ様にこんな感じを抱くのだろうか?

まー……父親が父親だし、こんなに素直には育たないかも知れないけれど……ねー。

「つと、あははは。これはアーシャお姉ちゃんには秘密ねっ、お兄様」

フツと離れ、照れ笑いを浮かべながら言うシャロンちゃん。

そんなシャロンちゃんの頭をスーと撫でて、

「うん、解かった」

微笑み返したボク。

さて、これから本当にどうしようか?

どうやったら二人で一緒に逃げれるのだろうか?

と、無い頭で一生懸命考えてると、

「あ、そう言えば、体力や魔力が少ないからあんまり動けない様な事を言ってた様な……」

ふと思い出して零れたボクの言葉。

その言葉に一つ唸ったシャロンちゃんは『よしっ』と呟いて、一瞬にて何かが浮かんだ様である。

「フローラお母様がここに居たらきつと反対すると思うけど……。お兄様、分の悪い勝負って嫌いな方？」

何やら考えがあった上で、問いかけたシャロンちゃん。

その言葉からすると、きつと色々考えた故に出た答えが『絶対に見つからずに逃げ切るのは無理かも知れない』という事なんだと解かったボクは、

「全然。その勝負と一緒に居るのがシャロンちゃんなら、ボクはそんな勝負も嫌いじゃないよ」

笑って返した。

「お兄様って顔に似合わず、意外にギャンブラーなのかも」

クスクスと可愛く笑いを零しながら言うシャロンちゃんに、

「そう？ その勝負にこんな可愛い女神様がお付なら、それは最高に絶好のチャンスだと思うよ、ボクには」

ニツと一つ笑みを浮かべて返した。

すると、シャロンちゃんは、

「いいなあ、やっぱり」

そう柔らかに言葉を零すと共に、また一つニツコリと笑みを浮かべたのだ。

「ン？」

「うつん、何でもないっ」

首を軽く傾げて問いかけると、軽く横に首を振って応えたシャロンちゃんは、それより……と、言葉を続け、

「これからの作戦ねっ、お兄様。作戦は簡単で、私とお兄様は一緒に魔法で飛んで、ひたすら『奏魔人』から逃げるの。」

でも、ただ逃げるんじゃないくて、相手を挑発しながら出来るだけ

遠くへ逃げる事が重要っ」

思い浮かんだ賭けの答えをボクに説明する。

あ、なるほど……。

ボクはその作戦の真意に気がつき、頷いたのだ。

それは、ただでさえ体力や魔力を費やすらしいあのノヴァニスから、大量のエネルギーを奪う事である。エネルギーを奪い易くする為と作戦の真意に気が付かない様に、挑発しながら動き回り、相手に冷静さを失わせて、そして行動不能までエネルギーを使い切らせるという、車で言う『ガス欠』にさせるのがこの作戦の真意なのだ。

……ただ、それには一つ問題がある。

「心配は要らないよぉーお兄様っ。私なら、さっきのお兄様の言葉で元気いっぱいになったからねっ」

ふと視線が物語ってしまったのだろう。シャロンちゃんに向けて直ぐ、何も訊かぬうちに答えが返ってくる。

そう、問題はシャロンちゃんの身体である。

二人分の体重を抱えつつ飛行魔法のコントロールと、相手への挑発に相手からの攻撃の防御を一人で三役をこなさなければいけないのである……。

「このまま地上じゃダメかな？」

心配して言ったボクの問いかけに、首を『ううん』と横に振って、「地上じゃ、このぬかるんだ土で早く走るのは大変だし、それに、もうこれ以上攻撃魔法で森さんに被害を与えたくないから……ねっ」そう苦笑いを一つ浮かべるシャロンちゃん。

本当に優しい女の子である。

「そっか、解かった」

返事をしながら、シャロンちゃんの言葉に心が温かい気分になるボク。

すると、シャロンちゃんは雨や泥などで汚れてしまった白のワンピースのポケットから何やら取り出し、

「お兄様、手を出してみて」

と、言われるまま出した掌てのひらに何かを乗せたのだ。

「これはー………？」

「大切な私の誕生石たいせつ セイラルストーンの欠片かけらだよお、お兄様にあげるっ」

「セイラルストーン??」

掌ほに乗せられたのは、プラチナか何かの金属で囲われた、一センチ程ほどありそうな大きさのブラックブルーの欠けた宝石である。

「あー………そっか。私達だけだっけこうゆづの作るのって。」

これは、産まれたばかりの赤子に特殊な石で魔力を吸わせると出来る物でね、それぞれその子の魔力や性質で色や形や硬度じょうども変わるんだ。昔はこれでその子がどんな子どもかを見極めたりするのが一族の仕来りしきただったんだけど、もう何百年も昔にそういった意味では廃止はいしされちゃってて、今では『その子が無事に成長します様に』ってお守りみたいなものになってるのっ」

「へえー………」

へえー………そうなんだ。

と、言う事は、これはシャロンちゃんが産まれてからの大切なお守りって事だよね??

「そんな大切な物なんて貰もらえないよっ、シャロンちゃんっ！」

ボクは慌あわててそれを返そうとすると、

「いいよお、お兄様にならあげても。私も三分の一は持つてるし、残りの三分の一はアーシャお姉様が持つてるものお。それにね、これって大切な人達に持つてもらうとより一層にあげた人・貰った人が幸せになれるって言い伝えがあるから、是非でひお兄様にも貰って欲しいんだよおー」

そう言っつて微笑みながらボクの片手を両手で大切そうに包んで、ゆっくりと優しく押し返したシャロンちゃん。

「これから大変な事をするから、お兄様にも大事だいじで居て欲しいから、それも込めてね」

「………うん、解とった。ありがとう、シャロンちゃん。大切にするね」

「うん！」

ボクの言葉に頷き、よしつ。と、一つ気合を入れ、

「それじゃ行こう、お兄様」

差し出したシャロンちゃんの手を、ボクはセイラルストーンをスカートのポケットにしまつてから、

「エスコートをお願いしますね」

と、まるで女の子の様にスカートの裾すそを摘つまんで振舞ふりまつて握にぎり返した。

それは、これから厳しい戦いに望むなんて微塵みじんも感じさせない様なそんな空気を、ボク達からは醸かもし出していたのかも知れない。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第二十九縁『ボクと彼女と誕生石』
セイラルストーン

第二十九縁。(後書き)

お疲れ様でした。よくぞここまで読んでくださいました(輝)。本当に更新が遅くなってすみません(滝汗)。途中書けなくなったりとかそうゆうがあつたりで中々書き進められなくてこんな間が空いてしまいました(ガツクシ)。本当、楽しみにしてください。た方が居りましたら、本当にごめんなさい……。出来るだけ頑張ろうかと思いますが、もしかしたらまた遅れるかも知れません。それでも良かったら、また読んでもらえると嬉しいなって ジャム猫は思っております。

次回の更新は、予定では二週間後くらいにはと思っております。また少し遅れてしまったらごめんなさい。それでも「いいよ」って言うてくださる方は、どうか楽しみに待っていてくださいね(感涙)。

では、またブログやこの後書きなどにてお会い出来る事を楽しみにしていますね。出来たら(中傷意外の)コメントなどを貰えると凄く嬉しいので、良かったらコメントしてみてくださいねbbではまた〜^^

第三十縁。

重い^{まぶた}瞼を薄^うつすらと開けた先に、ふと懐^{なつ}かしい姿がぼやけながらも目に浮^うかんだ。

何処^{どこ}か見慣^{みな}れた風景の先で、一人の女性が洗濯物^{たたくもの}を叩^{たた}いて干して
いる様である。

あれ……。

お母……さん？

すると、女性はこちらを向^むいて、ニツコリと笑^{わら}っていた様な気が
したボク。

……何だか、温かくて気持ちいいな。

ふと、そんな事を思い浮^うかびつつも、重い頭^{かぶ}がボクを静かに元の
場所へと意識を静めるのだった。

よ……ち……の。

よう……ちどの。

ふと、ボクを呼^よぶ様な声が、
「妖一殿^{よういちどの}？」

そうクリアに聞こえた。

それは、聞き覚えのある声に何処か似ているのである。

揺^ゆら揺^ゆらと揺れる海の中を漂^{たたよ}っていた様な安^{やす}らぎから、水面^{みなも}へと
射す一辺の揺^ゆらめく光へと引き起こされたボクは、意思とは抵抗^{ていこう}
する瞼^{まぶた}をゆつくりと開ける。

するとそこには、

「目覚^めめたかの？ 妖一殿^{よういちどの}」

腰^{こし}まで伸びた赤いロングストレートの髪^{かみ}、プルンとした唇^{くちびる}に綺^き
麗^{れい}に整^{ととの}った顔立^{かおたち}ち。鮮^{あざ}やかな花びらを散^ちりばめつつも白^{しろ}を基調^{きちょう}とし
た大人の綺麗^{きれい}な和服姿の美少女が、ボクの目の前に居^いたのだ。一見^{いっけん}
それは言葉遣^{ことばづか}いからもボクの良く知る空ちゃんにそっくりなのでは

あるが……ただ『違う箇所』がいくつも見受けられるのだ。

まず一つ目に、ボクを呼ぶその声が、とても『空ちゃんの声』とは違う事。二つ目に、その白の和服姿からはみ出さんかとばかりに胸元が覗けてしまったりする胸に、それとは対照的にキュッしたウエストの細さが妖艶なスタイルを更に強調している事。そして最後にボクの目の前にいるこの美少女は、ボクよりも年上の推定17・18歳、大人びている容姿から下手をしたら20歳くらいには見えるお姉さんだという事である……。

一体……誰？

凄く知っている様で知らない気がするんだけど……。

戸惑うボクに、目の前の女の子は、

「うーん……どうやったらこんな風になるのかのお……」

空ちゃんと同じ口調で、ボクをあちらこちらと観察する彼女。

「確認してみるがの、妖一殿で間違いはないじゃろつかのう？」

その腑に落ちていない問いかけに、ボクは「うん、そうだけど……」

……と返してみる。

一体何がそんなにおかしいんだろう？

と、言うか……この人は一体誰なんだろう……。凄く空ちゃんに似てはいるけど、大人っぽ過ぎるし……。

うーん……。

なんて、お互いを見ながら共に首を傾げて考えるボク達。

うーん……一体……。

と、言うか、ここはそもそも何処なんだろう！？

確かボクは……森の中でシャロンちゃんと居たはずじゃあ……。

辺りをゆっくりと見回すと、そこは何処か普段ボクが使っている部屋の様にも見える。

何故、この『様にも』というのかと言うと、確かに部屋の構造やベットの位置などは僕の知ってる部屋なんだけれども……置いてある物がボクが知ってる状態よりも古びていたり、新しくなっていたりするのだ。

「ところで妖一殿？ その服装は趣味か何かかのお……？ 気にはなっていたんだけどもの」

辺りを見回していて、天井に何かが落下して来た様な大きな穴が空いているを発見した時、ふと問いかけられたボク。

え？ 服って？？

問われてみて、目覚めてから初めて自分の姿を見たボクは、思わず、

「良かったー……ちゃんとある」

今まで存在してはいた気がするけど、存在を確認出来なかったものを確認してしまう。

そう、シャロンちゃんの魔法で女になっていた……というか、女の姿にさせられていて、感覚がほとんど無かったのだ。

「ん？ 無い方がいいのならちよちよいと変換装置でも作ってあげようかの？ 中性的だからそんなにイジらなくても直ぐにー……」

「いえ、結構です、是非とも遠慮をさせていただきます……」

恐ろしい事を何気ない顔で言い放つ彼女の言葉を遮る様に、ボクは彼女の提案を却下させていただく。

この性格とこの口調……やっぱりこの人は『空ちゃん』で間違いない無さそう……。

と、なると、ボクはどうやら元の世界に戻れたっていう事なのかなあ……。それにしても何だか違和感を覚えるんだけど。

そうボクが悩んでいたそんな時だった。

コンコンッ。

部屋のドアをノックする音が聞こえたのは。

「お。帰って来たみたいじゃのう」

「え？ 帰って来たって？？」

大きい空ちゃんの言葉に、頭の中にいっぱい疑問符が浮かんだまま問いかけるボク。

すると、

「ごめんなさい、お留守番ありがとうございます空ちゃん」

あれ……この声って何処かで確か。

なんて、今度は聴き覚えがある声と共に部屋へと入って来た人物に、ボクは驚かされたのだ。

黒く綺麗でしっとりとした背中まで伸びた長い髪に、優しい笑みと端麗な顔立ちをした、大人の美しさに磨きをかけた17・18歳くらいの淑女が、部屋に入って来たのだ。

「……え？」

お互い顔を見るや否や、驚きのあまり身体がそのまま硬直したかの様に動けないのである。

そこには、僕の知ってるよりも大人びていて、ますます綺麗になった姿のゆきめさんの姿があった。

「よう……いちさん??」

やっと出た、たどたどとした問いかけに、

「ゆきめ……さんだよね？」

ボクもまた問いかけ返した。

お互い、今見ている光景に信じられないという顔をするのだった。

「はい、もういいよ妖一殿。ありがとう」
ポンッ。

という、軽い音を響かせて、ノズルの先に付いた小さなトイレのスポン状の器具をボクの額から取り外す大きい空ちゃん。

とりあえず、何が何だか解らないボクは、解る範囲で説明をしようとした時に空ちゃんに制され、あつという間に良く解らない機械を作り上げて、ボクの額に当てていた。

と、いう状況から開放されたボク。

「なるほどのお……。あの『J・キャット理論』がこんな形で立証されるなんてのう」

ふむふむ。と、ジュータンに座るボク達を置き去りに一人納得する空ちゃん。

「えっと……ごめん、空さん。何が何だか良く解らないんだけど

「……」

一人頷き納得する大きい空ちゃんに、苦笑にがわらいを浮かべながら問いかけた。

「『空ちゃん』って呼んで、妖一殿」

と、ニツコリ。

あー……はい。

心の中で頷うなずいたボクは、一つ咳せき払いをして、

「……空ちゃん、一体何がどうなってるの？」

再び問いかけ直した。

すると空ちゃんは、天才超科学者の顔になり説明し始める。

「そうじゃの、何から話そうかのお。今、ちよつと妖一殿の記憶を見させてもらった事か考えて言える事だけは話してみるかの？ まず、いろんな疑問や意見があると思うし、そこから話そう。

そもそも何故こんな事が起きたのかと言うと、まー……記憶を覗のぞく限り完璧かんぺきな答えは出せんがの、きつと『特殊異空間保存装置』の故障こしょうが原因かも知れんのお」

って、何だっけ……。

言われて、パツと出ないボクの頭の中。ボクの頭の中を見たにしたら、見られた本人が解らないっていの、どうゆう理屈りくつなんだろう……。

「ふむ。ほれ、最初ワシが来た時に壊こわれた家を一瞬で直したじゃろ？ まあ『直した』と言うのは大きな語弊ごへいがあるけれども、解りやすく簡単かんたんに言えば、新しい部屋とかを作った装置の事じゃよ。

で、その装置がさっき言った『特殊異空間保存装置』って訳で、今回の事を引き起こした原因とも考えられそうじゃのう。何がどうやってそんな事を起こせたのか解析かいせきは出来できそうにないから、言えんけどものお」

そう言われ、ふと思ひ出してみるボク。

あー……。もしかしてアレかなあ……原因って。

思い当たる事を思ひ出したボク。

「次に、妖一殿が居た世界についてじゃ。妖一殿が居た世界は『Ｊ・キャット理論』で言われる『平行異次元空間世界』と考えていいかも知れんのお」

「キャット理論?? 平行??」

プシュー。

「あははは、いい壊れ具合で面白いのお。」

ま、この『Ｊ・キャット理論』というのは、Ｊ・キャットと言う人物が提唱した理論の事でお。こんな面白い話で『もしもの瞬間だけ空間は分岐し、次元世界は存在し、今生きているこの世界は、多くの異次元と平行して共存して成り立っている』というのじゃよ。一度はとある学会に持ち上がったが、それを立証するものが無く、あまりにもとんでも過ぎる話から誰も相手にしなくなった理論なんじゃがのう。まさかこんな形で立証されるとはお」

えつとー……。

何でしょう? 意味が解るような全く解らないような……。

「こうゆう事じゃよ」

すると、そう言って空ちゃんは、近くに転がっていた小さな消しゴムを拾い、そしてボクへと唐突に放り投げたのだ。

「わつ。えつ?」

放り投げられた消しゴムをキャッチしたボクは、意味が解らず空ちゃんに首を傾げてみた。

「今、妖一殿はワシが放り投げた消しゴムを受け取ったじゃろ?」

「う、うん」

「でも、受け取るか受け取らないかコンマの世界で迷ったハズじゃ。そのコンマの思考の結果出来た一つの世界がこの『今』という時が流れるこの世界。そしてコンマの思考の結果受け取らなかったりした多次元世界がその『平行異次元空間世界』という事じゃよ」

へー……。

うん、半分解った様な解らない様な。でもさっきよりは理解は出来た気がするな。

「妖一殿がさつきまで居た世界は、簡単に言えば、その様々な『もしも』が集まって出来た一つの時空次元って事だと思っのう。」

……そして、ここまで言えば解ると思うがの、今、妖一殿が居るこの『今』も、元居た世界と比べたら『異次元空間世界』じゃよ。まー……何の影響が解らないけども、平行とはまた違った未来の世界だろうけどのう」

あ、それは何となく解ってた気がする。

だって、ゆきめさんの姿や空ちゃんの姿も、全然ボクの知ってる姿より成長した姿だったしね。

そっかー……未来じゃ、二人共こんな綺麗になるんだあ。

「通りで妖一さんが、昔の頃の妖一さんの姿なんですな」

そうニツコリと微笑んで納得するゆきめさんの姿。

「あははは……でもきつとこんな『メイドコスプレ』なんてはしてなかったとは思っけど……ね」

苦笑いを一つ浮かべるボくに、大きな空ちゃんは意味深に、

「んにゃ、一度昔に実験でー……」

と、全部は言い切らぬままあえて口を噤む。

あー……そうなんだ。

全部は聞かぬけれども、なんとなく読めたボク。

きつとこの世界での過去で、空ちゃんの何かしらの実験で女にされちゃったんだろっうなあ……そんなでもって何処からか調達したメイド服を着せて遊ばれたんだなあ……あはは。

「でも、とても可愛らしくて素敵でしたよ、妖一さん。だって、何年も前なのに、今でも昨日の様に鮮明に覚えてますから。」

だから、服装は少し違いますが、もう一度この姿を見られて嬉しく思います。その事件の後『もう二度と着ないっ！』と怒ってしまったって着ては貰えませんでしたから」

クスクスと、まるでそのままの姿が絵画か何かにでもある様な、素敵な小さな笑みを零すゆきめさん。

「何なら、その服を持って来てあげようかのう、妖一殿」

フツと、危あぶない超科学者の瞳ひとみになった大きい空ちゃんにボクは、「いえ、結構です。この服だけで十分過ぎてますので、辞退じたいさせていただきます……はい」

即行そっこうで遠慮をさせてもらう。

「所での……」

「着ません」

キツパリ。

ボクはまた勧められる気がして、空ちゃんの言葉が終るより先に遮さえぎって断りの言葉を言う。

「……妖一殿」

「はい、スミマセン……」

いつもの超科学者の瞳に戻ったの見て、透すかさずボクは謝った。

この瞳の時には大半がマジメな話だからである。

「で、どうするかの？ このままここに居る訳わけにもいかんだろうし」

そう。大きい空ちゃんの言葉通りに、何時いつまでもこの世界に居る訳にもいかないのだ。

ボクは還かえらなくちや行けない。

「うん、ボクは還るよ。ここに居ちゃ、この世界のボクにも、色々な人にも迷惑めいわくがかかるし戻らなきゃね」

でも、一体何処に？

いや、そんな考えるまでも無い。

「何処の世界に戻るのかのお？ 妖一殿」

問いかけられて、ボクはハッキリとした声で、

「この世界に来る前に居た、あのアーシャやシャロンちゃんが居る世界にね」

そう告げたのだ。

「向こうの世界にやり残して来た事だつてあるし、やらないといけない事だつてある。それに、空ちゃんもあの世界にまだ居ると思うし一緒に元の世界に戻らなきゃね」

「そう言うと思ったから、こちらの世界に来た衝撃しょうげきが何かで少し壊

れていたみたいだから、これを直しておいたよ、妖一殿」

そうボクに手渡されたのは、向こうの世界で空ちゃんに作ってもらった、銀色の天使の少女が翼を大きく広げた様を模ったペンダントである。

「え、いつの間に……」

「たった今。しかも強度を50%上乗せして」

ニッコリと、キッパリと告げる大きい空ちゃん。

流石は未来の空ちゃん。相変わらずの超科学者だあ……。

「流石は昔のワシじゃのう。昔と言えど、精巧に作ってあって出来の良さに惚れ惚れしてしまいそうじゃのお」

と、自画自賛する所も何処と無く空ちゃんらしい。

「にしても……どうやってその世界に送り戻すかの……。もう一度装置を壊せばいいかも知れんが、それじゃこの世界でも同じ様な事が起こりかねないしのお……。」

それに、例え同じ様に『次元トンネル』の様なものを作り出せても、同じ時空にどうやって戻すかの……。『

天才超科学者の空ちゃんを持つてしても、どうやら戻るのは至難の業らしく、唸り声を上げる。

確かに、大きい空ちゃんの話からすれば、何とかという装置が壊れた末の、偶然の産物があの世界への転移な訳だから、それをもう一度完璧に同じ様になる様にするのは難しいかも知れない……。

「やっぱ無理……かな、空ちゃん？」

「そうそう簡単にワシが『無理』だなんて言うても？ 妖一殿」
鋭く恐ろしい瞳に変わった空ちゃんの視線に、フツと息が詰まるボク。

すると、次の瞬間には表情が元に戻り、

「まあ、大丈夫。この『天才プリティー美少女 空ちゃん』にお任せあれっ」

懐かしい手振り^{てぶ}と、ちよつと『プリティー不思議少女』からグレードアップした台詞^{せりふ}と共にし、そしてピースサインを見せる空ちゃん。

ん。しかも……昔には無かったものがあるせいか、大きく揺れていたりもする……。

「う、うん」

「小一時間くらいここで待っておれ。ワシはちよいと研究室に籠^{こも}つてくるから」

と、ニコツと微笑^{ほほえ}んで、物置スペースとしてある場所の襖^{ふすま}を開けてから、例の小さな小窓が付いたオレンジ色の扉の中へと姿を消して行った大きい空ちゃん。そう、ここが研究室などの空間へと繋がっている扉なのである。

しかし……ニコツと微笑んではいたけれど、瞳にはメラメラと燃える様な物を感じたのは、きっとボクだけだったのかなあ……？

ポツリと思うボクに、ピトツと寄り添う隣に座っていた大きなゆきめさんの姿。

えっと……。

懐かしい様な、それでいて更に心をくすぐる柔らかい香りと、脳をコンマの世界で激震^{げきしん}させる腕の感触に、ボクは頭の中で言葉が浮いた。

何か言わないと変に思われちゃう……なんて思ってるうちに、

「妖一さん」

と、ふわっと浮く様な綺麗な声で呼びかけられちゃったボク。

「は、はいっ？」

一つ、高く跳ね上がった鼓動^{こどう}と共に返した声が、そのまま表に表れ出してしまう……。

そんな声に、一つクスツと上品^{ひんぷん}に笑って大きいゆきめさんは、「妖一さん、大好きです。いいえ、今も、この頃の妖一さんも愛しています。そしてこれからだつてずっと変わらず」

ゆったりと心地よく流れる様に、気持ちを一っぱいに込めた声で告白したのだ。

あ……。ボクの知ってるゆきめさんだ。

ゆきめさんが放つ独特^{どくとく}の空気に、ドキドキしながらもそう感じた

ボク。飾らないし、真っ直ぐな気持ちが伝わってくるのである。

でも、ボクは……。

「あ。いいえ、別に妖一さんからの答えは要りません。私の気持ちのままに伝えただけですから」

フフフツと、戸惑うボクの顔を見て優しい微笑を見せる大きいゆきめさん。

何処か、ボクが知ってるいるゆきめさんより、大人っぽさが増してる様な気がするボク。

それは「何処が？」なんて聞かれても上手く答えられないんだけど……。敢えて言うなら、ゆきめさんが持っているゆったりとした独特の空気に、大人の磨きがかかった様である。

ボクは一呼吸の間を置いて、

「ごめんね、ゆきめさん。この世界のボクは『答え』をもしかしたら見つけてるのかなあ……？」

ふと、問いかけてみた。

どれくらいボクが居た頃から時が経って居るのか、どの様に出会いなどが変わってるのか解らないけれど……もしかしたら、この世界のボクはこのボクが迷っている『答え』を導き出しているかも知れないからだ。

すると、一呼吸を置いてニコツと微笑んだ大きいゆきめさん。

「はい、きつとその『答え』はコレだと考えられます。けれど、妖一さんは、それを本当に聞きたいんですか？」

そうボクは問いかけ返されたのだ。

本当に……？

……。

……いや、そうじゃないんだと思う。

そう、きつとボクが知りたいのは答えの『結果』が知りたいんじゃない。その『答えまでの考え』が知りたいんだと思う。この世界でそう決めた答えまでの考えを、ボクは参考にしたいのかも知れない……。

あ、そっか。そんなの参考にしたって仕方ないんだ。

ボクは、そこまで考えて、ふと思った。

ここは『今のボク』からあった色んな可能性を選択して行った、
いっぱいある『もしもの世界の中の一つの世界』でしかない事を。

さっきの大きい空ちゃんの説明から……きつとその様な事何だと、
曖昧あいまいだけど多分たぶんそう思う……。

そうなると、これは『未来のボクの選択』なのに、今はもうすでに『もしもの過去の選択』なんだよね。だからまだ『今のボク』にはこれからいっぱい選択肢があつて、まだまだ変わり様があるのだから、それほど参考にはならないって事を。

「ううん、やつぱりごめん。いいや、言わなくても。だって『今のボク』が考えて出さなきゃいけない事だしね」

ニッコリと笑ってボクは、大きいゆきめさんに返したのだ。

すると、大きいゆきめさんは嬉しそうに笑って、

「その方がやつぱり妖一さんらしくて、大好きで愛してます」

グツと優しくボクの左腕を抱きしめた。

と、言われてもボクには『ボクらしい』なんて解らないんだけどね。

「きつと、妖一さんの世界の私も『今の私』が思う様に、大好きだと思います」

そう、昔の事を懐かしむ様な、今も変わらぬ気持ちに乗せた様な言葉で告げたのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第三十縁『ボクと戸惑いともしもの未来』

第三十一縁。(前書き)

っと、言う訳でやっところ第三十一縁ですっ!! また今回も漢字へのルビ振りが多いんですが……。いつもの事なんで、ご了承の程のお願いします(汗)。

では、もおゝずずいと本編へ進んじやってくださいませ、ご主人様っ!(↑お?w)

第三十一 縁。

「それは何ですか？ 妖一さん」

あれ？ 何だろう？

と、違和感からボクがスカートのポケットから取り出したものに、大きいゆきめさんが、ふと問いかけた。

それは、向こうの世界でシャロンちゃんに貰った、プラチナか何かの金属で囲われた、一センチ程ありそうな大きさのブラックブルの欠けた宝石である。

「えっと、確かセイラルストーンとかいう宝石で、向こうの世界の女の子から貰った物なんだ」

「セイラルストーン??」

首を軽く傾げて問いかけるゆきめさんに、

「何でも誕生と同時に自分の力をこの石に吸わせて作る、世界で一つのお守りみたいな物らしいけど、昔はコレでその人物の将来を見て判断を下してたらしいんだ。その子はコレを三つに分けてあつて、その一つをお守りとしてボクにくれたんだ。何でも、コレは他人にあげると、あげた人・貰った人に一層効果を強くしてくれるんだって」

そう、向こうの世界の事を少し話してみるボク。

すると大きなゆきめさんは、まじまじと不思議そうな顔で宝石を覗き込んでから、やや一呼吸の間を置いて、

「妖一さんは向こうの世界でも、誰かに大切にされてるんですね」

そうニツコリと告げたのだ。

え……何かヤバい事言っちゃったかなあ……。何だかゆきめさんから、ふと黒いのが漂ってる様な気がするんだけど……。

なんてボクが思っていたその時、

「ほお……。それがのお」

ボクと大きいゆきめさんとの間から漏らす空ちゃんの姿がそこに。

音も無くスツと後ろに現れた空ちゃんの姿にボクは、思わず仰け反そってしまふ。

本当、向こうの世界でもそうだったけど、神出鬼没しんしゅつぎぼつな空ちゃんだよね……。

「ど、どうしたの空ちゃん？ 確か小一時間こいちじかんくらい研究室に籠こもるんじゃないかった……？」

「その途中うちゅうじゃよ、妖一殿よういちだん。今さっきの妖一殿の記憶を調べてヒントを探してたら、ふと閃ひらめいてのう。半分は何とか出来できそうだったじやが、後の半分位何ともなかった所に思いついて、実物をとনাあ」

そう、ボクが持っている宝石をまじまじと覗き込みながら、説明する空ちゃん。そんな空ちゃんの姿は、すでに実験などで着ている白衣姿である。

「このセイルストーンに何かあるの？ 空ちゃん??」

「おおありじゃよ、妖一殿」

ニコツと、微笑ほほえむ空ちゃんの顔には、確かに何かが見えていた様にも、ボクには思えたのだった。

「そうじゃのお……。例えて言うなら、出口がいつぱいある巨大なトンネルの道しるべって所かのう」

と、空ちゃんはボクから受け取った宝石を手に乗せながら告げたのだ。

「巨大トンネル？ 道しるべ??」

ボクの問いかけに、面白おもしろそうな顔をして説明する空ちゃん。

「うむ。異次元空間世界の間には一つの次元空間が存在しているんじゃないよ。それは、ほれ、妖一殿がこの異次元空間世界に来れたのがその証拠しやうこだしのう。その次元空間を仮に『次元トンネル』とすると、出口は、もしもの世界『異次元空間世界』になる訳わけじゃ。もちろん、異次元空間世界が出口なんじゃから、出口の数も多く、トンネルもまるで迷路めいろの様になってると考えられる。

そこで出番なのが、二つの異次元空間世界に共存するこの『セイルストーン』で訳じゃ。この石を使えば、迷路みたいな次元トンネルを一つに結ぶ事が出来るのじゃよ」

へ……。

そう、他人事の様に首をコックリとさせるボク。よく解った様な、それでも無い様な、中途半端な理解力である。

「あのー……差し出がましいかも知れないんですけど、一ついいですか？ 質問しても」

ボクがボーっとする中、話を理解した様な大きいゆきめさんが、手を挙げて質問をもちかける。

はい、どうぞ。なんて言われ、まるで教室の中に居る教師と生徒の様な空気が漂う中、大きいゆきめさんは、

「あの、異次元空間世界は『もしもの世界』なんですよね？ と、なると……このセイルストーンを受け取った妖一さんや、これを差し上げた方も沢山存在するし、このセイルストーンも同じ様に沢山存在するしてるハズなんじゃ無いでしょうか？ なので『二つの世界を』とは言い切れないんじゃないでしょうか？」

そう質問をしたのだ。

もしもの世界がこの世界だとすると、確かにここへ来たボクは他の異次元空間世界にも存在しているかも知れない。そしてそれは、ボクが居た世界のシャロンちゃんやアーシャ達もいっぱい存在している事になる。

だとすると……どうやって『今のボク』が居たあの世界へと特定して繋げるのだろう？

大きいゆきめさんの言葉から、ふと疑問が浮かぶボク。

すると、俯きながら肩を震わせて「ふっふっふっふ」と、不気味に笑う空ちゃんは、次の瞬間にはパツとこちらを見て、

「いい所突いて来たのお、ゆきめ殿。それを解決するには、この子に蓄積された記憶を手繰って行き、過去の異次元空間世界のこの子と共鳴させればいいのじゃよ」

「記憶って……物にもあるのっ!？」

空ちゃんの言葉に思わず驚いたボク。

「ある。ほれ、サイコメトリーとかいうのを知ってるかのお？ あれは物に宿る人の残留思念を読み取る事で色々な事件解決などをしていくじやろ？ それと似た様に、物には記憶媒体の様なものが人の目や超光学電子顕微鏡では見えぬ粒子状で存在しておっての、それを手繰れば、例え異次元空間世界がいっぱいあるうが、この子の記憶に残っている異次元空間世界は一つだけという事になるのじやよ」

と、ピースサイン一つしながら語り切った空ちゃん。

それが真実なら、本当に凄い事である。

物にも『記憶』が存在する事自体が、ボクの知る世の中では新発見であるのに、それを当然の如く言いのけてしまう空ちゃんにも、やっぱり驚かされた気がするのだ。

ボクは空ちゃんの話しに感心しながら、ん？ と、ポツリと引かなかった。

「あれ？ あの空ちゃん。記憶を手繰ればいいのなら、さっきボクの記憶を覗いたんだから、そこから手繰っていけばいいんじゃないの?? わざわざこのセイラルストーンから記憶を抽出させなくても済むと思うし……」

そう。過去の記憶でいいのなら、さっきやった事から手繰ればいいんじゃないかなって思ったのだ。

しかし、そんなボクの問いかけに空ちゃんは口をすばめて「ブッブー」と不正解を告げる。

「共鳴させて道を繋げる。と、言う事はどうゆう事が解るかの？ 妖一殿？」

「えっとー……共鳴させるという事だから、共に同じ様にさせる必要があるって事？」

急に振られたボクへの質問の答えに、ニコツと微笑んだ空ちゃんの姿。

「そうゆう事じゃ。では、ここでYESかNOの二択問題じゃ。今ここに居る妖一殿は、過去のあの世界に居た妖一殿と全く同じじゃろうかのぉ？」

え???

いやー……うん。過去は過去だし、全く同じじゃないから答えは

……

「NO。だよね？」

恐る恐る答えたボク。

「正解つ。そう、妖一殿は生きた細胞を持つ有機質で、全く同じでいる事は出来ないのじゃよ。共鳴させるにはほぼ全く同じじゃなくてはいけない。この無機質であるセイルストーンなら過去の状態に近づける事なら出来るという訳じゃのう」

実際のボクにとつては、然程大きな変化にも思えないけど……変化があると共鳴出来ないって事なんだあ……。

なんて、納得するボク。

しかし、そこに、再び疑問が浮かんだボクは、手を挙げる。

「はい、妖一殿」

と、ニツコリとした顔で、ボクの質問を待ちつける空ちゃんの姿。それは『超科学者』としてなのか、今この場の『教師』としてなのか解らないけれど、凄く嬉しそうではある。

「あのー……別に過去の物と共鳴させる必要も無い気がするんですけど……同じ世界に戻ればいい事だし。それに過去の異次元空間世界に戻るかも解らないから……」

そう言うボクの言葉に「ブブー。はいっ、スーパー空ちゃん人形没収じゃよあ、妖一殿」と、返す空ちゃん。

スーパー空ちゃん人形？　って???

ちよつと変な所で、凄く大きな疑問符が脳内を駆け巡るボク……。「まず、妖一殿が言う『過去の異次元空間世界に戻る』のは出来ると思うぞ。現に妖一殿は過去から未来へと来てるのじゃから、過去から未来へと繋げた次元トンネルがあるという証拠じゃしのお。そ

れに、平行線上の時空で、同じ異次元空間世界に繋げる手段が何処にあると言うのかのう？ その手段が無いし解らないからこの子の過去の状態を作って、その過去の世界と共鳴させよう言うのにのうと、手厳しい指摘。

「ま、過去より未来は沢山あるし、妖一殿が消えた刹那の次の瞬間に戻るのじゃから、文句は無かるう？ 妖一殿？？」

そう手厳しい指摘から軽い口調で言った空ちゃんは、

「と、言う事でしばしの間この石を借りるけど、いいかの？ 妖一殿」

ニコツと超科学者の顔になって問いかける。

「うん、解った。あ、でも、大切なものだから壊したり分解したり構造解析して再構築したりして遊ばないでね……」

「あははは、大丈夫じゃよ妖一殿」

そう、妖しい笑いを残し、セイルストーンを胸の谷間に挟んで持って、自分の研究室へと戻った空ちゃん。

あはははは……する気だったんだあ……。

そんな姿に、ポツリと心の中で零したボクだった……。

「用意はいいかのう？ 妖一殿」

「あ、うん。少し……緊張はするけど平気だよ」

一面真っ白な空間で、ひとり椅子に座るボクに、マイクを通して窺う空ちゃん。

空間にちよこんと浮かんだ、ガラス製の様な小窓の向こう側から、瞳を爛々としている空ちゃんと心配そうな表情で覗く二人の姿が、ボクの前から見える。

辺りが白一面なせいか、何処までが壁で何処までが天井かハッキリしないそんな空間である。

「そう。それじゃ今から解析した過去のデータを入力して次元間引力を発生させるからの。発生するまでしばし時間がかかるから、その間に遺言でもあれば聞いてあげるけど？ 妖一殿」

「遺言つて……縁起えんぎでもない事を言わないでつて空ちゃん……」

ガックシとうな垂うなだれながら、言葉を零すボク。

きつと空ちゃんのお遊びなんだろうけど、隣となりに立っている大きいゆきめさんは、さらに一層心配そうな表情を浮かべてしまっている様子である。

「うむ、冗談じょうたんじゃよ。あんまり緊張きんちやうし過ぎるといけないからリラックスさせようかとのう。まあ、共鳴させるのにセイラルストーンが多少ホツカイ口位くちの熱を持つくらいじゃから心配は要らぬよ。」

空ちゃんがそう言う様に、ポケットに入っているセイラルストーンが、少し熱を帯びて来たのを感じたボク。

ポケットを見ると、小さな光を放ちだしていた。

「妖一殿」

「何？ 空ちゃん」

ふと、問いかけられたボク。

「また昔の妖一殿に逢あえて楽しかったぞ。一緒に面白おもしろそうな世界に行けないのが少々残念ざんねんじゃが、こっちでやる事は山程やまほどあるしのう。

その代わりにメイド姿の妖一殿に逢えたのを儲もつけモノとしておくかのう」

「あははは……」

「妖一さん？」

と、今度は大きなゆきめさん。

「何？ ゆきめさん」

「またお逢い出来てとても嬉しかったです。きつと……これから先色んな事が待っていると思いますが、私の気持ちは先程さきほど伝えた通りですから……」

「うん、解った。ありがとうゆきめさん」

ゆきめさんの言葉に、ニッコリと笑って返したボク。

「ボクも、二人に会えて良かったし、とても嬉しかった。それに、二人共すつごく綺麗きれいになつてて驚いちゃったよ」

「当然当然じゃよ」

ニツと笑ってそう返す空ちゃんに、頬を赤らめさせて微笑む大きいゆきめさんの姿。

やがて先程よりも熱を感じてきたボク。

「よし、異次元空間世界同士の連結に成功じゃよ妖一殿。それじゃ、これでお別れじゃ」

「うん、二人共ありがとう。それじゃ体にも気をつけてね」

「はい。妖一さんもお気をつけて」

「あ、それと妖一殿、そっちの世界のワシに会ったら、ポケットに入れておいたビー玉くらいのボールを渡してくれんかのお？」

そう言われ、もう片方のポケットに手を入れてみると、確かにビー玉位の小さなボールが入ってる様である。

「うん、解った」

「頼んじゃよ。それじゃ、頑張つてらしゃい妖一殿っ」

「さようなら、妖一さん」

窓の向こう側から手を振る二人。

それは、その二人に手を振り返したその瞬間だった。

辺り一面が眩しいくらいに強く光を放ったのは。

ボクはその光に、思わず目を瞑ってしまう。

すると……直ぐ様耳に聞こえて来たのは、風を切る音と激しい雨音の轟音。

眩しい世界から急に暗くなったの感じたボクは、ゆっくりと目を開けると、そこには……。

「お兄様っ!!」

きつと数時間、この世界にしては数秒かも知れないけれど、ボクには懐かしくも思えた人物が、慌てた表情でボクへと手を差し出している所だった。

あ、シャロンちゃんだ。それじゃ、ちゃんと戻れたんだ……良かった。

なんて思った矢先、何故かボクとシャロンちゃんの距離が物凄いスピードで離れていくのに気がついたボクは、辺りを窺い、そして

状況を理解した。

……そうだ、ボク、この森の大陸の崖^{がけ}から落ちてる途中だったんだっけ……。

……………。

あはははははは……。

無事^{ぶじ}にこの世界に戻^{もど}って早々、ボクは置かれてる状況に笑うっきゃないなと思ったのだった。

ボクと彼女と彼女の縁結び記

第三十一縁『ボクとさよならと成^なすべき世界』

第三十一縁。(後書き)

お疲れ様でしたご主人様。(輝)(↑まだ言うか 笑)。今回のお話はいつもより短めでしたが……楽しんでもらえたらなあと思う ジャム猫 です。

今回のお話で近未来の空ちゃん・ゆきめさんの出番は終了となるんですが、どうだったでしょうか？ ゆきめさんならまだ解るかも知れませんが、空ちゃんまでが溢れ出さんかという見事なバストをご披露でしたね。(笑)。それにル。ン三世に出てくる女泥棒さんみたいに、谷間で物を挟むとかまで見せてくれたり。まー……ちっちゃい方の空ちゃん(身長もバストも)が好きって方も居るかも知れませんが、何とも言えないかも知れませんね。

さて、次回『第三十二縁』ですが、もしかしたら少し遅れるかも知れませんが……それでも良かったらまた遊びに来てみて下さいね(汗)。

それでは、また次回にでもお会い出来る事を祈りながら、後書きを終わりにしたいと思います。では……また浄土。(このネタ解る人いるかなあ……滝汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043i/>

ボクと彼女と彼女の縁結び記

2010年10月25日21時40分発行